



部典經  
卷二十第

BL                    Tripitaka. Japanese. 1929  
1411                 Showa shinshu kokuyaku  
T8J3                 Daizokyo  
1929  
v.12

East Asia

PLEASE DO NOT REMOVE  
CARDS OR SLIPS FROM THIS POCKET

---

UNIVERSITY OF TORONTO LIBRARY

---

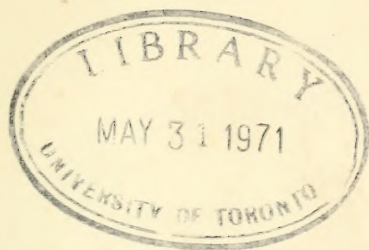






昭和  
新纂

國  
譯大藏經



BL  
1411  
T8J3  
1929  
V. 12

昭和  
新纂

# 國譯大藏經

經典部 第十二卷

## 過去現在因果經 目次

卷 第 一	.....	一
卷 第 二	.....	三
卷 第 三	.....	壹
卷 第 四	.....	101

## 佛所行讚 目次

卷 第 一	.....	一
生 品 第 一	.....	三六
處 宮 品 第 二	.....	五四
厭 患 品 第 三	.....	一六

離欲品 第四 ..... 一六九

出城品 第五 ..... 一七七

卷 第 二

車匿還品 第六 ..... 一九〇

入苦行林品 第七 ..... 一九九

合宮憂悲品 第八 ..... 二〇八

推求太子品 第九 ..... 二一九

卷 第 三

瓶沙王詣太子品 第十 ..... 二三四

答瓶沙王品 第十一 ..... 二四〇

阿羅藍鬘頭藍品 第十二 ..... 二五一

破魔品 第十三 ..... 二六五

阿惟三菩提品 第十四 ..... 二七四

轉法輪品 第十五 ..... 二八四

卷 第 四

瓶沙王諸弟子品第十六	三九四
大弟子出家品第十七	三〇六
化給孤獨品第十八	三二二
父子相見品第十九	三三五
受祇桓精舍品第二十	三四四
守財醉象調伏品第二十一	三四二
菴摩羅女見佛品第二十二	三四九
卷 第 五	
神力住壽品第二十三	三五五
離車辭別品第二十四	三六三
涅槃品第二十五	三六九
大般涅槃品第二十六	三七九
歎涅槃品第二十七	三九五
分舍利品第二十八	四〇七



法 句 經 目 次

卷 上

無常品第一	四一九
教學品第二	四二三
多聞品第三	四二五
篤信品第四	四二八
戒慎品第五	四三〇
惟念品第六	四三三
慈仁品第七	四三四
言語品第八	四三六
雙要品第九	四三八
放逸品第十	四四一
心意品第十一	四四四
華香品第十二	四四六



愚闇品第十三	四四八
明哲品第十四	四五二
羅漢品第十五	四五三
述千品第十六	四五四
惡行品第十七	四五七
刀杖品第十八	四六〇
老耗品第十九	四六三
愛身品第二十	四六四
世俗品第二十一	四六六

卷 下

述佛品第二十二	四六八
安寧品第二十三	四七一
好喜品第二十四	四七一
忿怒品第二十五	四七四
塵垢品第二十六	四七八

車持品第二十七	四八〇
道行品第二十八	四八三
廣衍品第二十九	四八六
地獄品第三十	四八八
象喻品第三十一	四九〇
愛欲品第三十二	四九三
利養品第三十三	四九七
沙門品第三十四	四九九
梵志品第三十五	五〇三
泥洹品第三十六	五〇八
生死品第三十七	五一三
道利品第三十八	五一五
吉祥品第三十九	五一八

過去現在因果經

經典部
第十二卷



# 過去現在因果經

## 卷第一

宋天竺三藏求那跋陀羅譯

【一】序分。

【舍衛國】シユラ  
一、グステイ(Srasti)  
二、聞者城、聞物  
城など譯す、拘  
薩羅國の都城。

【祇樹給孤獨園】

シヤアターラマ  
(Anāpindakesya  
rama)と梵にシテ、  
祇陀太子が園林を  
須達長者が精舎を  
布施せるるところ。

【比丘】ビクシユ  
(Bhiksu)乞士、除  
籠等と譯す。僧の  
こと。

【二】以下本經の  
要點たる過去の因  
縁を明す、先づ初  
めに善慧比丘の布  
髮受記。

【阿僧祇劫】アサ  
ンキエーヤカルバ  
(Asankhyeka  
kalpa)無數長時と譯

す。

是の如く我開けり。一時、佛、舍衛國祇樹給孤獨園に在したまふ。爾時、世尊、諸の比丘と竹林に住したまひき。

是諸の比丘、晨朝の時に於て衣を著け鉢を持し、城に入りて乞食し、還所住に歸り、食し竟りて澡漱し、各衣鉢を攝して、集りて講堂に在り、悉く共に過去の因縁を説かんと欲す。爾時、世尊、淨天耳の、世間に超えたるを以て、諸の比丘の語論の聲を聞き即ち座より起ちて講堂の上に到り、衆中に於て坐して、諸の比丘に問ひたまはく、「汝等

共に集りて、何なる法をか説かんと欲する。時に諸の比丘、即ち佛に白して言さく、「世尊、我等食し竟りて、澡漱已に訖るが故に、共に此に集りて各過去の因縁を説くを聞かんと欲す。是時、世尊、諸の比丘に語りたまはく、「汝等過去の因縁を聞かんと欲す。諦かに聽け諦かに聽け、善く之を思念せよ。今汝が爲に説かんと欲す。」唯然

なり、世尊、願樂して聞かんと欲す。」

佛の言はく、「比丘、過去無數阿僧祇劫に、爾時一仙人有りき。名けて善慧と曰ふ。梵行

を淨修して、一切種智を求め、此大智を成就せんと欲するが爲の故に、樂みて生死に處り、

【善慧】 姓にスメリダニ (Sunnahat) といふ。

【一切種智】 一切諸佛の道法に達し、一切衆生の因種を知り、種種の法門を觀じて、諸の無明を破する智慧、即ち佛の智慧なり。

【五道】 地獄、餓鬼、畜生、人間、天上をいふ。

【貪欲・愚癡】 三毒の煩惱なり。

【色・法】 六境、六識の對境に名く

【布施を以て等】 以下智慧までを六波羅蜜と名く、菩薩の行法なり。

【四事】 飲食、衣服、臥具、湯藥をいひ、別に房舎、衣服、飲食、華香、散華、燒香をいふ。

【佛法樂】 佛法僧に同じ、實なり

【提播婆底】 デーリ

リハティ (Devayana)

五道に周廻す、一身死壞して復一身を受け、生死無量なること、譬へば天下の草木を盡して、斬りて以て籌と爲し、其故の身を數ふるに、窮盡すること能はざるがごとし。夫れ天地の始終を極むる、之を一劫と謂ふ。而して其天地の成壞を經る者稱げて載すべからず。所以に群生の愛欲に耽惑し、苦海に洑流するを感傷して、慈悲心を起し、之を拔濟せんと欲す。

又、此念を作さく、「今、諸の衆生の、生死に没して自ら出づる能はざるは、皆貪欲、瞋恚、愚癡に由りて、色、聲、香味、觸、法に樂著するが故なり。我當に決定して、其此病を斷すべし」と。諸趣に生ると雖も、斯念を忘れず、諸の衆生に於て怨親平等に、布施を以て貧窮を攝し、持戒もて毀禁を攝し、忍辱もて瞋恚を攝し、精進もて懈怠を攝し、禪定もて亂意を攝し、智慧もて愚癡を攝し、是の如く長夜に、衆生を増益して、普く一切の爲に歸依と作り、諸の如來に於て、恭敬し、供養し、法を聽かんことを樂欲し、亦他の爲に説き、常に四事を以て衆僧に奉給し、佛、法、衆に於て、尊重し守護す。是の如きの諸行、稱げて數ふべからず。

爾時、王有りき。名けて燈照と曰ふ、城を提播婆底と名く。其國の人民、壽八萬歳なり、安隱豐樂にして極めて熾盛なり。欲する所の自在なること、猶し諸天の如し、時に彼國王正法もて世を治めて、人民を枉げず、殺戮楚撻の苦有ること無く、諸の人民を視ることし。一子の如くなる有り。時に燈照王、始めて太子を生む。端嚴なること比無し。威德具足し



【三十二相八十種好】佛の身に具へ給ふ三十二の相好並びに相好に随伴せる八十種の好をいふ。

【普光】梵にディーンバンカラ(Dhīmanī) 普通に燃燈又は錠光と譯す。

【薩婆若】サルワツニヤ(Śarva)一切智と譯す。

【天等】天の八部衆といふ。天デーブ(Deva)龍ナーガ(Naga) 夜叉ヤクシヤ(Yakṣa) 乾闥婆ガンダルヴァ(Gandharva) 天の樂神(阿修羅アスラ) 非天(Asura) 迦樓羅グルダ(Garuda) 金翅鳥(緊那羅キンナラ) (Kimnara) 人非人(摩睺羅伽マホーラカ) (Mahoraga) 大蟒神(人非人は緊那羅のこと) といふと、八部衆の眷屬を總稱するとあり。

て三十二相八十種好有り、初めて生るるの日、四方皆明かにして、日月珠火も復用を爲さず。王、太子に此の如きの瑞あるを見、即ち諸臣を召し、共に集り議して言はく、「太子の初めて生るるや、此奇特有り。當に太子の爲に何等の名をか作すべき」と。諸臣答へて言はく、「應に太子を名けて、以て普光と爲したまふべし」と。又相師を召きて之を占相せしむるに、相師答へて言はく、「今太子を觀たてまつるに、若在家せば、轉輪王と爲りて四天下を統べたまはん。若出家せば、天人の尊と爲りて、薩婆若を成じたまはん。王及び夫人後宮の姪女、相師の言を聞きて、此太子に於て、深く愛念を生じ、亦天龍夜叉乾闥婆阿修羅迦樓羅緊那羅摩睺羅伽人非人等、供養し、恭敬し、尊重し、讚歎せり。

是時、太子、後宮に在りて、夫人、姪女の爲に種種の法を説く。太子年二萬九千歳に至りて轉輪王の位を捨て、其父母に啓して出家せんことを求め欲すれども、既に聽かれず、乃至、三たび請へども、猶尙許されず。太子の慈悲は、志拯濟に存し、其小違を忍びて、以て大願を成ぜんとなす。即便往いて山林の樹下に詣りて鬚髮を剃除し、法服を被著して、苦行を勤修すること滿六千歳、阿耨多羅三藐三菩提を成じて、諸の天人及び八部衆の爲に、法輪を轉す。此輪は微妙にして、一切世間の天、人、魔、梵の轉する能はざる所なり。三乘の法を以て、衆生を教化し、利益したまふべき所、稱げて數ふべからず。

爾時、父王及び其夫人、後宮の姪女、太子普光の阿耨多羅三藐三菩提を成じたまへるを聞きて、心に大いに歡喜し、踊躍すること無量なり。爾時、群臣國內の人民、婆羅門等、太

【阿耨多羅三藐三菩提】アマツタラサミヤクサムボトイ(Amitayama yakshihohi)無上正遍知と譯す

【法輪を轉ず】教法を説きて能く邪見を破り正道を開くこと、即ち説法のこと

【三乘の法】聲聞緣覺、菩薩に對する四諦、十二因緣六波羅蜜をいふ

【婆羅門】ブラフマナ(Brahmana)淨行と譯す、印度四姓の最高位に位する種族

【阿羅漢】アルハン(Arhan)廣供と譯す、世間の供養を受くるに堪へたる聖者

【無著法忍】無著は執著なきこと、法忍は法智を得る前に起る忍可決定の心をいふ

【踰闍那】ヨージュヤナ(Yojana)印度甲數の單位

子の道の成せるを聞きて、心に各念言すらく、「太子普光、轉輪王の位を捨て、鬚髮を剃除し、法服を被著して、出家道を修し、正覺を成ずることを得たり。我等今、亦當に出家すべし」と。此念を作し已りて、悉く皆往いて普光佛の所に詣る。爾時、普光如來、即ち其心を觀じ、其因緣に隨つて、爲に法を説きたまへば、大臣婆羅門等、四千人有りて、阿羅漢を成じ、國中の人民、及び餘の四方の諸の來りて會する衆、八萬人有りて、亦無著法忍を得たり。

爾時、普光如來、八萬四千の諸の阿羅漢と、與に國界に往詣して、遊行し教化せり。父王聞き已りて、心に大いに歡喜し、即ち國中に勅して、道路を平治し、香水を地に灑ぎ、諸の繡綵の寶幢、幡、蓋を懸け、衆の名華を散じ、是の如く莊嚴すること、十二踰闍那に滿てり。又復鼓を撃ちて國內に唱令すらく、「諸の華有る者は、私に賣ることを得ざれ。悉く輸りて王に與へよ」と。并に人民に勅すらく、「我先ち佛を供養することを得ざれ」と。即ち大臣を遣はし、并に伎樂を作し、燒香散華して、往いて彼普光如來を請じまつる。

爾時、善慧仙人、山中に在りて、五の奇特の夢を得たり。一には夢に大海に臥し、二には夢に須彌に枕し、三には夢に海中の一切衆生、其身内に入る、四には夢に手もて目を執る、五には夢に手もて月を執る。此夢を得已りて、即ち大いに驚き悟め、心に自ら念言すらく、「我今の此夢は、小緣たるに非ず。當に誰にか問ふべき。宜しく城内に入りて、諸の

【須彌】スマール  
(Jinnaru) 妙高山  
と譯す、印度世界  
説に於て世界の中  
心にある大山。

智者に問ふべし。」と。是念を作し已りて、鹿皮の衣を披、手に水瓶、及び杖、繖蓋を執り、行いて城邑に入らんとて、路に外道所止の住處を過ぐ。五百人月りて、上首たり。善慧念言すらく、「我今、當に夢みる所を以て、之に問ふべし。并に其修する所の業を觀るを得ん。」と。即ち諸人と共に、道義を講論して、其異見を破す。時に五百人、即便屈を受けて、弟子たらんことを求め、善慧の所に於て深く恭敬を生じ、各銀錢一枚を以て、以て之を上つる。復五百の外道あり。既に善慧の辯才聰明なるを見て、亦隨喜を生ず。時に諸の外道、自ら共に議して言はく、「今普光如來、世に出興したまふ。」と。善慧仙人、斯語を聞き已りて、擧體の毛豎ち、心に大いに歡喜して、踊躍すること無量なり、便ち外道と分別れて去りぬ。外道問うて言はく、「師、何くにか趣きたまふ。」と。答へて言はく、「我、今、普光佛の所に往きて、供養を施さんと欲す。」外道白して言はく、「師若し去りたまはば、願樂くば隨從せん。」と。善慧答へて曰はく、「我今緣有り。宜しう應に先づ行くべし。」と。爾時、善慧、五百の銀錢を齎し、路に隨つて去り、諸の外道衆、悲戀懊惱し、辭別して歸りき。善慧、前に至りて、王の家人の、道路を平治し香水を地に灑ぎ、幢、幡、蓋を列し、種種に莊嚴するを見て、即便問うて言はく、「何の因縁の故に、是事を作すや。」と。王の人答へて言はく、「世に佛の興りたまふ有り。名けて普光と曰ふ。今燈照王、請じ來りて城に入りたまはんとす。所以に忽忽に道路を莊嚴す。」と。善慧、即ち復彼路人に問はく、「汝、何處にか諸の名花有るを知るや。」答へて言はく、「道士。燈照大王、鼓を撃ちて國內に唱令



【青衣】 賤者の服なり、轉じて婢女を云ふ。

【優曇鉢花】 ウツムバラ(Dumbare) 靈瑞華と譯す、佛及轉輪王の出世の時のみに開くと傳ふる花。

す、名花は皆賣ることを得ざれ。悉く以て王に輸れと。善慧聞き已りて、心大いに懊惱し、意猶息まずして、苦に花ある所を訪ふ。俄爾即ち王家の青衣の、密に七莖の青蓮花を持ちて過ぎ、王の制令を畏れて、藏めて瓶中に著くるに遇ふ。善慧の至誠、其蓮花に感じ、瓶の外に踊出す。善慧遙かに見て、即ち追ひ呼んで曰はく、「大姉日く止まれ。此花、賣るや不や。青衣、聞き已りて、心に大いに驚愕し、而も自念言すらく、「花を藏むること甚だ密なるに、此れ何の男子にて、乃ち我花を見て、買はんことを求索するや。」と。顧みて其瓶を看れば、果して花の出づるを見て、奇特の想を生じ、答へて言はく、「男子、此青蓮華は、當に宮内に送るべし。以て佛に上らんと欲するも、得べからず。善慧また言はく、「請ふ五百の銀錢を以て、五莖を雇はんのみ。青衣、意に疑ひて復自ら念言すらく、「此花の直する所、數錢に過ぎざるに、而も今男子、乃ち銀錢五百を以て、五莖を買はんことを求む。」と。即ち之に問うて言はく、「此花を持ちて、用て何等をか作さんと欲する。」善慧答へて言はく、「今如来有りて、世に出興したまひ、燈照大王請じ來りて城に入りたまはんとす。故に、此花を須て、以て供養せんと欲す。大姉、當に知るべし。諸佛如来は、值遇すべきこと難し。優曇鉢花の、時に乃ち一たび現はるるが如し。青衣又問はく、「如来を供養して、何等を求むることをか爲す。」善慧答へて曰はく、「一切種智を成就して、無量の苦の衆生を度脱せんと欲するが爲の故に。」爾時、青衣、此語を聞くを得て、心に自ら念言すらく、「今此男子、顔容端正にして鹿皮の衣を披、纔に形體を藏ふのみにて、乃ち爾く至誠

【無爲】爲は爲作  
造作の義、本來常  
住にして何ものに  
も造作せらるるこ  
となき法をいふ。

にして、錢寶を惜まず。」と。即ち之に語りて曰はく、「我、今當に此花を以て相與ふべし。願くば我生生に常に君が妻たらん。」と。善慧答へて言はく、「我、梵行を修して、無爲の道  
を求む。生死の縁を相許すを得ず。」青衣即ち言はく、「若し我此願に從はずんば、花は得べ  
からず。善慧又曰はく、「汝、若し決定して我に花を與へずんば、常に汝が願に從ふべし。  
我は布施を好みて、人意に逆はず。若し來りて、我より、頭、目、齒、鼻と、及び妻子とを乞  
ひ求むる有らしむるも、汝、鬘を生じて、我施心を壞ること莫れ。」青衣答へて言はく、  
「善い哉善い哉。敬んで來命に從はん。今我女なり、弱くして前請して、二花を寄せて以て  
佛に獻ずることを得る能はず。我をして生生、此願を失はざらしめば、好醜離れずして、  
必ず心中に置いて佛をして之を知らしめたまつらん。」

爾時、燈照王、其諸子、及び衆の官屬、婆羅門等と、好香の花、種種の供具を持ちて、  
出でて普光如來を迎へ奉り、學國の人民、亦皆隨從す。是時、善慧の五百の弟子、共に  
相謂つて言はく、「今日、國王及び諸の臣民、悉く皆往いて普光佛の所に詣る。大師今  
亦、當に已に去るべし。我等宜しく應に彼に往きて禮敬すべし。此言を作し已りて、即ち  
共に俱に行く。道に在る未だ遠からずして、善慧に逢ひ見、師徒相遇うて、喜悅無量なり、  
即ち共に同じく普光佛の所に詣る。燈照王の、已に佛前に到りて、最も初に在りて供養禮  
拜するを得、是の如く次第して、諸大臣に至るまで、亦各禮敬し、并に名花を散ずるに、  
花悉く地に墮つるを見る。

【釋迦牟尼如來】  
 世尊 釋迦牟尼 (Sakyamuni) 能仁寂默  
 と譯す。如來 太  
 一 古た (Tathagata)  
 應供アル。五濁知サ  
 ムミヤクセンボ  
 デイ (Samyaksambuddhi) 明行足、  
 ナサム。ンナ (Nanana) 善逝  
 (Sugata) 世間解  
 ローカザツト (Loka-kata) 無上土  
 ヲツタラ (Anuttara) 調御丈夫  
 (Anuraha) テイ (Pusa-dhanava) 天  
 (Thi) 天人師  
 (Devamanusa-sara) 佛  
 (Buddha) 世尊  
 (Bhagava) 以上を佛の十  
 號といふ。  
 【記】 記別、即ち  
 豫言のこと。

時に善慧、五百の弟子に與に諸人衆の供養し畢るを見已りて、如來の相好の容を諦觀し、又諸の苦の衆生を濟拔せんと欲し、亦一切種智を滿足せんと欲するが故に、即ち五莖を散するに、皆空中に住りて化して花臺となり、後に二莖を散するに、亦空中に止まりて佛の兩邊を夾む。爾時、國王、及び其眷屬一切の臣民、天龍、夜叉、乾闥婆、阿修羅、迦樓羅、緊那羅、摩睺羅伽、人非人等、此奇特を見て、未曾有と歎す。是に於て普光如來、無礙智を以て、善慧を讚じて言はく、善哉善哉、善男子。汝是行を以て、無量阿僧祇劫を過ぎて、當に成佛を得て、釋迦牟尼如來、應供、正遍知、明行足、善逝、世間解、無上士、調御丈夫、天人師、佛、世尊と號すべし。善慧の、記を受くる時に當りて、無量の天龍、夜叉、乾闥婆、阿修羅、伽樓羅、緊那羅、摩睺羅伽、人非人等、衆の妙花を散じて、虚空の中に滿たしめ、善光如來、即ち之を記したまひて曰はく、汝等、皆當に其國に生るるを得べし。

爾時、如來、既に記を授け已りて、猶善慧が、仙人の髻を作し、鹿皮の衣を披るを見たまひ、如來、此服儀を捨てしめんと欲して、即便地を化して、以て淤泥と爲す。善慧、佛の應に此より行くべくして、地の濁濕するを見、心に自ら念言すらく、云何が乃ち千輻輪の足をして、此を踏んで過ぎしめんしと、即ち皮衣を脱して、以て地に布くに、泥を掩ふに足らず。仍て又髮を解きて、亦以て之を覆ふ。如來即便之を踐んで度り、因つて之を記して曰はく、汝後に佛を得、五濁の惡世に當りて、諸の天、人を度せんこと、以て難し



【千輻輪】三十二相の一、佛足の裏にある千の輻輪の交。

【五濁】世に流るる五つのいまはしきこと、劫濁、見濁、煩惱濁、衆生濁、命濁これなり

【無生忍】不生不滅の眞如法性を忍知して決定安住する位、無生法忍の略。

【多羅樹】ターラ(ターラ)重と譯す印度にて之を尺度に用ひ、一多羅樹の高さを七仞と定む、舊に貝多といふ。

【兩足尊】二足を尊する生類中最も尊き人といふ意、佛のこと、また二足尊ともいふ。

【五體】兩手、兩膝、頭の二つ。

【袈裟】カチャヤ(kaśaya)不正色、染色衣と譯す、出家の正衣、諸草木の皮葉花の食ふ

と爲さず。必ず我の如くならん。時に善慧、此言を聞き已りて、歡欣踴躍し、喜び自ら勝へず。即時に便ち一切法空を解り、無生忍を得、身虚空に昇り、地を去ること七多羅樹なり。偈を以て佛を讚すらく、

今、世間の尊を見るや、我をして慧眼を開かしめ

爲に清淨の法を説いて、一切の著を去離せしむ

今、天人の尊に遇ふや、我をして無生を得しむ

願くば將來に果を獲て、亦兩足尊の如くならん

是時、善慧、此讚を説き已りて、空中より下りて、佛の前に到り、五體を地に投じて佛

に白して言さく、「唯、願くば世尊、我を哀愍せんが故に、我出家を聽したまへ。」爾時、普

光如來、答へて言はく、「善くぞ來りし、比丘。」と。鬚髮自ら落ち、袈裟身に著きて、即

ち沙門と成れり。

爾時、二りの貧窮なる老人有り。各親屬一百人と俱なり。佛の相好の威徳嚴顯なるを

觀たてまつり、自ら貧乏にして、以て供養する無きを傷む。是時、如來、其心の至れるを

愍み、即ち前地を化して、諸の草穢を生じ、二りの貧人をして、地の不淨を見、歡喜の

心を發して、便ち灑掃せしむ。普光如來、之を記して曰はく、「汝、無量阿僧祇劫を過ぎて

釋迦牟尼佛の世に出興せんとき、汝等爾時當に第一聲聞弟子と作るべし。」

爾時、普光如來、貧人を記し已りて、八萬四千の比丘及び燈照王、并に婆羅門、諸の

べからざるものを採りて之を染め用ひたり。

【沙門】 シユラマ

ナシツナミナ(勤息と譯す、善法を勤修して惡法を止息すればなり)

【聲聞】 シユラマ

ヅカ(Śravaka)の譯、佛の教誨の聲を聞きて證する人といふ意。

【陀羅尼】 ダーラ

ニー(Dhāraṇī)總持と譯す、種種の善法を集め持ちて散失せしめざることをいふ。

【三昧】 サマーダ

イ(Samādhi)等持と譯す、心を一境に止めて、動かざるに在る。

【般涅槃】 ハリニ

ル(Parinirvāṇa)寂滅、圓寂と譯す、迷妄を脱し、眞理を究めて、寂滅無爲の法性を究め、不生不滅の法身の眞諦に歸するをいふ。

臣民等と、前後に圍繞せられて、提攝婆底城に入りたまふ。時に燈照王、其眷屬と、四事を以て、普光如來并に及び八萬四千の比丘を供養し、四萬歳を経て、王即ち位を捨てて、以て其子に付し、其眷屬及び夫人の眷屬、各八萬四千人と、同じく佛法に於て出家修道し、陀羅尼諸法、昧を得たり。善慧比丘、亦普光如來に隨つて、王の供養を受くること四萬歳に滿ちて、諸法の中に於て深三昧を得、衆生を教化せること稱げて數ふべからず。

爾時、善慧比丘、普光如來に白して言さく、「世尊、我昔日に於て、深山の中に在りて、五の奇特の夢を得たり。一には大海に臥すと夢み、二には須彌に枕すと夢み、三には海中の一切衆生我身内に入ると夢み、四には手に目を執ると夢み、五には手に月を執ると夢みぬ。唯願くば世尊、我爲に此夢の相を解説したまへ。」爾時、普光如來、答へて言はく、「善い哉。汝若し此夢の義を知らんと欲せば、當に汝が爲に説くべし。大海に臥すと夢みたるは、汝が身の、即時に生死の大海の中に在るなり。須彌に枕すと夢みたるは、生死を出でて、般涅槃を得るの相なり。大海中の一切衆生の、身内に入ると夢みたるは、生死の大海に於て、諸の衆生の爲に、歸依處と作るべきなり。手に目を執ると夢みたるは、智慧の光明、普く法界を照すなり。手に月を執ると夢みたるは、方便智を以て生死に入り、清涼の法を以て、衆生を化導して、憍熱を離れしむるなり。此夢の因縁は、これ汝が將來成佛の相なり。善慧聞き已りて、歡喜し、踴躍し、自ら勝ふる能はず、佛を禮して退く。

爾時、普光如來、復少時を経て、般涅槃に入りたまふ。善慧比丘、正法を護持すること

【法界】宇宙、事  
理、物、心、すべの世  
界。

【方便智】方便即  
菩提にして、善巧  
の方便もて衆生を  
利益するを道とな  
すをいふ。

【四天王】四王天  
にをり佛法を護る  
四王、持國、增長  
廣目、多聞、これな  
り。

【轉輪聖王】チャ  
クラヴァルツチラー  
クシャ (Chakravarti)  
三須彌四洲を統  
領する王、輪寶を統  
轉じて一切を威服  
する故に名く、三  
十二相を具へ、人  
壽無量歳より八萬  
歳の時までに出て  
爾後出世せずと  
いふ。

【十善】十善即ち  
殺生、偷盜、邪淫、  
妄語、綺語、兩舌、  
惡口、貪欲、瞋恚、  
愚癡を離るること  
【初利天】トラー  
ヤストリオンシャ  
(Tavatimsa)三

一萬歳に滿ち、三乘の法を以て衆生を教化し、利益する所の者稱げて計ふべからず。爾時、  
善慧比丘、彼に於て命終して即便上生し、四天王と爲り、三乘の法を以て諸天衆を化し、  
彼天壽を盡して人間に下生し、轉輪聖王と爲りて、四天下に王として七寶具足せり。一に  
金輪寶、二に白象寶、三に紺馬寶、四に神珠寶、五に玉女寶、六に主藏臣寶、七に主兵臣  
寶なり。千子具足し、皆悉く勇健にして、能く怨敵を伏す。正法を以て治めて、諸の憂  
惱無く、常に十善を以て、諸の人民を化し、此に於て壽終り、初利天に生れて、彼天主と  
爲り、壽終り下生して、轉輪聖王と爲り、其壽命を終へて、乃至第七梵天に生れぬ、上り  
て天主と爲り、下りて聖主と爲ること、各三十六反、其間に、或は仙人と爲り、或は外  
道六師と爲り、或は婆羅門と爲り、或は小王と爲り、是の如く變現すること、稱げて數ふ  
べからず。

爾時、善慧菩薩、功行満足して、位十地に登り、一生補處に在り。一切種智に近づき、  
兜率天に生れて聖善白と名く。諸天主の爲に、一生補處の行を説き、亦十方國土に於  
て種種の身を現じて、諸の衆生の爲に應に隨つて法を説き、明運將に至らんとして下り  
て作佛すべきに當り、即ち五事を觀ず。一には諸の衆生の熟すると未だ熟せざるとを觀  
じ、二には時の至ると未だ至らざるとを觀じ、三には諸の國土の何れの國の中に處する  
かを觀じ、四には諸の種族の何れの族の貴盛なるかを觀じ、五には過去の因縁、誰か最  
も眞正にして、應に父母と爲るべきかを觀ず。五事を觀じ已りて、即ち自ら思惟すらく、







【十方國土】東西

南北國界上下

【十住】天台にて

華嚴にては十信の

最後位をいふ

【曇摩羅】ジャム

ブーローバ (Jam

buti) 須彌四

洲の南方にある人

間世界

【毘羅佛兜】カ

ピラマツツ (Kard

Javan) 釋尊誕生

の故地

【シヤキ】シヤキ

ヤ (シヤキ) 能と譯

す

【甘蔗】イク、ゾ

【白淨王】スアド

【摩耶夫人】マ

ヤ、マ、ローパー (M

ayadevi) 幻化と譯

す

【十八樹】動、起、

彌、震、吼、擊、

六種震動といふ、

これに遍、等遍の

爾時、菩薩、諸の天子の悲泣懊惱するを見て、又復戀慕の偈を聞き、即ち慈音を以て、

之に告げて曰はく、善男子、凡そ人の生を受くる、死せざる者無し。恩愛の合會には必ず

別離あり。上は阿逸駄吒天に至り、下は阿鼻地獄に至るまで、其中の一切の諸の衆生等、

無常の大火の爲に、煎炙せられざること有ること無し。是故に、汝等我に於て眞り戀慕を

生すべからず。我今汝と皆悉く未だ生死の熾火を離れず。乃至一切の貧富貴賤も、皆免

脱せず。是に於て菩薩、即ち偈を説いて言はく、

諸行は無常なり、是れ生滅の法なればなり。

生滅滅し已りて、寂滅なるを樂しと爲す。

爾時、菩薩、天子に語りて言はく、此偈は、乃ち是過去諸佛の共に説く所、諸行の性

相は法として皆是の如し。汝等、今は憂惱を生ずる勿れ。我の生死に於けるは無量劫來

なり。今は唯此一生の在る有るのみ。久しからずして當に諸行を離るるを得べし。汝等、

當に知らべし、今は是衆生を度脱するの時なり。我應に闍浮提中、迦毘羅佛兜圍、甘蔗の

苗裔、釋姓の種族、白淨王の家に下生すべし。我、彼に生るれば、父母を遠離し妻子

及び轉輪王の位を棄捨して、出家して道を學し、苦行を勤修し、魔怨を降伏して、一切煩

智を成じ、法輪を轉ぜんに一切世間の天、人、魔、梵の、轉ずる能はざる所なり。亦過去の諸

佛所行の法式に依りて、廣く一切の諸の天人衆を利し、大法幢を建て魔怨を傾倒し、煩

惱海を竭し、八正路を淨くし、諸の法印を以て衆生の心に印し、大法會を設けて諸の



六種を加へて十八相とす。

【魔】 欲界六天の最高位にある故、第六天の魔王といふ、他化自在天これなり。

【天龍八部】 八部衆のこと。

【諸行】 行は遷流の義、生滅變化すべき、一切の事物をいふ。

【波羅奢花】 バラシヤ(Shyama)赤花樹と譯す。

【法眼】 一切諸法を觀する眼のこと。

【阿迦膩吒天】 アカニタ(Anita)色界十八天中の最上位。

【阿比地獄】 アビチ(Avichi)無間と譯す、八熱地獄の最下位、この地獄に墮したるものは苦を受くること間なしといふ。

【八正道】 正見、正思、正語、正業、正精進、正念、正

天人を請ぜん、汝等、爾時、亦當に皆同じく此會に在りて法食を演受すべし。是因縁を以て、應に憂惱すべからず。」と。

爾時、菩薩、偈を以て頌して曰はく、

我此に於て久しからずして、當に閻浮提に下り

迦毘羅施兜の、白淨王の宮に生るべし。

父母親屬を辭し、轉輪王の位を捨てて

出家して道を學ぶことを行じ、一切種智を成じ

正法幢を建立し、能く煩惱の海を踏し

惡趣の門を閉塞し、淨く八正道を開き

廣く諸天人を利すること、其數計すべからざらん

是因縁を以ての故に、應に憂惱を生ずべからず

爾時、菩薩、擧身の毛孔より、皆光明を放つ。諸の天子等、菩薩の言を聞き、又復身

より大光明を出すを見て歡喜し、踴躍して諸の憂苦を離れ、各心に念言すらく、「菩

薩、久しからずして、當に正覺を成ずべし。」と。

爾時、菩薩、降胎の時至るを觀じ、即ち六牙の白象に乗じて兜率宮を發す。無量の諸天

諸の伎樂を作し、衆の名香を燒き、天の妙花を散じて菩薩に隨從し、虛空の中に滿ち、

大光明を放ちて普く十方を照し、四月八日、明星の出づる時を以て神を母胎に降す。

命、正定、八正道

【諸法印】 苦、空、

無常、無我、以て

諸法印とし、また

無常、無我、寂靜

を以て三法印とな

す

【三法印】 三法印に同

し三法印等如きべ

【圖】 兜率天より

下生して摩耶夫人

に託胎するを明す

時に摩耶夫人、眼瞶の際に於て、菩薩の六牙の白象に乗じ、虚に騰りて來るを見る。右脇

より入るや、影の外に現はるること瑠璃に處くが如く、夫人の靜安快樂なること、甘露を

服するが如く、自身を觸み見れば、日月の照すが如し。心々に歡喜して踴躍すること無

量なり。此相を見已りて、豁然として覺め、右育の心を生じ、即便往いて白淨王の所に至り

て、王に白して言はく、「我向に眼瞶の際、其狀夢の如くにて諸の瑞相を見たり。極めて奇特

と爲す。王即ち答へて言はく、「我向に、亦く光明有るを見、又復汝が相貌の常に異なるを覺

る。汝爲に見し所の瑞相を説くべし。」夫人即便具に上の事を説き、偈を以て頌して曰はく、

白象に乗ずる育るを見るに、皎淨なること日月の如く

釋梵諸天衆、皆悉く寶幢を執り

香を燒き、天花を散じ、并に衆の伎樂を作し

虚空の中に充滿し、圍繞して來下し

來りて我右脇に入るや、猶し瑠璃に處くが如し

今以て大王に現す、此れ何の瑞相爲る

爾時、白淨王、摩耶夫人の中の瑞相を見已りて、歡喜し踴躍して自ら勝ふる能はず

即便善相婆羅門を遣語して、妙香花、種種の飲食を以て之を供養し、供養し畢已りて夫人

の右脇を示し、并に瑠璃を上きて、婆羅門に白して言はく、「願くば爲に之を占へ、何等の

異有りや。」時に婆羅門、即ち之を占つて曰はく、「大王、夫人の懷ける所の太子の諸の善

相、皆く佛の瑞相に同し。此れ佛の太子の瑞相に同し。佛の太子の瑞相に同し。佛の太子の瑞相に同し。

佛の太子の瑞相に同し。佛の太子の瑞相に同し。佛の太子の瑞相に同し。佛の太子の瑞相に同し。

佛の太子の瑞相に同し。佛の太子の瑞相に同し。佛の太子の瑞相に同し。佛の太子の瑞相に同し。

佛の太子の瑞相に同し。佛の太子の瑞相に同し。佛の太子の瑞相に同し。佛の太子の瑞相に同し。

佛の太子の瑞相に同し。佛の太子の瑞相に同し。佛の太子の瑞相に同し。佛の太子の瑞相に同し。

佛の太子の瑞相に同し。佛の太子の瑞相に同し。佛の太子の瑞相に同し。佛の太子の瑞相に同し。

佛の太子の瑞相に同し。佛の太子の瑞相に同し。佛の太子の瑞相に同し。佛の太子の瑞相に同し。

佛の太子の瑞相に同し。佛の太子の瑞相に同し。佛の太子の瑞相に同し。佛の太子の瑞相に同し。

佛の太子の瑞相に同し。佛の太子の瑞相に同し。佛の太子の瑞相に同し。佛の太子の瑞相に同し。

佛の太子の瑞相に同し。佛の太子の瑞相に同し。佛の太子の瑞相に同し。佛の太子の瑞相に同し。

佛の太子の瑞相に同し。佛の太子の瑞相に同し。佛の太子の瑞相に同し。佛の太子の瑞相に同し。







名あり。

【三時】 初中後の三時をいふ。

【諸根】 眼、耳、鼻、舌、身の五根、或は意を加へて六根。

【五】 以下誕生を説く。

【藍毘尼園】 ルムキニ(Ānāpīnī) (Lumbini)

【帝釋】 インドラ

【マヤクヲ】 (Māyā) 幻利天主なり

【無憂】 梵にアジヨーク(Asoka)といふ。

藍毘尼園を掃灑せしめ、更に諸の妙花果を栽植せしめ、流泉浴池を悉く清潔ならしめ、欄楯階陛は、皆七寶を以て莊嚴と爲す。翡翠、瑪瑙、鸞、鳳凰、鸞、異類の衆鳥、鳴いて其中に集り、綵幡蓋を懸け、散花燒香し、諸の伎樂を作すこと猶し帝釋の歡喜の園の如し。又中間の經行する處に勅して、皆嚴淨ならしめ、種種に莊嚴し、又勅して、十萬の七寶の車輦を嚴辦す。一一の車輦は麗玩殊絶なり。又復外に勅して、四軍の象兵、馬兵、車兵、歩兵を嚴辦し、又復後宮の美女の、容顏端正、不老不少、氣性調和、聰慧明了なるを選び取り、其數凡そ八萬四千あり、以て摩耶夫人に給侍せしめ、又復八萬四千の端正なる童女を擇び取り、妙瓔珞嚴身の具を著け、香花を齎し持ち、先づ往いて彼藍毘尼園に住せしめ、下又諸の群臣百官に勅して、夫人去れば皆悉く侍從せしむ。

是に於て、夫人即ち寶輿に昇り、諸の官屬并に及び好女と、前後に導從して、藍毘尼園に往く。爾時、復天龍八部有りて、亦皆隨從して、虛空に充滿す。爾時、夫人、既に園に入り已る。諸根寂靜、十月滿足し、二月八日、日の初めて出る時に於て、夫人彼園中を見るに、一大樹有り、名けて無憂と曰ふ。花色香鮮に枝葉分布し、極めて茂盛を爲す。即ち右手を舉げて、之を牽きて摘まんとするに、菩薩漸漸に右脇より出づ。時に樹下に亦七寶の七葉の蓮花を生ず。大いさ車輪の如し。菩薩、即便蓮花の上に墮し、扶持する者無くして、自ら七歩を行き、其右手を舉げて師子吼すらく、我一切の天人の中に於て、最尊最勝なり、無量の生死、今に於て盡きたり、此生に一切の天人を利益せん。





【毘舍佉星】ゴシヤーカー (二) 三三三  
二氏宿

【惡律儀】佛の制法を守りて威儀を整ふるをなまざること

大光明を放つ。八には諸の天の妙服、自然に來り降る。九には摩訶迦流、恬靜澄清なり。十には風止み雲除こりて、空中明淨なり。十一には香風芬芳として四方より來り、細雨の潤澤、以て飛塵を斂む。十二には國中の疾病、皆悉く除こり愈ゆ。十三には國內の宮舎、明瞭ならざる無く、燈燭の光、復用を爲さず。十四には日月星辰、停住して行かず。十五には毘舍佉星、下りて人間に現じて太子の生るるを待つ。十六には諸の梵天王、素寶蓋を執り、列して宮上を覆ふ。十七には八方の諸の仙人衆、寶を奉じて來り獻す。十八には天の百味の食、自然に前に在り。十九には無數の寶瓶に、諸の甘露を盛る。二十には諸の天の妙車、寶を載せて至る。二十一には無數の白象の子、首に蓮花を戴き、列して殿前に住す。二十二には天の紺馬寶、自然にして來る。二十三には五百の白師子王、雪山より出で、其惡情を息め、心に歡喜を懷きて城門に羅住す。二十四には諸の天伎女、虚空の中に於て妙音樂を作す。二十五には諸の天玉女、孔雀の拂を執つて、宮牆の上に見す。二十六には諸の天玉女、各金瓶を持ち、香汗を盛滿し、空中に列住す。二十七には諸天歌頌して、太子の徳を讚す。二十八には地獄休息して、毒痛行はれず。二十九には毒蟲隱伏し、惡鳥善心なり。三十には諸惡律儀、一時に慈悲あり。三十一には國內の孕婦、産する者は悉く男、其百病有るは自然に除こり癒ゆ。三十二には一切の樹神、化して人形を作り、悉く來りて禮侍す。三十三には諸の餘の國王、各名寶を齎し同じく來つて臣伏す。三十四には一切の人天、時語に非ざることを無し。

爾時、諸の女衆、正端相を見て、極めて大いに歡喜して、自ら相謂つて曰く、太子、今生なるや、此の如きの素野の事有り。唯願くば、長壽にして、諸の苦無く、我等をして大樂樂を生ぜしむる勿らんことを。此言を作し已りて、天の樂樂を以て太子を異み抱きて、夫人の所に至る。時に因天下、虚空の中に在りて恭敬し瞻視し、釋提桓因、蓋を覆りて來り覆ひ、二十八天魔王有り。園の四角に在りて守衛奉養せり。

爾時、一青衣有り、聰慧明了なり。藍毘尼園より還りて宮中に入り、白淨王の所に到りて、王に白して言はく、天王の威徳、轉た更に増進す。摩耶夫人、はに太子を生みたまふ。靑貌端正にして、三十二相八十種好有り、蓮花の上に墮し、自ら行くこと七歩するに其右手を擧げて簡子呪すらく、我、一切天人の中に於て、最尊最勝なり、無量の生死、今に於て盡きたり。此生一切の天人を利益せんことを。是の如き等の諸の奇特の事有り。具に説くべからず。時に白淨王、彼青衣の、此語を説くを聞き已りて、歡喜踊躍して自ら勝ふる能はず。即ち身の環路を脱して、以て之に歸ひぬ。

爾時、白淨王、即ち四兵を遣はしめ眷屬圍繞し、并に一億の釋迦種と前後導衛して、藍毘尼園に入れり。彼園中に天龍八部の皆悉く充滿するを見、夫人の所に到りて太子の身の相好殊異なるを見、歡喜踊躍すること、猶し江海の諸大波濤の如し。其短壽を慮りて、懷に入りて、懷賜すること、譬へば須彌山王の、動搖すべきこと譬きが如く、大地動く時に此山も乃ち動く。彼白淨王、素野宿願にして、當に歡感無し。今、太子を

【棟揚】おそれられぶること。

見て、一は喜び一は懼るるも、亦復是の如し。摩耶夫人の性たる調和、既に太子を生み、  
諸の奇瑞を見て、倍柔軟を増す。爾時、白淨王、手を文へ合掌して、諸の天神を禮  
し、前んで太子を抱き、七寶の象輿の上に置き、諸の群臣後宮の婦女虚空の諸天と、諸  
の伎樂を作し、隨從して城に入れり。

時に、白淨王及び諸の釋子、未だ三寶を識らず。即ち太子を將めて、往いて天寺に  
詣る。太子、既に入るや、梵天の形像、皆座より起ち、太子の足を禮して、王に語りて言  
はく、「大王、當に知るべし。今此太子は、天人中の尊たり。虚空の天神、皆悉く禮敬す。  
大王豈此の如きを見ざるや。云何が今此に來りて我を禮する。時に、白淨王、及び諸の  
釋子、群臣内外、是を聞見し已りて、未曾有と敬じ、即ち太子を將めて天寺を出で、還つて  
後宮に入る。

爾時に當りて、諸の釋種、亦同一日に五百の男を生む。時に王の廐中、象は白子  
を生み、馬は白駒を生み、牛羊亦五色の羔犢を生み、是の如き等の類、數各五百なり。  
王家の青衣、亦五百の蒼頭を生む。爾時、宮中の五百の伏藏、自然に發出す。一の伏藏  
に、七寶の藏有りて、之を圍繞す。又、諸の大國商人有り。海より寶を採り、遍毘羅施兜  
國に還る。彼諸の商人、皆奇寶を齎らし、來りて王に獻す。時に白淨王、諸の商  
人に問はく、「汝等海に入り、諸の珍寶を採りて、悉く皆吉利なり、苦惱無きや不や。  
及び諸の伴侶、遺落無きや。」彼諸の商人、答へて言はく、「大王、經る所の道路、極め

【善讀】  
奴僕

【薩婆悉達】 サル  
ツシツダールタ  
【Charvākhārtha】

一切養成の義。  
【頻毘婆羅】 ビム  
ビサーラ (Bimbisāra)  
目) 影堅、影勝と譯す。

【波斯匿】 プラセ  
ーナ (Prasenajita) 毘軍と譯す。

【拘鞠婆】 クラブ  
(Kurubā) 勝邊と譯す。

【優陀延】 ウダヤ  
ナ (Udayana) 出愛  
と譯す。  
【七】 婆羅門等の  
太子を占相するを  
明す。

て自ら安んじたり。王此言を聞きて、甚だ大いに歡喜す。即ち諸の婆羅門等を請せしむ。婆羅門衆、皆悉く集り已るや、諸の供養を設け、或は象、馬、及び七寶、田宅、僮僕を與ふ。供養し畢りて、太子を抱きて出で、即ち諸の婆羅門に白して曰はく、當に太子の爲に、何等の名をか作すべき。諸の婆羅門、即ち共に論議して王に答へて言はく、「太子の生るる時、一切の寶藏、皆悉く發出し、有ゆる諸瑞吉祥に非ざる莫し。此義を以ての故に、當に太子を名けて薩婆悉達と爲すべし。」此語を説く時、虚空の天鼓、即ち天鼓を擊ち、燒香し散花して、善い哉と唱言し、諸天人民、即ち稱讃して、薩婆悉達と曰へり。

爾時、八王、亦是日に於て、白淨王と同じく太子を生む。彼諸の國王、各歡喜を懷きて、「我今太子を生み、諸の奇異有り」とし、是薩婆悉達の瑞相たるを知らず、皆婆羅門を生めて、各太子の爲に好名字を制す。王舍城の太子は、名けて頻毘婆羅と曰ひ、舍衛國の太子は、婆斯匿と名け、偷羅拘吒國の太子は、拘鞠婆と名け、犢子國の太子は、優陀延と名け、跋羅國の太子は、鬱陀羅延と名け、虛羅國の太子は名けて疾光と曰ひ、徳叉尸羅國の太子は、弗迦羅婆羅と名け、拘鞠婆國の太子は、拘鞠婆と名く。

爾時、白淨王、普く群臣に勅して、聰明多聞にして智慧善く相を占ふことを知り、諸の世人の爲に知識せらるる者を訪ねしむ。群臣聞き已りて、四方に推し覺む。時に王、即ち便後園の中に於て一大殿を起して、悉く欄楯、七寶もて莊飾す。爾時、群臣、五百の婆羅門の、聰明にして相を知り、諸の奇瑞を見るものを得、來りて王に詣らんと欲し、王の信



【阿私陀】アシダ  
(Aśita) 不白、無比  
等と譯す。  
【五通】天眼、天  
耳、神足、他心、天  
宿命の五神通。

を遣はして疾速に至るに會す。諸臣王に白さく、「相を知るの婆羅門、今已に到る。」王聞いて歡喜し、即ち勅して前ましめ、請じて殿に入りて坐せしめ、請の供養を設く。彼婆羅門即ち王に白して言くは、「我聞く、大王、新に太子を生み、請の相好奇特の瑞有り」と。願くば我等をして悉く之を見ることを得しめたまへ。時に、王、即ち勅して太子を抱きて出でしむ。諸の婆羅門、既に太子の相好威嚴を見て、未曾有と歎す。王、即ち問うて言はく、「今太子を占ふ。其相云何。」婆羅門言はく、「一切の衆生、皆子の好からんを欲するも、大王の今生みたまふ所の太子は、大王是れ王の子と云ふと雖も、乃ち是世間人天の眼にして言はく、「生みたまふ所の太子は、大王是れ王の子と云ふと雖も、乃ち是世間人天の眼なり」と。王、復、問うて言はく、「云何が知ることを得たる。婆羅門言はく、「我太子を觀るに、身色光焰、猶し眞金の如く、諸の相好有り、極めて明淨たり。若し出家せば、一切種智を成すべし。若し在家ならば、轉輪聖王と爲りて、四天下を領せん。譬へば江河にては海を第一と爲し、衆山の中にては須彌を最勝と爲し、凡そ諸の光輝あるは、目を無上と爲し、一切の清涼は、唯明月有るが如く、天人世間は太子を尊しと爲す。」王、此語を聞きて、心大いに歡喜し、諸の怖愕を離れぬ。彼婆羅門、又王に白して言はく、「一梵仙有り、阿私陀と名く。五通を具足して、香山に在り。彼能く王の爲に諸の疑惑を斷せん。」諸の婆羅門、此語を説き已りて、辭別して去りぬ。

爾時、白淨王、心に自ら思惟すらく、「阿私陀仙人は居して香山に在り。途遥嶮絶して



【四大】 地水火風  
一切のものを組織  
する元素、ここに  
ては身體の意

人の到る所に非ず。當に何の方を以てか請じ來りて此に至るべき」と。王が此心念を作せ  
る時、阿私陀仙人、遙に王の意を知り、又復先んじて諸の奇瑞の相を見て、深く菩薩の  
生死を破らんが爲の故に生を受くるを現することを解り、神通力を以て虚に騰りて來り、  
王宮の門に到る。時に、守門の者、入りて王に白して言はく、「阿私陀仙人、虚空に乗じて  
來り、今門外に在り。王、聞いて歡喜し、即ち勅して前ましむ、王門上に至りて自ら之を  
奉迎し、既に仙人を見るや恭敬し禮拜して、即ち問うて言はく、「尊者既に來り、門に住ま  
りて進まざるは、守門の者が、前むを遮さざるが爲か。」仙人答へて言はく、「止むる者を  
見る事無し。既に來りて相詣る。宜しく須らく先づ白すべし。」王、便ち隨從して後宮に  
入り、歡請して坐せしめ、問訊して言はく、「尊者、四大常に安住なりや不や。」仙人答へ  
て言はく、「大王の恩を蒙りて、幸に安樂なるを得たり。時に白淨王、仙人に白して言  
はく、「尊者が、今日能く來り下降せるは、我等の種族方に大いに熾盛にして、今より已上、  
日に吉祥に就かん。是雜邊の爲の故に、此に來るや。」仙人答へて言はく、「我香山に在りて、  
大光明、諸の奇特の相を見、又大王の心の所念を知る。是因縁を以ての故に、來りて  
此に到る。我神力を以て虚に乗じて來るや、上の諸天の説くを聞けり。王の太子、必ず當  
に一切種智を成じて、天人を度脱するを得べし。又王の太子、右脇より生れ、七寶の蓮花  
の上に墮して、行くこと七步するに、其右手を擧げて罽子吼せり。「我天人の中に於て、最  
尊最勝なり、無量の生死、今に於て盡きたり。此生一切の天人を利益せん。」又復諸天、爾

【三界】欲、色、無色の三世界をいふ。

【盛】香料を盛る

【跟】くびす。

【跌】足の甲。

續し恭敬せりと。此の如きの大奇特の事行るを聞く。快い哉、大王、宜しく應に欣慶すべし。太子今見るを得べきや不や。即ち仙人を將ひて太子の所に至り、王及び夫人、太子を抱きて出で、仙人を禮せんを欲す。時に彼仙人、即ち王を止めて曰はく、「此は是れ天人三界中の尊なり。云何が我をして禮せしむるや。時に彼仙人、即ち起ちて合掌して、太子の足を禮す。王及び夫人、仙人に白して言はく、「唯願くば尊者、太子を相することを爲せ。仙人、善しと言ひて、即便相を占ふ。具に相を見已りて、忽然として悲泣して、自ら勝ぶること能はず。王及び夫人、彼仙人の悲泣し流涙するを見て、舉身戰き怖れて、大憂惱を生ずること大波浪の小船を動かすが如し。仙人に問うて言はく、「我子の初生、諸の瑞相を具するに、何の不祥有りてか、悲泣するや。爾時、仙人、歎歎して答へて言はく、「大王、太子の相好は具足せり、不祥有ること無し。王又問うて言はく、「願くば、更に我爲に太子を占視せよ。長壽の相有りや不や。轉輪王の位を得て、四天下に王たるや不や。我年既に暮れぬ。國土を以て皆悉く之に付し、當に山林に隠して、出家學道すべきを欲す。志願すべき所は、唯此に在るのみ。尊者、必定の果を觀ると爲すや。」

爾時、仙人、また王に答へて言はく、「大王、太子は三十二相を具したまへり。一には足下安平、平なること、盆底の如し。二には足下の千幅網輪、輪相具足す。三には手足の相、指の長、餘人に勝る。四には手足柔軟にして、餘の身分に勝る。五には足跟廣くして具足満好なり。六には足指合、縷網、餘人に勝る。七には足趺高平にして、好く跟と相稱

【伊泥延】 アニネ  
イヤニニヤニ 腦  
如摩比相

【尼拘類樹】 ニヤ  
グロダ(Nyctro  
dia)無節ノ樹す。

【鬪浮檀金】 シヤ  
ムブナーダニヤ  
mhinna 鬪浮樹  
の下を流るる河中  
に生ずる砂金をい

【唯星】 ヤニマ  
ニ 如意珠と謂す。

【迦陵伽樹】 カラ  
ヤンカ(Kalavira  
ni)樹と謂す。

【白毫】 白き毛の  
うづめけるをいふ

【兜羅】 フーラ  
(Dum) 花鬘と譯  
す。

【無想入】 色界十  
八天の第十、この  
の天に生ずれば一  
期の間心想事成ら  
ざる故に名く。

ふ、八には伊泥延鹿鬪、織好なること、伊泥延鹿王の如し。九には平住して、兩手膝を摩す。十には陰藏の相、馬王象王の如し。十一には身の從廣等しくして、尼拘類樹の如し。十二には一一の孔に一毛生じ、青色柔軟にして右旋す。十三には毛上向して靡き、青色柔軟にして右旋す。十四には金色の相、其色の微妙なること鬪浮檀金に勝る。十五には身光の光、一丈なり。十六には皮薄く細滑にして、塵垢を受けず、蚊蚋を停めず。十七には七處の滿、兩足の下、兩手の中、兩肩の上、項の中に、皆滿字相分明なり。十八には兩腋下の滿、摩尼珠の如し。十九には身、師子の如し。二十には身廣く端直なり。二十一には肩、圓好なり。二十二には口に四十齒あり。二十三には齒白く齊しくして、密にして相淺し。二十四には四牙最も白くして大なり。二十五には方なる麴車、師子の如し。二十六には味中上味を得、咽中の二處より津液流出す。二十七には舌大いに軟薄にして、能く舌を覆ひ、耳の髮の際に至る。二十八には梵音深遠にして迦陵伽樹の響の如し。二十九には眼の色金精の如し。三十には眼隨牛王の如し。三十一には眉間の白毫相、軟白なること兜羅錦の如し。三十二には頂鬚の肉皮を、此の如き相好の身を具したまへり。若し在家せば、年二十九にして、轉輪聖王と爲りたまはん。若し出家せば、一切種智を成じ、廣く天人を濟ひたまはん。然るに王の太子は、必ず當に學道して、阿耨多羅三藐三菩提を成ずるを得た。ふべく、久しからずして當に清淨の法輪を轉じて、天人を利益し、世間の眼を闢くべし。我今、年壽已に百二十、久しからずして命終して無想天に生れん。佛の興るを見ず、經法を

【八】太子のため  
の三時殿について

聞かざるが故に、自ら悲しむのみ。又仙人に問はく、「尊者、向に占つて言ふ、二種有り。一には當に王と作るべし。二には正覺を成ぜん」と。而るに、今如何が決定して一切種智を成ぜんと言ふ。時に、仙人言はく、「我相の法、若し衆生有りて、三十二相を具するも、或は非處に生じ、又明顯ならずば、此人必ず轉輪聖王と爲らん。若し三十二相、皆其處を得、又復明顯ならば、此人、必ず一切種智を成ぜん。我、大王の太子の諸相を觀るに、皆其所を得、又極めて明顯なり。是を以て決定して正覺を成じたまはんことを知る。仙人、王の爲に此語を説き已りて、辭別して退く。

(八)爾時、白淨王、既に仙人の決定の說を聞きて心に愁惱を懷き、出家を慮り恐れ、即ち五百の青衣の賢明多智なるを擇びて、爲に嫗母と爲し、太子を養視す。其中或は乳する者有り、或は抱く者有り、或は浴する者有り、或は洗濯する者有り、是の如き等の比、太子に供給して皆悉く具足す。又復別に爲に三時殿を起す。溫涼、寒、暑に、各自處を異にし其殿は皆七寶を以て莊嚴し、衣裳服飾、皆悉く時に隨ふ。王、太子の家を棄てて道を學ばんことを恐れて、其城門の閑隙の聲をして、四十里に聞えしむ。又復五百の妓女の形容端正にして、肥えず瘦せず、長からず短からず、白からず黒からず、才能巧妙にして、各數技を兼ぬるを擇び取る。皆名寶を以て、其身を瓔珞し、百八一聲、迭ひに代りて宿衛す。其殿前に於て甘果を列樹し、枝葉蔚映し、花實繁茂す。又浴池有り、靜淨澄潔、池邊の香草、雜色の蓮花、猗靡芬敷すること、稱げて計ふべからず。異類の鳥、數百千種、



【九】 母后の生大に於いて、

【摩訶波闍波提】

マハーブラジヤパティ (Mahaprajapati) 大愛道、大生主と譯す。

【車匿】 梵にチャンダカ (Chandaka) と云ふ。

【跋提羅尼】 パーダラートナ (Padarathana) 跋提多羅の作者たる大婆羅門の名。

心目を光顯ならしむるもの、太子を趣悦せしむ。

太子既に生れ、始めて滿七日にして、其母命終す。太子を懐ける功德の大なるを以ての故に、初利に上生して、封受自然なり。太子、福德威重、女人の禮を受くるに堪ふるもの有ること無きを自ら知る。故に將に終らんとするに因りて、之に託して生れたるなり。

爾時、太子の嫡母、摩訶波闍波提、太子を乳養して、母の如く異ること無し。

時に白淨王、勅して七寶の天冠及以瓔珞を作りて、太子に與ふ。太子、年漸く長大して、象馬牛羊の車を辦ぜらる、凡そ是童子の玩好する所の具、給與せざること無し。

爾時、舉國の人民、皆仁惠を行ひ、五穀豐熟にして風雨時を以てし、又盜賊無く、快樂安隱なり。皆是太子の福德力の故に。時に王、又青衣の所生なる、是車匿等、五百の蒼頭を以て太子に給侍せしむ。

年七歳に至り、父王、心に念すらく、太子、已に大なり。宜しく書を學ばしむべし。國中の聰明なる婆羅門の、皆の書藝に善きを訪ね覓め、請使して來りて以て太子に教へしむ。爾時、一婆羅門有り、跋陀羅尼と名く。五百の婆羅門と、以て眷屬たり。來りて王の請を受く。即ち婆羅門に白して言はく、尊者を屈して太子の師と爲さんと欲す。此爾るべきや不や。婆羅門言はく、當に知る所に隨つて、以て太子に授くべし。時に白淨王、更に太子の爲に大學堂を起し、七寶もて莊嚴し、床檯學具極めて精麗ならしめ、吉日を卜擇して即ち太子を以て、婆羅門に與へて、之を教へしむ。爾時、婆羅門、四十九の書字の



【法樓書】 カロス  
 テイ (Kharosthi)  
 【蓮花書】 ブスカ  
 ラツリー (Pusta  
 Pustai)。

本を以て、教へて之を讀ましめんとす。時に太子、此事を見已りて、其師に問うて言はく、  
 『此は何等の書なる。閻浮提中の一切の諸書、凡そ幾種有りや。』師即ち默然として答ふる  
 所を知らず。又復問うて言はく、『此阿の一字に、何等の義有りや。』師、又默然として、亦  
 答ふるに能はず。内に慙愧を懷きて、即ち座より起ちて、太子の足を禮して、讚歎して  
 言はく、『太子初めて生れて七歩を行く時、自ら天人の中にて最尊最勝なりと言へり。此言  
 虚ならず。唯願くば爲に閻浮提の書に凡そ幾種有るかを説きたまへ。』太子答へて言はく、  
 『閻浮提の中に、或は法樓書有り、或は法樓書、或は蓮花書有り。是の如き等六十四種有り。  
 此阿字は、是れ梵音聲なり。又此字義は、是れ不可壞なり。亦是れ無上正眞道の義なり。凡そ  
 此の如きの義、無量無邊なり。』爾時、婆羅門深く慙愧を生じ、還つて王の所に至り、王に白  
 して言はく、『大王、太子は是天人の中の第一の師なり。云何が我をして教へしめんと欲し  
 たまふや。』爾時、父王、婆羅門の言を聞きて、倍歡喜を生じ、未曾有なりと歎じ、即ち  
 厚く彼婆羅門を供養して、意の之く所に隨ふ、凡そ諸の技藝、典籍、議論、天文、地理、算數  
 射御、太子悉く自然に之を知れり。

# 過去現在因果經

## 卷第二

宋天竺三藏求那跋陀羅譯

【二】太子諸人と武藝を盡試するを明す。

【提婆達多】デー

ツダツタ (Devahat)

【天授、天熱等と譯す、斛飯王の子。

【難陀】ナンダ

(Nanda) 歡喜と譯す、迦比羅城の王子。

【孫陀羅難陀】ス

ンダラナンダ (Sindaramana) 歡喜と譯す。

爾時、太子、年十歲に至る。諸の釋種中、五百の童子、皆亦同年なり。太子の從弟に提婆達多あり。次に難陀と名くる、次に孫陀羅難陀と名くる等に、或は三十相、三十一相なる者有り。或は、復三十二相有り。雖も相分明ならず。各伎藝に閑うて大筋力有り。時に提婆達多等の五百の童子、既に太子の、諸藝に皆通じて、名の十方に徹するを聞き、共に相謂つて言はく、太子、復聰明の智慧あり。善く諸論を解すと雖も、力脊に至りては、詎ぞ我等に勝らん。太子と、其勇健を較べんと欲す。

爾時、父王、又國中の善く射を知る者を訪ねて、之を召し來り、太子に教へしむ。即ち後園に往きて鐵鼓を射んと欲す。提婆達多等五百の童子、亦悉く隨從す。時に師、即便一小弓を授けて太子に興ふ。太子、笑を含んで之に問うて言はく、此を以て我に興へて、何等をか作さしめんと欲する。射師答へて言はく、太子をして此鐵鼓を射しめんと欲す。太子、又言はく、此弓力弱し。更に是の如き七弓を求めて將ち來り、師即ち授與す。太子、便ち七弓を執り、以て一箭を射、七の鐵鼓を過ぐ。時に彼射師、往いて王に白して言はく、天下、太子は自ら射藝を知り、一箭力を以て、射て七鼓を過ぐ。闍浮提の中、能く等し

き者無けん。云何が我をして師と作らしむるや。

爾時、白淨王、此語を聞き已りて、心に歡喜して自ら念言すらく、「我子聰明にして、書論算數は四遠、悉く知れども、其射藝は、四方の人民、未だ知る者有らず。即ち太子及び提婆達多等、五百の童子に勅し、又復鼓を撃ちて國界に唱令すらく、「太子薩婆悉達、即後七日、當に後園に出でて武藝を試みんと欲す。爾の人民中、勇力有る者は、悉く此に来るべし」と。第七日に到り、提婆達多六萬の眷屬と最も先に城を出づ。時に一大象有り。城門に當りて住る。此諸の軍衆、皆敢て前まず。提婆達多、諸人に問うて言はく、「何が故に此に住りて前まざるや」と。諸人答へて言はく、「一大象有り、門に當りて立つ。擧衆、之を畏るるが故に敢て前まず。提婆達多、此言を聞き已りて、獨り象の所に前みて、手を以て頭を搏つに、即便地に蹠る。是に於て軍衆次第に過ぐるを得たり。爾時、難陀、又眷屬と、亦城を出でんと欲す。其諸の軍衆、徐歩して漸く前む。難陀即ち問はく、「何が故に行くこと遅きや。諸人答へて言はく、「提婆達多、手に一象を搏つに、蹠れて城門に在り。行者の路を妨ぐ。是を以ての故に遅し。難陀、即便前んで象の所に至り、足指を以て象を挑げ、路傍に擲著す。無數の人衆、聚りて共に之を看る。爾時、太子、十萬の眷屬と、前後圍繞して始めて城門を出づ。路傍に人衆の聚り看るを見、即便問うて曰はく、「此諸人輩、何の看る所を爲すや。從人答へて言はく、「提婆達多、手に一象を搏つに蹠れて城門に在りて、人の行路を防ぐ。難陀、次に出でて足指を以て挑げて、此に擲著す。

是故に行人、悉く棄りて之を看る。是に於て太子、即ち自ら念言するく、今や正に是れ力を現はすの時」と。太子便即手を以て象を執り、城外に擲著し、還手を以て搯して、傷損せり。象又還つて驚りて、苦痛する所無し。時に、諸の人民、未曾有と歎す。王此を聞き已りて、深く奇特を生ず。是の如く太子、及び提婆達多、并に難陀と、四遠の人民、皆悉く來集して、被園中に在り。

爾時、彼園種種に莊嚴して、金鼓、銀鼓、鍍石の鼓、銅鐵等の鼓を施列して、各七枚有り。爾時、提婆達多、最も先に之を射て、三金鼓を徹す。次に及び難陀も亦三鼓を徹す。諸の來はる人衆、悉く皆羅敷す。爾時、群臣、太子に白して言はく、提婆達多、及與難陀、皆已に射訖れり。今や次第は正しく太子に在り。唯、願くば太子、此諸鼓を射よ。是の如く三たび請ふ。太子、善しと曰ひて、之に語りて言はく、若我をして諸鼓を射しめんと欲せば、此の力弱し。更に強き者を覓む。諸臣答へて言はく、太子の祖王に、良弓あり。今王庫に在り。太子語りて言はく、「便ち取り來るべし。」弓既に至るや太子即ち牽きて以て一箭を放ち、雷鼓を徹し過ぎて、然る後に地に入り、泉水流出し、又亦大鐵圍山を穿ち過ぐ。爾時、提婆達多、又難陀と共に相撲戲す。二人力等しく亦勝つ者無し。太子又前んで、手に二弟を執りて、之を地に擲し、惡力を以ての故に傷き痛まりめず。爾時、四遠の諸の人民衆、既に太子の此の如き力有るを見て、高聲に唱へて言はく、白淨王の太子は、但智慧の一切人に勝るるのみにあらず、其力の勇健なることも、亦等しき者無し」と。歡伏

【大鐵圍山】梵ヒチヤクラツダ(Cakrawala)といふ、須彌山を圍みて九山八海あり、その外圍を限る山



【二】太子の灌頂

せざるもの無く、益恭敬を生ず。

【薩婆悉達】サルワールタツダ(Sarvastivada)一切義成と譯す。

【三】太子が樹下の思惟について。

【淨居天】スツダ一ツラサ(Suddha)色界十八天中の最後の五天。不還果の聖者の居るところ。

爾時、白淨王、即ち諸臣を會して共に議して言はく、太子、今年年已に長大なり。智慧勇健にして、皆悉く具足せり。今宜しく應に四大海水を以て太子の頂に灌ぐべし。又復、勅を餘の小國王に下すらく、却後二月八日、太子の頂に灌がらん。皆來り集るべし。二月八日に至るや、諸の餘國の王、并に及び仙人、婆羅門等、皆悉く雲集し、雲の幡蓋を懸け、香を燒き花を散じ、鐘を鳴らし鼓を撃ち、諸の伎樂を作し、七寶の器を以て四海の水を盛り、諸の仙人衆、各各頂戴して婆羅門に授け、是の如くして、乃至遍く諸臣に及び、悉く已に頂戴して、傳へて王に授與す。時に、王即ち以て太子の頂に灌ぎ、七寶の印を以て之に付す。又大鼓を撃ちて、高聲に唱へて言はく、今、薩婆悉達を立てて以て太子と爲す。爾時、虚空の天、龍、夜叉、人非人等、天の伎樂を作し、異日同音に讚じて善い哉と言ふ。迦毘羅施兜國に於て太子を立てる時に當りて、餘の八國王も亦是日に於て同じく太子を立てつ。

爾時、太子、王に啓して出遊す。王即ち聽許す。時に王、即ち太子並に諸の群臣と前後導從して國界を按行し、次で復前行して王の田所に至りて、即便闍浮樹下に止息して、諸の耕人を見る。爾時、淨居天、化して壤蟲と作り、鳥隨つて之を啄む。太子、見已りて慈悲心を起すらく、衆生愁むべし。互に相呑食すと。即便思惟すらく、欲界の愛を離れて、是の如く乃至四禪地を得ん。日光明斷赫するや、樹爲に枝を曲げ隨つて太子を蔽ふ。





【五】 四門遊觀。

るべきやを瞻看すべし。彼に停まること、滿七日に至るべし。王勅を受け已りて、即便彼長者の家に往き、七日中に於て具に此女を觀、還つて王に答へて言はく、我、此女の容貌端正、威儀進止を見る、與に等しきものなし。王其言を聞きて極めて大いに歡喜し、即便人を遣はして、摩訶那摩に語つて言はく、太子年長じて、爲に妃を納れんと欲す。諸臣並に言ふ、汝が女淑令なり、宜しく此舉に堪ふべし。今、相屈せんと欲す。時に、摩訶那摩、王の使に答へて言はく、謹んで勅旨を奉ぜん。と。即ち諸臣をして、吉日を擇び推らしめ、車萬乘を遣はして、往いて之を迎ふ。既に宮に至り已りて太子、婚嫁の禮を具足し、又復更に諸の妓女衆を増して晝夜娛樂せしむ。爾時、太子恆に其妃と、行住坐臥、未だ曾て俱にせずんばあらざるも、初より自ら世俗の意有ること無く、靜夜中に於て但禪觀を修するのみ。時に王、日日、諸の妹女に問はく、太子は妃と相接近するや不や。と。妹女答へて言はく、太子に夫婦の道あるを見ず。王、此語を聞きて愁憂して樂しまず。更に妓女を増して之を娛樂せしむ。是の如く、時を経るも猶接近せず、時に王、深く不能男ならんを疑ひ恐れたり。

爾時、太子、諸の妓女の花果茂盛し流泉清涼なる園林に歌詠するを聞き、太子忽ち便ち出でて遊觀せんと欲す。即ち妓女をして往いて王に白さしめて言はく、宮に在るの日久し。暫く園林に出でて遊戯せんことを樂ひ欲す。王、此語を聞き心に歡喜を生じて、自ら念言すらく、太子は當に是宮に在りて夫婦の禮を行ふを樂しまざるべし。所以に園林に

出でて去らんことを求むるのみ。即便之を騙し、諸の群臣に勅して、國を兼治し、經  
 る所の道路を皆清淨ならしむ。太子、即便往いて王の所に至り、頭面足を塵し、辭して  
 出でて去れり。時に、王、即便一箇臣の、聰明智慧にして言語に善き者に勅して、太子に従  
 はしむ。爾時、太子、諸の官屬と前後導從して城の東門より出づ。國中の人民、太子の  
 出づるを聞き、男女路に逐ち、觀者雲の如し。時に、淨居天、化して老人と作り、頭白く  
 背縮り、杖に拄わけて麻歩す。太子、即便從者に問うて言はく、「此れ何人とか爲す。從者答  
 へて曰はく、「此は老人なり。太子又問はく、「何を謂つてか」と爲す。答へて曰はく、「此人  
 昔日、曾て嬰兒、童子、少年を難たり。還謝して住らず、遂に根斷するに至り、形變じ色衰  
 へ、飲食消せず、氣力虚微、坐起に苦極し、餘命幾くも無し。故に謂つて老と爲す。」太子、  
 又問はく、「唯、此人の云老なるや、一切皆然るや。從者答へて言はく、「一切皆悉く然當  
 に此の如くなるべし。」と

爾時、太子、是語を聞きはりて、大善慍を生じて自ら念言すらく、「日月流れ過ぎ、時變  
 り歳移り、老の至ること電の如し。身安んぞ恃むに足らん。我、富貴なると雖も、嬰  
 免れんや。云何が世人は情授せざる。太子、本より以來、世に處するを樂します。又此事  
 を聞きて、公、厭難を生じ、即ち車を廻して還り、愁へ思うて樂しまず。時に王聞き已り  
 て、心に煎憂を懷き、其事道を恐れ、更に妓女を増し、以て之を娛樂せしむ。

爾時、太子、復少時を経て、王に啓して出遊す。王此言を聞きて、心に憂慮を生じて、

自ら念言すらく、「太子前に出でて老人に逢ひ見て、憂愁して樂します。今や云何が復出るを求むる。」王太子を愛して、違異するに忍びず。備儀して之に従ひ、即ち諸臣を集めて共に議して言はく、「太子前には城の東門を出でて、老人に逢ひ見、還つて轎も樂まざりき。今、已に、復出でて遊觀せんことを求む。吾免るること能はず。遂に復之を許しぬ。」諸臣答へて言はく、「當に更に外の諸官屬に嚴勅して、道路を修治し、道の幡蓋を懸け、散華し焼香し、皆華麗ならしむべし。臭穢、諸の不淨潔、及以老病をして、道の側に在らしむること無かれ。」

爾時、迦毘羅施兜城の四門の外に、各一園有り。樹木花果、浴池樓觀、種種に莊嚴して、皆悉く異ること無し。王、諸臣に問はく、「外の諸の園觀、何れを勝と爲すや。」諸臣答へて言はく、「外の諸の園觀、皆等しくして異なること無く、初利天の歡喜の園の如し。」王、又勅して言はく、「太子、前に出でしは、已に東門よりせり。今は南門より出でしむべし。」爾時、太子、百官導從して、城の南門を出づ。時に淨居天、化して病人と作る。身瘦せ腹大にして喘息呻吟し、骨消え肉落きて顔貌痿黃に、舉身戰き掉うて、自ら持するること能はず。兩人扶掖して路の側に在り。太子即ち問はく、「此を何人と爲す。從者答へて曰はく、「此は病人なり。太子又問はく、「何を謂つてか病と爲す。」答へて曰はく、「夫れ病と謂ふは、皆嗜欲に由る。飲食度無ければ、四大調はず、轉變病を成し、百節苦痛、氣力虛微、飲食寡少、眠臥安からず、身手有りと雖も、自ら運ぶこと能はず、要す他の力を假り



て然る後に坐起す。」

爾時、太子、慈悲心を以て、彼病人を看、自ら愁憂を生じて、又復問うて言はく、「此人獨りのみなりや、餘も皆然りや。」答へて曰はく、「一切の人民、貴賤有ること無く、同じく此病有り。」太子聞き已りて心に自ら念言すらく、「此の如きの病苦、普く之に要るべきに、云何が世人、樂に耽りて畏れざる。」と。此念を作し已りて、深く恐怖を生じて、身心の戦き動くこと、譬へば、月影の波浪の水に現するが如し。從者に語りて言はく、「此の如きの身は、是大苦の聚なるを、世人は中に於て横に歡樂を生じ、愚癡にして識る無く、覺悟を知らず、今、云何が彼闇に往きて、遊觀嬉戯せんと欲する。」と。卽使車を廻し、還りて王宮に入り、空に自ら思惟し、愁憂して樂します。王、從者に問はく、「太子今出でて、寧ろ樂しめること有りや不や。」從者答へて言はく、「始め南門を出でて、病人に逢ひ見たり。此を以て樂します。卽ち車を廻らして還れり。」王、此語を聞きて、心に大いに憂し、共出家を慮る。時に王、卽使諸臣に問うて言はく、「太子前には城の東門を出でて老人に逢ひ見て、愁憂して樂しまさりき。此事を以ての故に、吾等等に勅して道路を淨治し、老病をして甚側に在らしむること無からしめたり。云何が今城の南門を出でて、復疾病人の有ることを致し、又太子をして逢値して之を見しめたりや。」諸臣答へて言はく、「近く王の勅を受けて、嚴に外司に命じて、諸の臭穢、老病をして、道側に在らしむること勿らしめたり。互に相捨覆して、敢て懈怠すること無かりき。知らず、何に緣りてか、忽ちに病人

【憂陀夷】ウダ  
イ(Upatissa)出  
現と譯す。迦尼羅  
城の國師の子。

有りしや。是れ我等の罪咎に非ざるなり。爾時、王、諸の從者に問うて言はく、「汝等並に病人の路に在るを見たり。何よりしてか至れる。」從者答へて曰はく、「蹤跡有ること無し。何れより來れるかを知らず。時に王、深く太子に於て、猶豫の心を生じ、其學道を恐れ、更に妓女を増して、其意を悦ばしめ、又復五欲の中に於て、戀著の心を生ぜしめんことを欲せり。

爾時、一婆羅門子有りて、憂陀夷と名く。聰明智慧にして極めて才辯有り。時に、王、即便請じ求めて宮に入れ、之に語りて言はく、「太子、今や世に在りて五欲を受くるを樂ます。恐くは其久しからずして出家學道せん。汝、之と共に朋屬と作り、具に世間の五欲の樂事を説きて、其をして心動きて、出家を樂しまざらしむべし。」時に優陀夷、即便答へて言はく、「太子の聰明、與に等しき者無し。知る所の書論、皆悉く淵博、並に是れ我今未だ曾て聞かざる所なり。云何が之を誘説せしむるを見んや。」譬へば、藕絲を以て須彌を懸けんと欲するがごとく、我も亦是の如し。終に太子の心を廻らすこと能はざらん。大王、既に勅して朋友と作らしむ。要す當に自ら我知見する所を竭すべし。時に優陀夷、王の勅を受け已りて、太子に隨從し、行住坐臥に、敢て遠離せず。時に、王、又復諸の妓女の、聰明智慧、顔容端正にして、歌舞に善く、能く人を惑はす者を選び、種種に莊飾し、光麗目を悦ばしむるを、皆悉く遣し、往いて太子に給侍せしむ。

爾時、太子、復少時を経て、王に啓して出遊す。王、此語を聞きて、心に自ら念言すら

く、彼優陀夷、既に太子と共に朋友たり。今若し出遊せば、或は前に勝りて、復俗を厭ひ出家を樂しむの心無からん。」と。此念を作し已りて、即便聽許す。時に王、又復諸の大臣を集め、悉く之に語つて言はく、「太子、今、復出遊を求めたり。我、違ふに忍びず、巴に復之を聽せり。太子、前に東南の二門を出でて、巴に老病を見、還つて輒ち憂愁せり。今は宜しく西門より出でしむべし。我心其を慮りて、還又樂します。然れども優陀夷は、是れ其良友なり。冀くば、今出で還らん、復爾るべからざることを。卿等、好く道路を修治せしめ、園林、臺觀を、皆嚴整ならしめ、香華幡蓋を、前に數倍とし、復老病臭穢有りて、道側に在らしむること無かれ。」と。臣勅を受け已りて、即ち外司に語りて、道路并に及び園林を嚴治して光麗常に倍せしめ、王、又先づ諸の妙妓女を送りて、彼園中に置き、又復勅して優陀夷に語りて言はく、「若し路側に當りて、不祥の事有らば、方便を以て其心を誘ひ悅ばしむべし。」并に諸臣に勅して、太子に隨從し、皆伺察して、若し不吉有れば、違く之を驅逐せしむ。爾時、太子、優陀夷と、百官導從して、燒香し散花し、衆の伎樂を作して、城の西門を出づ。時に淨居天、心に自ら念言すらく、「先に老病を二城門に現じ、衆を擧げて皆見たれば、白淨王をして從者并に及び外司を嗔責せしむ。太子の今出づる、王の制すること嚴峻なり。我、今死を現じ、若し皆見ば、王の忿怒を増し、必ず罰戮を加へ、狂、無辜に及ばん。我、今日に於て現する所の事、唯太子及び優陀夷の二人をして見しめんのみ。餘の官屬をして責を受けざらしめん。」此念を作し已りて、即便來り下り、

化して死人と爲る。四人輿を擧げ、諸の香華を以て、屍上に布散し、室家大小、號哭して之を送る。爾時、太子、優陀夷と二人のみ獨り見る、太子問うて言はく、「此は何物と爲す。花香を以て其上を莊飾し、復人衆有りて、號哭して相送る。」時に優陀夷、王勅を以ての故に、默然として答へず。是の如く三たび問ふや、淨居天王の威神の力、優陀夷をして覺えず答へて言はしむ、「是れ死人なり。」太子、又問はく、「何を謂つてか死と爲す。」優陀夷言はく、「夫れ死と謂ふは、刀風形を解いて、神識去り、四體諸根、復知る所無きなり。此人の世に在るや、五欲に貪著し、錢財を愛惜し、辛苦經營、唯積聚を知るのみ、無常を識らざるに今や一旦之を捨てて死す。又父母、親戚、眷屬の爲に愛念せらるるも、命終の後猶し草木の如く、恩情の好惡、復相關せず。是の如く死は誠に哀れむべきなり。」太子聞き已りて、心大いに戦き怖れ、又優陀夷に問うて言はく、「唯此人のみ死するや、餘も亦然るべきや。」即ち復答へて言はく、「一切の世人、皆此の如くなるべし。貴も賤も、免脱するを得ること有ること無し。」太子、素性、恬靜難動なり。既に此語を聞き、自ら安んずること能はず、即ち微聲を以て優陀夷に語るらく、「世間、乃ち復此死苦有るを、云何が中に於て放逸を行じつつ、心木石の如くにして怖畏を知らざるや。」と。即ち御者に勅すらく、「車を廻らして還るべし。」御者答へて言はく、「前に二門を出でしに、未だ園所に至らず、中路にて反り、大王をして深く曠責せられしむることを致せり。今、豈敢て復此の如くせんや。時に優陀夷、御者に語りて言はく、「汝が説く所の如し。便ち歸るべからず。」即ち復前行し



て、彼園中に至るに、香華幡蓋、衆の伎樂を作し、樂妓の端正、猶し諸天の仙女の如く、異なる無きもの太子の前に於て、各競つて歌舞し、姿態を以て其意を悦ばし動かさんことを冀ふ。太子の心安くして、移轉すべからず。即ち園中に止り、樹間に安息し、其侍衛を除きて端坐思惟し、昔、曾て閻浮樹下に在りて欲界を遠離し、乃至第四禪定を得たりしを憶ふ。

爾時、優陀夷、太子の所に到りて、此言を作さく、大王、勅して太子と共に朋友たらしめらる。脱し得失有らば互に相開悟せん。朋友の法、其要三有り。一には過失有るを見れば、輒ち相諫曉せん。二には好事有るを見れば深く隨喜を生ぜん。三には苦厄に在らば、相乘捨せざらん。今、誠言を獻ぜん、願くば責められざれ。古昔の諸王も及び今現在のものも、皆悉く五欲の樂を受けて然る後に出家するを、太子は云何が永絶して願みざる。又人の世に生るる、宜しく人行に隨ふべし。國を棄てて道を學する者有ること無し。唯願くば太子、五欲を受けて、子息有り、王嗣を絶たざらしめよ。爾時、太子、之に答へて言はく、誠に説く所の如し。但我、以て國を捐てざるが故に爾るのみ。亦復五欲を樂無しと言はず。老病生死の苦を畏るるを以ての故に、五欲に於て敢て愛著せざるなり。汝が向に言へる所、古昔の諸王は、先づ五欲を経て然る後に出家す一と。此諸王等、今、何許にか在る。愛欲を以ての故に、或は地獄に在り、或は餓鬼に在り、或は畜生に在り、或は人、天に在り。是の如き輪轉の苦有るを以ての故に、是を以て我老病の苦、生死の法を離れんと欲するのみ。

汝、今云何が我をして、之を受けしむるや。時に優陀夷、才辯を竭して、太子に勸奨すと雖も、廻らしむること能はず。即便退坐して、所止に歸る。太子、仍つて勅して駕を嚴め宮に還る。諸の妓女衆、及び優陀夷、愁憂慘戚、顔貌皴皴すること、人の新に愛する所の親屬を喪ひしが如し。太子、宮に到りて、惻愴常に倍す。

時に白淨王、優陀夷を呼びて、之に問うて言はく、「太子の今出、寧ろ樂める有りや不や。」と。優陀夷言はく、「城を出づること遠からずして、死人に逢ひ見る。亦其何れよりして來れるかを知らず。太子と我と同時に之を見たり。太子問うて言はく、「此は何人と爲すや。」我も亦覺えず。「是れ死人」と答へたり。「時に王、即ち復諸の從者に問はく、「汝等、皆、城の西門外に、死人有るを見しや不や。」從者答へて言はく、「我等見ず。」王、此語を聞きて神意驚然として、自ら念言すらく、「太子、優陀夷の二人のみ獨り見たるは、此は是れ天力なり、諸臣の答に非ず。必定して當に阿私陀の言の如くなるべし。」此念を作し已りて、心大いに苦惱し、復妓女を増して、以て之を娛樂せしめ、日日人を遣はして、太子を慰誘し、之に語つて言はく、「國は是れ汝の有なり。何が故に愁憂して樂しまざるや。」下又諸の妓女衆に嚴勅すらく、「太子の意を悅ばせ、晝夜を捨つること勿れ。」

時に、白淨王、天力にして、復人事に非ざるを知ると雖も、太子を愛重して、言はざるを能はず。心に自ら思惟すらく、「太子前に已に三城門を出でたり。今は唯北門の未だ出でざる有るのみ。其必ず久しからずして、更に出遊を求めん、當に復彼外國林を莊嚴し

【結】煩惱の異名  
心身を纏縛するを  
以て名く。

て、倍光麗ならしめ、諸の不可意の事有らしむる勿るべし。思惟せる所の如く、具に諸臣に勅す。時に、王又復心に自ら願つて言はく、太子、若し城の北門を出でん時、唯願くば、諸天、復不吉祥の事を現じて、復我子をして心に憂惱を生ぜしむる勿らんことを。既に心に願じ已りて、遂に御者に勅すらく、太子、若し出でば、當に馬に乗せしめて、四に諸の人民の光麗なる莊飾を望み見るを得しむべし。是時、太子、王に啓して出遊せんとす。王、違ふに忍びず、便ち優陀夷及び餘の官屬と前後導從して、城の北門を出でて、彼園所に至る。太子馬を下り、樹に止息し、侍衛を除去して、端坐し思惟し、世間の老病死苦を念ずる。時に淨居天、化して比丘と作り、法服にして、鉢を持ち、手に錫杖を執り、地を視て行き、太子の前に在り。太子、見已りて、即便問うて言はく、汝は是れ何人ぞ。比丘答へて言はく、我は是れ比丘なり。太子又問はく、何をか比丘と謂ふ。答へて言はく、能く結賊を破り、後身を受けざるが故に、比丘と曰ふ。世間は皆悉く無常危脆なり。我修學する所は、無漏の聖道、色、聲、香、味、觸、法に著せず、永く無爲を得て、解脱の岸に到るなり。此言を作し已りて、太子の前に於て神通力を現じて、虚に騰りて去る。爾時に當りて、諸從官屬、皆悉く觀見せり。

太子、已に此比丘を見、又廣く出家の功德を説くを聞きて、其宿懷厭欲の情に會し、便ち自ら唱へて言はく、善い哉善い哉、天人の中、唯此を勝と爲す。我當に決定して是道を修學すべし。此語を作し已りて、即便馬を索めて宮城に還歸す。時に太子、心に欣慶を

【染色衣】袈裟のこと。前出。

生じて、自ら念言すらく、「我、先に老病死苦有るを見て、晝夜常に此が爲に逼らるるを恐れしに、今、比丘を見るや、我情を開悟し、解脱の道を示す。此念を作し已りて、即ち自ら思惟方便して出家の因縁を求覓す。」

爾時、白淨王、優陀夷に問うて言はく、「太子の今出、寧ろ樂める有りや不や。」時に優陀夷、即ち答へて言はく、「太子向に出でて、經たまひし所の道路、諸の不辭無し。既に園中に到りて太子獨り自ら樹下に在り、遙に一人を見たまへり。鬚髮を剃除し、染色衣を著け、太子の前に來りて、共に言語し、言語既に畢りて、虚に騰つて去る。竟に亦何を論說せるかを知らず。太子是に因りて、駕を嚴しめて歸る。爾時に當りて、顔容歡悅し、還りて宮中に至りて、方に憂愁を生じたり。」と。時に、白淨王、既に此語を聞きて、心に狐疑を生じ、亦復は何の瑞相たるかを知らず。深く懊惱を懷きて、自ら念言すらく、「太子、決定して家を捨て道を學せん。又其妃を納れ、久しうして子無し。我、今應に耶輪陀羅に勅すべし、當に方便を思うて、國嗣を絶つこと莫かるべし。復應に警戒して太子の去るを知らざらしむること勿るべし。既に是念を作すや、思惟する所の如く、即便耶輪陀羅に勅す。耶輪陀羅、王の勅を聞き已りて、心に慚愧を懷き、默然として住し、行止坐臥、太子を離れず。時に王復諸の妙妓女を増して、以て之を娛樂せしむ。」

爾時、太子、年十九に至り、心に自ら思惟すらく、「我、今正に是れ出家の時なり。」と。便ち往いて父王の所に至る。威儀痒序、猶し帝釋の、往いて梵天に詣るが如し。傍臣見已り

【六】 太子の出家



て王に白して言はく、「太子、今大王の所に來る。」と。王、此言を聞きて、憂喜交集る。太子既に至りて、頭面に禮を作す。爾時、父王、即便之を抱き、勅して坐せしむ。太子坐しじりて、父王に白して言はく、「恩愛の集會には必ず別離有り。唯願くば我出家學道を聽したまへ。一切の衆生の愛別離苦を皆解脫せしめん。願くば必らず許を垂れて、留難せられざれ。」

時に白淨王、太子の語を聞きて、心大いに苦痛すること、猶し金剛の山を摧破するが如く、舉身戦き掉ひて本座に安んぜず、太子の手を執りて復言ふこと能はず。啼泣涙涙し、嗟啼啞啞し、是の如くすること良久しうして、微聲に言はく、「汝、今宜しく速に出家の意を息むべし。所以は何ん。年既に少壯にして、國未だ嗣有らざるに、便ち我に委して、曾て廻顧せざることを。爾時、太子、既に父王の流涙して許さざるを見て、所止に還歸し、出家を思惟して、愁憂樂します。」

爾時、迦毘羅佛兜國の諸大相師、太子を占知すらく、「若し出家せずんば、七日を過ぎて後、轉輪王の位を得、四天下に王として、七寶自ら至らん」と。各知る所を以て、往いて王に白して言はく、「釋迦種姓、此に於て方に興らん。王、是語を而きて心に歡喜を生じ、即ち諸臣并に釋種の子に勅すらく、「汝、相師の此の如く言ふを聞くや不や。皆、應に日夜太子を侍衛し、城の四門に於て門ごとに各千人、城外一踰闍那内を周匝して、人衆を邏置し、是を防護すべし。」復耶輸陀羅并に諸内官に勅すらく、「倍警戒を加へ、七日を

過ぐるまで家を出でしむること勿れ。」

時に、王又來りて太子の所に至る。太子遙に見、即ち往いて奉迎し、頭面に足を禮し、

起居を問訊す。王、太子に語るらく、「我昔既に阿私陀の説、及び衆の相師、并に諸

の奇瑞を聞きて、必定して汝が世に處するを樂しまざるを知りぬ。國嗣既に重し、屬當に

相繼ぐべし。唯願くば我爲に、汝が一子を生みて然る後に俗を絶てよ。復相違せ。」と。

爾時、太子、父王の言を聞きて、心に自ら思惟すらく、「大王の苦に我を留むる所以の者

は、正に自ら國に紹嗣無きが爲のみ。」と。此念を作し已りて、王に答へて言はく、「善い

哉、勅の如くせん。」即ち左手を以て、其妃の腹を指す。時に耶輸陀羅、便ち體の異るを覺

え、自ら疑める有るを知る。王、太子が、「勅の如くせん。」の言を聞き、心に大いに歡喜し

て當に謂へらく、「太子七日の内、必ず未だ兒有らざらん。若し此期を過ぎなば轉輪王の位、

自然に至り、復出家せざらん。」

爾時、太子、心に自ら念言すらく、「我年已に一十有九に至り、今は是れ二月、復是れ七日な

り。宜しく應に方便して出家を志求すべし。所以は何ん。今、正に是れ時にして、又父王に

於て所願も已に満ずればなり。此念を作し已りて、身に光明を放ちて四天王宮を照し、乃

至、淨居天宮を照し、人間をして此光明を見しめず。爾時、諸天、此光を見已りて、皆太子

の出家の時至るを知り、即便來り下りて、太子の所に到り、頭面に足を禮し、合掌して白し

て言はく、「無量劫來、修せざる所の行願、今や正に成熟の時なり。」と。是に於て、太子、

諸天に答へて言はく、「汝等の語の如く、今正に是れ時なり。然れども父王、内外の官屬に勅して戰に防衛せらる。去らんと欲するも從ふこと無し。」と。諸天白して言はく、「我等、自ら當に諸の方便を設け、太子をして出でしめ、知る者無からしむべし。諸天即便其神力を以て、諸の官屬をして、皆悉く昏臥せしむ。

爾時、耶輸陀羅、眠臥の中に、三大夢を得たり。一には月地に墮つと夢む。二には牙齒落つと夢む。三には右臂を失ふと夢む。此夢を得已りて眠の中より驚き覺め、心大いに怖懼し太子に白して言はく、「我、眠の中に於て三惡夢を得たり。太子問うて言はく、「汝が夢は何等ぞや。耶輸陀羅、即便具に夢みる所の事を説く。太子、語りて言はく、「月猶天に在り。齒又落ちず。臂また尙在り。復當に知るべし、諸の夢は虛假にして實に非ざることを。汝、今、應に横に怖畏を生ずべからず。耶輸陀羅、又太子に語るらく、「我自ら夢むるところの事を付る如くんば、必ず是れ太子出家の瑞なり。」太子又答ふらく、「汝但安眠せよ。此慮を生ずること勿れ。要す汝をして不祥の事有らしめず。」耶輸陀羅、此語を聞き已りて、即便還眠る。太子即ち坐より起ち、遍く妓女及び耶輸陀羅を觀るに、皆木人の如く、譬へば芭蕉の中に堅實なきが若し。或は樂器の上に倚りて伏して臂脚の地に垂るる有り。更に相枕に臥して、鼻涕、目淚し、口中に涎を流す。又復遍く妻及び妓女を觀、其形體を見て、髮、爪、髓腦、骨、齒、鬚鬣、皮膚、肌肉、筋、脈、肪、血、心、肺、脾、腎、肝膽、腸、胃、屎尿、涕唾、外に革囊を爲し、中に臭穢を盛る。一の奇とすべき無し。強ひて熏するに香を以てし、

【健陟】 カンダカ  
(Kantaka) 太子  
の愛乗せる白馬の  
名。

【結使】 結も使も  
其に煩惱の異名。  
心身を繫縛し苦界  
を結成するが故に  
結。衆生を隨逐し  
又は衆生を驅使す  
るが故に使と云ふ

飾るに花姫を以てす。譬へば、假借せるを當に還すべきが如く、亦久しきを得ず。百年の命、臥して其半を消す。又憂惱多くして、其業幾くも無し。世人云何が恆に此事を見て、覺悟せず、又其中に於て、姪欲に貪著するや。我今、當に古昔諸佛所修の行を學し、急に此大火の聚に遠かるべし。

爾時、太子、是を思惟し已りて、後夜に至る。淨居天王、及び欲界の諸天、虚空に充滿し、即ち共に聲を同じくして、太子に白して言はく、「内外の眷屬、皆悉く偈臥す。今、正に是れ出家の時なり。爾時、太子、即便自ら車匿の所に至るに、天力を以ての故に、車匿自ら覺む。之に語りて言はく、「汝、我爲に健陟に被せ來るべし。爾時車匿、此言を聞き已りて、舉身戰怖して心に猶豫を懷く。一には太子の命に違ふを欲せず。二には王の勅旨の嚴峻なるを畏る。思惟良久しくして涙を流して言はく、「大王の慈勅、是の如く嚴に、且又、今は遊觀の時に非ず。又怨敵を降伏するの日に非ず。云何が此後夜の中に於て、忽ちに馬を素め、何くに之かんと欲したまふや。太子、又復車匿に語りて言はく、「我、今、一切衆生の爲に、煩惱、結使の賊を降伏せんと欲するが故に、汝今、應に我此意に違ふべからず。爾時、車匿、聲を擧げて號泣し、耶輸陀羅及び諸の眷屬をして、皆悉く太子の當に去るべきを覺り知らしめんと欲せるも、天神力を以て偈臥故の如し。車匿即便馬を牽ひて來る。太子、徐に前んで、車匿及び健陟に語るらく、「一切の恩愛、會は當に別離すべし。世間の事は果遂すべきこと易く、出家の因縁は甚だ成就し難し。車匿聞き已りて默然



として言無く、是に於て、提提も復噴鳴せず。

爾時、太子、明相出でて身より光明を放ち、十方を徹照するを見て、師子吼して言は

く、「過去の諸佛、出家の法なり。我今亦然り。是に於て諸天、馬の四足を捧げ、共に車匿

を接し、釋提桓因、蓋を執りて、隨從す。諸天即便城の北門をして、自然に開いて聲有

らしめず。太子是に於て、門より出づれば、虚空の諸天、讚歎して隨從す。爾時、太子、又

師子吼すらく、我、若し生老病死憂悲苦惱を斷せずんば終に宮に還らざらん。我、若し阿耨多羅

三藐三菩提を得ず、又復法輪を轉ずること能はずんば、要す還父王と相見じ、若し當に恩

愛の情を盡さざるべくんば、終に還摩訶波提、及び耶伽陀羅を見じ。太子が此誓を説

く時に當り、虚空の諸天、讚じて言はく、「善哉、斯言必ず果さん」と。天曉に至りて、

所行の道路に三踰闍那なり。時に諸の天衆、既に太子に從ひ、此處に至り已るや、所

爲の事畢りて、忽然として現ぜず。爾時、太子、次で行いて、彼跋伽仙人の苦行林中に至る。

太子此園林の、寂靜にして諸の諸閑無きを見、心に歡喜を生じて諸根悦豫す。即便馬

を下り、背を撫でて言はく、「爲し難き所の事を汝は作し已畢りぬ。又車匿に詣るらく、馬

の行くこと賤狹にして、金翅鳥王の如かりしに、汝は既に隨從して我側を離れず。世間の

人、或は善心有るも相隨はず。或は形力を運ぶも心稱はず。汝、今心形皆悉く違ふこ

と無し。又世間の人は、富貴に處れば競ひ隨つて奉事す。我既に國を捨てて、此林中に來

るに、唯汝一人のみ獨り能く我に隨ふ。甚希有なりとす。我、今既に閑靜處に至りぬ。

【跋伽】 バカ(Bhaga) 或はバガ(Bhagava) 苦行婆羅門なり。

【金翅鳥】 ガルダ(Garuda) 龍を取りて食すといはる鳥類の王。神話化したる想像上の大怪鳥。

汝便ち蹠蹠と俱に宮に還るべし。爾時、車匿、此語を聞き已りて、悲號し啼泣し迷悶して地に蹠れ、自ら勝ふること能はず。是に於て蹠蹠、既に遣らるると聞き、膝を屈して足を舐め、涙落つること雨の如し。車匿答へて言はく、「我今、云何が太子の此の如く言ふを聽くに忍びんや。」我、宮中に於て大王の勅に違ひ、輒く蹠蹠に被せて以て太子に與へ、今日、來りて此に至らしむることを致せり。父王及び摩訶波闍提、太子を失ふが故に、必ず當に憂惱すべし。宮中内外、亦應に騒動すべし。又復此處、諸の嶮難多く、猛獸毒蟲、道路に交横す。我、今云何が太子を捨てて、獨り宮に還らんや。」太子即便車匿に答へて言はく、「世間の法、獨り生れて獨り死す、豈、復伴有らん。又生老病死の諸苦有り。我應に云何が此と侶と爲るべき。吾、今諸苦を斷ぜんと欲するが爲の故に、此に來至しぬ。苦、若し斷する時、然る後に應に一切衆生と伴侶たるべし。我、即時に於て、諸苦未だ離れず。云何が汝が爲に侶たることを得ん。」車匿又曰はく、「太子、生れてより、來深宮に長じ、身體手足皆悉く柔軟に、眠臥床褥、細滑ならざること無し。如何が一旦に荊棘瓦礫泥土を履藉して、樹下に止宿せん。」と。太子答へて言はく、「誠に汝が語の如し。設し我、宮に住せば、乃ち此荊棘の患を免るべきも、老病死の苦に會ず。自ら侵されん。」車匿、既に太子の此語を聞き、悲泣して涙を垂れ、默然として住す。

時に太子、即ち車匿に就て、七寶の劍を取りて、師子吼すらく、「過去の諸佛は、阿耨多羅三藐三菩提を成就せんが爲の故に、飾好を捨棄し、鬚髮を剃除したまへり。我、今、亦

當に諸佛の法に依るべし。」と 此言を作し已りて、便ち寶冠と譬中の明珠を脱し、以て車  
 匿に與へ、之に語つて曰はく、「此寶冠、及以明珠を以て、王の足下に致し、汝、我爲に大  
 王に上白すべし。」我、今、生天の樂の爲の故ならず、亦復父母に孝順ならざるに非ず  
 亦忿恨瞋恚の心無し。但彼生老病死を畏るるを以て、除斷せんが爲の故に、此に來至する  
 のみ」と。汝應に我を助けて隨喜欣慶すべし。吉祥に於て、更に悲慧を生ずること勿れ。父  
 王、若し我今の出家は未だ是れ時にあらずと謂ひたまはば、汝我語を以て、大王に上啓せよ、  
 「老病死の至る、豈定まれる時有らんや。人少壯なりと雖も、焉んぞ此を免るるを得んや」と。  
 父王、若し復我を責めて、「本、婁子有れば常に出家を聽すべし。今、未だ子有らざる  
 に、云何が去るや。及び宮を出づる時、啓聞せざる」と、言ひたまはば、汝、我爲に具に  
 父王に啓すへし、「耶輸陀羅、久しく已に身ある有り。王、自ら之を問ひたまへ。昔の勅  
 は此の如くなりき。專輒を爲すに非ず」と。往古に諸の轉輪聖王の國位を廢ふ者有り。  
 山林に入りて、出家求道せるもの、中途に、遇五欲を受くること有ること無し。我、今の  
 出家も、亦復是の如し。未だ菩提を成せずんば、終に宮に還らじ。内外の眷屬、皆當に我  
 に於て恩愛の情有るべければ、汝が辯を以て、爲に之を解釋すべし。我に於て横に憂惱  
 を生ぜしむる勿れ。太子復身の瓔珞を脱して、以て卓圍に授け、之に語つて言はく、「汝、  
 我爲に此瓔珞を持して、摩訶波闍波提に奉りて道ふべし。」我今、諸苦の本を斷ぜんが爲  
 の故に、宮城を出で、此願を滿ぜんことを求む。復我に於て反りて更に苦を生ずること勿

れ」と。又身上の餘の莊嚴具を脱して、以て耶輸陀羅に與へ、亦復語りて言はく、「一人の世に生るるや愛別離の苦有り。我、今、此諸苦を斷ぜんと欲するが爲に、出家學道す。我を以ての故に恆に愁憂を生ずること勿れ。」と。并に、諸の親屬も、皆、亦是の如し。爾時、車匿、此語を聞き已りて、倍悲絶を増すも、太子の勅令に違ふに忍びず。即便長跪して、寶冠、明珠、瓔珞及び璽飾の具を受け取り、涙を垂れて言はく、「我、太子の此の如きの志願を聞きて、擧身戰き掉ふ。設ひ人ありて心を失して木石の如くならしむとも、此語を聞かば、亦當に悲感すべし。況んや我は生來太子に奉侍せり。此誓言を聞いて、感絶せざらんや。唯願くば、太子、此志を捨てよ。父王及び摩訶波闍波提、耶輸陀羅、并に餘の親屬をして、大悲苦を生ぜしむること勿れ。若し決定して此意を廻さざらしめば、是處に於て、復我を棄つること勿れ。我、今太子の足下に歸依するもの、終に遠離して去るの理有ることを見ず。設し當に宮に還らば、王、必ず我を責むべし。」云何が獨り太子を委て歸ると。何の言もて大王に上答せしめたまはんと欲するや、太子答へて言はく、「汝、今此の如きの語を作すべからず。世は皆離別有り、豈常に集聚せん。我、生れて七日にして、母命終したまへり。母子すら、尙、死生の別有り。況んや餘人をや。汝、我に於て偏に戀慕を生ずること勿れ。蹉跎と俱に宮に還るべきなり。是の如く再び勅するも、猶去ることを肯んぜず。

爾時、太子、便ち利劍を以て、自ら鬚髮を剃り、即ち發願じて言はく、「今、鬚髮を落せ



## 【習】 煩惱の餘習

一、願くば一切の奥に、煩惱及以習障を斷除せん。と。釋提桓因、髮を接して去る。虚空の諸天、燒香し散花して、異口同音に讚じて言はく、「善い哉善い哉」と。爾時、太子、鬚髮を剃り已りて、自ら其身に著くる所の衣を見るに、猶是れし寶なれば即ち心に念言すらく、「過去の諸佛の出家の法は著くる所の衣服、當に此の如くなるべからず」と。時に淨居天、太子の前に於て、化して獵師と作り、身に袈裟を被る。太子、既に見て、心大いに歡喜して、之に語つて言はく、「汝が著くる所の衣は、是れ寂靜の服、往昔の諸佛の纏とする所なり、云何が此を著けて、罪行を爲すや、獵者答へて言はく、「我、袈裟を著けて、以て群鹿を誘ふ。鹿、袈裟を見て、皆來りて我に近づくをもて、我、之を殺すことを得。」太子又言はく、「若し汝が説くが如くんば、此袈裟を著くるは、但諸鹿を殺さんと欲するが爲の故のみ。解脱を求めて、之を服するに非ず。我、今、此七寶の衣を持つて、汝と貿易せん。吾此衣を服するは、一切衆生を攝救して、其煩惱を斷ぜんと欲するが爲なり。獵者答へて言はく、「善い哉、告ぐるが如くせん。」即ち寶衣を脱して、獵者に與へ、自ら袈裟を著け、過去の諸佛服する所の法に依る。時に淨居天、淨梵身に復して、虚空に上升し、其所止に歸る。時止空中に、異光明有り。車匿、此を見て、心に奇特を生じ、未曾有なり。今此瑞應は、小絲の爲に非ず」と歎す。車匿、既に太子の鬚髮を剃除して、身に法服を著くるを見、定めて太子の必ず廻るべからざるを知り、地に悶絶して、倍懷惱を増す。爾時太子、之に語りて言はく、「汝、今宜しく應に此悲惱を捨てて便ち富城に還り、具に我意を

【七】跋伽仙人住  
處の苦行林にあり  
し一夜。

宣ぶべし。太子是に於て即ち徐に前行す。車匿獻歡して、爾前（もろまへ）に禮を作し、乃至遠望し、太子を見ず、然る後に方に起ち、擧體氣を掉りて、自ら勝ふること能はず。捷旣（はやし）及び莊嚴の具を顧み看て、嗚咽悲哽し、涕泗交流れ、即ち捷旣を牽き、寶冠、嚴身の具を執持し、車匿は號咷し、捷旣は悲鳴しつづ、路に縁りて歸る。

爾時、太子、即便前んで跋伽仙人所住の處に至る。時に彼林中に諸の鳥獸有り。旣に太子を見て、皆悉く囁口し、端住して歸かず。跋伽仙人、遙に太子を見て自ら念言すらく、「此は何の神ぞ。日月天と爲すや。帝釋と爲すや。便ち眷屬と、來りて太子を迎へ、深く敬重を生じて、是言を作さく、『善くぞ來りたまひし、仁者太子、旣に諸の仙人衆を見、心意柔軟、威儀瘳序なり。太子、即便其住處に前めば、諸の仙人等、復威光無く、皆悉く同じく來りて、太子を請じて坐せしむ。太子坐し已りて、彼諸の仙人の行を觀察すれば、或は草を以て衣と爲す者有り。或は樹皮、樹葉を以て、以て服と爲す者有り、或は唯、草木花果のみを食する有り。或は、一日一食、或は二日一食、或は三日一食にして是の如く、自餓の法を行する有り。或は水火に事へ、或は日月に奉する有り。或は一脚を翹げ、或は塵土に臥すあり。或は荆棘の上に臥す有り。或は水火の側（そば）に臥す有り。太子、旣に此の如き苦行を見て、即便跋伽仙人に問はく、『汝等、今此苦行を修すること甚だ奇特と爲す。皆、何等の果報をか求めんと欲する。仙人、答へて言はく、『此苦行を修するは、天に生れんと欲するが爲なり。』太子又問はく、『諸天樂しと雖も、福盡くれば則ち窮り、六

道に輪廻して、終に苦聚と爲る。汝等、云何が諸の苦因を修して、以て苦報を求むるや。太子即便心に自ら對じて言はく、「商人は寶の爲の故に大海に入り、王は國土の爲に師を興して相伐つり。今、諸の仙人は天に生れんが爲の故に、此苦行を修す。是是觀を作し已りて、默然として住す。

跋伽仙人、即ち太子に問はく、「仁者、何の意にて默然として言はざる。我等の所行は、眞正に非ざるや。太子答へて言はく、「汝等の所行は至苦ならざるに非ず。然れども求むる果報、終に苦を離れず。太子、諸の仙人と此議論を設けて、言語往復し、乃ち日暮に至る。太子即便彼に停りて一宿し、既に明旦に至りて、復更に思惟すらく、「此諸の仙人は苦行を修すと雖も、皆解脱眞正の道に非ず。我今應に此に止住すべからず。即ち仙人と辭別して去らんと欲す。時に、諸の仙人、太子に白して言はく、「仁者の此に来るや、我皆歡喜し、我人衆をして威徳増盛ならしめたるに、今、何が故に忽ちに去らんと欲するや。是が爲に我等、威儀を失す。此衆中、相犯觸するが爲か。何の因縁を以てか此に住せざる。太子、答へて言はく、「此れ汝等が是の如く賓主の儀を失ふ有るに非ず。亦少くる所無し。但汝が修する所は、苦因を増長す。我今道を學するは、苦の本を斷ぜんが爲なり。此因縁を以て、是故に去るなり。諸の仙人衆、自ら共に議して言はく、「其修する所の道は、極めて廣大なりと爲す。云何が我等、之を留むることを得ん。」

爾時、一仙人有り。善く相法を知れり。衆人に語りて言はく、「今、此仁者、諸相具足す。

【阿羅邏、迦蘭】  
アーラ、ダ、カ  
ラー、アー、カ  
ラー、アー、カ  
ラー、アー、カ

【八】太子去りし  
候の宮城擧げて悲  
泣するを述べ。

必ず當に一切種智を得て天人師と爲るべし。即便俱に太子の所に往詣して、是語を作さく、  
「修する所の道異なる。敢て相留めじ。若し去らんと欲せば、北に向つて行くべし。彼に大仙  
行り。阿羅邏、迦蘭と名く、仁者、往いて其に就きて語論すべし。我、仁者を見るに、亦當  
に必ず彼處に住まらざるべし。是に於て太子即便北に行く。諸の仙人衆、太子の去るを  
見て心に懊惱を懷き、合掌し隨送し、極望し絶視して、然る後に乃ち還る。  
爾時太子、既に宮を出で已りて、天曉に至る。耶輸陀羅及び諸の婦女、眠より覺めて  
太子を見ず。悲號し啼泣して即便往いて摩訶波闍波提に啓すらく、「今日、忽ち太子の所在  
を失ふ」と。摩訶波闍波提、此語を聞き已りて、迷悶して地に躡る。是の如く展轉して、  
乃至下に達す。下、此言を聞きて、屹然として聲なく、其精魄を失して、四體を喪ふが若  
し。宮の内外を擧げて、皆亦是の如し。時に諸の大臣、即ち入りて太子の住處を檢視し、  
宮城を案行すれば、城の北門の自然に已に開けるを見、又復車匿、蹙陟を見ず。即ち門司  
に問はく、「誰か此を開く者ぞ。」互に相推檢するに、皆知らずと云ふ、并に防人に問ふに、  
亦此門の開ける意を解せずと云ふ。時に大臣、心に自ら思惟すらく、「北門既に開けたり。  
太子、必ず當に此門よりして出でたまひしなるべし。宜く速に太子の所在を尋ね覓むべ  
し。」と。即ち千乘萬騎に乗じて絡繹として門に出で、太子を追ひ求むるに、天力を以ての  
故に、迷うて道遥を失し、之く所を知らず。即便還歸りて、大王に白して言はく、「太子を  
推尋するに、所在を知らず。」爾時、車匿、歩みて蹙陟及び莊嚴の具を牽きて、悲泣し嗚咽し



一つ、路に隨つて還る。舉邑の人民、此を見て驚愕し、懊惱せざる無く、悉く皆就て來りて、車匿に問うて言はく、「汝、太子を送つて、何處に置き、今、撻陟と獨り還るや。」車匿既に諸人の此問を得て、倍更に悲絶して、之に答ふること能はず。此諸の人民、撻陟が、帶、鞍、勒、七寶の莊嚴を被るを見るも、雖も、太子を見ず。猶し死人の、飾るに花綵を以てするが若し。

是に於て車匿、前んで宮城に入るに、撻陟、悲み嗚けば、諸旣の群馬、一時に哀鳴す。外の諸の官屬、摩訶波闍波提、及び耶輸陀羅に白して言はく、「車匿、唯撻陟と俱に還る。此言を聞き已りて、地に宛轉して、自ら念じて曰はく、「今は唯、車匿、撻陟の相隨つて俱に還るを聞きて、太子の歸りますと道ふ聲を聞かず。」と、摩訶波闍波提、即ち此言を作さく、「我太子を養へるに、年長大に至りて一旦に我を捨て、所在を知らざるは、譬へば果樹の花を結び實を成すが、熟するに臨みて地に落つるが如し。」又飢人の、百味の饑に遇つて、之を食せんと欲するに臨んで、忽然として翻し倒すが如し。」と、耶輸陀羅、又自ら言つて曰はく、「我太子と、行住坐臥にも相違離せざりしに、今、我を捨てて趣く所を知る莫し。古昔、諸王の山に入りて道を學するや、皆妻子を將ゐて、暫くも相棄てざりき。世間の人、一たび遇うて相識れば、別るるも相忘れず。夫婦の情、恩愛の深きを、乃ち反りて、更に是の如く薄からんとは。」と。車匿を語りて言はく、「寧ろ智者と怨讎を爲すとも、愚人と以て親厚を爲さざらん。汝、癡頭人、益んで太子を送つて何處に置き、此種族をして復熾盛

ならざらしたるぞ。又捷師を責むるらく、汝、太子を載せて此王宮を出で、去ること近き時には、寂然として聲無く、今空しく反りて悲み嘶くは何の意ぞ。」

爾時、車匿、即便答へて言はく、「我及び捷師を責むる勿れ。所以は何ん。此は是れ天の力なり。人の爲す所に非ず。爾夕に當りて、夫人、好女、皆悉く昏臥せり。太子、我に勅して、起ちて馬に被せしむ。我、爾時に於て大高聲を以て太子を諫め、夫人及び諸の好女をして此を聞いて驚き悟らしめんと欲せしも、捷師に被するに及ぶまで、都て覺る者無かりき。城門毎に閉くや、四十里に聞ゆるに、爾時に當りて、自然に聞きて、又一の聲だも無かりき。此の如きの事は豈天の力に非ずや。城を出づるの時、天、諸神をして手に馬の足を捧げ、并に我を接し、虚空の諸天、隨從して無數なりき。我當に云何が能く止むべけんや。時に、天、既に曉けて、行くこと三踰閻那、彼跋伽仙人の住所に至り、又復諸の奇特の異事有り。願くば我説ふを聽きたまへ。太子、既に跋伽仙人の苦行林中に至り、即便馬を下りて手に馬背を撫で、并に我に勅して宮城に還らしむ。我、此時に於て太子に隨從して、永く歸るの意無かりしに、太子、遣られて終に住まるを聽したまはず。又復我に就きて、七寶の劍を取りて、自ら唱へて言はく、「過去の諸佛は、阿耨多羅三藐三菩提を成就せんが爲の故に、飾好を捨てて鬚髮を剃除したまへり。我、今亦當に諸佛の法に依るべし。此言を唱へ已りて、即ち寶冠及び明珠を脱し、悉く我に付して、還りて王の足下に置かしむ。又瓔珞を以て、摩訶波闍波提に與へ、餘の莊嚴の具もて、以て耶輸陀羅に與へたま

我、爾時に於て此誨を聞くと雖も、猶左右に侍して歸るの情有ること無かりき。時に太子、便ち利劍を以て自ら鬚髮を剃りたまふに、天、空中に於て隨つて接して去りぬ。即ち便前行して獵者に逢ひ、身に著くる所の七寶の妙衣を以て獵人に與へ、袈裟と寶易したまへり。是に於て虚空に大光、明有り。我太子の形服既に變じたるを見て深く其意の必ず廻るべからざるを知り、我即ち悶絶して心大いに懊惱せり。太子、前んで踐御仙人所作の處に至りたまふや、我便ち彼に辭別して歸りぬ。此諸の奇特は、皆是れ天の力、復人事に非ず。願くば我及び毘陁陟を責むること勿れ。時に摩訶波闍提及び耶輸陀羅、既に車匿の、此事を説くを聞き已りて、心少しく醒悟し、默然として聲無し。

爾時、白淨王、悶絶より始めて醒め、勅して車匿を喚び、之に語つて言はく、「汝、云何が諸の種種難をして、大苦惱を生ぜしむる。我嚴制有り、内外の官屬に勅して、太子を守護し、其出家を畏れたり。汝、復何の意にてか、輒く毘陁陟に被せて、太子に與へ、密に去らしめたるや。」車匿、聞き已りて、大怖懼を生じ、王に啓して言はく、「太子の城を出でたまひしは、實に我咎に非ず。唯願くば大王、我具に説くことを聽きたまへ」と、即ち寶冠及び髻中の明珠を以て王の足下に置く。太子、我をして、此冠、珠を以て王の足下に置き、七寶の瓔珞を摩訶波闍提に與へ、餘の莊嚴具を耶輸陀羅に與へしめたまふ。王、諸物を見て、倍悲絶を増す。復木石と雖も、猶尚感有り。況んや乃ち父子恩愛の深きをやし、車匿、具に前事を以て王に啓して言はく、「太子、我に勅したまふ。父王、若し本

要す子有れば、當に出家を聽すべし。今、未だ子有らざるに云何が去る。去るに臨むの時、又啓せざる」と謂ひたまはば、汝、我爲に具に父王に答ふべし。「耶輸陀羅、久しく已に娠める有り。王、宜しく之を問ひたまふべし。昔の勅や此の如し、專輒を爲すに非ず」と。王、此言を聞き、即便耶輸陀羅に問はしむらく、「太子云はく、汝久しく已に娠める有り」と。實に此の如しや不や。耶輸陀羅、即ち信に答へて言はく、「大王が此宮に來りたまへる時に當りて、太子、我を指したまふに、即ち娠める有るを覺えぬ。王、其語を聞いて、奇特の心を生じ、憂惱暫く歇みて、自ら念言すらく、『我前に子有らしめば、出家を聽さんといへる所以の者は、七日の中に、必ず子有るの理無く、轉輪王の位、自然に至らんをもてなり。謂はざりき、七日未だ滿ぜずして便ち娠める有らんとは。』と。深く自ら智慧淺短にして、爲す所の方便、之を住むること能はず。輕しく此約を作せるを咎め悼みて、重ねて悔恨を増す。太子の神略、人の意表に出づ。今日の事、亦復兼て是れ諸大天の力、我、今、車匿を責むべからざるなり。時に白淨王、心に自ら思惟すらく、『太子の出家は、必ず廻すべからず。設し更に諸餘の方便を作さしめんとも、亦留むること能はざらん。復國を棄てて出家學道すと雖も、然れども已に子有り、種嗣を絶たず。我今耶輸陀羅に勅して、好く懷める所の子を將護せしむべし。』

時に白淨王、愛念の情深く、車匿に語りて言はく、『我今當に往いて太子を尋ね求むべし。知らず、即時、定めて何許に在りや。其今既に我を捨てて學道す。我復何んが獨り生き



獨り活くるに忍びんや。便ち當に追逐して其所在に隨ふべし。爾時、王師及與大臣、王が出でて太子を尋ね求めんと欲するを聞き、二人俱共に來りて王を諫めて言はく、「大王、自らに憂慚を生ずべからず。所以は何ん。我、太子を觀じて、其相貌を見るに、過去世の中に久しく已に出家の業を修習したまふ。設し復釋提桓因たらしめんも、亦當に樂しまさるべし。況んや復今轉輪王の位もて能く留めんや。大王、憶ひたまはずや、太子初めて生れて行くこと七歩するに、手を擧げて住り、我生は已に盡きたり、是れ最後身なりと言ふや。諸の梵天王、釋提桓因、悉く來り下りて從へり。此の如きの奇特あり。云何が世を樂しまんこと。又復王に白さく、阿私陀仙、昔太子を相せるとき、年十九に至りたまはば、出家し道を學して、必ず當に一切種智を成就したまふべしといへり。今や時既に到る。大王、何が故に愁苦を生じたまふ。又復大王、嚴に内外に勅して、太子を守護し、出家せんことを慮り恐れたまへるに、諸天來りて導引して城を出でたり。是の如きの事は復人力に非ず。唯願くば大王、當に歡喜を生じたまふべし。愁惱を懷きたまふこと勿れ。須らく自ら出でたまふべからず。若し太子を憶ふこと、猶已みたまはずば、我今當に大臣と所在を尋ね求むべし。王、此語を聞いて、心に自ら念言すらく、「我知る太子は難すべからず、未だ便ち捨つるには忍びずと雖も、復之を追はじ。今當に師及び大臣をして更に一たび尋ねしむべし。」即便師及び大臣に答へて言はく、「善い哉、去るべし。宮の内外を擧げて、心皆苦惱して、速に還らんことを停逐す。是に於て王師、大臣、即便辭して出で、太子を追ひ尋ねき。」

# 過去現在因果經

## 卷第三

宋天竺三藏求那跋陀羅譯

【一】去れる人子  
を遺棄せしむるを  
明す。

爾時、白淨王、王師及び大臣を發遣し已りて、即ち太子の瓔珞を以て、摩訶波闍波提に與へ、之に語りて言はく、「此は是れ太子が服せし所の瓔珞なり。車匿の還るに付して、以て汝に與へしむ。」摩訶波闍波提、瓔珞を見已りて、倍悲絶を増して、自ら念言すらく、「四天下の人、極めて薄福なり。此明智の轉輪聖王を失はんとは。」又餘の莊嚴具を送りて、以て耶輸陀羅に與へ、之に語りて曰はく、「太子、此嚴身の具を以て、持つて汝に與へしむ。」耶輸陀羅、既に此物を見て、悶絶して地に躡る。王、又人を遣はして、耶輸陀羅に勅すらく、「自ら愛敬して、胎子をして安隱ならざらしむること無からしめよ。」

爾時、王師及び大臣、跋伽仙人の苦行林中に至り、從人及び諸の僮師を除き去つて、便ち仙人所住の處に前むや、仙人請じて坐せしめ、互に相問訊す。是に於て王師、仙人に語つて言はく、「我は是白淨王の師なり。今、來りて、此に至る所以の者は、彼白淨王の、是相太子、生老病死の苦を厭惡し、出家し道を學して、路、此林に由れり。大仙見たまへりや不や。」跋伽仙人、王師に答へて言はく、「我、近、此に於て一童子の、顔容端正にして、相好具足せるを見き。來りて此林に入り、我と共に議論して、遂に一宿を經たり。知らず、

【是相太子】三十  
二相を具足せる太  
子の意。

乃ち是れ王の太子なりしか、我等が修する所の道を鄙薄し、此より北行して、彼仙人阿羅邏迦蘭に詣りぬ。

爾時、王師、大臣、此言を聞き已りて、即便疾に彼仙人の所に往くに中路に於て、遙に太子が樹下に在りて、端坐思惟するを見たり。相好光明、日月に踰えたり。即便馬を下り、侍衛を除却し、詣の儀服を脱して太子の所に前み、一面に坐して互に相問訊す。是に於て王師、太子に白して言はく、大王、太子を尋ね求めしめたまふ。諳く所有らんと欲す。太子答へて言はく、父王、汝を遣はして、何の道ふところか欲したまふ。王師即ち言はく、大王、太子が深く出家を樂み、此意廻し難きを、久しく知ろしめす。然れども王、太子に於て恩愛の情深く、憂愁の盛大、常に自ら熾然す。太子の歸るを須ちて、以て之を滅せんのみ。願くば便ち駕を廻して、宮城に還反りたまへ。物務有りと雖も太子をして全く道業を棄せしめじ。靜心の處は必ずしも山林ならず。摩訶波闍波提、耶輸陀羅、内外の眷屬、皆悉く憂惱の大海に没し、太子の還りて之を拯救したまはんことを思ふ。爾時、太子、王師の語を聞き、深重の轡を以て、王師に答へて言はく、我豈父王が我に於て恩情の深きを知らざらんや。但生老病死の苦を畏れ、是を以て此に來れるは、斷除の爲の故なり。若し恩愛をして終日合會し、又生老病死の苦無からしめば、我復何すれぞ來りて此に至らん。我、今、父王に遠違する所以は、將來の和合を爲さんと欲するが故のみ。父王の憂愁の大火、今熾然すと雖も、我と父王と唯今生に此一苦有るを餘すのみ。將來は、自

ら常に永く此患を絶つべし。若し汝が言の如く吾をして宮に處りて道業を修せしめば、七寶の舎の中に焰火を滿たし、當に人有りて能く此室に止るべきが如くならずや。雜毒の食を、設ひ飢乏たる人あるも、終に之を食せるが如し。我、既に國を棄てて、出家して道を修す。云何が我をして復宮城に還り、道を修學せしめんや。世間の人は、大苦の中に在り。小樂の爲の故に、尙復耽湎して暫くも捨つること能はず。況んや、我、此極靜寂處に在りて、諸の患苦無きに、能く捐棄して、還つて惡に執かんや。古昔の諸王の山に入りて道を學する、中路に還欲を受くる者有ること無し。父王、若し必ず我をして歸らしめんと欲したまはば、便ち是れ先王の法に違ふ。

爾時、王師、太子に白して言はく、「誠に太子の、今の説きたまふ所の如し、然るに諸の仙聖、一は未來定めて果報有りと言ひ、一は定めて此無しと言ふ。二仙聖すらも尙未來世中の必定して有りや無しやを知ること能はず。太子、云何が現樂を捨てて、未來の不定の果報を求めんと欲したまふぞ。生死の果報すらも、尙、決定して有りや無しやを知るべからず。云何が乃ち解脱の果を求めんと欲したまふや。唯願くば便ち宮に還りたまへ。」太子答へて言はく、「彼二仙人の、未來の果を説くに、一は有りと言ひ、一は無しと言ふは、皆是れ疑心有り、決定の説に非ず。我、今終に彼教に隨順せず。應に此を以て難詰せらるべからず。所以は何ん。我、今果報を希ひ慕ふが爲に、此に來至せず。目に見る所の生死病死、必ず應に之を経べきが故に、解脱を求め、此苦を免れんとするのみ。汝をして久し



からずして我道の法するを見しめん。我此志願は、終に廻すべからず。還つて父王に啓して、此の如くに言け。爾時、太子、此語を作し已りて、即ち座より起ち、王師、大臣と辭別し北行して、阿羅邏、迦蘭仙人の所に詣る。

時に、王師大臣、太子の去るを見て、驚き復し、一には太子の情の深きを念じ、二には、王の使を受け奉りて、太子の所に來り、復其意を移轉すること能はず。路側に徘徊して、自ら反ること詰はず。互に共に議して言はく、既に王の使を被りてり効無く、今空しく歸りて、云何が答へ奉らん。我等、當に従へる所の五人の聰明智慧、心意柔軟、忠直を性とせし、精力の強なる者を留めて密に伺察し、其進止を看しむべし。此言を作し已りて、其箭を預請して、情練如等の五人を見、之に語りて言はく、汝等、悉く前く此に留止する事不や。五人答へて言はく、善い哉、勅の如くにして、進止に去來に、當に密に伺察すべし。即便辭別して太子の所に趣き、王師、大臣、宮城に還歸す。

爾時、太子、被阿羅邏、迦蘭仙人の住處に往かんとて、恆河を渡り、路王舍城に由る。既に城に入り已るや、諸の人民衆、太子の顔貌相好殊特なるを見て、歡喜し愛敬し、國を擧げて皆悉く奉迎して瞻視す。是の如きの諠譁、頻毘婆羅王と徹す。王、便ち驚いて問はく、此は是れ何の聲ぞ。諸臣答へて言はく、白淨王の太子にして薩婆悉達と名く昔諸の相師、唯に其轉輪王の位を得て四大下に王と爲るべきを記し、又復其れ、若し出家せば、必ず當に一切稱智を成就すべきを記せり。其人今來りて此城に入り、外の諸の人民、馳

【橋陳如】カウシヤ  
【カウシヤ】(Kauṣi-  
ya) 火器と譯す。

【二】已下は頻毘  
婆羅王の太子に逢  
見するを述ぶ。  
【恆河】ガングー  
(Ganga) ガンガ  
河のこと。  
【王舍城】カシ  
ヤグリハ (Kāśyā-  
pa) 摩竭國の都  
【頻毘婆羅】ビム  
ビカローラ (Pindivā-

【譯十、摩竭陀國の王。】

【般荼婆山】 パー  
ンズ (Paundava)

【日の種姓】 スー  
ルヤヅムシヤ (Sū  
r'yazumshya) 甘蔗王  
の苗裔を日種とい  
ふ。

【四兵】 象兵、馬  
兵、車兵、歩兵。

【三堅法】 無極身  
無窮命、無盡財を  
いふ。

過去現在四果經卷第三

せ競うて來り看る。是を以ての故に、所以に詰問す。時に頻毘婆羅王、既に此語を聞きて  
心大いに歡喜し、踴躍身に遍く、即ち一人に勅し、往いて太子の所在を伺察せしむ。使者  
勅を受け、太子を尋ね求めて般荼婆山に在り、一石上に端坐思惟す。時に見、即ち歸り  
て、具に大王に白す。王即ち駕を嚴しめて、諸の臣民と、太子の所に詣る。般荼婆山に  
至りて遙に太子を見れば、相好の光明、日月に踰えたり。即便馬を下り、儀飾及び諸  
の侍衛を除却し、前んで坐して問訊すらく、「太子、四大悉く調和するや不や。我太子を  
見て心甚だ歡喜す。然れども一の悲有り。太子は本是れ日の種姓、累世相承して、轉輪  
王たり。太子、今轉輪王の相、皆悉く具足するに、云何が之を捨て、來りて深山に入り、  
沙土を踐踏して遠く此に至るや。我是を見るが故に、所以に悲むのみ。太子、若し父王今  
在すを以ての故に、聖王の位を取らざらんとせば、當に我國分の半を以て之を治むべし。  
若し少しと謂はば、我、當に國を捨てて盡く以て相奉じ、太子に臣とし事ふべし。若し復我  
此國を取らずんば、當に四兵を給すべし。自ら攻伐して他國を取るべきなり。太子の欲す  
る所、其相違はじし。」

爾時、太子、頻毘婆羅王の、此語を説くを聞き已りて、深く其意に感じ、即ち王に答へて  
言はく、「王の種族は、本是れ明月、性自ら高涼、鄙事を爲さず。爲す所、作す所、清  
勝ならざること無し。今是言を發するも、奇と爲すに足らず。然して我、王が、中情の懇至、  
前後に倍するを觀る。王、今便ち身、命、財に於て、三堅法を修すべし。亦應に不堅の法を

【五欲】色、聲、香、味、觸、法、をいふ、五境、人の欲をひき起す、故に欲と名く

【三】阿羅漢、迦蘭一仙人に道を問

以て、餘人に勸賢すべからず。我、今既に轉輪王の位を捨てたり。亦復何に緣りてか塵に王の國を取るべき。王が善心を以て、國を捨てて、我に與ふるすら、猶尙取らず。何に緣りてか兵を以て他國を伐ち取らんや。我、今父母に辭別して鬚髮を剃除し、國を捨てし所以の者は、生老病死の苦を斷ぜんが爲の故のみ。五欲の樂を求めんが爲に非ず。

世間の五欲は、大火聚の如く、喟の業生を焼いて、自ら出づること能はざらんむ。云何が我之に貪著せんことを勸むるや。我今來りて此に至る所以の者は、二仙人阿羅漢、迦蘭有り。是れ解脫を求むる最上の導師なり。彼處に往いて解脫の道を求めんと欲す。宜しく久しく停まりて此に在るべからざるなり。我、既に王が初始の言の喜心もて我に賜ふに違ふも、嫌恨を致すこと勿れ。王今當に正法を以て國を治むべし。人民を枉ぐることを勿れ。此言を作し已りて、太子即ち起ちて、王と別る。時に頻毘婆羅王、太子の去るを見て、深く大いに憫恨し、合掌し流涙して、是言を作さく、初太子を見て、心大いに踊躍し、太子既に去るや、倍、悲苦を生ず。汝今大解脫の爲の故に、去らんと欲せば敢て相留めし。唯願くば太子、期する所を速に果さんことを。若し道成せば、願くば先づ度せられんことを。太子、是に於て、辭別して去る。時に王奉送し、次で路側に於て目を極めて瞻矚し、見えずして乃ち反る。

爾時、太子、即便前んで彼阿羅漢仙人の所に至る。時に諸天、仙人に語つて言はく、薩婆悉達、國土を棄捨し、父母に辭別して、無上正眞の道を求めて、一切業生の苦を抜かん

【冥初】 數論派に  
て第一を冥諦と云  
ふ、これを以て諸  
法の元初となす故  
に冥初と云ふ。  
【我慢】 アハンカ  
ーラ (Ahaṅkāra)  
我を恃みて心に憍  
る煩惱。  
【五微塵氣】 五惟  
のこゝと、色、聲、

と欲するが爲の故に、今已に來りて、此に至るに垂とす。時に彼仙人、既に天の語を聞き、心大いに歡喜し、俄爾の頃に、遙に太子を見、即ち出でて奉迎し、讚じて「善くぞ來りたまひし」と言ひ、俱に所住に還り、太子を請じて坐せしむ。是時、仙人、既に太子の顏貌端正にして相好具足し、諸根の恬靜なるを見て深く愛敬を生じ、即ち太子に問はく、「一行する所の道路、疲るる無きを得んや。太子の初めて生れし、及以家を出でし、又來つて此に至る、我悉く之を知る。能く火聚に於て、自ら覺りて出でしこと、又大象の繃索の中に於て自ら免脱するが如し。古昔の諸王、盛年の時、恣に五欲を受け、根熟するに至りて、然る後に方に國邑樂具を捨てて、出家し道を學せり。此未だ奇とするに足らず。太子今此壯年に、能く五欲を棄てて、遠く此間に至る。眞に殊特と爲す。常に勤精進して、速に彼岸に度るべし。太子聞きじりて、即ち之に答へて曰はく、「我汝が言を聞きて極めて歡喜を爲す。汝、我爲に、生老病死を斷ずるの法を説くべし。我、今、聞かんことを樂ふ。仙人答へて言はく、「善い哉、善い哉、即便説きて曰はく、「衆生の始は、冥初に始まる。冥初より我慢を起し、我慢より癡心を生じ、癡心より染愛を生じ、染愛より五微塵氣を生じ、五微塵氣より五大を生じ、五大より貪欲、瞋恚等の諸の煩惱を生じ、是に於て生、老、病、死に流轉して、憂悲苦惱す。今太子の爲に、略して之を言ふのみ」と。

爾時、太子、即便問うて曰はく、「我、今、已に、汝の説く所を知る。生死の根本や、復何の方便もて能く之を斷ぜん。仙人答へて言はく、「若し此生死の本を斷ぜんと欲せば、先





下地の過を念じ、又自地の功德を念ず、これ淨念なり。捨諸法に執著する念を捨離して平等に住せしむる作用なり、かくして不苦不樂の境に入る。【無想】 心心所の總て滅するをいふ無想定を修すれば無想果を得。【空處等】 已下非想非非想處までを四空定といふ。空處とは色想を厭ひて無邊の虚空を緣じて、心の空無邊と相應するをいふ。識處とは虚空を厭ひて無邊と相應するをいふ。無所有處とは識を厭ひて心識を有なしと觀するをいふ。非想非非想處とは識處は有想、無所有處は無捨つるをいふ。【攀緣】 心が外境

過去現在因果經卷第三

細結滋長して、復下生を受けん。此を以ての故に、彼岸に度るに非ざるを知る。若し能く我及び我想を除かば一切盡捨せん。是を則ち名けて眞の解脫と爲す。仙人默然として心に自ら思惟すらく、「太子の説きたまふ所、甚だ微妙と爲す。」

爾時、太子、復仙人に問はく、「汝、年幾に至りて出家せりや。梵行を修して來、復幾許の年ぞ。」仙人答へて言はく、「我、年十六にして便ち出家し、梵行を修して來、一百四年なり。」太子聞き已りて、心に念言すらく、「出家以來、乃ち是の如く久しうして、而も得る所の法、正に此の如きか。」時に太子、勝法を求めんが爲に即ち座より起ちて、仙人と別る。

爾時、仙人、太子に語りて言はく、「我久遠より來、此苦行に習ひて、得る所の果、正に此の如きのみ。汝は是れ王種。云何が能く苦行を修せんや。」太子答へて言はく、「汝が修する所の如きは、苦と爲すに非ず。別に最苦難行の道有り。仙人既に太子の智慧を見、復志意の堅固にして虧けざるを見て、決定して一切種智を成ぜんことを知り、太子に白して言はく、「汝若し道成せば、願くば先づ我を度したまへ。」是に於て、太子答へて「善い哉」と言ひ、次で迦蘭所住の處に至りて論議問答すること、亦復是の如くして、太子即便路を前んで去る。時に二仙人、太子の去るを見て、各心に念言すらく、「太子の智慧、深妙奇特にして乃ち爾く測り難し。」各掌して奉送し、視を絶して方に還る。

爾時、太子、阿羅邏、迦蘭二仙人を調伏し已りて、即便伽闍山苦行林中に前進す。是れ憍陳如等五人の止住する處なり。即ち尼連禪河の側に於て、靜坐思惟して衆生の根を觀すら

七三

のためにたえず影  
響せられて動搖す  
ること

【四】太子が六年  
間の苦行を明す

【伽闍山】(Gaya  
Shilshaya)ニヤ

【象頭山】(Elephant  
Head Mountain)ニヤ

【苦行林】(Ashoka  
Forest)ニヤ

【世尊苦行の地】  
(The place where the  
Buddha practiced  
asceticism)ニヤ

【尼連河】(Nirvana  
River)ニヤ

【天竺】(India)ニヤ

く、宜しく時に六年苦行して、以て之を度すべし。是を思惟し已りて便ち苦行を修す。是に於て諸天、麻米を奉獻す。太子、正眞の道を求むんが爲の故に、淨心に我を守りて日に一麻一米を食し、設し乞ふ者有れば、亦以て之をも施す。

爾時、憍陳如等五人、既に太子の端坐思惟して苦行を修し、或は日に一麻一米を食し、或は日に一米を食し、或は復二日乃至七日に一麻一米を食するを見、時に憍陳如等、亦苦行を修して太子に供奉し、其側を離れず。既に此を見已りて、即ち一人を遣し、還つて王師及以大臣に白して具に太子が行する所の事を説く。爾時、王師、大臣、俱に宮門に還る。顔貌愁悴し身形萎蕪せること、猶し人有りて、其所親を喪ひ葬送既に畢りて、忍を抑へて歸るが如し。時に守門者、王に白して言はく、「爾と大臣と、今門外に在り。王既に聞き已りて、氣奔り聲絶え、身首纒に動く。時に守門人、王の此意を解し、即ち呼んで前ました。王與に相見て、悲しんで言ふこと能はず。是の如き、良久しうして、微聲にして問はく、「太子は既に是れ我の性命なり、卿等今獨り此歸りを作す。我の性命、云何が存せんや。王爾答へて言はく、「我、王勅を奉じ、太子を尋ね求めて便ち跋伽仙人の住處に至り、太子を訪ね覓む。仙人我に太子の所在を語り、并に太子が言へる事を説きぬ。我便ち前行して、中路に於て太子が樹下に在りて端坐し思惟し、相好の光明、日月に踰るるに遇ひ見る。即ち太子に向ひ、具に大王、摩訶波闍波提、及び耶輸陀羅が憂苦の情を説く。太子即ち深重の聲を以て、答へて言はく、「我、豈、父王、親戚の恩情の深きを知らざらんや。但生死愛別離

の苦を畏れ、斷除せんと欲するが爲の故に、此に來るのみ一星の如き種種の言辭もて所説す、志意の堅固なること、須彌山の移轉すべからざるが如く、我を捨てて去ること、草芥を棄つるが如し。

爾時、卽使五人を選擇して、隨從給侍もて所在を伺察せしめぬ。遣はせる所の人中、一人有つて還つて説いて言はく、「太子は當に阿羅邏、迦蘭仙人の所に至るべく、路恆河に由る。天神力を以て水を渡るを得て、王舍城に至る。時に頻毘婆羅王、太子に來詣して、方便もて出家すべからず、國を分ちて共に治めん、及以食く與へん、并に兵を與へて他國を伐たしめんと欲すること」を譽説す。太子、亦復皆悉く受けず。卽ち又前行して仙人の所に達し、爲に法を説きて、其心を降伏し、又伽闍山苦石林中尼連禪河の側に至りて靜坐し思惟して、日に一麻一米を食したまふこと。

爾時、白淨王、王師、大臣の、彼使人の此の如きの語を説くことを聞き已りて、心大いに悲惱し、舉體戰き掉ひ、身毛皆堅ち、卽ち王師及び大臣に語つて言はく、「太子遂に轉輪王の位、父母、親屬恩愛の樂を捨て、遠く深山に在りて、此苦行を修す。我今薄福、生れて此の如き珍寶の子を失ふ。王卽ち復使人の所言を以て、摩訶波闍波提及び耶輸陀羅に向つて、爲に之を説く。

時に、白淨王、卽使五百乘の車を嚴駕し、摩訶波闍波提及び耶輸陀羅、亦復相與に五百乘の一切資生を辦じて、皆悉く具足し、卽ち車匿を喚びて、之に語りて言はく、「汝



【五】 苦行を棄捨するを述ぶ。

【那羅延】 ナーラ  
イヤナ(Naryana)  
堅固力士或は鉤鎖

太子を送りて、遠く深山に放ちたり。今復汝をして此千乗を領し、資糧を載致して、太子に送與せしむ。隨時供養して、乏少せしむること勿く、盡きなば更に來りて請へ。車匿物を受け即ち千乗を領し、速疾に去りて太子の所に至る。形消瘦して、皮骨相連り、血脈悉く現はるること、波羅奢花の如くなるを見、頭面に足を禮し、地に悶絶し、良久しくして乃ち起ち、涙を衝んで言はく、「大王太子を憶念して、日夜を捨てたまはず。今故に、我をして此千乗を領し、資生の具を載せ、以て太子に餉らしめたまふ。時に太子、車匿に答へて言はく、「我父母に違ひ、及び國土を捨て、遠く來つて此に在るは、至道を求めんが爲なり。云何が當に復此餉を受けんや。爾時、車匿、此語を聞き已りて、心に自ら思惟すらく、「太子今、既に此の如きの資糧を受くることを肯んじたまはず。我當に別に一人を覓めて、此千乗を領して、王の所に還歸せしめ、我此に住まりて、太子に奉事すべし。」即ち一人を差はし、車を領して去らしめ、是に於て車匿、密に太子に侍して、屢に昏に離れず。爾時、太子心に自ら念言すらく、「我今日に一麻一米を食し、乃至七日に一麻米を食し、身形消瘦せること、精木の若き有りて、苦行を修する。滿六年に垂として、臂腕を得ず。故に道に非ざることを知る。青閻浮樹下に在りて、思惟せる所の法、離欲寂靜の是れ最も眞正なるに如かず。今我若し復此羸身を以て道を取らば、彼諸の外道、當に自餓是れ較涅槃の因と言ふべし。我今復節節に那羅延力有りと雖も、亦此を以て道果を取らず。我當に食を受けて然る後に成道すべし。」是念を作し已りて、即ち座より起ちて、尼連禪河に至

力士と譯す、毘紐  
奴天の異名。

【菩提】ボーデイ  
(Bodhi) 智と譯す  
【六】次に菩提樹  
下の思惟  
【畢波羅樹】ピッ  
バラ (Pippala) 佛  
この樹下に成道し  
給へるを以て菩提  
樹といふ。

りて、水に入りて洗浴す。洗浴既に畢りて、身體羸瘠し、自ら出づること能はず。天神來下して爲に樹枝を按し、攀ちて池を出づることを得たり。時に彼林外に一牧羊女人有り、難陀波羅と名く。時に淨居天、來下して勸めて言はく、「太子、今林中に在り、汝供養すべし。」女人聞き已りて、心大いに歡喜す。時に地中、自然に千葉の蓮花を生じ、花上に乳糜有り。女人此を見て、奇特の心を生じ、即ち乳糜を取り、太子の所に至りて、兩面に足を禮し、以て奉す。太子即便彼女の施を受けて、之を呪願すらく、「今施す所の食、食する者をして、氣力を充たすを得しめんと欲す。當に施家をして、瞻を得、喜を得、安樂無病にして年壽を終保し、智慧具足せしむべし。」太子即ち復是の如きの言を作さく、「我一切衆生を成熟せんが爲の故に、此食を受く」と。呪願し訖りて、即ち受けて之を食するに、身體光悅、氣力充足して、菩提を受くるに堪ふ。

爾時、五人、既に此事を見、驚きて之を怪しむ、退轉せりと謂ひ、各所住に還る。菩薩獨り行いて畢波羅樹に趣き、自ら發願して言はく、「彼樹下に坐し、我道成らずんば、要す終に起たじ。」菩薩の徳重くして、地勝ふることは能はず。時に歩歩、地爲に震動して、大音聲を出す。爾時、盲龍、地動の響を聞きて、心大いに歡喜し、兩目開明し、曾て先佛に此瑞應有るを見たりき」と。是念を作し已りて、地より踊出し、菩薩の足を禮す。時に五百の青雀有り、虚空を飛騰して、菩薩を右繞し、雜色の瑞雲、及以香風、隨つて映拂す。

爾時、盲龍偈を以て讀じて曰はく、

菩薩の足の踐む處、地皆六種に震（一）、大深遠の音を發するを、我聞いて眼開明（二）す又虚空の中に、青雀菩薩を繞り

瑞云極めて鮮映、香風甚だ清凉なるを見る此菩薩の瑞相は、悉く過去佛に同じ

是を以て知る、菩薩の必定して正覺を成ぜんことを

是に於て、菩薩即ち思惟すらく、「過去の諸佛は何を以て座と爲し、無上道を成じたまへるや、即便草を以て座と爲したまへるを自ら知りや。」釋提桓因、化して凡人と爲り、淨歌草を執る。菩薩問うて言はく、「汝何等と名くるや。」答ふらく、「吉祥と名く。」と。菩薩之を聞きて、心大いに歡喜し、我不吉を破りて、以て吉祥を成ぜん。菩薩又言はく、「汝が手中の草は、此は得べきや不や。」是に於て吉祥、即便草を以て菩薩に與へ、因りて發願して言はく、「菩薩道成ぜば、願くば先づ我を度したまへ。」菩薩受け已りて敷いて以て座と爲し、草上に於て結跏趺坐すること、過去佛坐する所の法の如くし、自ら誓つて言はく、「正覺を成せずんば、此座を起たじ。」我亦是の如く、此誓を發する時、天龍、鬼神、皆悉く歡喜し、清凉の好風、四方より來り禽獸響を息め、樹條を鳴らさず、遊雲飛塵、皆悉く淨淨なり。知りぬ、是れ菩薩の必ず道を成せん相なることを。

爾時、菩薩、樹下に在りて、誓言を發する時、天龍八部、皆悉く歡喜して、虚空の中

【結跏趺坐】左の脚を右の脚の上に置き、右の脚を左の脚の上におく坐

【七】次に降魔。

【第六天】 欲界六天中の最高他化自在天にして、魔王の住所なり。

【沙門瞿曇】 シムラマナガウタマ (Sramanagautama)

【三界】 欲色無色の三界。迷界の全部。

【牟尼】 ムニ (Muni) 聖人のこと。

に於て、踊躍讃歎す。時に第六天の魔王の宮殿、自然に揺搖す。是に於て魔王、心大いに懊惱し、精神躁擾して聲味御せず。自ら念言すらく、沙門瞿曇、今樹下に在り、五欲を捨てて、端坐し思惟す。久しからずして當に正覺の道を成ずべし。其道若し成ぜば、廣く一切を度し、我境を超越せん。道の未だ成せざるに及んで、往いて之を壊亂せん。

爾時、魔子薩陀、父の憔悴を見て、往いて白して言はく、「不審し父王、何が故に憂感したまふや。」魔王答へて言はく、「沙門瞿曇、今樹下に坐す。其道將に成じて我を超越せんとす。今之を壊らんと欲す。」魔の子即便前んで父を諫めて言はく、「菩薩の清淨は三界に超出し、神通智慧、明了ならざること無く、天龍八部、咸く共に稱讚す。此父王の能く摧屈する所に非ざるなり。須らく惡を造りて、自ら禍咎を招くべからず。魔に三女有り。形容儀貌極めて端正と爲す。妖冶巧媚、善能く人を惑はすこと、天女の中に於て最第一と爲す。熏ずるに名香を以てし、好瓔珞を佩ぶ。一を染欲と名け、二を能悅人と名け、三を可愛樂と名く。三女俱に前んで其父に白して言はく、「不審し今何が故に憂愁したまふや。」父即ち心を寫して、諸女に語りて言はく、「世間に今沙門瞿曇有り。身に法鏃を被り、自在の弓を執り、智慧の箭を鏃し、衆生を伏し、我境界を壊らんと欲す。我若し如かすんば、衆生彼を信じて皆悉く歸依し、我土則ち空しからん。是故に愁ふるのみ。未だ道を成せざるに及んで、往いて摧挫し其橋梁を壊らんと欲す。是に於て魔王、手に強弓を執り、又五箭を持ち、男女眷屬、俱時に彼畢波羅樹下に往き、牟尼の寂然として動かす、生死三有の



【三有】三界の存  
在をいふ。  
【刹利種】クレーマ  
トリヤ(天)の五種一  
四姓中、第二に位  
する玉士族。

海を度らんと欲するを見る。

爾時、魔王、左手に弓を執り、右手に箭を調へ、菩薩に語りて言はく、「汝刹利種、死は  
其大畏るべし。何ぞ、速に起たざる。宜しく唯に汝が轉輪王の美を修し、出家の法を捨つ  
べし。機會に對ひ生天の樂を得るは、此道第一、先の行する所に勝る。汝は是れ刹利轉輪王  
の種、而して乞士と爲るは、此所應に非ず。今若し起たずんば、但好く安坐して、本誓を  
捨つること勿れ。我試みに汝を射ん。一たび刹利箭を放つや、若行仙人、我箭聲を聞きて、  
驚怖し惛迷して箭を失はざること莫し。況んや汝羅雲、能く此毒に堪へんや。汝若し速  
に起たば、安全を得べし。唯、此語を説きて、以て菩薩を怖す。菩薩怡然として驚かず動か  
ず。魔王即便弓を挽き箭を放ち、并に天女を逐む。菩薩、爾時、眼箭を見ず、箭、空中に傳  
り、其鐵下向して變じて蓮花と成る。時に三天女、菩薩に白して言はく、「仁者の平徳は、  
天人の歡ぶ所、實に侍侍有るべし。我等今年盛時に在り、天女の端正なること、我に歸せ  
る者無し。天今我を遣はして以て相供給せしむ。晨昏寢臥、願くば左右に侍せん。菩薩答  
へて言はく、「汝小善を積みて天身と爲ることを得、無常を念せずして妖媚を作す。形體美  
しと雖も、心離しからず、淫惑不善なり。死して必ず當に三惡道中に墮すべし。鳥獸の身  
を受け、之を重かるる事甚大難し。汝等、今定意を亂さんと欲するは清淨心に背す、今  
便ち去るべし。吾は相續ひず。時に三天女、變じて老妪と成り、頭白く齒落し、崩落ち涎  
を垂れ、肉消え骨立ち、腹の大なること鼓の如く、杖に柱へられて痛歩し、自ら後すること能

【摩醯首羅】マヘー  
ーシエアラ (Mahā  
Cvāra) 大自在と  
譯す。

【三塗】火塗刀塗  
血塗のこと、即ち  
三惡道なり。

【六種】動、起、  
涌、震、吼、擊な  
り。前三は形の變  
後三は聲の變なり

はす。

魔王、既に是の如く堅固なるを見て、心に自ら思惟すらく、「我昔曾て雪山の中に於て、此を射しに、摩醯首羅即便恐懼して、其善心を退けぬ。而して今瞿曇を動かすことを懼ぜず。既に此前も及び我三女も能く移轉して、愛恚を生ぜしむる所に非ず。當に復更に他餘の方便を作すべし。」即ち軟語を以て、菩薩を誘うて言はく、「汝若し人間の受樂を樂しまずんば、今便ち天宮に上昇すべし。我天位及ぶ五欲の具を捨てて、悉く持つて汝に與へん。菩薩答へて言はく、「汝先世に於て、少施の因を修す、故に今自在天王と爲ることを得たるも、此福に期有り、要す還三塗に下生し沈溺して、出濟甚だ難からん。此を罪因と爲す。我須ふる所に非ず。」魔、菩薩に語らく、「我の果報は、是汝が知る所なり。汝の果報は、誰か復知る者ぞ。」菩薩答へて言はく、「我の果報は、唯此地のみ知る。」此語を説き已るや、時に大地、六種に震動す。是に於て地神、七寶の瓶の中に蓮花の満ちたるを持ちて、地より踊出して、魔に語つて言はく、「菩薩昔眞目髓腦を以て、以て人に施し、出せる所の血、大地に浸潤し、國城、妻子、象馬、珍寶、用て布施せること、稱げて計ふべからず。無上正眞の道を求めんが爲なり。是を以ての故に、汝今應に菩薩を惱亂すべからず。」魔是を聞き已りて、心に怖懼を生じ、身毛皆堅つ。時に彼地神、菩薩の足を禮し、花を以て供養し、忽然として現ぜず。

爾時、魔王、即ち自ら思惟すらく、「我、強弓、利箭并及に三女を以て、兼て方便和言を以

て之を誘ふ、此輩等の心を壞亂すること能はず。今當に更に諸種の方便を設け、廣く軍衆を聚む、力を以て迫脅すべし。是念を作す時、其諸の軍衆、忽然として來至し、虚空に充滿す。形貌各異る。或は杖を執り劍を操り、頭に大樹を戴き、手に金杵を執り、種種の械具、皆悉く備足す。或は、猪、魚、驢、馬、鶴子、龍頭、熊、龍、虎、兕、及び諸の獸類、或は一身多頭なる、或は面に各一目なる、或は衆多目なる、或は大腹長身なる、或は羸瘦無腹なる、或は長脚大膝なる、或は大脚肥腦なる、或は長爪利牙なる、或は頭の胸前に在る、或は兩足多身なる、或は大面傍面なる、或は色の灰土の如き、或は身より脚指を放つ、或は象身に山を擔ふ、或は被髮裸形なる、或は復面色の半赤半白なる、或は唇垂れて地に至る、或は窠を上げて面を覆ふ、或は身に虎皮を著くる、或は獅子蛇皮なる、或は蛇の過く身を纏ふ、或は頭上に火燃ゆる、或は隰日終臂なる、或は傍行跳擲する、或は空中に旋轉する、或は馳歩して吼嚇する、是の如き等の諸の惡類形の、稱げて數ふべからざる有りて、菩薩を圍繞す。或は復菩薩の身を架かんと欲する有り。或は四方に烟起りて、炎焰天を衝き、或は狂音奮發して、山谷を震動し、風火颯摩、暗うして見る所無く、四大海水、一時に涌沸す。說法の天人、諸の龍鬼神等、悉く魔衆を忿り、瞋恚増盛して、毛孔より血流る。

淨居天衆、此惡魔の、菩薩を惱亂するを見て、慈悲心を以て、之を感傷し、是に於て來下して、虚空に徧ち集り、魔軍衆の無量無邊なるが、菩薩を圍繞し、大惡聲を發して、天

地を震動するも、菩薩の心定まりて、顛に異相無きこと、猶し師子の、鹿群に處るが如くなるを見て、皆悉く軟じて言はく、嗚呼奇なる哉。未曾有なり。菩薩決定して當に正覺を成すべし。是諸の魔衆、互に相搥切し、各威力を盡して、菩薩を摧破す。或は角日切齒し、或は横飛亂擲す、菩薩之を觀るに、童子の戲の如し。魔、益愁ひ忿り懣み、更に戦力を増す。菩薩慈悲力を以ての故に、石を抱く者をして、擧ぐるに勝ふることも能はず、其擧ぐるに勝ふる者をして、下すを得ること能はざらむ。飛刀舞劍、空中に停り、電雷雨火は五色の華と成り、惡龍の吐毒は變じて香風と成り、諸の惡類形、菩薩を毀らんと欲するに、動くことを得ること能はず。魔に姉妹有り、一をば彌伽と名け、二をば伽利と名く、各各手を以て鬪鬪器を執り、菩薩の前に在りて、諸の異狀を作して菩薩を惱亂す。是諸の魔衆、種種の醜身もて菩薩を怖さんと欲して、終に菩薩の一毛すらも、動かすこと能はず。魔、益憂愁す。

空中に神有り、名けて負多と曰ふ。身を隠して言はく、我今に於て牟尼尊の心意泰然として、怨恨の想無きを見る。是諸の魔衆、毒心を起して、怨無き處に於て、横に忿を生ずるも、是擬惡魔、猥に自ら疲勞するのみ、永く得る所無けん。今日宜しく應に悲害の心を捨つべし。汝が口乃ち須彌山を吹いて、其を崩倒せしむべく、火を冷かならしむべく、水を熱からしむべく、地性の堅強なるを柔軟ならしむべくとも、汝は菩薩が屢劫に修習せる善果、正思惟定、精勤方便、淨智慧光を壞る能はざらん。此四功德を、能く斷截し、留



【無上道】無上菩提に同じ、最上の智慧にして佛のさとりのこと。

難を爲作し、正覺を成せざること無きこと、千日の照、必ず能く暗を除き、木を鑽りて火を得、地を穿ちて水を得るが如く、精勤方便して、求めて得ざる無し。世間の衆生、三毒に没して、救ふ者有ること無し。菩薩の慈悲、智慧の業を求めて、世の爲に患を除くを、汝今云何が之を憫亂する。世間の衆生、真慧無智にして、悉く邪見に著す。今法眼を設け、正路を修習し、衆生を導かんと欲するを、汝今云何が導師を憫亂する。是れ則ち不可なり。譬へば曠野の中に在りて、商人の導師を欺誑せんと欲するが如し。衆生大黑暗の中に墮し、茫然として所止の處を知らず。菩薩爲に大智慧燈を然すを、汝今云何が吹いて滅せしめんと欲する。衆生今生死の海に没す。菩薩爲に智慧の寶船を修するを、汝今云何が沈溺せしめんと欲するや。忍辱を牙と爲し、堅固を根と爲し、無上大法を以て大果と爲すを、汝今云何が攻伐せんと欲するや。貪志蠶の眞、世の衆生を縛す。菩薩修行もて爲に之を解かんと欲し、今日決定して、此樹下に於て、結跏趺坐して無上道を成せん。此境は乃ち是れ過去諸佛の金剛の座なり。餘方悉く悔すと、斯處は動せず、妙定を受くるに堪ふ。汝が推く所に非ず。汝今宜しく難に跋慶の心を生じ、憍慢の意を息め、知識の想を修して、之に奉事すべし。

是時、魔王、空中の聲を聞き、又菩薩の恬然として異らざるを見、魔心に慙愧し、憍慢を捨離し、即便道を復して、天宮に還歸するや、群魔憂感して悉く皆崩散し、情意沮悴して復威武無く、諸の鬪戰の具、林野に縦横す。惡魔退散の時に當り、菩薩心淨く、湛

【八】 次に成道觀照。

然として動かす。天に烟霧無く、風條を揺がさず。落日光を停めて、倍更に明盛、澄月映徹し、衆星燦朗し、幽隱暗冥に、復障礙無し。虚空の諸天、妙花香を雨らし、衆の伎樂を作して、菩薩を供養す。

爾時、菩薩、慈悲力を以て、一月七日の夜に於て、魔を降伏し已りて、大光明を放ち、即便入定して、眞諦を思惟し、諸法の中に於て、禪定自在に、悉く過去に迷りし所の善惡、此より彼に生じ、父母眷屬、貧富貴賤、壽夭長短、及び名、姓、字を知りて、皆悉く明了なり。即ち衆生に於て大悲心を起して、自ら念言すらく、一切の衆生、救済者無く、五道に輪迴して、津を出づるを知らず。皆悉く虚偽にして、眞實有ること無し。而して其中に於て横に苦樂を生ずると。是思惟を作して初夜の盡くるに至る。

爾時、菩薩、既に中夜に至りて、即ち天眼を得、世間を觀察して、皆悉く徹見するごと、明鏡の中に自ら面像を觀るが如し。諸の衆生を見るに種類無量なり。此に死して彼に生れ、行の善惡に隨つて、苦樂の報を受く。地獄中の考治の衆生を見るに、或は洋銅を口に灌ぎ、或は銅柱を抱き、或は鐵床に臥し、或は鐵鑊を以て、之を煎煮し、或は火上に於て、非灸を加へ、或は虎狼鷹犬の食する所と爲り、或は火を避けて樹下に依るに、樹葉墜落して、皆刀劍と成り、其身を割截する有り。或は斧鋸を以て、肢體を解別し、或は熱沸せる灰河の中に擲ち、或は復糞屎の坑中に擲つ。是の如き等の種種の諸の苦を受くるも、業報を以ての故に、命終に死せず、菩薩既に此の如き事を見已りて、心に思惟すら

く、此等の衆生、本惡業を造り、世樂の爲の故に、今果を得、極めて大苦と爲す。若し人此の如きの惡報を見る有らば、復更に應に不善の想を作すべき無からん。

爾時、菩薩、復畜生を觀するに、種種の行に隨つて雜體の形を受く、或は復骨肉筋角皮牙毛羽の爲に、殺を受くる者有り、或は復人の爲に、重擔を荷負し、飢渴乏極して、人の知る無き者有り、或は其鼻を穿ち、或は其首を鈎し、常に身肉を以て人に供へ、還つて其類と、更相食噉する有り、是の如き種種の苦を受く。菩薩既に見て、大悲心を生じて即ち自ら思惟すらく、「斯等の衆生、恆に身力を以て人に供へ、又楚羸飢渴の苦を加ふ。皆是れ本惡行を修せる果報なり。」

爾時、菩薩、次に餓鬼を觀じて、其恆に黑闇の中に居て、未だ曾て嘗とも日月の光を觀ず、還、是れ其類の、亦相見ざるを見る。形を受くること長大にして、腹は太山の如く、咽喉は針の若く、口中に恆に大火有りて熾燃し、常に飢渴の爲に熾迫せられ、千億萬歳、食聲を聞かず。設し天雨の其上に灑ぐに値ふも、變じて火珠と成る、或は時に過ぎて江海河地に臨むに、水即ち化して熱銅熾炭と爲る。動身舉歩の聲、人の五百乘の車を牽くが如く、支體節節、悉く皆火然す。菩薩既に是の如き等の種種の諸の苦を見て、大悲心を起して自ら思惟すらく、斯等皆本慳貪を造し財を積んで施さざるが爲の故に、今、斯罪報を受けしむ。若し人彼が此苦痛を受くるを見ば、宜しく應に惠施して憐愍を生ずること勿らばし。設し財無からしむるも、亦應に肉を割きて以用て布施すべし。

爾時、菩薩、次に復人を觀じて、中陰より始めて胎に入らんと欲するを見る。父母和合して、顛倒想を以て愛心を起し、即ち不淨を以て己の身と爲し、既に胎に處し已りて、生熟二藏の間に在り、身體を重炙すること地獄の苦の如し。滿十月に至りて然る後に方に生る。初生の時、外人の爲に抱き執らるるや、羸澁苦痛なること、刀劍を被るが如し。是の如くして久しからずして、復老死に歸し、更に嬰兒と爲りて、五道に輪轉し、自ら悟ると能はず。菩薩見已りて大悲心を起して、自ら思惟すらく、衆生皆斯の如きの患有り。云何が中に於て、五欲に耽著し、横に計して樂と爲し、顛倒の根本を斷する能はざるや。爾時、菩薩、次に諸天を觀じて、彼天子を見るに、其身清淨、塵垢を受けざることを、眞の瑠璃の如く、大光明有り、兩目瞬かず。或は居して須彌山の頂に在る有り。或は復居して須彌の四鎮に在り、或は復居して虚空の中に在り。心常に歡悅して、事に適せざる無し。天の美樂を奏し、以て自ら娛樂して、晝夜を識らず。四方諸趣、絶妙ならざる無く、東を視て耽著し、歳を彌りて轉ずるを忘れ、西を瞻て耽溺し、年を経て廻らず、乃至南北も皆亦是の如し。飲食衣服、念に應じて即ち至る。此の如き適意の事有りとも雖も、猶し欲火の爲に煎焦せらる。又彼天福盡くる時に、五死相の現するを見る。一には頭上の花萎む。二には眼瞬く。三には身上の光滅す。四には腋下に汗出づ。五には自然に木座を離る。其諸の眷屬、天子の身に五死相の現するを見て、心に戀慕を生ず。天子も亦復自ら己が身に、五死相有るを見、又眷屬の己を戀慕するを見、爾時に當りて大苦惱を生ず。苦



薩既に彼諸の天子に、是の如きの事有るを見、大悲心を起して、自ら思惟すらく、「此諸の天子は、本少善を修して、天の樂を受くることを得たるも、果報將に盡きんとして、大苦惱を生じ、既に命終し、已りて、彼天身を捨てて、或は三惡道の中に墮する有り。本善行を造り、爲に樂報を求めしに、今の得る所は樂少くして苦多し。譬へば飢ゑたる人の雜毒の食を喰ひ、初は美と爲すと雖も、終に大患を成すが如し。云何が智者、此を食り樂しまんや。色、無色界の諸の天、壽命の長きを見て、便ち常樂と謂ふも、既に樂境を見れば大苦惱を生じ、即ち邪見を起して因果無しと誘ふ、此事を以ての故に、三善に輪迴して、具に諸の苦を愛く。菩薩天眼力を以て五道を觀察し、大悲心を起して自ら思惟すらく、『三界の中、一の樂有ること無し。是の如く思惟して、中夜盡くるに至る。』

【老死】以下十二因縁の逆觀順觀。老死とは梵にジヤラーマラナ(Jāma maraṇa)といふ。【生】(Jan) ジャヤテーイ【有】(Bhā) バワ【未來の存在を定むる業】。【四取】(Upādāna) 愛するものに對する

爾時、菩薩、第三夜に至りて、衆生の性に、何の因縁を以て、老死有るかを觀じて、即ち老死は生を以て本と爲す、若し生を離るれば、則ち老死無く、又復此生は天より生ぜず、自より生ぜず、業無くして生ずるに非ず、因縁よりして生じ、欲有、色有、無色有の業に因りて生ずるを知りぬ。又三有の業の、何より生ずるかを觀じて、即ち三有の業の四取より生ずることを知りぬ。又四取の何より生ずるかを觀じて、即ち四取の愛より生ずることを知りぬ。又復愛の何より生ずるかを觀じて、即便愛の觸より生ずることを知りぬ。又復受の何より生ずるかを觀じて、即便愛の觸より生ずることを知りぬ。又復觸の何より生ずるかを觀じて、即便觸の六入より生ずることを知りぬ。又六入の何より生ずるかを觀じて、

欲求、欲、見、戒  
我語の四。

【愛】ツリシユナ  
I (Tisna) 樂境に  
對する渴愛。

【受】アエダナ  
(Avidya) 苦樂の  
感受。

【觸】スバル、ヤ  
(Tunna) 外物との  
接觸によりて之を  
識別す。

【六入】シヤダー  
ヤタナ (Six sense  
organs) 六入の具足。

【名色】チーマル  
ナハ (Namarupa)  
心身分離の初位。

【識】ギジニヤ  
ナ (Vijñana) 過去  
の行業によりて受  
くる現在受胎の初  
一念。

【行】サムスカ  
ラ (Samskara) 善  
惡の行業。

【無明】アギデヤ  
I (Avidya) 無始  
の迷惑無知。

【八正道】正見、  
正思、正語、正業、  
正命、正道、正念、  
正定これなり。

過去現在因果經卷第三

即ち六入の名色より生ずることを知りぬ。又名色の何より生ずるかを觀じて、即ち名色の

識より生ずることを知りぬ。又復識の何より生ずるかを觀じて、即便識の行より生ずるこ

とを知りぬ。又復行の何より生ずるかを觀じて、即便行の無明より生ずることを知りぬ。

若し無明を滅すれば則ち行滅し、行滅すれば則ち識滅し、識滅すれば則ち名色滅し、名色

滅すれば則ち六入滅し、六入滅すれば則ち觸滅し、觸滅すれば則ち受滅し、受滅すれば則

ち愛滅し、愛滅すれば則ち取滅し、取滅すれば則ち生滅し、生滅すれば則ち老死憂悲苦惱

滅す。是の如く逆順に、十二因縁を觀じ、第三夜分に至りて無明を破り、明星出づる

時、智慧光を得、習障を斷じて、一切種智を成じたり。

爾時、如來、心に自ら思惟したまはく、八正聖道は、是れ三世の諸佛の履み行きて、般涅

槃に趣きたまひし所の路なり。我今已に踐み、智慧通達して、罪礙する所無し。

時に大地、十八相に動き、遊伎飛塵、皆悉く澄淨し、天鼓自然に妙聲を發し、香風

徐に起りて柔軟清涼に、雜色の瑞雲より甘露の雨を降し、園林の花果時を待たずして

榮えたり。又曼陀羅花、摩訶曼陀羅花、曼殊沙花、摩訶曼殊沙花、金花、銀花、琉璃等の花、  
七寶の蓮花を雨らし、菩提樹を繞ること、滿三十六踰闍那なり。是時、諸天、天の伎樂を作  
し、散花燒香し、歌唄讚歎し、天の寶蓋及び幢幡を執り、虚空に充塞して如來を供養した  
てまつる。龍八部の數くる所の供養も亦復是の如し。  
爾時に當り、一切の衆生、皆悉く慈愛有りて、瞋害の想無く、歡喜し踊躍し、聖跡

【十八相】六種震動に各、小中大の三種あり、十八を成ず。

【曼陀羅花】マンダラグヅ(Mandala) 一、蓮華、天曼華と譯す。

【摩訶曼陀羅花】マハーマンダラグヅ(Mahamandala) 大白蓮華と譯す。

【曼殊沙花】マンジュシキカ、Vajrasakara 蓮花、如意花と譯す。

【摩訶曼殊沙花】マハーマンジュシキカ(Mahamajusaka) 天赤闍花と譯す。

【菩提樹】ボーデーイーグルマ(Bodhi-tree)。

【九】次に梵人勸請のこゝを明す。

【五濁】劫濁、見濁、煩惱濁、衆生濁、命濁。

【轉法輪】説法のこゝ。

を見るが如く、怖畏の情無く、其心調柔にして憍慢の意を離れ、亦憍慢詭詐の心無し。五淨居天、意樂根を離れ、亦皆歡悅して、自ら勝ふること能はず。地獄の苦痛、暫く休息を得て大歡喜を生じ、一切の畜生相食臘する者、復惡心無く、餓鬼飽滿して、飢渴の想無し。世界の中、幽冥の處、日月の威光の照すこと能はざる所、皆大いに明なり。其中の衆生、悉く相見ることを得、各是言を作さく、此中云何が忽ち衆生有るや。大聖法王、世に出興し、大法の光を以て非法の暗を破るが故に、一切をして皆悉く明朗ならしむ。甘露先王の、國を業て道を學して五通仙を得、又十善を行じて、天に生るることを得たる者、皆神通に乗じて菩提樹に到り、虚空の中に在りて、歡喜し合學し、讚歎して言はく、我甘露種族の中に於て、能く諸濁を離れ、一切智を成じて世間の眼たるは、甚だ奇特と爲す。一切歡喜し踊躍せざる莫し、唯魔王のみ心に獨憂愁する有り。

爾時、如來、七日中に於て一心に思惟し、樹王を觀て、自ら念言したまはく、我此所に在りて一切の濁を盡し、所作已に竟り、本願成滿す。我得る所の法は、甚深にして解し難く、唯、佛と佛と、乃ち能く之を知るのみ。一切衆生、五濁の世に於て、食欲、瞋恚、愚癡、邪見、憍慢、詭曲の當障する所と爲り、薄福鈍根にして智慧有ること無し。云何が能く我得る所の法を解せんや。今我若し轉法輪を爲さば、彼必ず迷惑して、信受すること能はず。誹謗を生じて當に惡道に墮し、諸の苦痛を受くべし。我寧ろ默然として寂涅槃に入らん。

爾時、如來、偈を以て頌して曰はく、

爾時、如來、偈を以て頌して曰はく、

聖道は甚だ登り難く、智慧の果は得難し  
我此難の中に於て、皆悉く已に能く辨ぜり

我得る所の智慧は、微妙最第一なり

衆生は諸根鈍にして、樂に著し癡に盲ひられ

生死の流に順ひ、其源に反ること能はず

斯の如き等の類、云何が度すべき

爾時、如來、此念を作し已りたまふに、大梵天王、如來の聖果已に成じて、默然として住

し、法輪を轉じたまはざるを見て、心に憂惱を懷き、即ち自ら念言すらく、世尊、昔無量億

劫に於て衆生の爲の故に、久しく生死に在り、國城、妻子、頭目、齒鬚を捨て、備に衆苦を受

け、今始めて所願満足して、阿耨多羅三藐三菩提を成ず、云何が默然として説法したまは

ざるや、衆生は長夜に生死に沈没するを、我今當に往いて法輪を轉ぜんことを請ひたま

つるべし。是念を作し已りて、即ち天宮を發して、猶し壯士の臂を屈伸するが如き頃に、

如來の所に至り、頭面に足を禮し、繞ること百千匝して、却いて一面に住し、跏趺し合掌

して、佛に曰して言さく、世尊、往昔衆生の爲の故に、久しく生死に住し、身の頭目を捨

てて、以用て布施し、備に諸苦を受け、廣く徳本を修し、今、始めて無上道を成ず、云何

が默然として説法したまはざる。衆生長夜、生死に没溺し、無明の暗に墮し、出期甚だ難

し、然るに衆生有りて、過去世の時、善友に親近し、諸の徳本を植ゑ、法を聞きて、聖



道を受くるに堪任せり。唯願くば但世尊、斯等を以ての故に、大悲力を以て、妙法輪を轉じたまへ。釋提桓因、乃至他自在天も亦復是の如く、如來に、諸の衆生の爲に大法輪を轉じたまへと勸請す。

爾時、世尊、大梵天王及び釋提桓因等に答へて言はく、我も亦一切衆生の爲に法輪を轉せんと欲す。但得る所の法、微妙甚深にして、解し難く知り難し。諸の衆生等、信受すること能はずして、誹謗の心を生じて地獄に墮せん。我今此が爲の故に、默然たるのみ。時に梵天王等、乃ち三たび請ひたてまつるに至り、爾時、如來滿七日に至りて、默然として之を受けたまふ。梵天王等、佛の請を受けたまへるを知り、頭面に足を禮して、各所住に還す。

【三】世尊鹿野苑に鹿を明す。

爾時、世尊、梵天王等の請を受け已りて、又七日に於て、佛眼を以て諸の衆生の上中下の根、及び諸の煩惱の、亦下中上を觀じたまふこと、滿二七日なり。爾時、世尊、又復思惟したまはく、我今當に甘露の法門を開くべし、誰か應に先に在りて聞くを得べき者ぞ。阿羅邏仙人は、聰慧にして悟り易く、又先に道成せば我を度したまへと發願せり。是念を作したまへる時、空中に言有りて、阿羅邏仙人、昨夜命終すと。爾時、世尊、即便彼空中の聲に答へて言はく、我も亦其昨夜命終せることを知る。又自ら思惟したまはく、迦蘭仙人は、利根明了なり。亦應に先に聞くべし。空中に又言はく、迦蘭仙人、昨夜命終すと。爾時、世尊、即ち復答へて言はく、我も亦其昨夜命終せるを知る。

【鹿野苑】 ムリカ  
ダーマ (Aligulava)

【二】 二商人 世尊  
を供養す。

【鉢多羅】 パトラ  
(Patra) 東方持  
【四天王】 東方持  
國天、南方增長天、  
西方廣目天、北方  
多聞天。

爾時、世尊、又自ら思惟したまはく、『彼王師、大臣の遣したる所の、橋陳如等の五人、我  
を瞻視せる者、皆悉く聰明にして、又過去世に、我に於て先づ法を聞くべきを發願せり。  
我今宜しく當に五人の爲に、先づ法門を開くべし。又自ら思惟したまはく、『古昔諸佛の轉  
法輪處は、皆悉く婆羅捺國、鹿野苑中、仙人の住處なり。又此五人の止住する處、令彼  
處に在り。我今應に往いて其住處に至り、大法輪を轉すべし。』是を思惟し已りて、即ち座  
より起ちて、婆羅捺國に至りたまふ。

爾時、五百の商人有り。二人主たり。一を跋陀羅斯那と名け、二を跋陀羅聚と名く。行い  
て曠野を過ぐる時、天神有り、之に語りて言はく、『如來、應供、正遍知、明行足、善逝、世間  
解、無上士、調御丈夫、天人師、佛、世尊有りて、世に出興したまへて、最上の福田たり。汝  
今宜しく應に最も前に供を設くべし。』時に彼商人、天語を聞き已りて、即ち之に答へて曰  
はく、『善い哉、告の如くせん。』又天に問うて言はく、『世尊今何許に在りと爲すや。』天又報  
へて言はく、『世尊久しからずして當に此に來至したまふべし。』是に於て如來、無量の諸天  
に、前後導從せられて、多調婆跋利村に到りたまふ。時に彼商人、既に如來の威相莊嚴を  
見、又諸天の前後に圍繞するを見て、倍歡喜を生じ、即ち蜜鬘を以て佛に奉上す。爾時、  
世尊、心に自ら思惟したまはく、『過去の諸佛は、鉢多羅を用て、以て食を盛りたまへり。』  
時に四天王佛の心念を知り、各一鉢を持ちて佛の所に來至し、以て奉上す。是に於て世  
尊、自ら念言したまはく、『我今若し一王の鉢を受けば、餘王は必ず當に恨心を生ずべし。』即

便普く四王の鉢を受けたまひ、累ねて掌上に置き、按じて一と成らしめ、四諦を現ぜしむ。爾時、世尊、即便呪願したまはく、「今布施する所は、食者をして氣力を充たすを得しめんと欲し、施者をして、色を得力を得、聲を得、喜を得、安快無病にして終に年壽を保ち、諸の善鬼神、恆に隨つて守護せしむべし。飯食の布施は三毒の根を斷ち、將來當に三堅法の報を獲、聰明智慧、篤く佛法を信じ、在在の所生、正見不昧なるべし。現世の中、父母妻中、親戚眷屬、皆悉く熾盛に、諸の災怪不吉祥の事無く、門族の中、若し命過有りて惡道に墮せば、當に今施す所の福を以て還つて人天に生じ、邪見を起さず、功德を増進し、常に諸佛如來に近き、奉ることを得、妙説を聞くことを得、諸を見、證を得て、所願具足せしむべし。」

爾時、世尊、呪願し訖已り、即便食を受け、食既に畢竟りて澡漱して鉢を洗い、即ち商人に三歸を授けたまふ。一に歸依佛、二に歸依法、三に歸依將來佛なり。師を授け竟りて、因りて之と別れて、便ち前行したまふ。威儀庠序、歩は鵝王の若し。  
 路に外道の優波伽と名くるに逢ひたまふに、既に如來の相好莊嚴、諸根寂定なるを見、歎じて奇特と爲し、即ち偈を説きて、「はく、

世間の諸の衆生は、皆三毒に縛せられ

諸根又輕躁、外境に動蕩す

今仁者を見るに、諸根極めて寂靜なり

【優波伽】 ウバカ  
 【威儀庠序】 威儀の整つたこと

必ず解脱の地に到れること、決定して疑有ること無し  
仁者の學せる所の師、其姓字は何等ぞや

爾時、世尊、偈を以て答へたまはく、

我今に、一切衆生の表に超出し

微妙深遠の法を、我今已に具に知る

三毒五欲の境、永く斷じて餘習無きこと

蓮花の水に在りて、濁水の泥に染まざるが如し

自ら八正道を悟り、師無く等侶無く

清淨智慧を以て、大力の魔を降伏し

今正覺を成ずることを得て、天人師と爲るに堪へ

身口意満足す、故に號して牟尼と爲す

婆羅捺に趣きて、甘露の法輪を轉せんと欲す

是天、人、魔、梵の、轉ずること能はざるべき所なり

爾時、優波伽、此偈言を聞きて、心に歡喜を生じ、未曾有なりと歡じ、合掌し恭敬し、圍

繞して去り、迴顧し瞻矚し、見えずして乃ち止みたり。

爾時、世尊、即ち復前行し、次に阿闍婆羅水の側に到り、日暮に止宿して便ち定に入

りたまふ。爾時に當り、七日風雨有り、時に彼水中に、大龍王有り、日眞隣陀と名く、佛

日眞龍王を  
化すること

日眞隣陀  
ムチ

リンド  
Mucim





て、深く慙愧を生じ、即ち前んで白して言さく、「瞿曇、道を行きて疲倦無きを得んや。」爾時世尊、五人に語りて言はく、「汝等云何が、無上尊に於て、高情を以て、姓を稱へ喚ぶや。我心は空の如く、諸の毀譽に於て、分別する所無し。但汝が憍慢、自ら惡報を招く、譬へば、子有りて父母の名を稱するは、世儀の中に於て、猶尙不可なるが如し。況んや我は今是一切の父母たるをや。時に彼五人、又此語を聞いて、倍慙愧を生じて、佛に白して言さく、「我等愚癡にして、慧識有ること無く、今已に正覺を成じたまへること知らず。所以は何ん。往に如來が日に麻米を食し苦行六年なりしに、今過りて飲食の樂を受けたまふを見、我是を以ての故に、道を得たまはずと謂へり。爾時世尊、憍陳如に語りて言はく、「汝等小智を以て輕しく我道の成ぜると成ぜざること量ること莫れ。何を以ての故に。」形苦に在れば、心則ち憍亂し、身樂に在れば、情則ち樂著す。是を以て苦樂は、兩ながら道の因に非ず。譬へば火を鑽るに、之に澆々に水を以てすれば、則ち必ず破暗の照有ること無きが如し。智慧の火を鑽るも、亦復是の如し。苦樂の水有れば慧光生ぜず。生ぜざるを以ての故に、生死の黑障を滅すること能はず。今若し能く苦樂を棄捨して、中道を行ぜば、心則ち寂定して、能く彼八正聖道を修し、生老病死の患を離るるに堪ふ。我已に中道の行に隨順して、阿耨多羅三藐三菩提を成ずることを得たり。時に彼五人、既に如來の此の如きの言を聞きて、心大いに歡喜し、踊躍すること無量なり、尊顏を瞻仰して、目、暫くも捨てず。

【五盛陰苦】五陰身心身受くる苦をいふ。以下所求不得苦を普通八苦といふ。

【苦】アホカ(三二)二界六趣の苦也。

【苦】サムダヤ(Manjira)苦集を集起する原因。

【滅】ニコロダ(Nicodha)寂滅涅槃の果報。

【苦】マールガ(Marga)涅槃に通人としむる八正道。

【四聖諦】苦集滅諦の四、即ち聖人所見の四個の眞理。

【四諦】即ち聖人所見の四個の眞理。

爾時、世尊、五人の根が、道を受くるに堪任ふるを觀じて、之に語りて言はく、橋陳如、汝等當に知るべし。五盛陰苦、生苦、老苦、病苦、死苦、愛別離苦、怨憎會苦、所求不得苦、失業苦に、橋陳如、有形も無形も、無足なる一足なる、二足、四足、多足なる、一切の衆生、悉く此の如き苦有らざる者無し。譬へば、灰を以て火上に置はんは、若し乾草に遇へば、復燃するが如し。是の如く、諸の苦は我を本と爲すに由る。若し衆生有りて、復我の想を起せば、復復更に此の如きの苦を受く。貪欲、瞋恚、及び愚癡は、皆悉く我の根本に緣りて生ず。又此三毒は、是諸の苦の因なり。猶し種子の能く芽を生ずるが如し。衆生は是を以て三有に輪廻す。若し我想及び貪、瞋、癡を滅せば、諸苦亦皆此によりて斷じ、悉く彼八正道に由らざる莫し。人の水を以て盛火に澆ぐが如し。一切の衆生の諸苦の根本を知らざる者は、皆悉く輪廻して生死に在り。橋陳如、苦は應に知るべし。習は當に斷ずべし、滅は應に證すべし、道は當に修すべし。橋陳如、我以て苦を知り以て習を斷じ、以て滅を證し、以て道を修するが故に、阿若多羅三藐三菩提を得たり。是故に汝今應當に苦を知り、習を斷じ、滅を證し、道を修すべし。若し人四聖諦を知らずんば、當に知るべし是人の、解脱を得ざることを。四聖諦は、是眞、是實なり。苦は實に苦、習は實に習、滅は實に滅、道は實に道なり。橋陳如、汝等解せりや未だしや。橋陳如言さく、解し已んぬ、世尊。知り已んぬ、世尊。四諦に於て解知を得たるを以ての故に阿若橋陳如と名く。佛、四諦十二行の法輪を三轉したまへる時に當り、阿若橋陳如、諸法の中に於て、摩訶

【法眼淨】四諦の理を分明に見たるをいふ。

【阿迦膩吒天】アカニシタ(Akaniṣṭha)色究竟天のひと。

遠かり垢を離れて、法眼淨を得たり。時に、虚空の中の、八萬那由他の諸天も、亦摩垢を離れて、法眼淨を得たり。

爾時、地神、如來が、其境界に在りて法輪を轉じたまへるを見て、心大いに歡喜し、高聲に唱へて言はく、「如來此に於て、妙法輪を轉じたまふ。虚空の天神、既に此言を聞きて、又踊躍を生じ、展轉して聲を唱へて、乃ち阿迦膩吒に至る。諸天聞き已りて、欣悅すること無量なり、高聲に唱へて言はく、「如來、今日、婆羅捺國、鹿野苑中、仙人住處に於て、法輪を轉じたまふ、一切世間の天、人、魔、梵、沙門、婆羅門の、轉ずる能はざる所なり。」爾時、大地、十八相に動き、天龍八部、虚空の中に於て、衆の伎樂を作し、天鼓自ら鳴り、衆の名香を燒き、華の妙花を散じ、寶幢、幡蓋、歌頌もて讚歎し、世界の中、自然に大明あり。

【道跡】初果のこと。

阿若憍陳如、弟子の中に於て、始めて悟れるを以ての故に、第一の弟子たり。時に彼摩訶那摩等の四人、佛の轉法輪を聞き已りて、阿若憍陳如が、獨り道跡を悟れるなり。心に自ら念言すらく、「世尊若し更に我爲に說法したまはば、我等も亦當に復道跡を悟るべし。」此念を作し已りて、尊顏を瞻仰して、目暫くも捨てず。

爾時、世尊、四人の念を知ろしめして、即便重ねて爲に廣く四諦を説きたまふ。時に四人、諸法の中に於て、亦摩垢を離れて、法眼淨を得たり。時に彼五人、道跡を見已りて佛足を頂禮し、佛に白して言さく、「世尊我等五人、已に道跡を見、已に道跡を證したり。我等今



佛に於て出家して道を修せんと欲す。唯願くば世尊、慈愍もて聽許したまへ。』時に世尊、彼五人を、善くぞ來りし比丘。』と喚びたまへば、鬚髮白から落ち、髮髮身に著きて、即ち沙門と成りぬ。

爾時、世尊、彼五人に問ひたまはく、汝等比丘、色、受、想、行、識の、是常たり無常たり、是苦たり非苦たり、是空たり非空たり、有我たり無我たるを知るや。時に互比丘、佛の是五陰の法を説きたまふを聞き已りて、漏盡き意に解して、阿羅漢果を成じ、即便答へて言さく、世尊、色、受、想、行、識は、實には無常、苦、空、無我なり。』  
是に於て、世間に始めて六阿羅漢有り。佛阿羅漢は、是佛寶たり、四諦の法輪は、是法寶たり、互阿羅漢は、是僧寶たり。是の如く世間に三寶具足して、諸の天人の第一福田たり。

【色】ルバニ  
【有形】有形の物質、  
【質】ゾーグナ  
【受】(Vedana) 感受作用  
【行】ムス  
【識】チヤヤ  
【了別】了別  
【了別】了別  
【無常】以下無  
【我】我まを法印といふ、佛教の標識なり  
【福田】供養すれば福を生ずること、田地の穀物を生ずるが如きに喩ふ。

過去現在因果經

卷第四

宋天竺三藏求那跋陀羅譯

【一】 耶舍を度するを明す。  
【耶舍】 名聞、名稱と譯す。

【五體】 頭、二肘二膝をいふ。

爾時、長者子有り、名けて耶舍といふ。聰明利根、極大巨富、閻浮提中、最も第一たり。天冠瓔珞を服し、無價の寶屐を著く。中夜に於て、諸の妓女と、相娛樂し已りて、各還つて寢息す。忽ち眠より覺めて、諸の妓女を見るに、或は伏して臥す有り、或は仰いで眠る有り。頭髮蓬のごとく亂れ、涎唾流れ出で、樂器服玩、顛倒縱橫す。既に是を見已りて、厭離の心を生じ、自ら念言して言はく、「我今此災怪の内に在りて、不淨の中に於て安に淨想を生ず。是念を作せる時、天力を以ての故に、空中に光明あり、門自然に開く。光を尋ねて去り、鹿野苑に趣かんとて、路恆河に由り、高聲に唱へて言はく、「苦なる哉怪なる哉。」と。佛の言はく、「耶舍、汝便ち我に来るべし。此に今離苦の法有り。」耶舍聞き已りて、著くる所の寶屐の、價閻浮提に直するを、即便之を脱して、恆河を渡り、往いて佛の所に詣り、三十二相、八十種好、顏容挺特、威德具足せるを見て、心大いに歡喜し、踊躍すること無量に、五體を地に投じて、佛足を頂禮す、「唯願くば世尊、我を救濟したまへ。」佛の言はく、「善哉、善男子。諦に聽き、善く之を思念せよ。」如來即便其根に隨順して、爲に法を説きたまはく、「耶舍、色、受、想、行、識の、無常、苦、空、無我なるを、汝、之

を知るや不<sup>レ</sup>や。是<sup>レ</sup>時<sup>ニ</sup>耶舍<sup>ハ</sup>、此<sup>ノ</sup>語<sup>ヲ</sup>を説<sup>キ</sup>たまへるを聞<sup>キ</sup>て、即<sup>チ</sup>諸<sup>ノ</sup>法<sup>ニ</sup>於<sup>テ</sup>座<sup>ヲ</sup>を遠<sup>シ</sup>かり垢<sup>ヲ</sup>を離<sup>レ</sup>て、法<sup>眼</sup>淨<sup>ヲ</sup>を得<sup>タリ</sup>。是<sup>ニ</sup>於<sup>テ</sup>如來<sup>ハ</sup>、重<sup>テ</sup>四<sup>ノ</sup>諦<sup>ヲ</sup>を説<sup>キ</sup>たまふや、漏<sup>盡</sup>意<sup>ニ</sup>解<sup>シ</sup>、心<sup>ニ</sup>自<sup>在</sup>を得<sup>テ</sup>、阿羅漢<sup>果</sup>を成<sup>ジ</sup>、即<sup>チ</sup>佛<sup>ニ</sup>答<sup>ヘ</sup>て言<sup>ク</sup>く、「世尊<sup>ニ</sup>、色<sup>ハ</sup>、受<sup>ハ</sup>、想<sup>ハ</sup>、行<sup>ハ</sup>、識<sup>ハ</sup>、實<sup>ニ</sup>は無<sup>常</sup>、苦<sup>ハ</sup>、空<sup>ハ</sup>、無<sup>我</sup>なり。」

爾<sup>時</sup>、如來<sup>ハ</sup>、猶<sup>モ</sup>耶舍<sup>ノ</sup>の嚴<sup>身</sup>の具<sup>ヲ</sup>を著<sup>ク</sup>くるを見<sup>タ</sup>まは、即<sup>チ</sup>偈<sup>ヲ</sup>を説<sup>キ</sup>て言<sup>ク</sup>く、

復<sup>タ</sup>居家<sup>ニ</sup>處<sup>シ</sup>、寶<sup>嚴</sup>身<sup>ノ</sup>の具<sup>ヲ</sup>を服<sup>ス</sup>と雖<sup>モ</sup>、

善<sup>ク</sup>諸<sup>ノ</sup>の情<sup>根</sup>を攝<sup>シ</sup>て、五<sup>欲</sup>を厭<sup>離</sup>する

若<sup>シ</sup>能<sup>ク</sup>此<sup>ノ</sup>の如<sup>ク</sup>んば、是<sup>ヲ</sup>眞<sup>ノ</sup>の出家<sup>ト</sup>爲<sup>ス</sup>

身<sup>曠</sup>野<sup>ニ</sup>在<sup>リ</sup>て、糞<sup>土</sup>を服<sup>ス</sup>と雖<sup>モ</sup>、

意<sup>猶</sup>五<sup>欲</sup>を食<sup>ハ</sup>るを、是<sup>ヲ</sup>出家<sup>ニ</sup>非<sup>シ</sup>と爲<sup>ス</sup>

一<sup>切</sup>善<sup>惡</sup>を造<sup>ル</sup>は、皆<sup>ハ</sup>心<sup>想</sup>より生<sup>ズ</sup>

是<sup>故</sup>に眞<sup>ノ</sup>の出家<sup>ハ</sup>、皆<sup>ハ</sup>心<sup>ヲ</sup>を以<sup>テ</sup>本<sup>ト</sup>と爲<sup>ス</sup>

爾<sup>時</sup>、耶舍<sup>ハ</sup>、眞<sup>ノ</sup>の如來<sup>ノ</sup>、眞<sup>ノ</sup>の偈<sup>ヲ</sup>を説<sup>キ</sup>たまへるを聞<sup>キ</sup>じりて、心<sup>ニ</sup>自<sup>ら</sup>念<sup>言</sup>すらく、「世尊<sup>ニ</sup>の此<sup>ノ</sup>偈<sup>ヲ</sup>を説<sup>キ</sup>たまふ所以<sup>ノ</sup>の者は、正<sup>ニ</sup>に當<sup>テ</sup>に我<sup>ノ</sup>猶<sup>七</sup>寶<sup>ヲ</sup>を著<sup>ク</sup>くるを以<sup>テ</sup>た<sup>ラ</sup>べし。我<sup>今</sup>宜<sup>シ</sup>く當<sup>ニ</sup>此<sup>ノ</sup>の如<sup>キ</sup>業<sup>ヲ</sup>を脱<sup>ス</sup>べし。即<sup>チ</sup>佛<sup>ヲ</sup>を禮<sup>シ</sup>、佛<sup>ニ</sup>自<sup>ら</sup>白<sup>シ</sup>て言<sup>ク</sup>く、「唯<sup>願</sup>くば世尊<sup>ニ</sup>、我<sup>ニ</sup>出家<sup>ヲ</sup>を聽<sup>シ</sup>たまへ。」佛<sup>ノ</sup>の言<sup>ハ</sup>く、「善<sup>ク</sup>ぞ來<sup>リ</sup>し、比丘<sup>ニ</sup>。」と鬚<sup>髮</sup>自<sup>ら</sup>落<sup>シ</sup>、袈<sup>裟</sup>身<sup>ニ</sup>著<sup>キ</sup>て、即<sup>チ</sup>沙<sup>門</sup>と爲<sup>ル</sup>。

爾時耶舍の父、既に天曉に至りて、耶舍を求覓するに、所在を知らず。心大いに懊惱し、悲號し啼泣し、路に緣りて推し尋ね、恆河の側に到り、其子の履を見、心に自ら思惟すらく、「我子、正に當に此道より去りしなるべし。」即ち其跡を尋ねて、佛の所に至る。爾時世尊、其子の爲の故に來りて此に至るを知りたまひ、若し即ち耶舍を見るを得しめば、必ず大苦を生じて或は能く命終せんとして、便ち神力を以て、耶舍の身を隠したまふ。其父即便前んで佛の所に到り、頭面に足を禮し、退いて一面に坐す、是に於て如來、即ち其根に隨つて、爲に法を説きたまはく、「善男子、色、受、想、行、識は無常、苦、空、無我なり、汝之を知るや不や。時に耶舍の父、此言を説きたまへるを聞いて、即ち諸法に於て、唯に遠ざかり垢を離れて法眼淨を得て、佛に答へて言さく、「世尊、色、受、想、行、識は、實には無常、苦、空、無我なり。」

爾時、如來、既に已に其道跡を見て、恩愛の漸く薄きを知りたまひ、之に問うて言はく、「汝何の因緣にて來りて此に至れるや。其即ち答へて言さく、「我一子有り、名けて耶舍」と曰ふ。昨夜の中、忽ちに所在を失ひ、今日推し求めて、其實履の恆河の側に在るを見、足跡を追ひ尋ねて、故に此に來り至る。」

爾時世尊、其神力を攝したまふ。其父即便耶舍を見るを得て、心大いに歡喜し、耶舍に語りて言はく、「善い哉善い哉、汝が此事を爲せるは、眞實に快し。既に能く自ら度し、又能く他を度す。汝今此に在るが故に、我をして來りて道跡を見るを得しめたり。」即ち佛前





【二】三迦葉を度すのこと。

【優樓頻螺迦葉】ウロエールツリーカーニヤハ(Druey tree-anna)

【摩竭提】マカダ(Magadha)

に堪へたり。宜しく各方に遊び教化して、慈悲心を以て諸の衆生を度すべし。我も今亦當に獨り摩竭提國、王舎城中に往きて、諸の人民を度すべし。諸の比丘言さく、「善哉、世尊。爾時、比丘、頭面に足を禮し、各衣鉢を待ち辭別して去りぬ。」

爾時、世尊、即便思惟したまはく、「我今應に何等の衆生を度してか、能く廣く一切の天人を利すべし。唯優樓頻螺迦葉兄弟三人有り。摩竭提國に在りて仙道を學び、國王臣民、皆悉く歸信す。又其聰明利根にして悟り易し。然れども其我慢も、亦摧伏し難し。我今當に往いて之を度脱すべし。是を思惟し已りたまひ、即ち波羅捺を發して、摩竭提國に趣き、日將に昏暮ならんとして、優樓頻螺迦葉の住處に往きたまふ。時に迦葉、忽ち如來の相好の莊嚴なるを見て、心大いに歡喜して、是言を作さく、「年少沙門、何より來れるや。佛即ち答へて言はく、「我波羅捺國より、當に摩竭提國に詣るべし。口既に晩暮る。一宿を寄せんと欲す。迦葉又言さく、「寄りて宿止するは甚相違せず。但諸の房舎は、悉く弟子住し、唯石室有りて、極めて潔淨と爲す。我火に事ふるの具、皆其中に在り、此寂靜の處、相容るることを得べし。然れども惡龍有り。其内に居在す。恐くは相害せんのみ。」佛又答へて言はく、「惡龍有り」と雖も、但以て借せ。迦葉又言さく、「其性兇暴なり。必ず當に相害すべし。是惜しむ有るに非ず。佛又答へて言はく、「但以て借せ。必ず辱しむること無からん。迦葉又言さく、「若し能く住せば、便ち意の隨に住せよ。佛の言はく、「善哉。」と。即ち其夕に於て、石室に入り結跏趺坐して、三昧に入りたまふ。

爾時、惡龍、毒心轉盛にして、舉體より烟出づ。世尊、即ち火光三昧に入りたまふ。龍是を見じりて、火焰天を衝き、石室を梵燒す。迦葉の弟子、先づ此火を見て、還つて師に白さく、「彼年少沙門は聰明端嚴なり。今、龍火の爲に燒害せらる。迦葉驚き起きて、彼龍火を見て心に悲傷を懷き、即ち弟子に勅して、水を以て此に澆がしむるに、水減すること能はず。火更に熾盛にして石室融け盡く。爾時、世尊、身心動じたまはず容顏怡然として、彼惡龍を降して復害無からしめ、三歸依を授けて鉢中に置き、天明に至りじりぬ。迦葉の師徒、俱に佛の所に往いて、年少沙門、龍火猛烈なり。將之が爲に傷けらるる無きや。沙門の室を借り。我昨相與へざりし所以の者は、正に此が爲のみ。」佛の言はく、我内、清淨なり、終に彼外災の爲に害せられず。彼毒龍は、今鉢中に在り。即便鉢を擧げて、以て迦葉に示す。迦葉の師徒、沙門の、火に處して燒けず、惡龍を降伏して、鉢中に置けるを見て、未曾有なりと歡じ、弟子に語りて言はく、「年少沙門、復神通有りと雖も、然れども、故、我道の眞なるに如かざるなり。」

爾時、世尊、迦葉に語りて言はく、「我今方に此處に停止せんと欲す。迦葉答へて言さく、「善い哉、心の隨なり。此時、如來、第二夜に於て、一樹下に坐したまふ。時に四天王、夜佛の所に來りて、共に法を聽き、各光明を放ち、照すこと日月に踰えたり。迦葉夜起きて、遙に天光の如來の側に在るを見、弟子に語りて言はく、「年少沙門も亦火に事ふ。明日の曉に至り、往いて佛の所に詣り、問うて言はく、「沙門、汝火に事ふるや。佛の言

はく、「不。四天王有り、夜來りて法を聽けり。是其光のみ。是に於て、迦葉弟子に語りて言はく、『年少沙門、大神徳有り。然れども故我道の眞なるに如かざるなり。』」

第三夜に至り、釋提桓因來り下りて法を聽き、大光明を放つこと、日の初めて昇るが如し。迦葉の弟子、遙に天光の如來の側に在るを見て、師に白して言はく、『年少沙門、定めて火に事ふ。』明旦に至り、往いて佛の所に詣り、沙門に問うて言はく、『汝、定めて火に事ふ。』佛の言はく、『不。釋提桓因、來り下りて法を聽けり。是其光のみ。』時に迦葉、弟子に語りて言はく、『年少沙門、神徳盛なりと雖も、然れども故我道の眞なるに如かざるなり。』

第四夜に至り、大梵天王、來り下りて法を聽き、大光明を放つこと、日の正に申するが如し。迦葉夜起きて、光明の如來の側に在るを見、沙門必定して火に事ふとて、明日佛に問はく、『汝、定めて火に事ふ。』佛の言はく、『不。大梵天王、夜來りて法を聽けり。是其光のみ。』是に於て、迦葉心に自ら念言すらく、『年少沙門、復神妙なりと雖も、然れども、故我道の眞なるに如かざるなり。』

爾時、迦葉の五百の弟子、各三火に事ふ。晨朝の時に於て、俱に火を燃さんと欲するに、火肯て燃えず。皆迦葉に向つて、具に此事を説く。迦葉聞き已りて心に自ら思惟すらく、『此必ず當に是沙門の爲す所なるべし。』即ち弟子と、來りて佛の所に詣り、佛に白して言さく、『我諸の弟子、各三火に事ふ。旦に之を燃さんと欲するに、火燃えず。』佛即ち

【三火】朝、中、暮の三時に火を祀るをいふ。



答へて言はく、「汝還り去るべし。火當に自ら燃ゆべし。迦葉便ち還れば、火の已に燃ゆるを見て、心に自ら念言すらく、「年少沙門、復神妙なり」と雖も、然れども、故、我道の眞なるに如かざるなり。」

諸の弟子衆、火を供養し畢りて、之を滅せんと欲するに、滅せしむること能はず。即ち迦葉に向つて、具に此事を説く。迦葉聞き已りて心に自ら思惟すらく、「此亦當に是沙門の所爲なるべし。」即ち弟子と來りて佛の所に至り、佛に白して言さく、「我諸の弟子、朝に火を滅せんと欲して、火滅せず。」佛即ち答へて言はく、「汝還り去るべし。火自ら當に滅すべし。」迦葉便ち歸れば、火の已に滅するを見て、心に自ら念言すらく、「年少沙門、復神妙なり」と雖も、然れども故、我道の眞なるに如かざるなり。」

爾時、迦葉、自ら三火に事ふ。晨朝に火を燃さんと欲するに、火敢て燃えず。即ち自ら思惟すらく、「此必ず復是沙門の爲す所なり。」と。即ち佛の所に往き、佛に白して言さく、「我朝に火を燃すに、背て燃えず。」佛即ち答へて言はく、「汝還り去るべし。火自ら當に燃ゆべし。」迦葉便ち歸りて、火の已に燃ゆるを見て、心に自ら念言すらく、「年少沙門、復神妙なり」と雖も、然れども、故我道の眞なるに如かざるなり。」

時に、迦葉、火を供養し畢りて、之を滅せんと欲するに、滅せしむること能はず。心に自ら思惟すらく、「此必ず當に是沙門の爲す所なるべし。」即ち佛の所に往き、佛に白して言さく、「我、朝に火を燃し、今之を滅せんと欲するに、背て滅せず。」佛即ち答へて言はく、

汝還り去るべし。火自ら當に滅すべし。迦葉便ち歸りて、火の已に滅するを見て、心に自ら念言すらく、「年少沙門、復神妙なりと雖も、然れども、故我道の眞なるに如かざるなり。」

爾時、迦葉の諸の弟子衆、晨朝に薪を破るに、斧背て擧らず。即ち迦葉に向つて、具に此事を説く。迦葉聞き已りて心に自ら思惟すらく、「此必ず復是沙門の爲す所なり。」即ち弟子と、來りて佛の所に至り、佛に白して言さく、「我諸の弟子、朝に薪を破らんと欲するに、斧背て擧らず。」佛即ち答へて言はく、「汝還り去るべし。斧自ら當に擧るべし。」迦葉便ち歸りて、諸の弟子の斧、皆擧ることを得たるを見て、自ら念言すらく、「年少沙門、復神妙なりと雖も、然れども、故我道の眞なるに如かざるなり。」

迦葉の弟子、即ち斧を擧ぐるを得て、復背て下らず。還迦葉に向うて、具に此事を説く。迦葉聞き已りて、心に自ら思惟すらく、「是亦當に是沙門の爲す所なるべし。」即ち弟子と往いて佛の所に至り、佛に白して言さく、「我諸の弟子、且に薪を破らんと欲し、斧既に擧ぐるを得、復背て下らず。」佛即ち答へて言はく、「汝還り去るべし。當に斧をして下らしむべし。」迦葉既に歸りて、諸の弟子の斧、皆下ることを得たるを見て、心に自ら念言すらく、「年少沙門、復神妙なりと雖も、然れども、故我道の眞なるに如かざるなり。」

爾時、迦葉、晨朝の時に於て、自ら薪を破らんと欲するに、斧擧ぐるを得ず。心に自ら思惟すらく、「此亦當に是沙門の爲す所なるべし。」即ち佛の所に詣り、佛に申して言さく、

「我且に薪を破るに、斧背て擧らす。」佛即ち答へて言はく、「汝還り去るべし。斧當に自ら擧るべし。」迦葉既に還れば、斧即ち擧ることを得、心に自ら念言すらく、「年少沙門、復神妙なりと雖も、然れども、故我道の眞なるに如かざるなり。」

迦葉の斧、既に擧り已りて、又背て下らず。心に自ら思惟すらく、「此亦當に是沙門の爲す所なるべし。」即ち佛の所に詣り、佛に白して言さく、「我斧已に擧り、復背て下らず。」佛即ち答へて言はく、「汝還り去るべし。斧自ら當に下るべし。」迦葉即ち歸れば、斧即ち下ることを得、心に自ら念言すらく、「年少沙門、復神妙なりと雖も、然れども、故我道の眞なるに如かざるなり。」

爾時、迦葉、即ち佛に白して言さく、「二年少沙門、此に止りて、共に梵行を修すべし。房舎衣食は、我當に相給すべし。」時に世尊、默然として、之を許したまふ。迦葉佛の許しを知り已りて、其所住に還り、即ち勅して日日好飲食を辦じ、并に床座を施し、明の食時に至り、自ら行いて佛を請す。佛の言はく、「汝去れ。我隨つて後に往かん。」迦葉適き去る。俄爾の間に、世尊即便闍浮洲に至りて闍浮果を取り、鉢に滿てて持ち來り、迦葉未だ至らざるに佛已に先づ到る。迦葉後に來り、佛の已に坐したまふを見て、即便問うて言さく、「年少沙門、何の道より來り、先んじて此に至れるや。」佛鉢中の闍浮果を以て、以て迦葉に示して、之に語りて言はく、「汝今此鉢中の果を識るや不や。」迦葉答へて言さく、「此果を識らず。」佛の言はく、「此より南に行くこと數萬踰闍那に、彼に一洲有り。其上に樹有り、名け

【闍浮洲】 ジャラム  
アビラマ、ジャラム  
ニラマニ（須彌山麓  
の南方）閻浮世界  
【闍浮果】 ジャラム  
Jambhu

て闇浮と曰ふ。此樹有るに縁りての故に、闇浮提と言ふ。我此鉢中には是彼果なり。一念の頃に於て、此果を取り來る、極めて香美たり。汝之を噉ふべし。是に於て迦葉、心に自ら思惟すらく、「彼道此を去ること、極めて長遠なりと爲す。而して此沙門、乃ち能く俄爾に、已に往還することを得、神通變化、殊に自ら迅速なり。然れども、故我道の眞なるに如かざるなり。」

迦葉即便種種の食を下す。佛即ち呪願したまはく、

婆羅門の法の中、火に奉事するを最と爲し

一切の衆流中、大海を其最と爲し

諸の星宿の中に於て、月光を其最と爲し

一切の光明の中、日照を其最と爲し

諸の福田の中に於ては、佛福田を最と爲す

若し大果を求めんと欲せば、當に佛福田を供すべし

佛、食し已畢りて、所住に還歸し、鉢を洗ひ口を漱ぎ、樹下に坐したまふ。

明日の食時、復往いて佛を請す。佛の言はく、「汝去れ。我、隨つて後に往かん。」迦葉適

き去る。俄爾の間に、世尊即便弗婆提に至り、菴摩羅果を取り、鉢に滿てて持ち來り、迦

葉未だ至らざるに佛已に先づ到る。迦葉後に來り、佛の已に坐したまふを見て、即便問う

て言はく、「年少沙門、何の道より來り、先に此に至れる。」佛、鉢中の菴摩羅果を以て、以

【弗婆提】 プール  
【ツゲデーハ】 須彌山  
【Vidya】 説の東方人間世界  
【菴摩羅果】 アイ  
ラ (Amra)



て迦葉に示し、之に語つて言はく、「汝今此鉢中の果を識るや不や。」迦葉答へて言はく、「此果を識らず。」佛の言はく、「此より東に行くこと數萬踰闍那にして、弗婆提に到り、此果を取り來る。名は菴摩羅、極めて香美たり。汝之を食すべし。」迦葉聞き已りて、心に自ら念言すらく、「彼道は此を去ること極めて長遠なりと爲す。而して此沙門、乃ち能く我爾に以て往還することを得、其神力を觀るに、未だ曾て有らざる所なり。然れども、故我道の眞なるに如かざるなり。」

迦葉即使種種の食を下す。佛即ち呪願したまはく、

婆羅門の法の中、火に奉事するを最と爲し

一切の衆流の中には、大海を其最と爲し

諸の星宿の中に於ては、月光を其最と爲し

一切の光明の中には、日照を其最と爲し

諸の福田の中に於ては、佛福田を最と爲す

若し大果を求めんと欲せば、當に佛福田を供すべし

佛食し已畢りて、所止に還歸し、鉢を洗ひ口を漱ぎ、樹下に坐したまふ。

明日の食時、復往いて佛を請す。佛の言はく、「汝去れ。我隨つて後に往かん。」迦葉適き

去る。俄爾の間に、世尊即便瞿陀尼に至り、呵梨勒果を取り、鉢に満てて持ち來り、迦葉

未だ至らざるに、佛已に先づ到る。迦葉後て來り、佛の已に坐したまふを見て、即便問

【瞿陀尼】 ゴーダ  
ニヤ (Gudhanya)  
須彌山麓の西方人  
間世界。

【阿梨勒果】 ハリ  
一タキ (Harits  
三)

【鬱單越】 ウツタ  
ラクル (Uttara  
三) 須彌山説の北  
方人間世界。

うて言はく、年少沙門、何の道より來りて、先んじて此に至れるや。「佛、鉢中の阿梨勒果を以て、以て迦葉に示して、之に語りて言はく、「汝今此鉢中の果を識るや不や。」迦葉答へて言はく、「此果を識らず。」佛の言はく、「此より西に行くこと數萬踰闍耶にして瞿陀尼に到り、此果を取り來る。名は阿梨勒、極めて香美たり。汝之を食すべし。」迦葉聞き已りて、心に自ら念言すらく、「彼道や此を去ること、極めて長遠なりと爲す。而して此沙門、乃ち能く俄爾に、已に往還することを得、其神通を觀るに、未だ曾て有らざる所なり。然れども、故我道の眞なるに如かざるなり。」

迦葉、即便種種の食を下す。佛即ち呪願したまはく、

婆羅門の法の中、火に奉事するを最と爲し

一切の衆流の中には、大海を其最と爲し

諸の星宿の中には、月光を其最と爲し

一切の光明の中には、日照を其最と爲し

諸の福田の中に於ては、佛福田を最と爲す

若し大果を求めんと欲せば、佛福田を供すべし。

佛食し已りて、所に還歸し、鉢を洗ひ口を漱ぎ、樹下に坐したまふ。

明日の食時、復往いて佛を請す。佛の言はく、「汝去れ、我隨つて後に往かん。」迦葉適き

去る。俄爾の間に、世尊即便鬱單越に至り、自然の粳米の飯を取り、鉢に満てて持ち來り、

迦葉未だ至らざるに、佛已に先づ到る。迦葉後れて來り、佛の已に坐したまふを見て、即便問うて言はく、「年少沙門、何の道より來りて、先んじて此に至れるや。」佛、鉢中の粳米の飯を以て、迦葉に示し、之に語りて言はく、「汝今此鉢中の飯を識るや不や。」迦葉答へて言さく、「此飯を識らず。」佛の言はく、「此より北に行くこと數萬輪闍那にして、鬱單越に到り、此自然の粳米の飯を取り來る。極めて香美なりと爲す。汝、之を食すべし。」迦葉聞き已りて、心に自ら念言すらく、「彼道は、此を去ること、極めて長遠なりと爲す。而して此沙門、乃ち能く俄爾に、已に往還することを得。復神通の測量すべきこと難しと雖も、然れども、故我道の眞なるに如かざるなり。」

迦葉即便種種の食を下す。佛即ち呪願したまはく、

婆羅門の法の中、火に奉事するを最と爲し

一切の衆流の中には、大海を共最と爲し

諸の星宿の中に於ては、月光を共最と爲し

一切の光明の中には、日照を共最と爲す

諸の福田の中に於ては、佛福田を最と爲す

若し大果を求めんと欲せば、當に佛福田を供すべし

佛、食し已畢りて、却つて所止に歸り、鉢を洗ひ口を漱ぎ、樹下に坐したまふ。

明日食時、復往いて佛を請す。佛言はく、「善い哉。即ち共に俱に行き、既に其舍に到

【八功德】 澄淨、  
清冷、甘美、輕軟、  
潤澤、安和、除患、  
增益をいふ。

れば種種の食を下す。佛、即ち呪願したまはく、

婆羅門の法の中、火に奉事するを最と爲し

一切の衆流の中には、大海を其最と爲し

諸の星宿の中に於ては、月光を其最と爲し

一切の光明の中に於ては、日照を其最と爲し

諸の福田の中に於ては、佛福田を最と爲す

若し大果を求めんと欲せば、當に佛福田を供すべし

爾時世尊、呪願し已畢りて、即便食を取り、獨樹下に還り、食し畢りて心念に水を須む、

釋提桓因、即ち佛の意を知り、大壯士の臂を屈伸するが如き頃に、天より來り下りて、

佛の前に到り、頭面に足を禮し、即便手を以て地に指して池を成す。其水清淨にして、八

功德を具す。如來即便得て之を用ひ、澡漱既に畢りて、釋提桓因の爲に種種の法を説き

たまふ。釋提桓因、既に法を聞き已りて、歡喜踊躍し、忽然として現ぜず、天宮に還

歸す。是時、迦葉、中食後に於て、林間を經行し、心に自ら念言すらく、「年少沙門、今日

は食を受けて、樹下に還歸せり。我當に彼に往いて之を看視るべし。即ち佛の所に詣り、

忽ち樹の側に、一大池の泉水澄淨にして、八功德を具ふる有るを見て、怪んで佛に問

はく、「此中云何が忽ちに此池有りや。」佛即ち答へて言はく、「且に汝が供を受け、此處

に還歸し、食し訖りて水を須め、澡漱して鉢を洗はんとするや、釋提桓因、我此意を識



【香山】 一、ガマ  
一、ダナ、二、anham  
adham、無熱池の北  
にあり、池を隔て  
て大雪山に對す、  
閻浮洲の最高中心  
なり

り、天上より來りて、手を以て地を指し、此池を成しぬ。爾時、迦葉、既に池水を見、復佛言を聞きて、心に自ら思惟すらく、「年少沙門、大威徳有り、乃ち能く此の如く天瑞を致せることを感じたり。然れども、故已が道の眞なるに如かざるなり。」

爾時、世尊、別に他日に於て、林間を經行し、糞穢中に諸の幣帛有るを見、卽ち拾ひ取り、之を洗濯せんと欲し、心念に石を須む。釋提桓因、卽ち佛の意を知り、大壯士の臂を屈伸するが如き頃に、香山の上に往き、四方石を取りて、樹間に安置し、卽ち佛に白して言さく、「石上に就きて、衣を洗濯したまふべきなり。佛復心に念したまはく、「今風に水を須むべし。」釋提桓因、又香山に往き、大白槽を取り、清淨の水を盛りて、方石の所に置く。釋提桓因、爲す所の事畢りて、忽然として現せず、天宮に還歸す。

爾時、世尊、洗濯すること已に竟りて、還つて樹下に坐したまふ。是時、迦葉又來りて佛の所に至り、忽ち樹間に、四方石及び大白槽有るを見て、卽ち自ら思惟すらく、「此中云何が此二物有るや。心に驚怪を懷き、往いて佛に問はく、「年少沙門、汝が此樹間に、四方石及び大白槽有り。何より來れるや。是に於て世尊、卽ち之に答へて言はく、「我向に經行して、地の幣帛を見て、取りて之を洗はんと欲し、心念に之を須めしに、釋提桓因、我此意を知り、卽ち香山に往き、之を取りて來りぬ。迦葉聞き已りて、未曾有なりと歎じ、自ら念言すらく、「年少沙門、是の如き大威神力有り、能く诸天を感せしむと雖も、然れども、故我道の眞なるに如かざるなり。」

【迦羅迦】 カーラ  
カ (Kālikā) 黒と  
譯す。

爾時、世尊、又他日に於て、指地池に入りて、自ら洗浴し、洗浴し訖已りて、心念に出でんと欲するに攀ぢ持つ所無し。池上に樹有りて、迦羅迦と名く。枝葉蔚映して、池上に臨む。樹神即便此樹枝を按じて、佛をして攀ぢて出でしめ、還つて樹下に坐したまふ。時に迦葉、來りて佛の所に至り、忽然として樹の枝を曲げ蔭を垂るるを見、怪んで佛に問はく、「此樹何が故に枝を曲げ蔭を垂るるや。」佛即ち答へて言はく、「我向に於て、池に入りて洗浴し、出づるに攀づる所無し。樹神感を致して、我爲に之を曲げぬ。是に於て迦葉の樹の枝を曲ぐるを見、又佛の言を聞きて、未曾有なりと歎じ、自ら心に念すらく、『年少沙門、乃ち此の如き大威徳力有り、能く樹神を感ぜしむ。然れども、故我道の眞なるに知かざるなり。』」

爾時、迦葉、心に自ら念言すらく、「明日摩竭提王、及び諸の臣民、婆羅門、長者居士等、當に來りて我に就きて、七日の會を作すべし。年少沙門、若し來りて此に在り、國王、臣民、婆羅門、長者、居士等、其相好及び神通威徳力を見ば、必ず當に我を捨てて之に奉事すべし。願くば此沙門、七日中に於て、我所に來らざらんことを。」佛其意を知ろしめして、即便往いて北鬱單越に詣り、七日七夜、彼に停りて現じたまはず。七日を過ぎ已りて、集會畢訖り、國王辭し去るや、迦葉、心に念すらく、「年少沙門、七日に近く我所に來らざるは、善い哉快い哉。我今既に集會の餘饌有り。以て之に供へんと欲す。其れ若し來らば、善く時宜を得ん。」是に於て世尊、即ち其意を知り、鬱單越より、譽へば壯士の臂を屈伸するが

【四轉果】次に出す比丘乃至優婆塞をいふ。前二は出家の男女、後二は在家の男女。

如き頃に、來りて其前に到りたまふ。時に迦葉、忽ち如來を見て、心大いに驚き喜び、即ち佛に問うて言さく、「汝近き七日、何處に遊行して、相見えざりしや。」佛即ち答へて言はく、「摩竭提王、及び諸の臣民、婆羅門、長者、居士、七日中に於て、汝に就きて集會す。汝近ごろ心に念じて我を見るを欲せず。是故に我北鬱單越に往きて、以て汝を避くるのみ。汝今心に念じて我をして來らしめんと欲す。所以に今、故に來りて汝に詣るなり。」迦葉、佛の此言を説きたまふを聞き已りて、心驚き毛豎うて、此念を作さく、「年少沙門、乃ち我意を知る。甚だ奇特なりと爲す。然れども、故我道の眞なるに如かざるなり。」爾時、世尊、又他日に於て、心に自ら思惟したまはく、「優樓頻螺迦葉、根縁漸く熟す。今は正に是れ調伏其時なり。是を思惟し已り、即ち尼連禪河に趣き、既に河側に到りたまふ。是時魔王、來りて佛の所に詣り、佛に白して言さく、「世尊、今宜しく般若涅槃すべし。善逝今は宜しく般若涅槃すべし。何を以ての故に。應に度すべき所の者、皆悉く解脱せり。今は正に是れ般若涅槃の時なり。是の如く三たび請ふ。世尊、爾時、魔王に答へて言はく、「我今未だ是れ般若涅槃の時ならず。所以は何ん。我四部衆、比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷、未だ具足せざるが故に。應に度すべき所の者、皆未だ究竟せず。諸の外道衆、悉く未だ降伏せず」と。爾時如來、亦復三たび答へたまふ。魔王聞き已りて、心に愁惱を懷き、即ち天宮に還る。世尊、即便尼連禪河に入り、神通力を以て水を兩聞せしめ、佛の行じたまひし所の處、步步塵起り、兩面の水を皆悉く涌き起らしむ。迦葉遙に見て、佛を洩溺せりと謂ひ、即

【阿羅漢】アルハ  
ン(Arhan) 應供、  
不生と譯す。

ち弟子と船に乗りて來り、既に河側に至り、佛の行きたまふ處、皆悉く塵の起るを見て、其希有なることを歎じて、自ら念言すらく、「年少沙門、此の如き神通の力有り」と雖も、然れども、故我道の眞なるに如かざるなり。」

是時、迦葉、即ち佛に問うて言さく、「年少沙門、船に上らんと欲するや不や。佛の言はく、一甚だ善し。』時に世尊、即ち神力を以て、船底を貫きて入り、結跏趺坐したまふ。迦葉佛の船底より入りて、穿漏無きを見、其希有なることを歎じて、心に自ら念言すらく、「年少沙門、乃ち是の如き自在神力有り。然れども、故我眞の阿羅漢を得たるに如かざるなり。』佛即ち語りて言はく、「迦葉汝は阿羅漢に非ず。亦復是れ阿羅漢向に非ず。汝今何が故に大我慢を起すや。』迦葉、此の如きの語を説きたまふを聞く時、心に愧懼を懷き身毛皆豎ちて自ら念言すらく、「年少沙門、善く我心を知る。』即ち佛に白して言さく、「是の如きの沙門、是の如きの大仙、善く我心を知る。唯願くば大仙、我を攝受したまへ。』佛即ち答へて言はく、「汝既に年耆百二十歳、又復多く弟子眷屬有り、又國王臣民の敬ふ所と爲る。若し決定して我法に入らんと欲せば、先づ弟子と熟共に論詳せよ。』迦葉答へて言さく、「善い哉善い哉、大仙の勅の如くせん。然れども我内心は決定せざるに非ず。爲に當に還つて弟子と論ずべしと爲すのみ。』此語を作し已りて、即ち本處に還り、諸の弟子を集め、之に語つて言はく、「年少沙門、此に住して以來、其種種の神通變化を見るに、極めて奇特と爲す。智慧深遠、性又安座なり。我今便ち其法に歸依せんと欲す。汝等云何。』弟子答へて言さく、





【那提迦葉】ナデ  
（Nadika-yana）  
【伽耶迦葉】ガヤ  
（Yakasyana）

悉く流を逐うて来るを見て、心大いに驚愕して、自ら念言すらく、「我兄今何の不祥有るや。火に事ふるの具、今水に墮つて流る。將悪人の害する所に非ずや。」是時二弟、奔り競つて相就き、共に議して言はく、「我兄今若し復悪人の害する所と爲らざるや。諸物何に縁りてか水に従つて來れる。苦しい哉怪しい哉。我等宜しく速に共に兄の所に至るべし。」即便相與に流に忝りて上り、兄の住處に至るに、空寂にして人無し。心大いに悲絶して、其兄及び諸の弟子の所在を知らず、四向推尋して、遇舊人を見、之に問うて言はく、「我仙聖兄、及び諸の弟子所在を知らず。汝之を見たりや不や。舊人答へて言はく、「汝が仙聖兄は、諸の弟子と火に事ふるの具を棄て、皆悉く罽曇の所に往いて、出家し道を學す。」是時二弟、此語を聞き已りて心大いに懊惱し、未曾有なりと怪しみ、又自ら念言すらく、「云何が阿羅漢道を棄てて、復更に他餘の法を求むるや。」即便馳せ往いて其兄の所に至り、到り已りて兄及び眷屬の鬚髮を剃除し、身に袈裟を披たるを見、即便跪き拜して、兄に問うて言はく、「兄は本既に是れ大阿羅漢、聰明智慧、與に等しき者無く、名十方に聞え、宗とし仰がざるもの莫きに、何が故に今に於て自ら此道を捨てて、還つて人に從つて學ぶや。此れ小事に非ず。」

爾時、迦葉、其弟に語りて言はく、「我、世尊を見たてまつるに、大慈大悲を成就して、三事の奇特有り。一には神通變化、二には慧心清徹、決定して一切種智を成就す。三には善く人根を知り、隨順攝受す。此事を以ての故に、佛法の中に於て出家し道を修す。我今

復闍王臣民の宗敬せらるるところ、世論機辯は能く折する者無しと雖も、然れども永く生死を纏つゝの法に非ず。唯如来の演説すべき所のみ能く生死を盡す有り、即ち是の如き大聖の尊に値ふ。而して、自ら勵んで、彼高勝を師とせさんば、則ち是れ無心なり、亦無眼と爲す。二弟白して言はく、若し兄の語の如くんば、決定して是れ一切種智を成せるなり。我知得する所は、皆是れ兄の力、兄今既に已に佛に従つて出家せり。我等も亦願くば、兄に隨順して學せん。即ち、各其諸の弟子に語つて言はく、我今大兄に同じて、佛法の中に於て、出家し道を學せんと欲す。汝が意法何時に諸の弟子、即ち師に答へて言はく、我等が知見有ることを得る所以は、皆大師の恩なり。大師若し佛法の中に於て出家せんと欲せば、亦願くば隨從せん。是に於て那提迦葉、伽耶迦葉、各二百五十の弟子と與に、佛の所に至り、頭面に足を禮し、佛に白して言さく、一世尊唯願くば慈哀もて我等を濟度したまへ。佛言はく、善くぞ來りし、比丘。一と鬚髮自ら落ち、袈裟身に著きて、即ち沙門と成る。時に那提迦葉、伽耶迦葉、亦佛に白して言さく、一我諸の弟子、今皆佛法に於て出家せんと欲す。唯願くば世尊、慈を垂れて聽許したまへ。佛即ち答へたまはく、一善哉善哉。爾時、世尊、便ち呼びたまはく、一善くぞ來りし、比丘。一と鬚髮自ら落ち、袈裟身に著きて、即ち沙門と成れり。

爾時、世尊、即ち那提迦葉、伽耶迦葉、及び諸の弟子の爲に大神變を現じ、又其心に應じて、爲に法を説き、語りて言はく、一比丘、當に知るべし。世間は皆貪欲、瞋恚、愚癡の猛

【三】頻毘婆羅王  
佛に歸すること。

【杖林】梵にヤス  
テイツナ (Yashit-  
ana) といふ。

火の爲に熾炙せらる。汝等、往昔奉事せる三火を既に能く絶棄しぬ。此外惑を除くも、今三毒の火、尙猶身に在り。宜しく速に之を滅すべし。時に諸の比丘、佛の此語を聞きて、諸法の中に於て、塵に遠ざかり垢を離れて、法眼淨を得。世尊又爲に廣く四諦を説きたまひ、皆悉く阿羅漢果を得たり。

爾時、世尊、心に自ら念言すらく、『頻毘婆羅王、往昔、我に於て約誓の言有りき、一道若し成せば、願くば先づ度せよ』と。今日時至りぬ。宜しく應に彼に往きて、其本願を満すべし。此念を作し已りて、即ち迦葉兄弟及び千の比丘と、眷屬に圍繞せられて、王舍城に往き、頻毘婆羅王の所に詣りたまふ。爾時、頻毘婆羅王が昔、聚落を以て優樓頻螺迦葉に給したる者、既に迦葉及び其弟子の、悉く沙門と爲れるを見て、即ち還つて王に啓し、此の如きの事を説く。王、諸臣と、既に此語を聞きて、心大いに驚怪し、默然として聲無し。時に外人民、此語を聞き已りて、各相謂つて言はく、『優樓頻螺迦葉は智慧深遠にして、與に等しき者無く、年又耆老にして已に阿羅漢を得たり。云何が反りて瞿曇の弟子と爲らんや。終に此理無し。乃ち説いて沙門瞿曇が弟子と爲れりと言ふべきのみ。』

爾時、世尊、漸く王舍城に近づき杖林に住りたまふ。時に優樓頻螺迦葉、即便其常に使ふ所の人を遣し、頻毘婆羅王に白して言はく、『我今佛法の中に於て、出家し道を修し、今、佛に隨從して來り、杖林に至りぬ。大王、宜しく先づ禮拜し供養したまふべし。』王來信の此言を説くを聞き已りて、方に決定して優樓頻螺迦葉の佛弟子たることを知り、即ち勅し



【月種】 チャンド  
ラヅンシヤ (Chand  
ra-Yuzunsha)

て駕を嚴しめ、諸の大匠、婆羅門及び人民衆と、往いて佛の所に詣り、杖林の外に至りて、上即ち輿を下り、儀飾を除却し、歩んで佛の前に至る。爾時、空中に天有り。王に語りて言はく、「如來今此林中に在す。是諸の天人の最上の福田なり。大王、宜しく應に恭敬し供養したまふべし。又應に國中の人民に宣示して、皆悉く其をして如來を供養せしめたるまつるべし。時に、王既に彼天語を聞き已りて、心大いに歡喜し、倍踊躍を増し、便ち林中に進み、遙に如來の相好の莊嚴を見、又優樓頻螺迦葉兄弟三人、并に其弟子の前後に圍繞すること、盪滿の月の、衆星の中に處するが如くなるを見て、歩歩踊悦して、自ら勝ふること能はず。既に佛の所に至り、頭面に足を禮し、佛に白して言さく、「我は是れ月種摩竭提王、頻毘婆羅と名く。世尊知りたまふや不や。佛即ち答へて言はく、「善哉、大王。是に於て、頻毘婆羅王、却いて一面に坐す。時に婆羅門、及以大臣、諸の人民衆、皆悉く座に就く。

爾時、世尊、既に來衆の皆安坐し居るを見て、即ち梵音を以て、頻毘婆羅王を慰問して言はく、「大王、四大常に安隱なりや不や。民務を統理して乃ち勞すること無きや。王即ち答へて言はく、「世尊の恩を蒙りて、幸に安隱なることを得たり。爾時、頻毘婆羅王、及び餘の大摩婆羅門、長者、居士、大臣、人民、既に迦葉の佛弟子と爲れるを見て、自ら相謂つて言はく、「嗚呼、如來に大神力有り、智慧深遠不可思議なり。乃ち能く此の如きの人を伏して、以て弟子と爲せり。爾時、復諸餘の人衆有り、心に自ら念言すらく、「優樓頻螺迦葉、大智慧

有り、普く世人の爲に歸信せらる。云何が當に沙門羅雲の爲に、弟子と作るべきや」と、心に狐疑を懷く。爾時、世尊、彼心念を知り、即ち迦葉に語りたまはく、「汝今宜しく應に諸の神變を現すべし。一時に迦葉、即ち虚空に昇りて、身上より水を出し、身下より火を出し、或は一身を分ちて無量身と爲し。或は地に入り、還つて復踏出し、虚空の中に於て、行住坐臥することを現す。舉衆見已りて、未曾有なりと歎じ、悉く皆第一大仙と稱へ言ふ。爾時、迦葉、此變を現じ已りて、即ち空より下りて、佛の前に到り、頭面に足を禮し、佛に白して言さく、「世尊は實に是れ天人の師なり、我は今實に是れ尊の弟子なり。是の如く三たび説くや、佛即ち答へて言はく、「是の如く是の如し。迦葉、汝我法に於て何等の利を見てか、火具を棄捨して出家せるや。」

是に於て迦葉、偈を以て答へて言はく、

我昔日の中に於て、火に事ふる所の功德もて

天人の中に生れ、五欲の樂を受くることを得

恆に是の如く輪轉して、生死の海に没せり

我此過患を見て、所以に之を棄捨せり

又復火に事ふるの福は、天人の中に生るるを得て

貪、恚、癡を増長す。是故に我は遠離せり

又復火に事ふるの福は、將來の生を求めんが爲なり  
既已に生有るが故に、必ず老病死有り

已に此の如きの事を見て、是故に火法を棄てり

施會と苦行を修すると、及び火に事ふるの福とは

梵天に生るることを得と雖も、此究竟の處に非ず

是因縁を以ての故に、所以に火に事ふることを棄てたり

我如來の法を見るに、至老病死を離れて

解脱の處を究竟せり、是故に今出家す

如來は眞に解脱して、諸の天人の師たり

是因縁を以ての故に、大聖尊に歸依したてまつる

如來大慈悲より、種種の方便を現じ

及び諸の神通力もて、以て我を引導したまふ

云何が復應に、火法に奉事すべけんや

爾時、頻伽婆羅王、及び諸の大衆、優樓頻螺迦葉の此偈言を説くを聞きて、心大いに歡

喜し、如來の所に於て、深く歡信を生じ、決定して如來の必ず一切種智を成じたまへるを

知ることを得、迦葉の是れ師弟子なることを審に知りぬ。爾時、诸天、虚空の中に於て、衆

の天花を雨らし、妙伎樂を作し、異口同音に唱へて言はく、「善哉、善哉、優樓頻螺迦葉、快く

【五陰】色受想行識即ち物心の諸現象をいふ。

【我】アートルマン (Anima) 心的實在の總稱、我所は我の所有物の意にて我に附屬し、我によりて執著せらるる事物をいふ。  
【法】ダルマ (Dharma) 有形無形一切事物のこと。

此偈を説けり。

爾時、世尊、諸の大衆の心意決定して、復狐疑無きことを知らしめし、又其根の皆已に成熟せるを觀じたまひ、即ち爲に法を説きたまはく、「大王當に知るべし、此五陰の身は、識を以て本と爲す。識に因るが故に、意根を生じ、意根を以ての故に、色を生ず。而して此色法は、生滅して住せず。大王若し能く是の如く觀ぜば、則ち能く身に於て、善く無常を知らん。此の如く身を觀じて、身相を取らずんば、則ち能く我及び我所を離れん。若し能く色の、我、我所を離るるを觀ぜば、即ち色の生ずるは便ち是れ苦の生ずることなるを知り、若し、色の滅するは、便ち是れ苦の滅するを知らん。若し人能く此の如きの觀を作せば、是を名けて解と爲す。若し人斯觀を作すこと能はずんば、是を名けて縛と爲す。法は本、我及び我所無し。倒想を以ての故に、横に我及び我所有りと計するも、實の法有ること無し。若し能く此倒惑の想を斷ぜば、則ち是れ解脱なり。爾時、頻毘娑羅王、心に自ら思惟すらく、若し其衆生の我有りと云ふを、名けて縛と爲し、一切衆生は、皆悉く我無しと謂はば、既に我有ること無くんば、誰か果報を受くるや。爾時、世尊、彼心念を知らしめして、即ち之に語りて言はく、「一切衆生の、爲す所の善惡、及び受くる果報は、皆我造に非ず、亦我愛に非ず。而して今現に善惡を造作し、果報を受くる者有り。大王諦かに聴きたまへ。當に王の爲に説くべし。大王、但情、摩、識の合するを以て、境に於て染を生じ、累想滋繁し、是縁を以ての故に、生死に馳流して、備に苦報を受くるも、若し境に於て染無く、其累想を息



れば、則ち解脫を得るなり。情塵、識の三事の因縁を以て、共に善惡を起し、及び果報を受くるのみ、更に別の我無し。譬へば火を鑽るに、手の礎を轉するに因りて、火の生ずること有るを得るも、然も彼火性は、手より生ぜず、及び礎より出でず、亦復手及び礎鑽を離れざるが如し。彼情塵、識も、亦復是の如し。

時に、頻毘婆羅王、又自ら思惟すらく、「若し情塵、識の和合を以ての故に、善惡有りて果報を受くる者、便ち常に合すと爲さば、應に離絶すべからず、若し常に合せずば、是れ則ち斷と爲す。」爾時、世尊、王の心念を知りて、即便答へて言はく、「此情塵、識は、不常不斷なり。何を以ての故に。合するが故に不斷なり。離るるが故に不常なり。譬へば地水を縁とし、彼種子を因として、芽葉を生ずるに、種子既に謝せば、常と名くることを得ず。芽葉を生ずるが故に、斷と名くることを得ず。經常を離るるが故に、中道と名くるが如し。三事の因縁も、亦復是の如し。」爾時、頻毘婆羅王、此法を聞き已りて、心開け意解け、諸法の中に於て、塵に遠ざかり垢を離れて、法眼淨を得、八萬那由他の婆羅門、大臣、人民も、亦諸法に於て、塵に遠ざかり垢を離れて、法眼淨を得、九十六萬那由他の諸天、又諸法に於て、塵に遠ざかり垢を離れて、法眼淨を得たり。

時に頻毘婆羅王、即ち坐より起ち、佛足を頂禮し、合掌して佛に白さく、「快い哉世尊、能く轉輪王の位を捨てて、出家し道を學し、一切稱智を成じたまへることや。我昔愚癡にして、世尊を留めて、小國を臨治したまはんことを欲せり。今慈愍を起、又正法を聞きて、

【四事】 衣服、飲食、臥具、湯藥をいふ。

【竹園】 梵にエーヌツナ(Anuvana)といふ。

【三不堅法】 身、命、財。

【三堅報】 無極身無窮命、無盡財。

【僧伽藍】 サムガラーヤ(Saṅgha Rāma)衆園或は僧房と譯す。

方に慙愧を懷き、昔過を追悔す。唯願くば世尊、大慈悲を以て、我懺悔を受けたまへ。我、昔日に於て、世尊に白して言さく、「若し道を得ん時、願くば先づ我を度したまへ」と。今日始めて宿願の成し遂ぐるを蒙り、世尊の恩を荷ひて、道跡を履むことを得たり。我今日より、世尊及び比丘僧を供養して、當に四事をして乏しき有らしめざるべし。唯願くば世尊、竹園に住して、摩竭提國をして、長夜安きを獲しめたまへ。佛即ち答へて言はく、「善い哉、大王乃ち能く三不堅法を捨てて、三堅報を求むることや。當に王の願をして満足を得しむべし。』時に頻毘婆羅王、佛の請を受けて竹園に住したまふを知り已りて、佛足を頂禮し、辭退して去る。王、城に還り已りて、即ち諸臣に勅して、竹園に於て、諸の堂舎を起さしめ、種種に莊飾して、極めて嚴麗ならしめ、繪幡蓋を懸け、散花し燒香し、悉く皆辦じ已りて、即便駕を嚴しめ、往いて佛の所に至り、頭面に足を禮して、佛に白して言さく、「竹園僧伽藍、修理已に畢れり。唯願くば世尊、比丘僧と與に、我を哀愍するが故に、往いて彼に住したまへ。」

爾時、世尊諸の比丘及び無量の諸天と前後に圍繞せられて、王舍城に入りたまふ。如來の門闕を踏みたまへる時に當りて、城中の樂器、鼓せずして自ら鳴り、門の狭きは更に廣く、門の下れるは更に高く、一切の丘墟、皆悉く平坦に、臭穢の塵垢、自然に香淨に、聾者は聽くことを得、癡者は能く言ひ、盲者は視ることを得、狂者は正を得、拘躰の疾病は普く皆除癒し、枯木花を發き、腐草榮秀し、澗池淵を増し、香風清く靡き、鳳、孔

雀、鵲、鳧、雁、鸞、鷲、異類の衆鳥、繽紛として翔集し、和雅の音を出す。是の如き等の種種の祥瑞有り。既に城に入り已りて、頻毘婆羅王と、俱に竹園に往きたまふ。爾時、諸天、虚空の中に滿りて、時に王即便手に寶瓶を執り、盛るに香水を以てし、如來の前に於て、是言を作さく、我今此竹園を以て、如來及び比丘僧に奉上す。唯願くば哀愍もて、我爲に納受したまへ。此言を作し已りて、即便水を捨つ。

爾時、世尊、默然とし、之を受け、偈を説いて呪願したまはく、

若し人能く布施せば、饑食を斷除す

若し人能く忍辱なれば、永く嗔恚を離る

若し人能く善を造せば、則ち愚癡に遠かる

能く此三行を具すれば、速に般涅槃に至る

若し貧窮の人有り、財の布施すべき無くば

他の施を修するを見ん時、隨喜の心を生ぜよ

隨喜の福報は、施と等しうして異ること無し

爾時、婆羅門、大臣、及び餘の人民、王の如來に僧伽藍を施し奉れるを見て、皆悉く踊躍して、隨喜の心を生ぜり。爾時、頻毘婆羅王、僧伽藍を施し已りて、心大いに歡喜し、頭面に足を禮し、退いて所住に還る。

閻浮提中、諸王の佛を見る、頻毘婆羅王を、最も具首と爲し、諸の僧伽藍にて、竹園

【四】舍利弗、日連の入園に就て

【拘栗】 コーリタ (Kotita)

【優波室沙】 ウパティシヤ (Upatisya)

【舍利】 シャーリ (Sari)

【舍利弗】 シャーリフトラ (Sariputra)

【目犍連】 マウドガリヤーナ (Maudgalyayana)

【阿捨婆耆】 アシマツット (Asaiti)

馬勝と譯す、五比丘の一。

僧伽藍は最も其初なりと爲す。

爾時、世尊、諸の比丘と、竹園僧伽藍に住したまふ。時に王舍城の中に婆羅門有り、聰明利根、大智慧有り、諸の甚論に於て、通達せざること無く、辯才論議に能く摧伏するもの莫し。一の姓は拘栗、優波室沙と名く、母を舍利と名くるが故に、世譽りて喚んで舍利弗と爲す。二の姓は目犍連、日犍羅夜那と名く、各一百の弟子有り。普く國人の爲に宗として仰がる。二人互に共に以て親友爲り。極めて相愛重し、咸共に誓つて言はく、『若し先づ諸の妙法を聞くことを得ば、要す相聞悟して、悟悟を得ること無けん。』  
爾時、阿捨婆耆比丘、衣を著け鉢を持して、村に入りて乞食す。善く諸根を攝し、威儀庠序なり。路人見る者、皆恭敬を生ず。時に舍利弗、忽ち路次に於て、阿捨婆耆が、善く諸根を攝し、威儀庠序なるに逢ひ見る。彼舍利弗、善根既に熟す。阿捨婆耆を見て、心大いに歡喜し、踊躍身に遍く、歩を停め瞻視して、暫くも捨つること能はず。即便問うて言はく、『我意、汝を觀るに、新出家に似たり。而も能く此の如く諸の情根を攝す。問ふ所有らんと欲す。唯願くば答へよ。汝が今の大師、其名は何等なる。教誡する所、何の法をか演説する有りや。』時に阿捨婆耆、即便安庠として、之に答へて言はく、『我大師は、一切種智を得たまふ。是れ甘蔗種、天人の師なり。相好、智慧、及び神通力、與に等しき者無し。我既に年幼、道を學すること日淺し。豈能く如來の妙法を宣説せんや。然れども知る所を以て、當に汝が爲に説くべし。』と。即ち偈を説いて言はく、



一切諸法の本は、因縁より生じて主無し

若し能く此を解せば、則ち眞實の道を得ん

時に舍利弗、阿捨婆耆の此偈を説くを聞き已りて、即ち諸法に於て、摩を遠ざかり垢を離れて法眼淨を得たり、道跡を見已りて、心大いに踊躍し、身の諸の情根、皆悉く悦豫し、自ら念言すらく、「一切の衆生悉く我に著し、所以に輪廻して、生死に在り。若し我想を除けば、即ち我所に於て、亦皆離るるを得ること、譬へば日光の能く闇を破るが如し。無我の想も亦復是の如く、悉く能く我見の闇障を破る。我昔より來、修學すべき所、皆邪見と爲し、唯今の得る所のみ、是れ正眞の道なり。」此念を作し已りて、阿捨婆耆の足を禮し、所止に還歸す。時に阿捨婆耆、前に至りて食を乞ひ、訖りて竹園に還りぬ。

時に舍利弗、還つて住處に至る。時に目撻羅夜那、善根已に熟し、舍利弗の諸根寂定に、威儀庠序にして顔容の怡悅、常日に異なるを見て、即便問うて言はく、「我今汝を見るに、諸根潤貌、常と異なる有り、必ず當に已に甘露の妙法を得たるべし。我昔汝と共に摠言を結ぶらく、「若し妙法を聞かば、要す相啓悟せん」と。汝が得る所有る者、聞くば我爲に説け、時に舍利弗、即便答へて言はく、「我今實に已に甘露の法を得たり。目撻羅夜那聞き已りて、歡喜すること無量なり。數じて言はく、「善哉、時に我爲に説け。舍利弗言はく、「我今出て行いて一比丘に逢へり。衣鉢を置持し、村に入りて食を乞ふ。諸根寂靜にして、威儀庠序なり。我既に見已りて、深く恭敬を生じ、既に其所に到り、之に問うて言

はく、「我意、汝を觀るに、新出家に似たり。而も能く此の如く、諸の情根を攝す。問ふ所有らんと欲す。唯願くば答へよ。汝が今の大師、其名は何等なる。教誡する所、何の法をか演説する有りや。」時に阿捨婆耆、即便安岸として答へて言はく、「我大師は、一切種智を得たまへり。是れ甘蔗の種、天人の師なり。相好、智慧、及び神通力、與に等しき者無し。我既に年幼、道を學すること日淺し。豈能く如來の妙法を宣説せん。然れども知る所を以て、當に汝が爲に説くべし」と。即ち偈を説いて言はく、

一切諸法の本は、因縁より生じて主無し  
若し能く此を解せば、即ち眞實の道を得ん

と。  
爾時、目健羅夜那、舍利弗の此語を説き已るを聞きて、即ち諸法に於て、塵に遠ざかり垢を離れて法眼淨を得たり。

爾時、舍利弗、目健羅夜那と、各佛法に於て、甘露を得已りて、共に相謂つて言はく、「我等已に佛法に於て、各利益を得たり。今宜しく應に共に佛の所に往いて、出家を求索すべし。」此語を作し已りて、各弟子を喚び、之に語りて言はく、「我等今已に佛法に於て、甘露味を得たり。唯此法のみ有り、是れ出世の道なり。我今往いて佛に出家を求めんと欲す。汝等云何。」諸の弟子等、其師に答へて言はく、「我等今知見する所有るは、皆大師の力なり。師若し出家したまはば、我悉く隨從せん。是に於て二人、即ち二百の弟子を將みて、

往いて竹園に詣る。既に門に入り已りて、遙に如來の相好の莊嚴なると、諸の比丘衆の前後に圍繞するを見て、心大いに歡喜し、踊躍すること身に過し。

爾時、世尊、舍利弗及び目犍羅夜那が、諸の弟子と相隨つて來るを見已りて、諸の比丘に告げたまはく、「汝等當に知るべし。今此人、我諸の弟子を將ゐて、來りて我所に至りて、出家を求めんと欲す。一を舍利弗と名け、一を目犍羅夜那と名く。當に我法の中に於て上弟子たるべし。舍利弗は、智慧中に於て、最も第一と爲す。目犍羅夜那は、神通中に於て復無上と爲す。佛の所に至り已りて、頭面に足を禮して、佛に白して言はく、「我佛法に於て、已に道跡を得、出家せんことを樂ひ欲す。願くば時に聽許したまへ。」

爾時、世尊、即便喚んで言はく、「善くぞ來りし、比丘。」と。鬚髮自ら落ち、袈裟身に著きて、即ち沙門と成る。時に彼二百の弟子、既に其師の沙門と成れるを見已りて、俱に佛に白して言さく、「我等も亦師に隨つて出家せんことを欲す。唯願くば世尊、惑を垂れて聽許したまへ。」是に於て世尊、即ち復喚んで言はく、「善くぞ來りし、比丘。」と。鬚髮自ら落ち、袈裟身に著きて、即ち沙門と成る。爾時、世尊、舍利弗及び目犍羅夜那の爲に、廣く四諦を説きたまふ。二人即ち阿羅漢を得たり。又復彼二百の弟子の爲に、廣く四諦を説きたまふ。即ち諸法に於て、塵に遠ざかり垢を離れて、法眼淨を得、乃至、亦阿羅漢果を成す。爾時、世尊、即ち一千二百五十の比丘の、皆大阿羅漢なると與に、摩竭提國に於て、廣く衆生を利したまふ。諸の比丘の中に、多くの人の目犍羅夜那と名くる有り。世尊、故に

【五】 大迦葉を度する事。

【迦葉】 カシヤパ(Kasyapa) 飲光と譯す。

【四毘陀經】 リゲエーダ(Rivada) サーマエーダ(Sama-veda) ヤージュルエーダ (Yajur-veda) アタルヴェーダ (Atharva-veda) の四をいふ。

【納衣】 不用の布片にて縫ひつづり合せてたる僧衣。

【釋迦牟尼佛】 シヤキヤムニブツダ(Mia)能忍寂默と譯す。

此日毘羅夜耶を名けて、大日毘羅夜耶と爲したまふ。

爾時、偷羅賊又國に一婆羅門有り。名けて迦葉と曰ふ。三十一相有り。聰明智慧にして、四毘陀經を誦し、一切の書論通達せざる無し。極大巨富、善能く布施す。其婦端正にして、國を擧げて雙ぶもの無し。二人自然に欲望有ること無く、乃至亦同じく一室に宿せず。久しき往昔に於て、善根を種ゑたるが故に、家に在りて五欲の樂を受くることを樂はず。日夜思惟して世間を厭離し、精勤に出家の法を求め訪ね、是の如く推尋するも、得ること能はず、已に即ち家事を捨てて、山林に入り、心に念じて口に言はく、「諸佛如來、出家し道を修す。我、今、亦當に佛に隨つて出家すべし。即便金縷にて織り成せる珍寶の衣、價直百千、兩金なるを脱ぎ去りて、壞色の納衣を著、自ら鬚髮を剃る。」

爾時、諸天、虚空の中に於て、既に迦葉の自ら出家せるを見已りて之に語りて言はく、「善男子、甘蔗の種族、白淨王の子、其名薩婆悉達、出家し道を學して、一切種智を成じ、世擧りて號して釋迦牟尼佛と爲す。今千二百五十の阿羅漢と、王舍城竹園中に在りて住したまふ。」

爾時、迦葉、天語を聞き已りて、歡喜し踊躍して、身毛皆堅ち、即便往いて竹園僧伽藍に趣く。爾時、世尊、其當に來るべきを知り、自ら思惟して、其善根を觀じて、「宜しく往いて之を度すべし」と。此念を作し已りたまひ、即ち行いて之を逆へ、子兜婆に到りて、迦葉に逢ひたまふ。時に彼迦葉、既に相好威儀の特に尊きを見て、即便合掌して、此言を作さ

た。時、迦葉、天語を聞き已りて、歡喜し踊躍して、身毛皆堅ち、即便往いて竹園僧伽藍に趣く。爾時、世尊、其當に來るべきを知り、自ら思惟して、其善根を觀じて、「宜しく往いて之を度すべし」と。此念を作し已りたまひ、即ち行いて之を逆へ、子兜婆に到りて、迦葉に逢ひたまふ。時に彼迦葉、既に相好威儀の特に尊きを見て、即便合掌して、此言を作さ



く、世尊は實に是れ一切種智、實に是れ慈悲もて衆生を濟ひたまふ者、實に是れ一切の歸依する所の處なり。即便五體を地に投じ、佛足を頂禮して、佛に白して言はく、「世尊は今是れ我大師なり。我は是れ弟子なり。是の如く三たび説く。佛即ち答へて言はく、「是の如し、迦葉。我は是れ汝が師なり、汝は是れ我弟子なり。佛又語りて言はく、「迦葉當に知るべし。若し人實に一切種智に非ずして、汝を受けて弟子と爲さんと欲せば、頭則ち破裂して以て七分と爲らん。又復告げて言はく、「善い哉、迦葉。快い哉、迦葉。當に知るべし。五受陰の身は是れ大苦聚なることを。時に迦葉、此言を聞き已りて、即便諦を見、乃至阿羅漢果を得たり。爾時、世尊、即ち迦葉と俱に竹園に還りたまふ。此迦葉大威徳有り、智慧聰明なるを以て、是故に之を名けて大迦葉と爲す。

爾時、世尊、諸の比丘に告げたまはく、「普光如來の世に出興したまへる時の善慧仙人は、豈異人ならんや。即ち我身是なり。緣路に遇へる五百の外道の、共に論議し及び隨喜せる所の者は、今此會中の優樓頻螺迦葉兄弟、及び其眷屬の千比丘是なり。時に花を賣れる女は、今の耶輸陀羅是なり。善慧仙人の髮、地に布ける時、傍に二人有りて、佛の前の地を拂ひ、及び二百人の隨喜して助けたるは、今此會中の舍利弗、大目犍羅耶那、并に二百の弟子比丘是なり。虚空の諸天の善慧仙人の、髮を以て地に布けるを、悉く皆隨喜して讚歎せるは、我初めて得道して、鹿野苑の中に始めて法輪を轉じ、八萬の天子、及び頻毘娑羅王の將ゐたる眷屬、八萬那由他の人、及び九十六萬那由他の天是なり。

汝等當に知るべし。過去の種因は、無量劫を經るも終に磨滅せざること。我、往昔に於て、一切の善業を精勤に修習し、及び大願心を發して退轉せざりしが故に、今に於て一切種智を成就することを得たり。汝等、宜しく魔に道行を動搖して、懈怠を得ること無かるべし。

時に諸の比丘、佛の説きたまふ所を聞き、歡喜し頂戴し、禮を作して退きぬ。

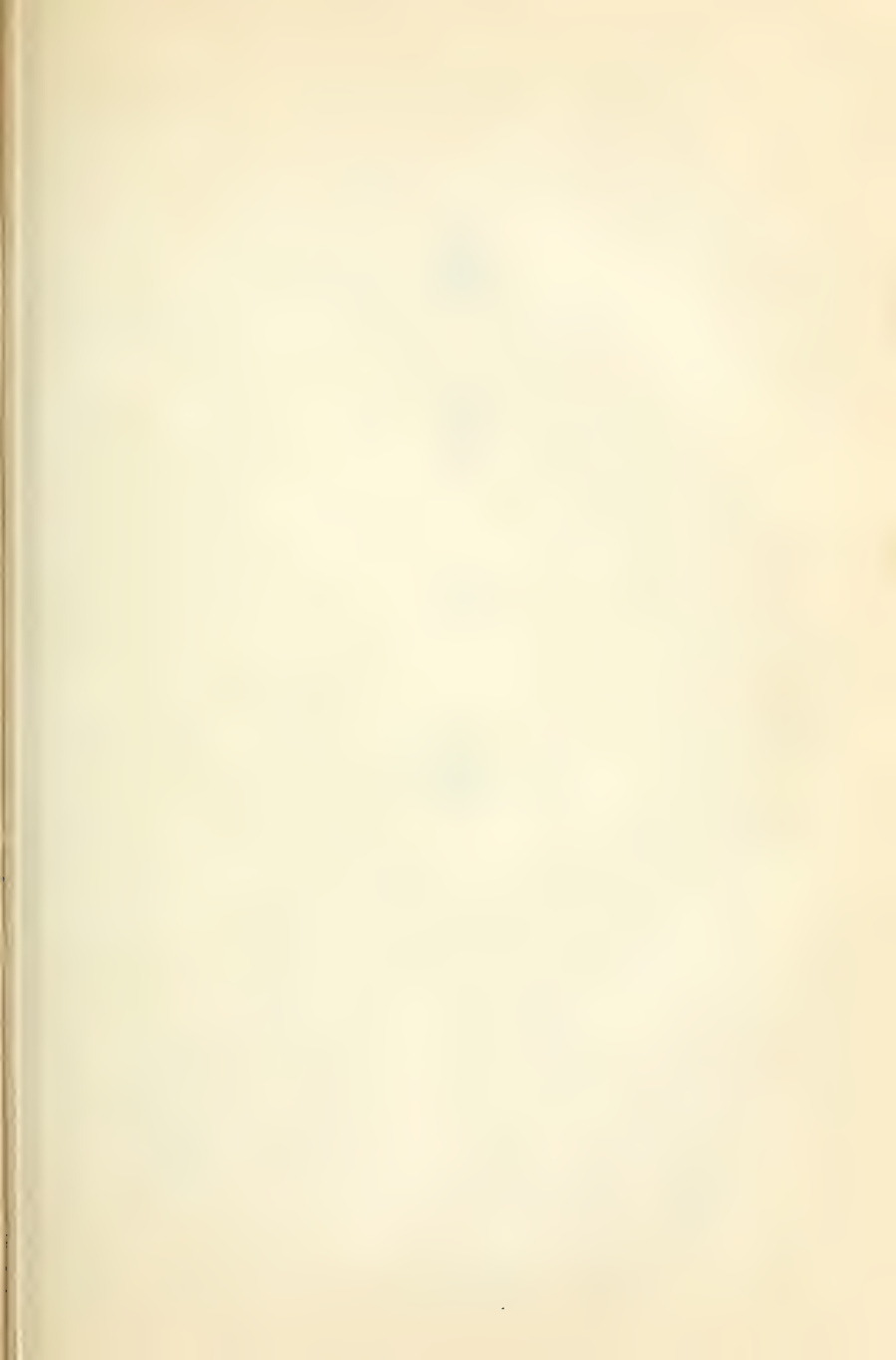
過去現在因果經 終



佛  
所  
行  
讚

經 典 部	第 十 二 卷
-------------	------------------





佛ぶつ所しよ行ぎやう讚さん

卷はき第だ一いち 亦亦佛佛本本行行  
經經と云云ふ

馬うま鳴な菩ぼ薩さつ造ぞう  
北ほく涼りやう天てん竺ぢく三さん藏ざう曇とん無む讖ぢん譯やくす

生しやう品ひん第だい一いち

【生品】 悉達太子の出生、苦行仙等が太子の將來について豫記せしこと等を述ぶ。  
【甘蔗】 釋迦種族のこと。  
【淨飯】 梵にシュツトダナ (Suddho dana) といふ。釋尊の父王。  
【舍脂】 シヤシー (舎遮) 帝釋夫人の名なり。  
【摩耶】 マーヤ (Maya) 幻生、大智母等と譯す、淨飯王の后、釋尊の母。  
【藍毘尼】 ルムビニー (Lumbini) 迦毘羅城の東にありし園の名。

甘蔗かんごの苗裔めうがいなる、釋迦しやか無勝むじやう王わうは淨財じやうさいの徳とく純じゆんら備ほる。故ゆゑに名なけて淨飯じやうはんと曰いふ。群生ぐんじやうの樂たのんで瞻仰せんじやうすること、猶なほし初生しじやうの月つきの如ごとし。王わうは天帝釋てんたいしやくの如ごとく、夫人ふじんは舍脂しゃしの猶なほし。執志しやくし安やすらかなること地ちの如ごとく、心淨こんじやうらかなること蓮花れんげの若ごとし。假かりに譬たとへて摩耶まやと名なく、其そのれ實まことに倫比りんひ無なし。彼象おんじやう天后てんちゆうに於おて、神かみを降くだして胎たに處ある。母はは悉ことごとく憂患うゑんを離はなれて、幻偽まがたふの心こころを生うぜず。彼誼おんぎ俗じやくを厭いと惡にくして、空閑くうけん林りんに樂處らくぢよす。藍毘尼らんびにの勝園しやうえんは、泉いづみを流ながし花果けわくわ茂さかり。

【優留】アウルヤ  
 (Aurva) 梵志ウル  
 ヲア (Diva) の子。  
 【毘倫】ブリツ  
 (Pitru)  
 【曼陀】マーンダ  
 ートトリ (Mandhar)  
 【伽叉】カクシー  
 ツット (Kakavat)

寂靜にして禪思に順ふ、王に啓して彼に遊ばんと請ふ

王其志願を知りて、奇特の想を生じ

内外の眷屬に勅して、俱に彼園林に詣らしむ

爾時に摩耶后、自ら産む時の至れることを知り

安勝の床に偃寝し、百千の侍女侍せり

時は四月八日、清和の氣調適せり

齋戒して淨徳を修するに、菩薩は右脇より生ぜり

大悲は世間を救ふをもて、母をして苦惱せしめず

優留王は股より生じ、毘倫王は手より生じ

曼陀王は頂より生じ、伽叉王は腋より生ぜり

菩薩も亦是の如し。誕るるに右脇より生じ

漸漸として胎より出で、光明普く照耀せり

虚空より墮つるが如く、生門に由らず

徳を修すること無量劫なれば、自ら知る生れて不死なることを

安諦として傾動せず、明顯妙に端嚴なり

晃然として後に胎現すること、猶し日の初めて昇るが如し

觀察するに極めて明耀にして、眼根を害せず

【七星】(Ursa Ma  
jor) 星座の星。

縦視するも耀がざること、空中の月を觀るが如し  
自身の光照耀すること、日の燈明を奪ふが如く  
菩薩の眞金身の、普く照すこと亦是の如し  
正眞に心亂れず、安座として行くこと七歩なり  
足下安平の趾は、炳徹すること猶し七星のごとし  
默王師子の歩んで、四方を觀察するがごとく  
眞實の義に通達し、能く是の如きの説に堪へたり  
此生は佛生たり、則ち後邊の生たり  
我唯此一生に、當に一切を度すべし  
時に應じて虚空の中より、淨水雙流し下るに  
一に温にして一は清涼なり、灌頂して身を樂しましむ  
寶空殿に安處し、琉璃の床に臥す  
天王は金華もてる手もて、床の四足を奉持す  
諸天は空中に於て、寶蓋を執持して侍す  
威神を承けて讚歎し、成佛道を勸發す  
諸の龍王は歡喜し、殊勝の法を渴仰す  
曾過去佛に奉し、今は菩薩に値ふを得たり



【曼陀羅花】マン  
ダーラ (Mandara)  
天妙華と譯す。

【淨居天】シユツ  
ダーイワリーサ  
(Sudhivara)

と梵にいふ。諸天  
中の最位の神。

【須彌】スメル  
(Sumeru) 妙高山  
と譯す。

【梅檀】チャンド  
ナ (Chandana) 香木  
の名。

曼陀羅花を散じて、專心に供養を樂しむ

如來世に出興したまへば、淨居天歡喜せり

已に愛結の歡を除き、法の爲に欣悅す

業生苦海に没するも、解脫を得しむるが故に

須彌寶山王は、此大地を堅持するも

若隣世に出興せる、功徳の風の飄るところ

普く皆大いに震動して、風の舟を鼓浪するが如し

梅檀細末香、衆寶蓮花散

風吹けば空に隨つて流れ、繽紛として亂れ墜つ

天衣空より下り、身に潤れて妙樂を生ず

日月は常凌の如く、光耀は倍增明なり

世界の諸の火光は、蔚然きに自ら炎熾え

淨水清涼の井は、前後して自然に生ず

中宮の女衆は、怪んで未曾有なりと歎じ

競ひ赴きて飲浴し、皆安樂の想を起す

無量都多天、法を樂んで悉く雲集し

藍毘尼園に於て、林樹の間に遍滿す

【魔王】 マーラ  
スワタス (Marsya  
tan)

【懺悔】 おそるる  
こと。

奇特なる諸の妙花は、時に非ざるに歡樂し  
 凶暴なる衆生の類は、一時に悪心を生ぜり  
 世間の諸の疾病は、瘵さずして自然に除ころ  
 亂鳴せる鳥の禽獸は、恬黙し寂として聲無し  
 萬川は皆流を停め、濁水は悉く澄清なり  
 空中には雲翳無く、天鼓自然に鳴る  
 一切の諸の世間、悉く安隱の樂を得ること  
 猶し荒難國の、忽ち賢明の主を得たるが如し  
 菩薩の生じたまひし所以は、世の衆苦を濟はんが爲なり  
 唯彼魔王の、震動して大いに憂惱す  
 父王は生子を見て、奇特未曾有なりとし  
 素性安重なりと雖も、驚駭して常容を改め  
 二息交胸に起り、一たびは喜び復一たびは懼る  
 夫人は其子の、常道に由つて生れざりしを見るをもて  
 女人の性は怯弱なれば、懺悔して氷炭を懐くがごとし  
 吉凶の相を別たされば、反つて更に憂怖を生ず  
 長宿の諸の母人は、互に亂れて神明を祈る

各くわ常じょうの所しよ事じを請こふ一いつ願ねんくば太子たいしをして安やすかならしめん』ことを  
時ときに彼かの林中りゆうちゆうに、知ち相さうの婆ば羅ら門もん有あり

威ゐ儀ぎに多た聞もんを具ぐし、才さい辯べん高たかく名な稱せうへらる

相さうを見みて心こころ歡くわん喜ぎし、踊う躍やくすること未み曾ぞう有あり

王わうの心こころに驚きやう怖ふせしを知しり、下げに白はくずに眞しん實じつを以もつてす

人ひとの世よ間かんに生なるや、唯ただ殊じゆ勝せうの子こを求もとむるのみ

王わうは今いま滿まん月げつの如ごとし、應まさに大だい歡くわん喜ぎを生しじたまふべし

今いま奇き特とくの子こを生なみたまへり、必かならず宗しゆ族とくを光くわう顯けんせん

安あん心しんして自みづから欣きん慶ぎやうしたまへ、餘あまの疑ぎ慮りよを生しじたまふこと莫なれ

靈れい祥じやうは家か國こくに集あつり、今いまより轉てんた休きゆう盛せうならん

生なぜし所ところの殊じゆ勝せうの子こは、必かならず世よ間かんの救すけたらん

惟ただは此こゝれ上じやう土どの身み、金こん色しき妙めう光くわう明めいなり

是こゝの如ごとき殊じゆ勝せうの相さうは、必かならず等とう正じやう覺かくを成じやうぜん

若もし世よ間かんを習しゆ樂らくせば、必かならず轉てん輪りん王わうと作ならん

普あまく大だい地ぢ主しゆとなり、勇ゆう猛めうに正じやう法ぽうもて治ちせん

四し天てん下げを王わう領りやうし、一いつ切せつの王わうを統とう御ぎすること

猶なほし世よの光くわう明めい、日にち光くわうを最さい勝せうと爲なすが如ごとし

【等正覺】 ラミヤクサムブツダ (Sāmyak sambuddha) 正じやう遍へん知ちともいふ、如ごときは平等びやうとうの正じやう理りを覺かく知ちするに名なく  
【轉輪王】 チヤクヲゾルテイ、サイジヤ (cakravartī) 須しよ彌み四し洲しゆうを統とう領りやうする王

若し山林に處せば、專心に解脱を求め  
實智慧を成就し、普く世間を照さん

譬へば須彌山の、普く諸山の王たり

衆寶は金を最と爲し、衆流は海を最と爲し

諸宿は月を最と爲し、諸明は日を最と爲すが如し

如來の世間に處する、兩足中の最と爲す

淨日は脩く且つ廣く、上下に瞬く長睫あり

瞻矚せば紺青の色あり、明煥すること半月の形のごとし

此相云何が非なる、平等殊勝の目なり

時に王二生に告ぐらく、「若し汝が説く所の如くんば

此の如きの奇特の相は、何の因縁を以ての故に

先王に應ぜずして、乃ち我世に現じたる」

婆羅門、王に白さく、「應に是の如く説くべからず

多聞と智慧と、名稱及び事業と

是の如きの四事は、應に先後を顧みるべからず

物性の所生するや、各因縁に従つて起る

今當に諸の譬を説くべし、王今日く諦に聽きたまへ



【昆求】 アトリグ

【吠陀仙】 吠陀仙の創始者。

【史書羅】 アンギ

【吠陀院】 吠陀の多くの歌

【昆梨訶鉢底】 ア

【薩羅薩】 シユク

【毘羅羅】 サラ

【毘羅羅】 サラ

【毘羅羅】 サラ

【毘羅羅】 サラ

【毘羅羅】 サラ

【毘羅羅】 サラ

【毘羅羅】 サラ

【毘羅羅】 サラ

【毘羅羅】 サラ

【毘羅羅】 サラ

【毘羅羅】 サラ

【毘羅羅】 サラ

【毘羅羅】 サラ

昆求と史書羅と、此二仙人族

久遠世を結縁して、各殊異の子を生ぜり

昆梨訶鉢底と、及與薩羅薩とは

能く帝王論を達りて、先族に従つて來らず

薩羅薩仙人は、經論久しく斷絶せるも

而も婆羅婆を生じ、續いて復經論を明す

現在知見生ずるも、必ずしも先肯に由らず

毘耶婆仙人は、多く諸の經論を造り

本の後植跋彌は、廣く佛章句を纂む

阿底利仙人は、醫方論を撰せず

後生の阿底離は、善能く百病を治す

二生の駒尸仙は、外道論に閑はず

後の伽提那王は、悉く外道の法を解す

甘蔗王の結族は、海潮を制すること能はず

婆伽羅王に至つて、千の王子を生育し

能く大海潮を制して、常限を越えざらしむ

閻那駒仙人は、無師にして禪道を得たり

【駒戸】 タシカ  
 (Kumido) 王にして  
 同族の祖。  
 【伽提那】 イデ  
 イ (Gatana) 日種族の  
 王。  
 【閻那駒】 シヤナ  
 カ (Janaka) 深き  
 知識ありし王。

【阿私陀】 アシタ  
 (Asita) 雪山に隠  
 棲せし老仙人。

凡そ名稱を得る者は、皆自力より生ず  
 或は先に勝れ後に劣り、或は先に劣り後に勝る  
 帝王諸の神仙は、必ずしも本族を承けず  
 是故に諸の世間は、應に先後を顧みるべからず  
 大王今是の如し、應に歡喜心を生じたまふべし  
 心歡喜するを以ての故に、永く疑惑を離れん  
 玉仙人の説を聞いて、歡喜して供養を増す  
 『我今勝子を生じ、應に轉輪の位を紹ぐべし  
 我年已に朽邁せり。出家して梵行を修し  
 聖王子をして、世を捨てて山林に遊ばしむること無からん』  
 時に近處の園中に、苦行仙人有り  
 名けて阿私陀と曰ふ、善く相法を解す  
 來りて玉宮の門に詣り、王に謂ふ、『梵天應じ  
 苦行して正法を樂しむ、此二相俱に現じ  
 梵行の相具足せり』と、時に王大いに歡喜し  
 即ち請うて宮内に入らしめ、恭敬して供養を設く  
 將に内宮の中に入らんとし、唯王子を見んと樂ふ

【安低牒】 アムテ  
イデーソ (Antide  
yah)  
【波戸吒】 プシシ  
ターヤ assitina)

婁女蒙有りと雖も、空閑林に在るが如し

正法の座に安處して、敬尊奉事を加ふ

安低牒王の、波戸吒に奉事するが如し

時に王仙人に白さく、我今大利を得たり

大仙人を勞屈せるに、辱くも來りて我を攝受す

諸有應に爲すべきところ、唯願くば時に教勅せよ

是の如く勸請し已るに、仙人大いに歡喜す

善い哉常勝王、業徳悉く皆備り

愛樂して來求する者に、惠施して正法を崇めしむ

仁智殊勝の族、謙恭善く隨順す

宿は業の妙因を殖ゑ、勝果今に現れぬ

汝當に我の、今や來りし因縁を聽くべし

我日道に従つて來れるに、空中に天の説くを聞く

言はく、王太子を生ぜり、當に正覺道を成すべし」と

并に先に瑠相を見る、今故に此に來到し

釋迦王の、正法幢を建立するを見んと欲す

王仙人の説を聞いて、決定して疑網を離る

【千輪輪】手足の裏に輪相のあること、手足綳纒は手足の指間に水掻きの如き膜のあること、是等は悉く佛三十二相たり。

命じて太子を持し出さしめ、以て仙人に示す  
仙人太子を觀るに、足下の千輪輪  
手足の網纒指、眉間の白毫、跣り  
馬藏隱密の相、容色に炎光の明あり  
見て未曾の想を生じ、涙を流して長歎息す  
王仙人の泣けるを見、子を念じて心戰慄す  
氣結んで心胸に盈ち、驚悸して自ら安んぜず  
覺えず坐より起ち、仙人の足を稽首す  
仙人に白して言さく、「此子の生るるや奇特なり  
容貌極めて端嚴にして、天人と殆ど異らず  
汝は言ふ人中の上なりと、何が故に憂悲を生ぜるや  
短壽子の、我に憂悲を生ずるに非ざらんとするや  
久しく渴して甘露を得、反つて復失ふや  
財寶を失ひ家を喪ひ、國を亡すに非ざらんとするや  
若し勝子の存する有らば、國嗣所寄有り  
我死する時心悦び、安樂に他世に生ぜん  
猶し人の兩目の、一は眠り一は覺むるが如し



秋霜花の、敷くと雖も實無きが如くなること莫れ  
人親族の中に於て、愛深きは子に過ぎたる無し

宜しく時に爲に記説し、我をして蘇息するを得しむよ  
仙人父王の、心に大憂懼を懐けるを知り

即ち大王に告げて言はく、「王今恐怖すること勿れ  
前に已に大王に語る、慎んで自ら疑を生ずること勿れ

今の相は猶し前の如し、魔に異想を懐くべからず  
自ら我年の暮るるを惟うて、悲慨泣歎するのみ

今我臨終の時、此子は應に世に生ずべし  
生を盡さん爲の故に生ぜるも、斯人に遇ふことを得難し

當に聖王の位を捨てて、五欲の境に著せず  
精勤して苦行を修し、閑覺して眞實を得

常に諸の群生の爲に、幽冥の障を滅除し  
世に於て永く熾然し、智慧の日光は明なるべし

衆生は苦海に没し、衆病は聚沫たり  
衰老を巨浪と爲し、死を海の洪濤と爲す

輕き智慧の舟に乗じ、此衆の流難を渡る

【五欲】色聲香味觸の五境

【三昧】 サマーデ  
イ(Samadhi) 靜慮  
と譯す。

智慧もて流水を浜り、淨戒を彼岸と爲す  
三昧は清涼の池、正受は衆の奇鳥ならん  
此の如き甚だ深廣なる、正法の大河を  
渴愛せる諸の群生は、之を飲んで以て蘇息せん  
五欲の境に染著し、衆の苦に驅迫せられ  
生死の曠野に迷ひ、歸趣するところを知る莫し  
菩薩は世間に留りて、爲に解脱の道を通ぜん  
世間の貪欲の火もて、境界の薪熾然たり  
大悲の雲を興發し、法雨雨りて滅せし  
擬闇は門の重扇、貪欲は關鑰と爲り  
諸の群生を閉塞す、出要解脱の門  
金剛智慧の鑿もて、恩愛の逆證を抜く  
愚癡の網は自ら纏ひ、窮苦は所依無し  
法王は世間に出でて、能く衆生の縛を解く  
王此子を以て、自ら憂悲の患を生ずること莫れ  
應に彼衆生の、欲に著して正法に違するを變ふべし  
我今老いて死壞し、聖の功德を遠離せん

諸の禪定を得と雖も、其利を獲ず

此菩薩の所に於て、竟に正法を聞かずんば

身壞し命終の後、必ず三難天に生ぜん」と

王及び諸の眷屬は、彼仙人の説を聞いて

其自らの變數なるを知り、恐怖悉く以て除く

此奇特の子を生み、我心大安を得たり

出家して世榮を捨て、仙人の道を修習せば

遂に國位を紹がず、復我をして悦ばざらしめん

爾時、彼仙人、王に向つて眞實を説けり

「必ず王の所慮の如く、當に正覺道を成すべし」と

王眷屬中に於て、衆の心を安慰し已つて

自ら己の神力を以て、虚に騰り遠く逝けり

爾時、白淨王、子の奇特の相を見

又阿私陀の、決定眞實の説を聞いて

子に於て心に敬重し、珍護し兼ねて常念す

天下に大敬し、牢獄を悉く解脫せしむ

世人の生子の法の、宜しきに隨つて事を取捨するは

【沙門】 シユラマ  
ナ(Sramana)勤息  
と譯す、諸善法を  
勤修し、諸惡法を  
止息するもの意  
【婆羅門】 ブラフ  
マナ(Brahmana)  
淨行と譯す、僧侶  
の階級。  
【囑施】 施すこと

【摩醯首羅】 マヘ  
ーシユヅラ(Mahe  
svara)自在天のこ  
と。  
【六面子】 サナム  
カ(Sannaka)軍  
神カールツチケ  
カのこと。

諸經の方論に依つて、一切悉く皆爲せり  
生子滿十日、安隱にして心已に泰し  
普く諸の天神を祠り、廣く有道に施す  
沙門婆羅門は、呪願して吉福を祈り

諸の群臣、及び國中の貧乏に囑施し  
村城の婬女衆に、牛馬象財錢を  
各彼所須に隨つて、一切皆給與す

トひて良時を擇選し、子を選して本宮に還る  
二飯白淨牙、七寶もて莊嚴せる輿  
雜色の珠絞絡し、明焰極めて光澤なり

夫人太子を抱いて、周匝して天神を禮し  
然る後寶輿に昇り、妖女衆隨侍す

王諸の臣民と、一切俱に導從す  
猶し天帝釋の、諸天衆に圍遶せらるるが如し

摩醯首羅の、忽ち六面子を生ずれば  
種種の衆具を設け、供給及び請福するが如し

今王太子を生じ、衆具を設くるも亦然り



【毘沙門天】

ツイ  
シユマナ (Vishnu)

多聞と譯す、四天王の一。

【毘羅鳩婆】

ナラ  
クローツラ (Vishvakarma)

高神クエー  
ラの子。

【迦毘羅衛】

カビ  
ラツスツ (Kapilavastu)

釋尊誕生の  
故城。

【處宮品】

宮廷に  
ある太子が生育、  
結婚等の事を叙す

毘沙門天王の、那羅鳩婆を生じ

一切の諸の天衆、皆悉く大歡喜せり

王の今太子を生ずるに、迦毘羅衛國の

一切諸の人民の、歡喜することも亦是の如し

處宮品第二

時に白淨王の家、聖子を生ずるを以ての故に  
親族名子も、群臣悉く忠良なり

象馬寶車輿、國財七寶の器

日日轉た増盛し、應に隨つて集生す

無量の諸の伏藏、自然に地より出づ

清淨なる雪山中の、凶狂なる群白象は

呼ばざるに自然に至り、御せざるに自ら調伏す

種種の雜色なる馬の、形體極めて端嚴なる

朱髻纖長の尾、超騰して戲きこと飛ぶが如く

又野の生ずる所、時に應じて自然に至る

【雷霆】 かみなり

【四聖種】 佛道を修行する前に身器を清浄ならしむるため、衣服、飲食、臥具の三種に對し少欲知足し、煩惱を斷じ聖道を修せんと樂ふこと。

純ら色の調へる善牛の、肥壯し开端正なる  
平歩し淳香なる乳あるが、時に應じて悉く雲集す  
怨憎せる者は心平かに、中平なるは益淳厚なり  
素より篤きは親密を増し、亂逆は悉く消除す  
微風隨つて時に雨らし、雷霆は震裂せず  
種殖に時を待たず、實を收むるに倍豊積す  
五穀に鮮香の美あり、輕軟にして消化し易し  
諸有の懷孕者は、身安く體和適せり  
四聖種を受けしを除きて、諸餘の世間人は  
資生各自ら知り、他求の想有ること無し  
慢無く慳嫉無く、亦慈善の心無し  
一切の諸の士女、女は劫諸人に同じ  
天廟諸の寺舎、園林井泉池

一切天物の如く、時に應じて自然に生ず  
境に合せば飢餓無く、刀杖疾疫息む  
國中の諸の人民、親族相敬愛し  
法愛相娛樂し、染汚の欲を生ぜず

【摩窶】マヌ(Mina)人類の王。

【日光】アールディトヤスタ(Ardiya stina)

【悉達羅他】サルゾールタシツダ(Sarvathasiddha)一切義成と譯す。

【大愛瞿曇彌】マハーフラジヤールバテイ(Malapaya)摩耶夫人の妹

義を以て財物を求め、貪利の心有ること無し  
 法の爲に恵施を行ひ、反報を求むるの想無し  
 四の梵行を修習し、悲害心を滅除す  
 過去の摩窶王は、日光太子を生じ  
 擧國吉祥を蒙り、衆惡一時に息む  
 今王の太子を生むや、其徳も亦復爾なり  
 衆徳を備ふるの義を以て、悉達羅他と名く  
 時に摩耶夫人は、其所生の子を見るに  
 端正なること天童の如く、衆美悉く備足せるをもて  
 過喜して自ら勝へず、命終して天上に生ぜり  
 大愛瞿曇彌は、太子天童の  
 徳貌は世に奇挺なるも、既に生母の命終せるを見て  
 愛育すること其子の如く、子の敬ぶも亦母の如し  
 猶し日月火光の、微より照し漸く廣きがごとし  
 太子の長すること日に新に、徳貌も亦復爾なり  
 無價の梅檀香と、闍浮檀名寶と  
 護身の神仙薬と、瓔珞とを以て身を莊嚴す

【耶輸陀羅】(Yashodhara) 名聞と譯す  
拘利城主善覺長者の女。

【舍那鳩摩羅】(Sakunamalā) 梵天の心より生れし四子の隨一。

【逍遙】はるかなるなり。

附庸せる諸の隣國は、王の太子を生ぜるを聞いて諸の珍異、牛羊鹿馬車寶器莊嚴の具を奉獻し、太子の心を助悦す。諸の嚴飾、嬰童玩好の物有り、雖も太子の性安重にして、形少きにも心を宿し、心は高勝の境に栖み、榮華に染まらず。諸の術藝を修學し、一たび聞けば師匠に超ゆ。父王聰達、深慮の世表に踰ゆるを見、廣く名豪族、風教禮義の門を訪れしに、容姿端正の女あり、耶輸陀羅と名く。應に太子の妃に聘すべく、誘導して其心に留む。太子は志高遠にして、徳の盛なること清明に貌る。猶し梵天の長子、舍那鳩摩羅のごとし。賢妃の美き容貌、窈窕淑妙なる姿。壤艶なること天后の若く、同處して日夜に歡ぶ。爲に清淨の宮を立つ、安麗極めて莊嚴なり。高く峙ちて虚空に在り、逍遙なること秋雲の若し。



【檀提婆】ケンダ  
ルゾ (Kandharva)  
摩香と譯す、帝釋  
の俗樂神なり。

【月火】ツーム  
ソム(oma)神に捧げ  
しるる一種の酒。

温涼四時に適し、隨時に普居を擇ぶ  
妓女衆は圓遊し、天の樂音を奏合し  
穢聲色に隣して

厭世の想を生ぜしむること勿らしむ。天の魁提婆の

自然の寶宮殿に、樂女天音を奏で

聲色の心目を耀かすが如し。菩薩の高宮に處する

音樂も亦是の如し、女王は太子の爲に

靜居して純徳を修し、仁慈にして正法もて化す

賢に觀み悪女に遠かり、心を恩愛に染めず

欲に於て毒想を起し、情を攝し諸根を捺す

輕躁の意を滅除して、和顏善く訟を聽き

慈教厭衆の心を、諸の外道に宣化し

一門の諍論の術を闢じ、教學濟世方び

萬民の安樂を得ること、我子を安ならしむるが如し

萬民亦是の如く、火に事へ諸神を奉ず

又手して月光を飲み、恆水に身を沐浴し

法水もて其心に澡ぎ、福を祈るも已に存するに非ず

唯子及び萬民にあり、愛言は義無きに非ず  
義言は不愛に非ず、愛言は不實に非ず  
實言は不愛に非ず、慚愧有るを以ての故に  
如實に説くこと能はざるは、愛不愛の事に於てす  
貪恚の想に依らずして、志は寂黙に存す  
平正にして諍訟を止め、祠大會を以てせず  
斷事の福に勝れ、彼多求の衆を見るに  
豐施して其望に過ぐ、心に戰爭の想無く  
徳を以て怨敵を降す、一を調べて七を護り  
しを離れて五を防制し、三を得て三を覺了す  
二を知り二を捨し、情を求めて其罪を得  
死に應りて仁恕を垂れ、蠱惡の言を加へず  
軟語して教勅し、務めて施すに財物を以てす  
資生の路を指授し、神仙道を受學す  
怨恚の心を滅除し、名徳普く流聞す  
世間は永く消亡す、主匠は明徳を修し  
率土皆承習し、人心安靜なる如くんば

【羅睺羅】ラーフ  
ラ (Rahula) 覆障と  
譯す

四體の諸根從ふ

時に白淨太子の、賢妃耶輸陀

年並に漸く長大し、羅睺羅を孕生す

白淨王自ら念すらく、太子已に子を生む

歷世相續耐し、正化終極する無けん

太子既に子を生む、子を受すること我と同じく

復出家を慮らざらん、但當に力めて善を修すべし

我今心大いに安く、生天の樂に異なること無し

猶し劫初の時の如し、值王所住の道有り

清淨の業を愛行し、祠祀も生を害せず

熾然として勝業を修し、王勝れ梵行勝れ

宗族財寶勝れ、勇健伎藝勝る

明顯に世間を照すこと、日の千光の耀くが如し

王者たる所以は、將に其子を顯さんとするにあり

子を顯すは宗族の爲、放を榮すは名聞を以てなり

名高ければ生天を得、生天して樂を爲すこと已に  
已に樂しめば智慧増し、道を悟り正法を弘む

先勝名聞の所に、衆の妙道を受行す

唯願くば太子をして、子を愛し家を捨てざらしめん

一切諸國の王の、生子の年尙少きに

王の國土をして、其心の放逸なるを慮らしめず

情を繼にし世樂に著し、王種を紹ぐこと能はざるに

今王の太子を生むや、心に隨つて五欲を恣にす

唯願くば世樂を樂み、學道せしむるを欲せず

過去の菩薩王、其道深固なりと雖も

要す世の榮樂を習へり。生子宗嗣を繼ぎて

然る後仙林に入り、寂默の道を修行せん

厭患品第三

【厭患品】太子が  
現世を厭患するに  
至りし緣由、所謂  
四門遊觀のことを  
叙す。

外に諸の園林、流泉清涼の池有り

衆雜の華果樹は、行列して玄蔭を垂る

異類の諸の奇鳥は、奮飛して其中に戯る

水陸の四種の花は、炎色あつて妙香を流す



【羽儀】儀表とな  
る意

伎女因りて奏樂し、絃歌して太子に告ぐ  
 太子音樂を聞いて、彼園林を歎美し  
 内に甚た踴悅を懷き、出でて遊觀せんことを樂み  
 猶し繋がれし狂象の、常に園廣野を慕ふが如し  
 父王太子の、彼園に出でて遊ばんと樂ふを聞き  
 即ち諸の群臣に勅して、嚴飾して羽儀を備へ  
 正王路を平治し、并に諸の園域  
 老耄形骸の類、癯劣貧窮の苦を除き  
 少き樂子、見て厭惡の心を起さしむること無からんを  
 莊嚴悉く備はりたりて、啓請し求めて拜辭す  
 王太子の至れるを見て、頭を摩で顔色を瞻るに  
 悲喜の情交結ず、口に許し心に留む  
 兼寶軒飾の車に、結べらる麗麗平流す  
 賢良なる善き術藝、年少なる美しき姿容あるが  
 妙淨鮮花の服もて、同卓して執御を爲す  
 御巷に衆華を散じ、寶網路傍を蔽ふ  
 垣樹道側に対ひ、寶蓋を以て莊嚴せら

【瞻陽】みはつて  
みること。

【六畜】馬牛羊犬  
豕鶏のこと。

繪蓋と諸の幃幡とは、繽紛として風に隨つて揚り  
觀る者長路を挟んで、身を側てて目連光す  
瞻陽して瞬がす、青蓮花の並ぶが如し  
臣民悉く扈從し、星の宿王に隨ふが如し  
異口同聲に歎じ、稱慶して世に希有なりと  
貴賤及び貧富、長幼及び中年  
悉く皆恭敬して禮し、唯願ふ吉祥ならしめよと  
郭邑及び田里、太子の當に出づべきを聞き  
尊卑辭を待たず、寤寐相告げず  
六畜收むるに違あらず、錢財斂するに及ばず  
門戸は容れざるに閉ぢ、奔馳して路傍に走り  
樓閣堤塘樹、窓牖衢巷の間  
身を側てて容目を競へ、瞻陽して觀て厭くこと無し  
高觀するは地に投ぜんかと謂ひ、歩者は虚に乗ぜんかと謂ふ  
意専らにして自ら覺らず、形と神と變ながら飛ぶが若し  
虔虔として恭しく形觀し、放逸の心を生ぜず  
圓體と肺と支節と、色は蓮花の敷くが若し

今出て園林に處する、顧うて聖法仙を成ぜん  
太子修塗を見るに、莊嚴あり人衆を従ふ

服乘は鮮かに光澤あり、欣然として心に歡悅す

國人太子を瞻るに、嚴儀勝羽の從へるあり

亦諸の天衆の、天太子の生ずるを見るが如し

時に淨居天王、忽然として道側に在り

衰老の相に變形し、厭離の心を生ぜんと勸む

太子老人を見、驚怪して御者に問はく

「此は是れ何等の人ぞ、頭白くして背偻み

日冥み身戰き搖き、杖に任りて癡歩す

是身卒に變ずと爲すや、受性自ら雨りと爲すや」

御者心に躊躇し、敢て實を以て答へず

淨居神力を加へて其をして眞言を表せしむらく

「色衰し氣虛微たり、憂多くして歡樂少く

喜び忘れ諸根は羸る、是を衰老の相と名く

此は本嬰兒たり、母の乳に長養せられ

童子に及んで嬉遊し、端正なるときは五欲を恣にし

年逝いて形枯朽し、今老の爲に壞せらるる』  
太子長歎息して、御者に問うて言はく

『但彼のみ獨り衰老するや、五等も亦當に然るべきや、』

御者又答へて言さく、尊も亦此分有らん

時移れば形は白ら變じ、必ず至らんこと疑ふ所無けん

少壯は老せざる無く、舉世知つて求む

菩薩は久しく、清淨智慧の業を修習し

廣く諸の徳木を殖ゑ、願は今に果華せり

衰老の苦を説くを聞いて、戰慄し身毛豎つ

雷霆霹靂の聲に、群獸怖れて奔走するがごとし

菩薩も亦是の如く、震怖して長く嘯息す

心に老苦を繫け、額頭して瞻矚す

此衰老の苦を念せば、世人何をか愛樂せん

老相の壞するところ、觸類と擇ぶところ無し

壯色力有りと雖も、一として遷變せざる無し

目前に證相を見る、如何が厭離せざらん

菩薩御者に謂く、『速に車を廻らして還るべし



念念に衰老至る、園林も何ぞ歡ぶに足らん。

命を受けて即ち風馳し、輪を飛ばして本宮に旋る

心朽暮の境に存すれば、空しく塚間に歸するが如し

事に觸るるも情を留めず、所居暫くも安きこと無し

王子の悦ばざるを聞いて、勸めて重ねて出遊せしむ

即ち諸の群臣に勅して、莊嚴せること復前に譬

天復病人に化し、命を守つて路傍に在り

身瘦せて腹大なり、呼吸長く喘息せり

手脚は擧きて精燥し、悲泣して呻吟す

太子神昏に同はく、此れ復何等の人ぞ

對へてははく、是は病者なり四大俱に錯亂せり

藥劣堪ふる所無く、轉側して人を恃仰す

太子所を聞いて、即ち哀愍の心を生じ

問はく、唯此人のみ病むや、餘も亦當に復亂ふべきぞ

對へてははく、此世間、一切俱に亦然り

身有れば必ず患有り、愚癡は樂歡を樂ふ

太子其説を聞いて、即ち大恐怖を生ず

【四大】地水火風  
をいふ、身體の構  
成要素なり

身心悉く戰動し、譬へば揚波月の如し  
 斯大苦器に處して、云何が能く自ら安らかなる  
 嗚呼世間の人は愚にして、癡闇の障に惑はされ  
 病賊の至る期無きに、喜樂の心を生ず  
 是に於て車を廻らして還り、愁憂もて病苦を念ず  
 人の打害を被り、捲身して杖の至るを待つが如し  
 閑宮に靜息して、専ら反世の樂を求む  
 王復子の還るを聞いて、勅して何の因縁なるかを問ふ  
 對へて曰はく、「病人を見たり」と、王怖るること身を失へるが如し  
 深く路を治むる者を責め、心結びて口に言はず  
 復伎女衆を増して、音樂は前に倍勝せり  
 此を以て視聽を悅ばしめ、俗を樂み家を厭はざらしめんとし  
 晝夜に聲色を進むるも、其心未だ始より歡ばず  
 王自ら出でて遊歴し、更に勝妙の園を求め  
 諸の姪女を簡擇す、美艷極恣の顔  
 詔點もて能く奉事し、容媚能く人を惑はす  
 王御道を増修し、諸の不淨を防制し

并びに善御者に勅して、瞻察し路を擇んで行かしむ  
時に彼淨居天、復化して死人と爲り

四人共に輿を持し、菩薩の前に現す

餘人悉く覺らず、菩薩と御者とのみ見る

問はく、「此れ何等の輿、幡花雜莊嚴せる」  
從者悉く憂感し、髮を散じ號哭して隨ふ

天神御者をして、對へて曰はしむ、「死人たり

諸根壞すれば命斷じ、心散じ意識離る

神逝き形乾燥し、挺直せること枯木の如し

親戚諸の朋友、恩愛素より纏縮たるも

今悉く喜び見ず、遠く空しく塚間に乘つ

太子死の聲を聞いて、悲痛の心交結ぶ

問はく、「唯此人のみ死するや、天下亦俱に然るや」  
對へて曰はく、「普く皆爾り、夫れ始あれば必ず終有り

長幼及び中年、身有れば壞せざる莫し

太子心に驚怛し、身を車軾の前に垂れ

息殆ど絶えて歎ずらく、「世人一に何ぞ誤れる

【挺直】まつすぐ  
にゆきいづること

【雜陀園】 ナンダ  
ワナ (Nanda Vana)  
須彌山の北にある  
因陀羅の森なり。

【離欲品】 諸の好  
女衆或は友優陀夷  
等の五欲を勧むる  
も悉く却くるを叙  
す。

公に身の磨滅を見るに、尙放逸を生ずるがごとし

心は枯木石に非ざるに、曾て無常を慮らず

即ち勅すらく、「車を廻らして還れ、復遊戯の時に非ず

命絶え死するに期無し、如何が心を縦にして遊ばんや」

御者王勅を奉すれば、畏怖して敢て旋らさず

正しく御して疾く驅馳し、徑に彼園に往至す

林流は清淨に満ち、嘉木悉く敷榮せり

靈禽雜奇獸は、飛走し欣び和鳴す

光耀耳目を悦ばすこと、猶し天の雜陀園のごとし

離欲品第四

太子園林に入れば、衆女來つて奉迎し

並に希遇の想を生じ、競ひ媚びて幽誠を進め

各伎に恣態を盡し、供に侍し所宜に隨ふ

或は手足を執る有り、或は遍く其身を摩す

或は復對つて言笑し、或は憂戚の容を現じ



【優陀夷】 ウダト

【孫陀利】 スンダ  
リー (Sundarī)

以て太子を悦ばしめ、愛樂の心を生ぜしむるを見る

衆女太子を見るに、光顔の狀天身のごとく

諸の飾好を假らずして、素體莊嚴に踰えたり

一切皆瞻仰し、謂く二月天子來る」と

種種に方便を設くるも、菩薩の心を動かさず

更互に相顧視し、愧を抱き寂として言無し

婆羅門子有り、名けて優陀夷と曰ふ

諸の姪女に謂つて言はく、汝等は悉く端正

聰明にして伎術多し、色力亦常ならず

兼ねて諸の世間の、隱秘隨欲の方を解す

容色は世に希有なり。狀王女の形の如し

天も見ては妃后を捨て、神仙も之が爲に傾かん

如何が人王の子、其情に感ずること能はざらん

今此王太子は、心を持つこと堅固にして

清淨の徳純ら備ると雖も、女人の力には勝たず

古昔孫陀利は、能く大仙人を壞し

愛欲を習はしめ、是を以て其頂を踏お

【長善行羅婆】 マ  
ンターラガウタマ  
(Manthahaguntam  
ハ)

【勝渠】 リンヤン  
ユリンガ (Rasyar  
inra)

【毘戸婆】 ギジュ  
ブリーミトラ (Bive  
mitra) 利利種なる  
も苦行により婆羅  
門族となりし大仙

【眇昧】 斜に見る  
こと。

長善行羅婆は、亦天后に壞せらる  
勝渠仙人の子は、習欲して随つて沿流し

毘戸婆梵仙は、修道十千歳なるも

深く天后に著し、一日頓に破壊す

彼諸の美女の如きは、力諸の梵行に勝る

況んや汝等の伎術、王子を感ぜしむる能はずば

更に當に勤めて方便もて、王嗣をして絶えしむること勿るべし

女人の性は賤しと雖も、尊榮なるは勝天に隨はん

何んが其術を盡して、彼をして染心を生ぜしめざる一

爾時に姪女衆、慶んで優陀の説を聞き

其踊悦の心を増すこと、良馬に鞭策するが如し

往いて太子の前に到り、各種種の術を進め

歌舞し或は言笑し、眉を揚げ白齒を露す

美目して相眇昧し、輕衣に素身を現じ

妖搖して徐歩し、詐親して漸く習近す

情欲は其心に實り、兼ねて大王の旨を奉ず  
慢りに形嫫れ隱陋に、其慚愧の情を忘る

【傲然】 おごりて人を見下ぐる貌。

【帝釋】 釋提桓因  
即ちインドラデー  
ゼーन्द्रラ(Garhi  
devinim) 能天主  
と譯す。

太子心堅固なれば、傲然として容を改めず  
猶し大龍象の、群象衆に圍遶せらるるが如し  
其心を亂すこと能はず、衆に處するも閑居せるが如し  
猶し天帝釋の、諸の天女に圍遶せらるるが如く  
太子の園林に在りて、圍遶せらるるも亦是の如し  
或は爲に衣服を整へ、或は爲に手足を洗ふ  
或は香を以て身に塗り、或は華を以て嚴飾し  
或は爲に瓔珞を貫き、或は身を扶抱する有り  
或は爲に枕席を安んじ、或は身を傾けて密語す  
或は世俗の調戯を、或は衆欲の事を説く  
或は諸の欲形を作り、以て其心を動かさんと規る  
菩薩は心清淨なれば、堅固にして轉すべきこと難し  
諸の婦女の説を聞いて、憂へず亦喜ばず  
倍厭思惟を生じ、此を敬して奇怪と爲す  
「始めて諸の女人の、欲心の盛なることは是の如きを知る  
少壯の色は、俄頃(いつしき)に老死に壞するを知らず  
哀むべき哉此れ大惑なり、愚癡其心を覆ふ

當に老病死を思ふべし、晝夜勤めて勸勵せよ  
鋒刃其頭に臨む、如何が猶嬉笑せん

他の老病死を見て、自ら觀察することを知らず

是は即ち泥木の人、當に何の心にか慮有るべきや

空野の雙樹の、華葉俱に茂盛せるが如く

一は已に斬伐せらるるも、第二は怖るることを知らず

此等の諸の人輩の、無心なるも亦是の如し

爾時に優陀夷、來りて太子の所に至りて

宴默禪思し、心に五欲の想無きを見て

即ち太子に白して言さく『大王先に勅せらる

『子の爲に良友と作れ』と、今當に誠言を奉すべし

朋友に三種有り、能く不饒益を除く

人の饒益の事を成せんには、難に遭ふも遺棄せじ

我既に善友と名く、丈夫の義を棄捨せん

言うて懐ふ所を盡さざれば、何をか名けて三益と爲さん

今故に眞言を説き、以て我丹誠を表さん

年盛時に在り、容色充備を得たるに

女人を重んぜざるは、斯れ勝人の體に非ず

正使實心無からしむとも、宜しく應に方便もて納むべし

當に軟下心を生ずべくんば、隨順して其意を取れ

愛欲の情慢を増す、女人に過ぎたるは無し

且令心背くと雖も、法は應に方便もて隨ふべし

女に順ふは心に樂みを爲す、順ずるは莊嚴具たり

若し人順を離れば、樹に花果の無きが如く

何が故に應に隨順すべきや、其事を攝受するが故に

已に難得の境を得たり、輕易の想を起すこと勿れ

欲は最も第一たり、天樂忘ること能はず

帝釋すら尚、瞿曇個人の妻と私通す

阿伽陀仙人は、長夜に苦行を修するも

以て天后を求めしが爲に、遂に願を果さず

婆羅墮仙人、及與月天子

婆羅舍仙人、迦賓闍羅

是の如きの比衆多く、悉く女人の爲に壞せらる

況みや今は自らの境界、娛樂すること能はざらんや

【阿伽陀】 アガス  
テイー (Agasthi) 教

養ありし仙人、梨  
俱吠陀讚歌のある  
ものを作りし人。

【婆羅墮】 バラド  
ブーシヤ (Bharad  
Vajra)

【婆羅舍】 バラー  
シヤラ (Parashara)

【迦賓闍羅】 カビ  
ムツヤラーダ (Ka  
pinjalata)



宿世に徳本を殖ゑて、此妙業具を得たり

世間皆樂著し、心反つて珍ならず一

爾時に王太子、友優陀夷の

甜辭利口の辯もて、善く世間の相を説けるを聞き

答へて言はく「優陀夷、汝が誠心もて説けるに感ずるも

我今當に汝に語るべし、且く復心に留めて聽け

妙境界に薄からず、亦世人の樂を知るも

但無常相を見る、故に患累の心を生ずるのみ

若し此法常に存し、老病死の苦無くんば

我も亦應に受樂すべく、終に厭離の心無けん

若し諸の女色をして、竟に至るも衰變無からしむば

愛欲は過ぎたりと雖も、猶人情を留むべし

人に老病死有り、彼應に自ら樂しまざるべし

何に況んや他人に於て、而も染著の心を生ぜんや

非常なる五欲の境は、自身も俱に亦然り

而も愛樂の心を生ずるは、此れ則ち禽獸に同じ

汝が引く所の諸仙は、五欲に習著する者

彼は即ち厭患すべし、習欲の故に磨滅すればなり  
又彼勝士、五欲の境に樂著せりと稱するも  
亦復同じく磨滅せん、當に知るべし彼れ勝るるに非ざるを  
若し假の方便にして、隨順習近するものと言はば  
習は則ち眞の染著なり、何を名けてか方便と爲さん  
虚誑と偽の隨順と、是事我は爲さず  
眞實の隨順と、是れ即ち非法と爲す  
此心裁抑し難く、事に隨つて即ち習を生ず  
著は即ち過を見ず、如何が方便もて隨はん  
處に順じて心乖く、此理を我は見ず  
是の如きの老病死は、大苦の積聚なり  
我として其中に墜せしむるは、此れ知識の説に非ず  
嗚呼優陀夷、眞に大肝膽たり  
生老病死の患、此苦甚だ畏るべし  
眼見悉く朽壞せるに、而も猶樂を追逐す  
今我停劣に至り、其心亦狭少なり  
老病死を思惟するに、卒に至るを預め期せず

【出城品】 四門遊  
觀の結果抱きし厭  
離の心の遂に決し  
て出城して道を求  
むるを明す。

晝夜を睡眠に忘る、何に由つてか五欲を習せん  
老病死は熾然なり、決定して至ること疑無けん  
猶憂感を知らざるは、眞に木石心たり』  
太子優陀の爲に、種種に巧方便し  
欲の深患たり、日暮に至るを覺らざるを説く  
時に、諸の姪女衆の、伎樂莊嚴の具  
一切、悉く用無く、慚愧して還つて城に入る  
太子園林を見るに、莊嚴、悉く休廢し  
伎女は、盡く還歸し、其處、盡く虚寂なり  
非常の想を倍増し、俛仰して本宮に還る  
父王太子の、心に五欲を絶せるを聞き  
極めて大憂苦を生ずること、利子の心を貫くが如し  
即ち、諸の群臣を召し、問はく、『何の方をか設けんと欲する』と  
咸く言はく、『五欲は、能く其心を留むる所に非ず』と

出城品第五

王復種種の、勝妙の五欲の具を増し

晝夜娛樂を以て、太子の心を悦ばしんと冀ふ

太子深く厭離し、了に愛樂の情無し

但生死の苦を思ふこと、箭を被れる獅子の如し

王諸の大匠、貴族名子弟の

年少にして勝れたる姿顔の、聰慧なるをして禮儀を執り

晝夜同じく遊止し、以て太子の心を取らしむ

是の如くすること未だ舞時ならずして、王に啓して復出遊す

駿足の馬に服乘し、樂寶の具もて莊嚴せり

諸の貴族子と與に、圍遶して俱に樂を出づ

譬に四種華の、日照れば悉く開敷するが如し

太子は神景に耀き、行從悉く光を蒙る

城を出でて園林に遊ぶに、餘路は廣く且平なり

樹木花草は茂り、心樂み遊に歸るを忘る

路傍に盲人を見るに、壤を墾し諸蟲を殺す

其心に悲憫を生じ、痛むこと心を刺貫するに踰えたり

又彼農夫を見るに、勤苦し形は枯悴し

蓬髮して汗を流し、塵土は其身を塗す

耕牛も亦疲困し、舌を吐いて急喘す

太子は性慈悲なれば、極めて憐愍の心を生じ

慨然として長歎を興し、身を降して地に委ねて坐し

此衆の苦を觀察し、生滅の法を思惟すらく

「嗚呼世間の世間、愚癡にして能く覺る莫し」と

諸の人衆を安慰して、各處に隨つて坐せしめ

自らは閻浮樹に蔭して、端坐して正思惟し

諸の生死の、起滅無常變を觀察するに

心定り安んじて動かす、五欲の廓雲消え

有覺亦有觀、初めて無漏禪に入り

欲を離れ喜樂を生じ、三摩提を正受す

世間は甚だ辛苦なり、老病死の壞する所

終身大苦を受くるも、而も自ら覺知せず

他の老病死を厭ふ、此れ則ち大患と爲す

我今勝法を求む、應に世間に同じて

自ら老病死を嬰るに、而も反つて他人を惡むべからず

【初無漏禪】 プラ  
タムドギーナ、  
アナーシユラプ  
ラカーラ (Pāṭha  
nani-dhyana - ana  
sraṇṇakāra)。  
【三摩提】 サマー  
テイ (Samādhi)  
靜慮と譯す。



是の如きは眞實の觀なり、少壯の色力壽は  
 新舊にして暫くも停らず、終に磨滅の法に歸せん  
 喜ばず亦憂へず、疑はず亦亂れず  
 眠らず欲に著せず、壞せず彼を嫌はず  
 寂靜にして諸蓋を離れ、慧光轉た増明す  
 爾時に淨居天、化して比丘の形と爲り  
 來りて太子の所に詣り、太子敬ひ起つて迎ふ  
 問うて言はく、「汝何人を、答へて言はく、「是は沙門なり  
 老病死を畏厭すれば、出家して解脱を求むるなり  
 衆生の老病死は、變壞暫くも停ること無し  
 故に我常樂を求む、無減亦無生  
 怨親平等の心もて、財色を務めず  
 安んずる所は唯山林、空寂なれば營む所無し  
 摩想已に息み、蕭條として空閑に倚る  
 精進は擇ぶ所無し、乞求以て身を支ふ」  
 即ち太子の前に於て、轉擧し虚に騰つて逝く  
 太子心に歡喜して、唯過去佛を念ずらく

【蕭條】ものさび  
 しきこと。

『此威儀を建立せるに、遺像を今に見る

端坐正思惟して、即ち正法念を得ん

當に何の方便を作してか、心を遂げ長く出家すべき』

情を斂め諸根を抑へ、徐ろに起ち還つて城に入る

眷屬悉く隨從し、謂く一止つて遠く逝かざれ」と

内密に惡念を興し、方に世表に超えんと欲し

形は路に隨つて歸ると雖も、心は實に山林に留る

猶し繋げる狂象の、常に曠野に遊ばんと念するが如し

太子時に城に入るに、士女は路を挾んで迎へ

老者は願うて子爲らんとし、少きは願うて夫妻爲らんとし

或は願うて兄弟、諸親内眷屬爲らんとし

若し當に所願に従ふべくんば、諸の集れる希望を斷すべしと

太子心に歡喜し、忽ち斷集の聲を聞き

若し當に所願に従ふべくんば、斯願要す當に成すべしと

深く斷集の樂みを思ひ、涅槃の心を增長せり

身は金山峰の如く、膂臂は象手の如し

其音は春雷の若く、紺眼は牛王に譬ふ

無盡の法を心と爲し、面は満月の光の如し

師子王は遊歩し、徐に本宮に入る

猶し帝釋子の如し、心散ひ形亦恭し

往いて父王の所に詣り、稽首して和安を問ふ

并びに生死の畏を啓べ、哀請して出家を求む

一切諸の世間は、合會せば要す別離す

是故に願うて出家し、眞解腕を求めんと欲す

父王出家と聞いて、心即ち大いに戦き懼る

猶し大狂象の、小樹枝と動搖するが如し

前んで太子の手を執り、涙を流して告げて言はく

「且く此所説を止めよ、未だ是れ依法の時に非ず

少壯には心動搖し、行法多く過を生ず

奇特なる五欲の境を、心に尙未だ厭離せず

出家して苦行を修するも、未だ心を決定すること能はず

空閑曠野の中には、其心未だ寂滅ならず

汝心に法を樂むと雖も、未だ我是れ時なるが若くならず

汝應に國事を領し、我をして先づ出家せしむべし

父を棄てて宗嗣を絶つ、此れ則ち非法たり  
當に出家の心を息めて、世間の法を受習すべし  
安樂に善名聞えて、然る後出家すべし

太子恭しく滯辭して、復父王に啓さく

「惟四事を保つことを爲さば、當に出家の心を息むべし  
子の命保つて常に存し、無病にして衰老せず  
衆具損滅せずんば、命を奉じて出家を停めん」

父王太子に告ぐらく、「汝此言を説くこと勿れ

此の如きの四事は、誰か能く保つて無からしめんや  
汝此四願を求むるも、正しく人の爲に笑はる

且く出家の心を停めて、五欲に服習せよ  
太子復王に啓さく、「四願保つべからずんば

應に子の出家を聽すべし、願くば留難を爲さざれ  
子焼を被れる舎に在り、如何が出づるを聽さざらん

分析は常理たり、孰か能く聽すを求めざらん  
脱するも當に自ら磨滅すべし、法を以て離るるには如かず

若し法を以て離れずんば、死至るも孰か能く持せん

父王子の心の、決定して轉すべからざるを知り  
「但當に力を盡して留むべし、何ぞ復多言するを須ひん」と  
更に諸の妹女の、上妙なる五欲の樂みを増し  
晝夜苦んで防衛し、要す出家せざらしむ  
國中の諸の群臣、來りて太子の所に詣り  
廣く諸の禮律を引き、勸めて王命に順はしむ  
太子父王の、悲んで感泣し流涙するを見て  
且く木宮の中に還り、端坐し黙して思惟す  
宮中の諸の婦女は、親近し圍遶して侍す  
伺候して顔色を瞻るに、矚目して暫くも瞬がず  
猶し秋林の鹿の、彼獵師を端視するが若し  
太子の正しき容貌は、猶し眞金山の若く  
伎女共に瞻察し、聽教して音顏を高擧げ  
敬ひ畏れて其心を察すること、猶し彼林中の鹿のごとし  
漸く日に日暮に至る  
太子晝夜に處せるに、光明甚だ輝耀たり  
日の須臾を照すが如く、七寶の座に坐し



薰するに妙梅檀を以てし、姪女樂園造せり  
捷捷婆の音を奏すること、毘沙門子の

衆妙の天樂の聲の如し。太子が心に念ずる所は  
『第一に遠離の樂のみなり、衆妙の音を作すと雖も

亦其懐に在らず。時に淨居天子

太子の時至りて、決定して應に出家すべきを知り

忽然として化して來下し、諸の伎女衆を眠ひて

悉く皆睡眠せしむ。容儀欽攝せず

委に醜形を縦露し、昏睡して互に低仰す

樂器は縦横に亂れ、傍倚し或は反側す

或は復投深に似、瓔珞は鎖を曳くが如し

衣裳は身を絞縛し、琴を抱いて地に偃す

猶し受苦人の若く、黄緑の衣は流散し

迦尼華を摧けるが如く、體を縦にし壁に倚つて眠る

狀角弓を懸けたるが若く、或は手もて窓闥に攀づ

絞死尸に似たるが如く、嘔呻し長欠吐す

魔呼し涕流し涎し、蓬頭して醜形を露す

【迦尼華】 カルニ  
カーラ Karika  
ニ

見れば顛狂人の加く、華鬘は垂れて面を覆ひ、  
或は面を以て地を掩ひ、或は身を舉げて蹴掉す  
猶し獨搖鳥の若く、身を委ねて更に翻轉し

手足を互に相加へて、或は擗蹙し眉を皺む  
或は眼を合せて目を閉き、種種に身を散亂し

狼藉なること猶し横屍のことし、時に太子端坐して

諸の婦女を觀察するに、先には皆極めて端嚴にして  
言笑し心語黙に、妖豔にして姿媚に巧なるも

而も今悉く醜穢なり、女人の性是の如し

云何が復近すべき、沐浴して緣飾を假り

男子の心を誑惑す。我今已に覺了せり

決定して出づること、疾無けん

爾時に淨居天、來下して爲に門を聞く

太子時に徐ろに起ち、諸の婦女の間を出で

内闈に踰騰して、車匿に告げて言はく

「吾今心渴仰せり、甘露の泉を飲まんと欲す

馬に被せて速に牽き來れ、不死の郷に至らんと欲す

【迦提】 ためらふ  
こと。  
【車匿】 チヤンダ  
カ(Jhanjaka)  
【不死の郷】 涅槃  
のこと。

自ら知る心決定して、堅固なれば誓つて莊嚴せん  
妖女は本端正なるも、今悉く醜形を見す  
門戸は先に關閉せるに、今已に悉く自ら聞く  
此諸の瑞相を見るは、第一義の筈なり」と  
車屋内に思惟すらく、「當に太子の教を奉すべきや  
脱して父王に知らしめば、復應に深く罪責せらるべきや」と  
諸の天神力を加ふれば、覺えず馬を牽き來る  
平乗せる駿良馬、衆寶を鏤めし乗具有り  
高き翠長き髦尾、局れる背短毛の耳  
鹿腹と鶉王の頸と、額は廣く圓かに瓠鼻有り  
龍咽と臆臆と方び、麟驥の相を具足せり  
太子馬頭を撫でて、身を摩して告げて言はく  
「父王常に汝に乗り、敵に臨んで辄ち怨に勝ちぬ  
吾今相依つて、遠く甘露の津に涉らんと欲す  
戦鬪には衆族多く、榮樂には伴遊多し  
商人は珍寶を求め、樂從者亦衆し  
苦に遭うて良友は難く、法を求むるに必ず朋寡し

此二友に堪へし者は、終に吉安を獲ん

吾今出遊せんと欲するは、苦の衆生を度せんが爲なり

汝今自ら利し、兼ねて諸の群萌を濟まんとす

宜しく當に其力を竭すべし、長驅して疲倦すること勿れ

勸め已りて徐ろに馬に跨り、鞭を理めて條ち辰を征く

人は日殿の流るるを狀り、馬は白雲の浮ぶが如し

身を束ぬるも奪退せず、氣を屏めて嘖鳴せず

四神來りて足を捧げ、潛密に寂として聲無し

重門は固く闕鑰せらるに、天神自ら開かした

敬ひ重んずることは父に過ぎたるは無く、愛の深きことは子に踰えたるは莫し

内外の諸の眷屬、恩愛亦纏綿たるも

情を潰れは遺念無し、飄然として城を超出す

清淨なる蓮花の目、淤泥の中より生ずるがごとし

父王の宮を顧瞻して、告離の篇を説く

生老死を度せずんば、永く此に遊ぶの縁無けん

一切の諸の天衆、虚空の龍鬼神

隨喜して「善哉、唯此れ眞諦の言なり」と稱す

【出句】 ヨーヅヤ  
ナ (Yojima) 距離  
の單位。

諸の天龍神衆、難得の心を得たるを慶び  
各自力の光を以て、引導して其明を助く  
人と馬と心は俱に鋭く、奔逝すること流星の若く  
東方猶未だ曉ならざるに、已に三出句を進めり

佛所行記卷第一



# 佛所行讚

卷第二

亦佛本行  
經と云ふ

## 車匿還品第六

【車匿還品】太子  
苦行林に到りし後  
別れて車匿白馬と  
共に本宮に還らんと  
するを叙す  
【跋伽】パールガ  
ツ (Haravata) プ  
リゲの子孫の意

須臾にして夜ま已に過ぎ、衆生の眼に光出づ  
林樹の間に、跋伽仙人處を顧見せり  
林流極めて清曠にして、禽獸は人に親附す  
太子見て心に喜び、形勢自然に息む  
此れ則ち祥瑞たり、必ず末會の利を獲んと  
又彼仙人を見るに、是れ應に供養すべき所  
并に自ら其儀を護りて、高慢の跡を滅除し  
馬を下り手もて頭を摩で、汝今已に我を度せり  
慈目もて車匿を觀ること、猶し清涼の水もて洗ふがごとし  
一跋足もて馳すること飛ぶが若く、汝常に馬の後に係る

馬 鳴 苦 薩 造  
北涼天竺三藏曇無讖譯

汝の深く敬ひ勤めて、精勤し懈倦すること無きを感じず  
餘事は計するに足らず、唯汝の眞心のみを取る

心敬ひ形動むるに堪ふ、此二今始めて見ぬ

人は心に至誠有るも、身力に堪ふる所無し

力堪ふるも心至らず、汝は今二つ共に備る

世の榮利を捐棄して、進歩し我に隨つて來る

何人か利に向はざる、利無くんば親戚は離る

汝今空しく我に隨ひて、現世の報を求めず

夫れ人の子を生育するは、以て宗嗣を紹がしめんが爲なり

王を奉敬する所以は、以て恩養に報ぜんが爲なり

一切皆利を求むるに、汝獨り利に背いて遊ぶ

至言は煩多ならざらんも、今當に略して汝に告ぐべし

汝我に事へ已畢れば、今日く馬に乗じて還れ

我長夜より來れる、所求の處今得たり

即ち寶瓔珞を脱して、以て草庵に投ぐ

「具せる是を持して汝に賜る、以て汝の憂悲を慰めよ」

寶冠と頂の摩尼の、光明其身を照せるを

【苦行林】 ウルギ  
ルブー (Jivikya)  
木瓜と譯す、尼連  
禪河の邊にあり。

即ち脱して掌中に置くに、日の須彌を曜すが如し  
 卓座此珠を持って、父王の所に還歸し  
 珠を持つて王足を嚙し、以て我虔心を表し  
 我爲に王に啓請せよ。願くば愛戀の情を捨てたまへ  
 生老死を脱せんが爲に、故に苦行林に入る  
 亦生天を求めず。仰慕の心無きに非ざらも  
 亦結恨を懷かず、唯愛戀を捨てんと欲す  
 長夜に恩愛を棄つるも、要す當に別離有るべし  
 當に離るべきこと有るを以この故に、故に解腕の因を求む  
 若し解腕を得ば、永く離觀の期無けん  
 斷愛の爲の出家なれば、子の爲に愛を生ずること勿れ  
 五欲は愛根たり、應に著欲者を愛ふべし  
 乃祖諸勝王は、堅固の志を移さず  
 今我餘財を襲ふも、唯法のみ非宜を捨す  
 夫れ人命終の時に、財産を悉く子に遺すも  
 子多く俗利を貪り、而も我は法財を樂む  
 若し年少壯、是れ遊學の時に非すと言はば

當に知るべし正法を求むるに、時非爲時無し  
 無常に定期無く、死怨は常に隨伺す  
 是故に我今日、決定して法を求むるの時なりと  
 上の如く諸の啓ふる所、汝悉く我爲に宣べよ  
 唯願くば今父王をして、復我を顧戀せざらしめよ  
 若し形を以て我を毀つとも、王をして愛を割かしめん者な  
 汝慎んで言を惜みて、王の念をして絶えざらしむる勿れ  
 車匿教勅を奉ずるも、悲み塞り情昏迷  
 合掌して跏跪し、還太子に答へて言はく  
 勅の如く具に宣べ言はんも、恐くは更に憂悲を増さん  
 憂悲増し轉た深からんこと、象の深泥に溺るるが如し  
 決定して恩愛に乖くも、心有るもの執が哀まざらん  
 金石尙摧碎せんも、何に況んや哀情に溺れんをや  
 太子は深宮に長じ、少くして樂み身細軟なり  
 身を刺棘林に投ず、苦行安んぞ堪ふべけん  
 初め我に命じて馬を牽かしむ、下情甚だ安からざるも  
 天神に驅逼せられ、我に命じて速に莊嚴せしむ

何の意あつてか太子として、決定して深宮を捨てしむるや

迦毘羅衛國は、合境悲痛を生ぜん

父王年已に老い、子を念するの愛も亦深し

決定して家を捨出するは、此れ則ち所應に非ず

邪見にして父母無きは、此れ則ち復論無し

瞿曇彌は長く養うに、乳哺し形枯乾せり

慈愛は忘るべきこと難し、恩人に背くことを作す莫れ

嬰兒の功徳の母は、勝族能く奉事するも

勝つを得て復棄つれば、此れ則ち勝人に非ず

耶輸陀の勝子、國を嗣いて正法を掌るも

厥年尙幼かなれば、是も亦應に捨つべからず

已に父王、及び宗親眷屬を違捨す

復我を遺棄すること勿れ、要す尊足を離れざらん

我心に湯火を懐くがごとくして、獨り國に還るに堪へず

今奈野の中に於て、太子を棄捨して還るは

則ち須曼提の、羅摩を棄捨するに同じ

今若し獨り宮に還らば、王に白して當に何をか言ふべき

【須曼提】スミット  
ラ(Manita)ダシ  
ヤラタ王の大妃、  
王子羅摩(Manu)  
の女。



合宮同じく責めらるるも、復何の辭を以てか答へん  
太子向に我に告ぐらく、「方便に隨つて形を毀つ」と  
牟尼功德の所、云何がして虚説せん

我深く慚愧するが故に、舌も亦言ふこと能はず  
設使所設有らんも、天下誰か復信せん

若し月光は熱しと言ふも、世間に信する者有りや

脱し太子の、所行非法行を信する有らんも

太子は心柔軟に、常に一切に慈悲有り

深く愛するに而も棄捨するは、此れ則ち宿心に違す

願くば思うて宮に還り、以て我愚誠を慰むべし」

太子車匿の、悲切なる苦諫の言を聞いて

心安く轉た堅固なり、而も復之に告げて曰はく

「汝今我爲の故に、而も別離の苦を生ず

當に此悲念を捨てて、且自ら其心を慰むべし

衆生は、各異趣なれば、乖離の理自ら常なり

縱令我今日、諸の親族を捨てざるも

死に至り形と神とは乖き、當に復云何が留むべき

慈母の我を懐妊するや、深く愛せるも常に苦を抱き  
生じ已りて即ち命終し、竟に子の養を蒙らず  
存亡各路を異にす、今何處にか求むることを爲す  
曠野に茂れる高樹に、衆鳥群聚して栖むに  
暮に集ると晨には必ず散せん、世間の離も亦然り  
浮雲の高山に興り、因集して虚空に澄つるも  
俄にして復消散す、人理も亦復然り  
世間は本自ら乖く、暫く會うて思愛釋るも  
夢中の集散の如く、寔に我親を計すべからず  
譬へば春生樹の、漸く長し柯葉茂り  
秋霜に遂に零落するが如く、同體なるも尙分離す  
況んや人は暫くの合會なり、親戚異常に供ならんや  
汝且く憂苦を息めて、我教に順ひて歸れ  
歸意猶我に存せば、日く歸すとも後更に還らん  
迦毘羅衛の人、我心の決定せるを聞き  
顛遣して我を念ずる者あらば、汝當に我言を宣ふべし  
生死の海を越度し、然る後當に來還すべし」と

【輪掌綱鞭の手】  
三十二相の一。

【初利】 トラーヤ  
ストリンシヤーフ  
(T. yasthini 卷二)  
三十三天のこと。

【素繪衣】 白きぬ  
の衣。

情願若し果さずんば、身を山林の間に滅せん。  
白馬太子が、斯眞實の言を發するを聞いて  
膝を屈して足を舐め、長息して涙流れ連る  
輪掌綱鞭の手もて、白馬の頂を順摩し  
「汝憂悲を生ずること莫れ、我今汝に  
良馬の勤勞を感謝す。其功今已に畢れり  
惡道の苦長く息み、妙果今に現せん。  
衆寶もて莊嚴せる劍の、卓匠常に執りて隨ふあり  
太子利劍を抜けば、龍曜光明の如し  
寶冠に女髮の籠れるを、合刺して空中に置けば  
凝虚の境に上昇し、飄へること鸞鳥の翔けるが若し  
初利の諸天下つて、髮を執つて天宮に還る  
常に足に奉事せんと欲するを、況んや今頂髮を得んを  
心を盡して供養を加へ、正法の盡くるに至る  
太子時に自ら念ずらく、「莊嚴の具悉く除きぬ  
唯素繪衣のみ存るは、猶出家の儀に非ず」と  
時に淨居天子、太子の心念を知り

【袈裟】カチヤト  
キ(kaiva)染色  
衣と譯す。出家の  
正衣。

位して獵師の像となり、弓を持ち利箭を佩び  
身に袈裟衣を被、徑に太子の前に至る

太子此衣を念するに、染色清淨の服なり

仙人上標の飾にして、獵者の所應に非ず

既ち獻師を呼びて前め、軟語して告げて曰はく

汝此衣服に於て、貪愛すること深からざるに似たり

我身上の服を以て、汝と相貿易せん

獵師太子に白さく、此衣を惜まざるに非ず

用て諸の群鹿を謀り、之を誘つて見趣せしむるなり

苟くも是れ汝が須ふる所なれば、今當に與に交易すべし

獵者既に衣を買へ、還自ら天身に復す

太子及び車匿、見て奇特の想を生ず

此れ必ず無事の衣、定めて世人の服に非ざらん

内心大いに歡喜し、衣に於て倍敬を増す

即ち車匿と別れ、袈裟衣を被著し

猶し青縫雲の、日月輪を圍遶せるが若し

安詳として諦歩し、仙人の窟に入る

【入苦行林品】太  
子苦行林の跋伽  
人の處に到り、出  
離の道を求むるを  
叙す。

卓た座ざ自みづから隨ま躡もし、漸あく隱かれて復また見みず  
太子たうじは父ちち王わう、眷けん屬ぞく及および我わが身みを捨すて  
袈け裟さ衣えに愛あい著ちやくして、苦く行ぎやう林りんに入いる

首かぶを擧あげ仰おほいで天てんに呼よび、迷めい悶もんして地ちに躡もる

起たつて白びやく馬まの頭あたまを抱かかき、望つぞ絶めえて路みちに隨したがつて歸かへり

徘徊はいかいして屢しばしば反へん顧こし、形かたちは住ゆるくも心こころは反そむいて馳はす

或あるは思おもを洗ひめて魂たましを失うひ、或あるは俯ひ仰おほして身みを垂たれ

或あるは倒たふれては復また起おこき、悲ひ泣なし路みちに隨したがつて還かへる

入苦行林品第七

太子たうじ車しや匿かくを遣やり、將まさに仙せん人にん處じよに入いらんとす  
端たん嚴げんにして身み光くわう耀やうき、普あまねく苦く行ぎやう林りんを照てらす  
一切いっさい義ぎを具ぐ足そくし、義ぎに隨したがつて彼かに之これくこと  
譬たとへば師し子し王わうの、群ぐん獸じゆの中なかに入いるが如ごとし  
俗ぞく容ようを悉ことごとく已やに捨すてて、唯ただ道だう真しんの形かたちのみを見みる  
彼か諸しよの學がく仙せん士し、忽たちち覩みて未な曾そう見けんと爲なし



【持鹿戒の梵志】

ムリガチャリリン (Miranin) 鹿行者のこと、是れ鹿の如く草を食ひ歩く行者なり。  
【膝脇】 忙はしくみること。

【婆藪】

ワス (Vas) 因陀羅の侍者八人あり。

【阿濕波】

アシユ (Asiyu) アシユ乗馬

凜然として心に驚喜し、合掌し端目して驅る

男女随つて執事するも、即ち視て儀を改めず

尺の帝釋を觀るが如く、瞻視して目瞬がず

諸仙足を移さずして、瞻視すること亦復然り

任重ければ手に執作するも、瞻て敬ふも事を釋かす

牛の轅輓に在るが如く、形來つて心依る

俱に神仙を學べる者、威く説いて未會見とす

孔雀等の衆鳥は、亂聲して翔り鳴き

持鹿戒の梵志、鹿に随つて山林に遊ぶ

麋性の鹿膝陽に、太子を見て端視し

隨鹿の諸梵志も、端視すること亦復然り

甘蔗の燈重明なること、猶し初日光の如く

能く群乳牛に感じて、増して甜香の乳を出す

彼等の梵志等、驚喜し傳へて相告ぐらく

八婆藪天たりや、二阿濕波たりや

第六魔王たりや、梵迦夷天たりや  
日月天子たりや、而も來つて此に下れるや

者の意、双神なり。  
【第六魔王】他化自在天のこと。  
【梵迦夷】ゴラフマカライカ (Prahmakāyika) 淨身と譯す、色界初禪天の通名。

要す是を塵に散ふべき所、奔り競へ來つて供養す  
太子亦兼下し、敬辭以て問訊す

菩薩遍く觀察するに、林中の諸の梵志

種種福業を修し、悉く生天の樂を求む

長宿の梵志に問はく、『所行は眞實の道なりや

今我初めて此に至る、未だ何の法を行するやを知らず

事に隨つて請問せん、願くば我爲に解説せよ』

爾時彼二生、具に諸の苦行

及與苦の行果を以て、次第に事に隨うて答ふらく

『聚落の所出に非ざる、清淨の水生物

或は根莖葉を食し、或は復華果を食し

種種各異道なれば、服食も亦同じからず

或は鳥生を習ひ、兩足を鉗取して食し

鹿に隨つて草を食する有り、吸風蟒陀仙は

木石もて舂きて食せず、兩齒もて嚼みて痕を爲し

或は乞食して人に施し、殘を取りて自ら食し

或は常に水に沐頭し、或は復火に奉事し

水居して魚仙を習ひ、是の如き等の種種有り

梵志は苦行を修し、壽終り生天を得

苦行に因るを以ての故に、當に安樂の果を得べし

兩足尊賢士は、此諸の苦行を聞き

眞實の義を見ず、内心に欣悦せず

思惟して彼を哀念し、心口に自ら相告ぐらく

「哀むべき哉大苦行や、唯人天の報のみを求む

輪廻して生死に向ふは、苦多くして果少し

視に違し勝境を捨て、決定して天樂を求むるも

小苦は免ると雖も、終に大苦縛を爲す

自ら其罪を精槓し、諸の苦行を修行し

而も受生を求めて、五欲の因を増長し

生死を見ざるが故に、苦を以て苦を求む

一切衆生の類は、心に常に死を畏る

精勤して受生を求むるも、生已に會せば當に死すべし

復苦を畏ると雖も、而も長く苦海に没す

此生極めて疲勞なるに、生復息まざるべし

苦に任せて現樂を求めんも、生天を求むるも亦勞たり  
樂を求むる心は下劣にして、俱に非義に墮す  
方に極鄙劣に於て、精勤して則ち勝れたりと爲す  
未だ智慧を修するが著くならず、兩捨は永く無爲なり  
苦身は是れ法なる者、安樂は非法と爲す  
法を行じて後樂むは、因法なるも果は非法なり  
身所行の起滅する、皆心意力に由る  
若し心意を離るる者は、此身枯木の如し  
是故に當に心を調ふべし、心調へば形自ら正し  
食の淨きを福と爲す者は、禽獸貧窮の子なり  
常に果葉を食するも、斯等に應に福有るべし  
若し善心起つて、苦行を福因たりと言はば  
彼諸の安樂行に、何んが善心起らざらんや  
樂は善心の起るに非ず、善亦苦因に非ず  
若し彼諸の外道、水を以て淨しと爲さば  
水居を樂むの衆生、惡業能く常に淨からん  
彼木功德仙の、住止すべき所の處を

功德仙の住するが故に、普く世に重んぜらる  
 應に彼功德を尊ぶべきも、應に其處を重んずべからず  
 是の如く廣く說法して、遂に日の暮るるに至る  
 事火者有るを見るに、或は鑽り或は吹然たり  
 或は酥油を灑ぐ有り、或は磬を擧げて呪願する有り  
 是の如く日夜を竟りて、彼所行を觀察するに  
 眞實義を見ず、則便捨て去らんと欲す  
 時に彼諸の梵志、悉く來つて留住を請ふ  
 菩薩の徳を眷仰し、勤めて勸請せざる無し  
 汝非法處より、來りて正法林に至る  
 而も復棄捨せんと欲す、是故に留らんことを勸請す  
 諸の長宿梵志は、蓬髮に草衣を服し  
 菩薩の後に追隨して、願うて小しく刹を留めんことを請ふ  
 菩薩諸老の、隨逐して身の疲勞せるを見  
 一樹下に止住して、安慰し流りて還らしめんとす  
 梵志の諸長幼、爾遮し合掌して請はく  
 汝忽ち此に來至せるに、園林の妙充滿せり



而も今棄捨して去れば、遂に丘曠野を成せん  
人の壽命を愛して、其身を捨てんと欲せざるが如し  
我等も亦是の如し、唯願くは小く留住せよ  
此處の諸の梵志、王仙及び天仙  
皆此處に依る。又雪山の側に隣れば  
人の苦行を増長する、其處此に過ぎたるは莫し  
衆多の諸の學士、此路に由つて天に生ず  
福を求め仙を學ぶ者、皆此より已北して  
正法を攝受する、慧者は南に遊ばず  
若し汝我等の、憍怠して精進ならず  
諸の不淨法を行するを見、而も住すると樂しまざれば  
我等悉く應に去るべし、汝此に留止すべし  
此諸の梵志等は、常に苦行の伴を求む  
汝は苦行の長たり、云何が相棄捨する  
若し能く此に止住せば、奉事すること常釋の如くせん  
亦天の、毘梨河鉢底に奉事するが如くせん  
菩薩は梵志に向ひて、己の心の所期を説くらく

「我わが正ただ方ちやう便べんを修しゆして、唯ただ諸しよ有うを滅めつせんと欲まほす

汝なんぢ等らは心こころ質しつ直ちやくにして、行ぎやう法ぽう亦また寂じやく黙もくたり

來きた賓びんに觀かん念ねんす、我わが心こころに實じつに愛あい樂らくす

美み説せつは人ひとに懐なつみを感じ、聞きく者もの皆みな沐みく浴よくせん

汝なんぢ等らの説せつく所ところを聞きくに、我わが樂らく法ぽうの情じやうを増ませり

汝なんぢ等ら悉しつく我わがに歸かへり、以もつて法ぽうの良らう明めいたらんとす

而しかも今いま我わがを棄す捨すするは、其その心こころ甚ただ恨うら然わんたり

先まづに本もと視し屬じやくに違ちがひ、今いま汝なんぢ等らと乖こく

合あは會あひと別わか離りの苦くるしみは、其その苦くるしみ等らしくして異ことなること無し

我わが心こころに樂らくまざるに非あらず、亦また他たの過あやまちをも見みざるも

但ただ汝なんぢ等らの苦くるしみ行ぎやうは、悉しつく生なま天てんの樂らくを求め

我わがは三さん有うを滅めつせんと求もとむ、形かたち背そむき而しかも心こころ乖こく

汝なんぢ等ら所ところ行ぎやうの法ぽうは、自みづから先まづ師しの業ごふを習まなぶも

我わがは諸しよ集じふを滅めつせんが爲ために、以もつて無む集じふの法ぽうを求もとむ

是こゝ故ゆゑに此こゝ林りんに於おて、永とこく久ひさしく停とどまるの理りなし」

爾その時とき諸しよの梵ぼん志し、菩ぼ薩ざつの所ところ説せつの

眞まこと實じつ有う義ぎの言ご、辭ことば辯べんと理りの高たか勝かつなると聞きいて

【三有】欲、色、無色の三。

其心大いに歡喜し、倍深く崇敬を加ふ

時に一りの梵志有り、常に塵土の中に臥す

榮髮にして樹皮を衣、黄眼脩高の鼻有り

菩薩に白して言さく、志固く智慧明かなれば、

決定して生の過を了し、善く離生の安きを知らん

祠祀し天神を祈り、及び種種に苦行し

悉く生天の樂を求むる、未だ貪欲の境を離れず

能く貪欲と争ひ、眞の解脱を志求するは

此れ則ち丈夫、決定正覺の士たり

斯處は留るに足らず、當に頻陀山に至るべし

彼に大牟尼有り、名けて阿羅藍と曰ふ

唯彼のみ究竟し、第一増勝の眼を得たり

汝當に彼に往語し、眞實の道を聞くことを得べし

能く心を悦ばしめば、必ず當に其法を行すべし

我汝が志樂を觀るに、恐らく亦所安に非ざらん

當に復彼を捨てて遊び、更に餘の多聞を求むべし

隆鼻と廣長の目と、丹唇と素の利齒と

【頻陀仙】 ギンド  
ヤローシユタ (Vi  
nadhakostha)  
【阿羅藍】 アーラ  
ーダ (Alāda)

【爾炎】 シユニエ  
ーヤ(シユニエ) 知ら  
るべきもの。

【合宮憂悲品】 太  
子の出城を知り、  
更に還歸せる車  
に太子の所信をき  
き遊馬釋城内擧げ  
て悲歎するを叙す

【蹄躡】 ゆきつも  
どりつ足にて地を  
うつこと。

薄膚と面に光澤あり、朱舌は長く軟薄なり  
是の如き衆の妙相は、悉く爾炎の水を飲まん  
當に不測の深を度るべく、世間に比有ること無けん  
耆舊の諸仙人の、得ざる者も當に得べし」と  
菩薩其言を領し、諸の仙人と別る  
彼諸の仙人衆、右遶して各辭し還る

合宮憂悲品第八

車匿馬を牽いて還るに、望は絶え心悲しみ塞がり  
路に隔つて號泣しつづき、自ら開割すること能はず  
先には太子と俱なりし、一宿の徑路も  
今は太子を捨てて還る、生の天蔭に奪はれし故  
徒徧しては心に顧戀し、八日にして乃ち城に至る  
良馬は素より體駿、奮迅する威相有るす  
【蹄躡】 して顧みては瞻仰するも、太子の形を觀す  
涙を流し四肢垂れ、憔悴して光澤を失ふ

【廓然】 空しき貌

【鐘冥】 くらきこ  
と。

【悵快】 うらむこ  
と。

旋轉して、濁き悲み鳴いて、日夜に水草を忘る  
救世の主を遺失して、迦毘羅に還歸せり

國土は悉く廓然として、空聚落に入るが如く

日の須彌に隠れしが如く、世を擧げて悉く鐘冥なり

泉池は澄清ならず、華果は榮茂せず

巷路の諸士女は、憂感して歡容を失ふ

車匿は白馬と與に、悵快として行くも前まず

事を問へども答ふること能はず、遲遅たること口の若くに行く

衆は車匿の還るを見るも、釋王子を見ず

聲を擧げて大いに號泣すること、羅摩を棄てて還るが如く

人有り路傍に來り、身を傾けて車匿に問はく

『王子は世の愛する所、擧國の人の命なり

汝輒ち盜みて將に去らんとす、今何にか所在を爲すや

車匿悲心を抑へて、衆人に答へて言はく

『我咎總追逐して、王子を捨てず

王子は我を捐棄し、并に俗の威儀を捨てて  
剃頭して法服を被、遂に苦行林に入る』と



衆人出家と聞いて、驚いて奇特の想を起し

嗚咽して啼泣し、涕淚交流下し

各各相告げて語らく、「我等何の計をか作さん」と

衆人咸く議して言はく、「悉く追隨して去るべし

人の命根の壞するが如く、身死せば形と神と離る

王子は是れ我命、命を失うて我豈生あらん

此邑は丘林を成じ、彼林に城郭邑あらん

此城の威徳を失ふこと、毘梨多を殺すが如し」と

城内の諸の士女、王子還れりと虚傳して

奔馳して路上に出づれば、唯馬のみ空しく歸るを見る

其存亡を知る莫ければ、悲泣して種種に聲す

卓厝歩みて馬を牽き、歎歎し涙を垂れて還る

太子を失へるの憂悲は、怖懼の心を加増して

戰士の敵に破れて、怨を誓り王の前に送らるるが如し

門を大るに涙は雨を下り、満目に見る所無し

尺を仰いで大に啼哭し、白馬も亦悲鳴す

宮中の繻くの鳥獸、内廩の諸の群馬

【毘梨多】ウリト  
ラ(=Ure) 因陀羅  
と戦ふ早籠と悪い  
天氣の悪魔

白馬の悲鳴を聞いて、長鳴して之に應ず  
謂は太子還れりと呼ぶも、見ざれば聲を絶つ  
後宮の諸の嬖女は、馬鳥獸の鳴くを聞いて  
亂髮し面は萎黄し、形瘦せ唇口乾き  
弊衣なるも洗濯せず、垢穢有るも身を浴せず  
悉く莊嚴の具を捨て、毀悴して鮮明ならず  
舉體に光耀無く、猶し細小の星の如し  
衣裳は壞して縷縷たり、狀被賊形の如し  
車匿と白馬と、涕泣絶望して歸れるを見  
感結んで號咷し、猶し新に親を喪へるが如く  
狂亂して搔擾し、牛の其道を失へるが如し  
大愛罹曇彌は、太子の還らざるを聞き  
竦身して白ら地に投じ、四體の悉く傷壞すること  
猶し狂風の、金色の芭蕉樹を摧くが如く  
又子の出家せるを聞いて、長歎して悲感を増さく  
「石旋せる細軟の髮は、一孔に一髮生じ  
黒淨鮮かに光澤有り、平住して地に灑げるに

何の意あつてか天冠を合し、刺つて草土中に著せよ  
摩訶は師子の歩むごとく、脩廣なる牛王の目のごとく  
身光は黄金の炎のごとく、臆は梵音聲に方し

是上妙の相を持して、苦行林に入る

世間何人が福薄くして、斯聖地主を失へる

妙網ある柔軟の足、清淨の蓮花色のごとくに

土石荆棘の林を、云何が踏むべき

深宮に生長し、温衣細軟の服あり

沐浴するに香湯を以てし、末香を以て身に塗れるに

今則ち風露に置く、寒暑安んぞ堪ふべき

華族の大丈夫、標挺し勝れて多聞なり

徳備り名稱高く、常に施して所求無きに

云何が忽ち一朝にして、乞食して以て身を活かすや

清淨の寶床に臥し、奏樂は以て憍を覺させるに

豈能く山樹の間に、草土を以て身を藉かすや

子を念うて心に悲み痛み、悶絶して地に寤る

侍人扶けて起さしめ、爲に具目の涙を拭く

【標挺】めだちて  
まきいづること。

其餘の諸の夫人、憂苦して四體垂れ

内に感じ心懐結し、助かざることを使人の如し

等に耶輸陀羅、深く車座を責めて言す

「生きながら我爾眞を亡く、今何事ぞ在す」と言す

人馬三つ共に行いて、今は唯二つのみ乗り歸る

我心懐かて憤憤し、戰慄して自ら安からず

終に是れ不正の人、不眠なり善友に非ず

不吉なり無暴を繼にす、爾に笑ふべし用て時を爲さず

待り上りて時いて還る、反覆相懸せず

愛念自ら伴有り、欲に随つて恣心に作す

爾に聖王子をして、一たび去つて復歸らざらしむ

汝今應に善いに喜ぶべし、惡を作して時に果成すればなり

善の智聖の怨に近くも、愚癡の友に附はざれ

爾に名けて良類と爲すも、爾は實に惡結を懷く

今此弊主の家、且悉く破壊せり

比喩の貴夫人、憂悴して影好を毀ち

涕泣し氣息絶え、兩淚横に流下す

夫れ主尙世に在らば、依止すること雪山の如く  
安意なること大地の如くならんと、憂悲して殆ど死に至る  
況んや此窓牖の中、悲泣長叫する者のみ  
生きて其所天を亡ふ、是苦何んが堪ふべけんや」  
馬に告ぐらく、「汝は義無し、人心の重んずる所を奪ふ  
猶し闇冥の中に、怨賊の珍寶を劫むるが如し  
汝に乗じて戰鬪せし時、刀刃と鋒と利箭と  
一切悉く能く堪へしに、今何の忍びざる有らんや  
一族の殊勝、我心を強奪して去る  
汝は是れ弊惡の蟲、詔の不正業を造る  
今日大いに嗚呼して、聲は王宮に満たんも  
先に長所念を劫むる、爾時に何を以てか瘞せる  
若し爾時に聲あらば、宮擧りて悉く應に覺るべく  
爾時に若し覺らば、今の苦惱を生ぜざらん」  
車匿苦言を聞いて、氣を飲み息結び  
涙を收め合掌して答ふらく、「願くば我自ら陳ぶるを聽きたまへ  
白馬を豫責したまふこと莫れ、亦我を悲ること莫れ



我等に悉く過無し、天神の爲せる所なり

我極めて王法を畏るるも、天神の驅逼せるところ

速に馬を牽いて之に與り、俱に去つて疾きこと飛ぶが如し

氣を厭うて聲無からしめ、足も亦地に觸れず

城門は自然に開き、虚空は自然に明けし

斯れ皆天神の力、豈是れ我所爲ならん』

耶輸陀説を聞いて、心に奇特の想を生ずらく

『天神の所爲なれば、是は斯等の罪に非ず』と

嫌責の心消除し、熾然たる大苦息む

地に蹴れて怨歎を稱し、雙輪鳥の分垂せるとし

『我今依怙を失ひ、同法の行生きながら離る

法を樂まんも同行に捨てられ、何處にか更に法を求めん

古昔の諸の先勝、大快見王等は

斯れ皆夫妻俱ひて、道を學び林野に遊べる

而も今我を捨てて、何等の法をか求めんとは爲る

梵志が祠祀典には、夫妻必ず同行す

同行の法を因と爲して、終に期ち同じく報を受く

【雙輪鳥】 おしど  
り。

【大快見王】 マハ  
ースダルシヤ(Ma  
hasidansa)

汝何んが獨り法を慳みて、我を棄てて隻遊する

或は我嫉惡を見て、更に無嫉者を求めしや

或は當に我を嫌薄すべく、更に淨天女を求めしや

何の勝徳色の爲に、苦行を修習するや

我薄命を以ての故に、夫妻生きながら別離す

羅縑羅何が故に、膝下を蒙らざる

嗚呼不吉の士、貌柔に而も心剛し

勝族盛に光榮あり、怨憎も猶宗仰せん

又子生れて未だ孩ならず、而も能く永く棄捨す

我も亦心腸無し、夫は棄てて山林に遊ぶ

自ら泯没すること能はずんば、此れ則ち木石の人なり

言ひしりて心迷亂し、或は哭し或は狂言す

或は陰視して沈思し、哽咽して自ら勝へず

憐愍の氣殆ど盡き、塵土の中に臥す

諸餘の婦女衆は、見て悲痛の心を生ずること

猶し盛蓮花の、風雹の摧いて萎めしむるが如し  
父王太子を失うて、晝夜に心に悲み戀ひ

【泯没】 ほろぶる

【慘状】 うれふる

齋戒して天神に求むらく、「願くば子をして速に還らしめよ」  
 發願し祈請し已りて、天祠の門を出づるに  
 諸の啼哭の聲を聞き、驚怖して心迷亂す  
 天に大雷震有り、群象の亂れて奔馳するが如し  
 車匿と白馬とを見、廣く問うて出家を知り  
 身を擧げて地に投すること、帝釋の幢を崩すが如し  
 諸臣、徐に扶け起し、法を以て勸めて安からしむ  
 久しくして心小しく醒め、白馬に告げて言はく  
 「我、數汝に乗じて戦ひ、毎に汝が功有るを念せり  
 今や汝を憎惡すること、愛念せる時に倍す  
 所念の功德子を、汝は輒ち運びて去らしめ  
 山林の中に擲著して、猶自ら空しく來り歸る  
 汝速に我を持って往け、爾らずんば往いて將の還れ  
 此を爲さざれば、我命將に存せざらんとす  
 更に餘の方治無く、唯子待つを藥と爲すのみ  
 瑠闍梵志は、子死せるが爲に身を殺せしが如く  
 我も行法の子を失へば、自ら殺して身を無からしめん

【瑠闍】 スリンガ  
 ヤ (Sringaya)

【摩造】 マヌ(Manu)

三三

魔冤業生主も、亦當に子の爲に憂へしなるべし  
況や復我は常人なり、子を失うて能く自ら安んぜんや

【阿闍】 アジャ(Asura) その子はダシヤラタ王。

古昔阿闍王は、愛子の山林に遊べるを  
感思して命終し、即時に天に生ずるを得たり

吾今死すること能はず、長夜嬰苦に住す

合宮古子を念ずること、虚渴せる餓鬼の如し

人渴せば水を探し、飲まんと欲するに之を奪はるるが如く

渴を守りて命終せば、必ず餓鬼趣に生ぜん

今我至つて虚渴せり、子水を得たるに復失ひ歎

及び我未だ命終せず、速に我子の處を語れ

我をして渴死して、餓鬼中に墮せしむること勿れ

我素より志力強く、動じ難きこと大地の如きも

子を失ひて心躁亂せること、昔の十車王の如し

王師多聞王と、大臣の智聰達せると

二人勸めて王を諫め、緩ならず亦切ならず

願くば自ら相念を寛うし、憂を以て自ら傷ふこと勿れ

古昔の諸の勝王は、國を棄つること散花の如し

【十車王】 ダシヤラタ(Dasaritha)

その子とはラーマ王子

【王師】 富延僧の

こと

【舍君陀】  
(Takumi)

サクニ

【推求太子品】  
師、大臣等王の命  
に依て太子を推求  
するを明す

子今學道を行ず、何んが苦んで憂悲するに足らん  
 當に阿私の記を憶ふべし、理數自ら應に然るべし  
 天樂も轉輪聖の、蕭然たるを累清せざるに  
 豈曰はんや世界の王、能く金王の心を移すと  
 今當に我等をして、推求して其處に到らしむべし  
 方便もて苦諫して諍ひ、以て我丹誠を表す  
 要す望めて其志を降し、以て王の憂悲を慰めん  
 王喜んで即ち答へて言はく、唯汝等速に行け  
 舍君陀鳥の、子の爲に空中を旋るが如くして  
 我今太子を念するに、便ち惜心も亦然り  
 二人既に命を受け、王諸の眷屬と與に  
 其心少して清涼にして、氣宣び滾欲通ず

推求太子品第九

王正に憂悲せるを以て、師大臣を感じし  
 良馬を鞭策するが如く、馳駛すること迅流の若し



【闍延多】  
シタ(Javanti)因  
陀羅の子

身疲るるも勞を辭せず、遲に苦行林に詣る  
俗の五儀飾を捨て、善く諸の情根を捨て  
梵志の精盧に入り、彼諸仙に敬禮す

諸仙請うて座に就かしめ、說法して之を安慰す

即ち仙人に白して言さく、一意に諮問するところ有り

淨稱淨飯王、甘蔗名は勝貴

我等師臣たり、法教典要を事とす

王は天帝釋の如く、予は闍延多の如し

老病死を度せんが爲に、出家して或は此に投せりと

我等彼爲に來る、惟尊應當に知るべきや

答へて言はく、此人有り、長臂大人の相あり

我等の所行が、生死の法に隨順するを擇びて

阿羅藍に往詣して、以て勝解脱を求む

既に定實を得已り、王の速命を遵崇し

敢て疲勞を計らさず、路を尋ねて馳進み

太子の林に處せるを見るに、悉く俗儀の飾を捨てしも  
眞體無きり難くこと、日の烏雲より出づるが如し

【烏雲】 黒き雲

【婆摩魯】マハー  
 ワーマデーヅ(Mahā  
 Yamadeya)十車  
 王の大臣  
 【婆私吒】ワシエ  
 ーヤ(Asvay  
 ー)【儵迦羅】シニ  
 ークラ(Sukra)  
 【央耆羅】アング  
 ラス(Angiras)

【富那婆敷】プナ  
 ルワス(Punava  
 sa)貯蔵せし財の  
 義、第五又は第七  
 の月宿の名。  
 【毘利波低】プリ  
 ハスバテイ(Brah  
 ma)

國奉天神師と、執法大臣と

俗威儀を捨除し、下乘して歩み進む

猶し王の婆摩魯と、仙人婆私吒と

往いて山林の中に詣り、王子羅摩を見るかごとし

各其本義に隨つて、恭敬禮して問訊すること

猶し儵迦羅、及與央耆羅の

心を盡して恭敬を加へ、天帝釋に奉事するが如し

王子亦隨つて、王師及び大臣を敬ふこと

帝釋の、儵迦央耆羅を安慰するが如し

即ち彼二人に命じて、太子の前に坐せしむ

富那婆敷の、兩星の月傍に侍するが如く

王師及び大臣、王子に啓請すること

毘利波低の、彼闍延多に語るが如し

父、王太子を念じて、利刺の心を貫くが如し

荒迷して狂亂を發し、塵土の中に臥す

日夜に悲思を増し、涙を流すこと常に雨の如し

我に勅して所命有り、唯願くば心を留めて聽きたまへ

汝が樂法の情を知ること、決定して疑ふ所無きも  
 非時に林藪に入れば、悲戀我心を疏る  
 汝若し法を念せば、應當に我を哀感すべし  
 望望き逆遊の情を、以て我懸心を慰めよ  
 憂悲の水もて、我心片を崩壞せしむること勿れ  
 雲水草山に、風日火雹の災あるが如く  
 憂悲は四患を爲し、飄乾は心を燒壞す  
 日く還つて上邑を食ひ、時至つて更に仙に遊べ  
 靴履を顧みず、父母をも亦棄捐す  
 此れ豈慈悲、一切を覆護すと名けんや  
 法必ずしも山林ならず、在家するも亦閑を脩め  
 覺悟し勤めて方便せば、是れ則ち出家と名く  
 剃髮して染衣を服し、自らを山藪の間に放つも  
 此れ則ち畏怖を懷けば、何んが學仙と名くるに足らん  
 願くば一たび汝を抱き、水を以て具頂に雨らし  
 汝に冠するに天冠を以てし、傘蓋の下に置くことを得ん  
 矚目一たび汝を觀ば、然る後我出家せん

【頭留摩】 ドルヲ

【阿窶闍阿涉】 ア

【一シヤーク】 (Asādi ha)

【跋闍羅婆休】 ヲ

【シモラバフ】 (Va jrahnu)

【毘跋羅安提】 ヲ

【イブラーシヤ】 (Va ibhrajā)

【毘提訶闍那】 ヲ

【ヤナカ】 (Janaka)

【那羅濕波羅】 セ

【一ナカハト】 (Sana jhi)

【毘林摩】 ビーシ

【キムナ】 (Kimsa)

【羅彌】 ラーマ

【跋祇】 パールガ

【Bharava】

頭留摩先王、阿窶闍阿涉

跋闍羅婆休、毘跋羅安提

毘提訶闍那、那羅濕波羅

是の如き等の諸王、悉く皆天冠を著け

瓔珞以て嚴容し、手足に珠環を貫き

姝女衆と娛樂するも、解脫の因に違せず

汝今家に還り、二事を崇習すべし

心に増上の法を修すると、地の増上の主たるとなり

涙を垂れて我に約勸したまひ、是の如きの言を宣べし

既に此勸旨有り、汝應に教を奉じて還るべし

父王汝に因つての故に、憂悲海に没溺せり

救無く所依無く、自ら開釋するに由無し

汝當に船師と爲りて、安隱處に渡苦せしむべし

毘林摩王子も、二羅彌跋祇も

父勸恭へ仰を聞けり、汝今亦應に然るべし

慈母鞠養の恩は、壽を盡して報ずるも極る罔し

牛の其犢を失ふに、悲呼して眠食を忘るるが如し

【梵梵】 憂ふる貌

【倏忽】 たちまち

汝今塵に速に墜り、以て我生命を救ふべし  
 孤鳥の群を離れしは哀れに、龍象の窟り遊ぶは苦し  
 憑依者蔭を失ふ、當に思つて救護と爲すべし  
 一子孩幼にして孤、苦に遭へるを告ぐるに知る莫し  
 彼梵梵の苦を勉むるは、人の月蝕を救ふが如し  
 學國の諸の士女、別離の苦熾然なり  
 歎息の咽は火を衝き、慧眼を熏じて闇からむ  
 唯汝の水の、火を滅して目を開明せしめんことを求むと  
 菩薩父王の、切なる教苦の備に至れるを聞き  
 端坐正思惟し、宜に隨つて遜順して答ふらく  
 「我も亦父王の、慈念と心の過厚なるを知るも  
 生老病死を畏れて、故に極り回きの恩に違へり  
 誰か所生を重んぜざらん、終に別離するを以ての故に  
 正使生きて相守るとも、死至れば能く留むること莫し  
 是故に所重を知り、長く辭して出家せり  
 父王の憂悲を聞いて、増戀我心を切る  
 但夢に暫く會ふが如く、倏忽として無常に歸す



汝當に決定して知るべし、衆生の性は同じからず  
憂苦の生ずる所、必ずしも子と親とのみならず  
生の離苦たる所以は、皆癡惑より生ずればなり  
人の路に隨つて行くが如く、中道にして暫く相逢ふも  
須臾にして各分析す、理に乖くも本より自然なり  
合會暫く親を成ずるも、隨縁の理は自ら分つ  
深く親の假合に達して、應に憂悲を生ずべからず  
此世に親愛に違せんも、他世に更に親を求む  
暫く親むも復乖離す、處處親に非ざること無し  
常に合して常に散ず、散散何んが哀むに足らん  
處胎は漸漸に變じて、分分に死して更に生ず  
一切時に死有り、山林何んが時に非ざらん  
侍時に五欲を受け、求財の時も亦然り  
一切の時に死するが故に、死法を除いて時無し  
我をして王爲らしめんと欲する、慈愛の法に違し難きも  
病に非藥を服するが如く、是故に我  
高位愚癡の處に在りて、放逸し愛憎に隨ふに堪へず

終身常に畏怖し、思慮して形神疲る

衆に順ふも心法に違するは、智者の爲さざる所なり

七寶の妙宮殿も、中に於て盛に火然え

天厨百味の飯も、中に於て雜毒有り

蓮華清涼池にも、中に於て毒蟲多し

位高きも災宅たらば、慧者は居らざる所なり

古昔の先勝王は、居國に愆多きを見

楚毒の衆生に加ふるを、厭患して出家せり

故に王の正苦を知らば、行法するの安きには如かず

山林に寧慮し、草を食すること禽獸に同じく

深宮に堪へずして、黒蛇と具穴を同じうす

王位の五欲を捨てて、任苦もて山林に遊ぶ

此れ則ち隨順たり、樂法漸く増明せん

今閑靜林を棄てて、家に還つて五欲を受けば

日夜に苦法増さん、此れ則ち所應に非ず

名族の大丈夫は、法を樂うて出家し

永く名稱放に背き、大丈夫の志を建つ

【楚毒】 くるしみ

【寧慮】 安らかに居ること。

形を毀ち法服を被、法を樂うて山林に遊ぶ

今復法服を棄てて、慚愧の心に違する有らば

天王すら尙不可なるに、況んや人の勝宅に歸らんをや

已に貪患癡を吐けるに、而も復還つて服食せば

人反つて吐けるものを食せるが如し、此苦安んぞ堪ふべけん

世舎の焼を被るが如し、方便もて馳走して出づるに

須臾にして還つて復入らば、此れ豈黠夫となさんや

生老死の過を見、厭患して出家せるに

今當に還つて復入るべくんば、愚癡彼と同じからん

宮に處して解脱を修せんに、則ち是處有ること無し

解脱と寂靜と生ずるは、王者の楚罰の如く

寂靜は王威を廢し、王の正解脱と乖く

動靜は猶し水火のごとく、二理何んが具するを得ん

決定して解脱を修するは、亦王位に居せざればなり

若し王位に居り、兼ねて解脱を修すと言はば

此れ則ち決定に非ず、決定の解も亦然り

既に決定心に非ざれば、或は出でて還つて復入るなり

我今已に決定して、親族の鈎餌を斷じ

正方便もて出家す、云何が還つて復入らざる

大臣内に思惟すらく、「太子は大丈夫なり

深く識り徳隨順し、所説に因縁ありし

而も太子に告げて言さく、「王子の所説の如く

法を求むる法も應に爾るべきも、但今は是れ時に非ず

父王衰暮の年なれば、子を念じて憂患を増す

解脱を樂ふと曰ふと雖も、反つて更に非法たり

樂んで出づと雖も慧無し、深く細理を思はず

因を見ずして果を求む、徒らに現法の歡ぶべきを捨つ

後世は有りと言ふ有り、又復無しと言ふ有り

有無既に判せず、何を爲してか現樂を捨つるや

若し當に後世有らば、應に其所得に任ずべし

若し後世無しといはば、無即ち解脱たり

後世有りと言ふ有るは、解脱の因を説かず

地堅く火暖く、水濕り風飄動するが如く

後世も亦復然り、此れ則ち性自ら爾るのみ

淨不淨を説く有るも、各自性より起る

方便もて移すべしと言ふは、此れ則ち愚癡の説なり  
諸根行の境界は、自性皆決定せり

愛念と不念と、自性定めて亦然り

老病死等の苦、誰か方便もて然らしむるや

謂く水能く火を滅し、火は水をして煎消せしむ

自性増せば相壞し、性和して衆生を成す

人の胎中に處するが如く、手足諸體の分れ

神識自然に成す、誰有りてか之を爲す者ぞ

棘刺は誰か利からしむる、此れ則ち性の自然なるなり

及び種種の禽獸は、無欲の爾らしむる者なり

諸有の生天者は、自在天の所爲なり

及び餘の造化者に、自力の方便無し

若し由つて生ずる所有らば、彼も亦能く滅せしむん

何んが自らの方便を須ひて、而も解脱を求めて

有るが言ふ、「我を生ぜしむ、亦復我を滅せしむ」と

有るが言ふ、「由つて生ずる無ければ、要す方便して滅す」と



人の子を生育するが如き、祖宗に負かず  
仙人の遺典を學び、奉天大祠祀する

此三所負無きを、則ち名けて解脫と爲す  
古今の所傳は、此三に解脫を求む

若し餘の方便を以てせば、徒勞にして實無し  
汝解脫を求めんと欲して、唯上方便のみを習ふ

父王の憂患息めば、解脫道申ふるを得  
家を捨てて山林に遊び、還歸するも亦過に非ず

昔奄婆梨王は、久しく苦行林に處し  
徒業眷屬を捨てて、家に還り王位に居り

國王下子羅摩は、國を去つて山林に處するも  
國の風俗の離れしを聞き、還歸して正化を繼ぐ

婆伽婆の國王を、名けて頭樓摩と曰ふ  
父子山林に遊び、終に亦俱に國に還る

婆私書牟尼、及與安低疊とは  
山林に梵行を修し、父亦本國に還る

是の如き等の先勝は、正法を善く名稱せり

【奄婆梨】 アムバ  
リリーシヤ Anubari  
(Sa)

【頭樓婆】 サール  
ガ(Prithi) 國。

【頭樓摩】 ドルマ  
トクシヤ Drumā

【安低疊】 アムテ  
王。 イデーゾ Antide

(Vii)

悉く王の領國に還ること、檀の世間を照らすが如し  
是故に山林を捨てて、正法もて化するも過に非ず」と  
太子大臣の、愛語饒益の説を聞くに

常理を以て亂さず、無礙にして庠序たり

固志安隱に説く、而も大臣に答ふらく

有無等に猶豫せば、一心の疑惑増す

而も有無の説を作すも、我決定して取らず

淨智もて苦行を修せば、決定して我自ら知る

世間は猶豫して論じ、展轉して相傳習するは

眞實の義有ること無し、此れ則ち我安からざるなり

明人は眞偽を別つ、信豈他に由つて生ぜんや

猶し生盲人の、盲人を以て導と爲すが如く

夜大闇中に於て、當に復何の所にか從ふべき

淨不淨の法に於て、世間は疑惑を生ず

説し眞實を見ずして、應に清淨の道を行すべくんば

寧ろ苦に淨法を行じ、樂に不淨を行するに非ずや

彼相承の説を見るに、一として決定相無し

眞言を虚心もて受くれば、永く諸の過患を離る  
 過れる虚偽の説を語るは、智者の言はざる所  
 説の如くんば羅摩等、家を捨てて梵行を修せん  
 終に本國に歸還して、五欲を服習せし者は  
 此等陋行と爲す、智者は依らざる所なり  
 我今當に汝が爲に、略して其要義を説くべし  
 日月地に墜ち、須彌雪山轉ずとも  
 我身終に易らず、退いて非處に入らば  
 寧ろ身を盛火に投ぜん、義を以てせざれば  
 畢に本國に還歸して、五欲の火に入らず  
 『斯要誓を表し已りて、徐ろに起つて長辭す  
 太子の辯鋒の炎は、猶し盛なる日光の如く  
 王師及び大臣、言論に能く勝つもの莫し  
 相謂つて『計已に盡きぬ、唯當に辭退して還るべし』と  
 深く太子を敬歎し、敢て強逼して留まらしめず  
 王命を敬奉するが故に、敢て速疾に還らず  
 中路に徘徊し、行適し顧みて遲遲たり

選擇せる點慧の人、審諦機悟の士を  
隱身もて密に伺候せしめ、然る後捨てて還る

佛所行讚卷第一  
終

# 佛所行記

卷第一

亦佛本行

經と六ふ

## 瓶沙王詣太子品第十

【瓶沙王詣太子品】  
 瓶沙王即ち頻羅沙  
 王王太子のもと  
 に赴いて歸城して  
 俗利に隨ふべきを  
 曉むるを明す  
 【恆河】 ガンガ  
 (Ganges)  
 【摩蹉】 梵にサリ  
 ト、クロー (Sāli  
 Tāla) 即ち者闍  
 闍山のこと  
 【五山の城】 王舎  
 城のこと、王舎城  
 の周圍には修行す  
 るに適する山五個  
 ありしを以てこの  
 名あり。

太子は王師、及び正法大臣を辭し  
 浪を冒して恆河を濟り、路を靈鷲の巖に由る  
 五山に藏根し、特に秀で綺中亭かなり  
 林木花果は茂り、流泉は温涼に分つ  
 彼五山の城に入りに、寂靜なること猶し天に昇るがごとし  
 國人太子を見るに、容徳深く且明かなり  
 少年の身に光澤有り、無比の丈夫の形なり  
 悉く奇特の想を起し、自在幢を見るが如し  
 横行せるは爲に足を止め、後に隨ふ者は速に馳せ  
 先に進んで悉く廻顧し、瞻目して視るも厭くこと無し

馬ウマ 鳴ナリ 菩ボ 薩サ 造ゾウ  
 北涼天竺三藏曇無讖譯



【白毫相】 三十二の間に白毫の毫ありて、清淨柔軟に細香のごとく、右旋宛轉して常に光明を放つをいふ  
 【網縷の手】 三十二指の一  
 【瓶沙王】 ビンヒサーラ (Pimpha) 王のこゝ、影堅と譯す  
 【惶惶】 おそるる貌

瓶沙王詣太子品第十

四體の諸の相好を、隨つて見て目を移さず  
 恭敬して來つて奉迎し、合掌し禮して問訊し  
 咸く皆大歡喜し、宜しきに隨つて供養す  
 尊勝顔を瞻仰し、俯して種種の形を愧づ  
 政素輕躁の儀も、寂默し肅敬を加ふ  
 結恨の心も氷解し、慈和の情願に増し  
 士女公私の業、一時に悉く休廢し  
 形を敬ひ其徳を宗び、觀るに隨つて盡く歸るを忘る  
 眉間の白毫相、脩廣紺青の目  
 舉體に金光曜き、清淨網縷の手  
 出家の形を爲すと雖も、聖王に應ずるの相有り  
 王舍城の士女、長幼悉く安からず  
 此人尙出家せるも、我等何の俗か歡ばん  
 爾時瓶沙王、高觀の上に處し  
 彼諸の士女の、惶惶として常儀に異れるを見  
 勅して一の外人を召し、備に何の因縁たるやを問ふ  
 恭しく王の樓下に跪き、其に見聞せる所を白さく

音聞く釋氏種に、殊特殊勝の子有り

神慧世表に超え、應に王として八方を領すべきに  
今出家して此に在り、衆人悉く奉迎す

王聞いて心に驚喜し、形留るも神は已に馳す  
勅して使者に速に還り、進趣の宜を伺候せしむ

教を奉じて密に隨從し、施爲する所を瞻察するに  
澄清なる端目もて視、岸歩して眞儀を顯す

里に入りて乞食を行じ、諸の乞士の光と爲る  
形を斂めて心亂れず、好惡安んせざる靡し

精露は所得に隨ひ、鉢を持して閑林に歸る  
食し訖りて清流に漱ぎ、樂靜にして安かなること白山のごとく

青林高岸を別ち、丹華を具間に殖う  
孔雀等の衆鳥は、翻飛して亂鳴し

法服を助けて鮮明なること、日の扶桑を照らすが如し  
使彼安住するを見、次第を具に上聞せり

王聞いて心に馳敬し、即ち勅して駕を嚴にして行く  
天冠に花服を佩び、師子王は遊歩す

【扶桑】東海中にありといふ大なる神木

【摩醯首羅】マ  
ーシユヅラ(Mahā  
Svara) 自在天のこ  
と。

諸宿重を簡擇せる、安靜審諦の士は  
導從百千衆と、雲の白山に騰昇するがごとし  
菩薩の嚴儀を見るに、諸情根を寂靜にし  
山巖室に端坐すること、月の青天に麗かなるが如し  
妙色淨く端嚴なること、猶し法化身の若し  
虔心肅然として發り、恭しく歩み漸く親近す  
猶し天帝釋の、摩醯首羅に詣るが如し  
容を斂め禮儀を執り、彼和安を徵問す  
菩薩詳にして動じ、隨順して反つて相酬ゆ  
時に王勞問し畢りて、清淨なる石に端坐し  
瞻矚して神儀を瞻る、顔和し情交悦ぶ  
『伏して聞けるに名高族は、盛徳を相承して襲け  
欽情久しく蘊積せりと、今所疑を決せんと欲す  
日光の元宗は、祚の隆なること已に萬世  
徳をして遺嗣に紹がしめ、弘廣して今に萃る  
賢明は年幼少にして、何が故に而も出家せるや  
超世の聖王子、乞食して榮を存せず』

妙體に應に香を養ふべきに、何が故に嬰裝を服せるや  
手に宜しく天下を握るべきに、反つて以て薄浪を受く  
若し父王に代つて、禪を受け其土を享けずんば  
吾今牛闘を分たん。庶望くば少しく情を留めよ  
既に親嫌を免逼せば、時過ぎて所從に隨へ  
當に我誠言を體すべし、貪と徳とは良隣たり  
或は名勝族を恃み、才徳容貌兼ぬ  
高節を降し、屈下して人恩を受けんことを欲せず  
當に勇健の上、器械と隨軍の資とを給すべし  
自力もて廣く收羅せば、天下孰か推さざらん  
明人の時を知りて取れば、法財と五欲とを増す  
若し三利を獲ざれば、終始徒勞もて勤めん  
法を崇び財色を捨つれば、財を一分人と爲す  
富財もて法欲を捨つれば、此れ則ち財資を保つ  
貧窶にして法を忘る、五欲孰か能く歡ばん  
是故に三事俱なれば、徳流れて道宣ふ  
法財と五欲と稱るを、世に大丈夫と名く

【曼陀】 マーリンド  
ートリ (Mantha  
ゴ) 日種の古代轉  
輪王。

【綯繆】 倚附して  
はなれざること。

圓相身をして、徒勞して功無からしむること無かれ  
曼陀轉輪王は、四天下を王領し  
帝釋半坐を分つも、力天に王たること能はず  
今汝が隋長なる臂は、人天の境を攬るに足る  
我王力を恃んで、而も強ひて相留めんことを欲せざるも  
汝が形好を改めて、出家の衣に愛著せるを見  
既に以て其徳を敬ひ、矜苦する其人を惜む  
今行乞して求むるを見て、我願つて其王を奉らん  
少壯にして五欲を受け、中年にして用財と習ひ  
年耆いて諸根熟するは、是れ乃ち法に順するの時なり  
壯年にして法財を守らば、必ず欲の爲に壞せられん  
老ゆれば則ち氣虚微、隨順して寂黙を求め  
青年は財欲を愧づれば、行法は世を擧げて宗ぶ  
壯年は心輕躁なれば、五欲の境に馳騁し  
儔侶の製纏綿し、情交相感して深し  
年宿れば綯繆寡く、順法者は宗はる  
五欲悉く休廢し、樂法の心を増長す



【答瓶沙王品】 王の世俗に著すべきを勸めしに對し、太子が愛欲、王位の排斥すべきことを答ふるを明す。

其に王者の法を崇め、大會に天神を奉じ、當に神龍の背に乗じて、樂を受け天に上昇すべし。先勝の諸の聖王は、身を寶瓔珞もて嚴り、祠祀して大會を設け、終に歸して天福を受く。是の如く瓶沙王、種種の方便もて説くも、太子の志堅固にして、動かざること須彌の如し。

答瓶沙王品第十一

瓶沙王隨順し、安慰し勸請し已り。太子敬うて答謝すらく、「深く來言に感じぬ。善く世間の宜を得、所説理に乖かず。訶梨は名族の胄なり、人の爲に善知識たり。義懐の心虚しく盡くるも、法は應に是の如く説くべし。世間に説く凡品は、仁義に處すること能はず。薄徳もて近情に遇ふ、豈名勝の事に達せんや。先勝の宗を承習し、崇禮もて敬讓を修せん。

能く苦難の中に於て、周濟して相棄てず

是を則ち世間の、眞善知識の相と爲す

善友は財もて通じて濟へば、是を牢固藏と名く

守惜して己利に封ぜば、是れ必ず速に亡失せん

國財と非常の寶を、惠施するは福業たり

兼ねて善知識に施せば、散すと雖も後に悔無し

既に汝が厚懷を知れば、違逆の論を爲さざるも

且く今所見を以て、率心に相告げん

生老病死を畏るれば、眞の解脱を求めんと欲す

親を捨てて恩愛に離れ、豈還つて五欲を習はんや

盛なる毒蛇、凍電猛盛火を畏れざるも

唯五欲の境を畏れ、流轉は我心を勞す

五欲の非常の賊たる、人の善珍寶を劫め

詐僞にして虚しく非實なること、猶し幻化人の若し

暫く思ふすら人をして惑はしむ、況んや常に其中に處せんをや

五欲は大礙たり、永く寂滅の法を障ふ

天樂は尙不可なり、況んや人間の欲に處せんや

五欲は渴愛を生じ、終に満足の時無し

猶し盛風の猛火に、薪を投ずるも亦足る無きがごとし

世間の諸の非義、五欲の境に過ぎたるは莫し

衆生愚貪の故に、樂著して覺らず

智者は五欲を畏るれば、非義に墮せず

王は四海の内を領し、猶外に更に希求す

帝釋半座を分つも、鬪らんと欲せば命終を致すなり

農沙は苦行を修し、三十三天に王たるも

縱なる欲あり心高慢なれば、仙人に歩車を掩かしむ

斯放逸の行に縁て、即ち蟒蛇中に墮せり

畢羅轉輪王は、忉利天に遊び

天女を取りて后と爲し、仙人の金を賦斂す

仙人忿つて呪するが如く、國滅して命終せり

波羅大帝釋たり、大帝釋農沙たり

農沙帝釋に歸するも、天主豈常有らんや

國土は堅固に非ず、唯大力の居る所

草衣を被服し、果を食し流泉を飲み

【農沙】 ナフシヤ  
(Nahusa)

【畢羅】 ブルーラ  
ツメ (Pururavas)

【波羅】 バリ (Ba  
ra)

【千臂】 梵にウケ  
ラーユダ (Ucchra-  
yudha) といふ。

長髮地に垂るるが如く、寂黙して所求無し  
是の如き苦行を修するも、終に欲の爲に壞せらる  
當に知るべし五欲の境は、行道者の怨家なり  
千臂の大力王の、勇健なるも敵と爲すこと難し  
羅摩仙人の殺も、亦貪欲に由ての故なり  
況んや我利利種、欲の爲に牽かれざらん  
少味の境界欲すら、子息長せば彌増し  
慧者の惡む所、欲毒を誰か服食せん  
種種に苦んで利を求むるも、悉く貪に使せらる  
若し貪欲無き者は、勤苦すれば則ち生ぜず  
慧者は苦の過を見て、貪欲を滅除す  
世間に謂ひて善と爲すもの、即ち皆是れ惡法なり  
衆生の貪樂する所、諸の放逸を生ずるが故に  
放逸は反つて自ら傷け、死して當に惡趣に墮すべし  
勤方便の所得は、而も方便に護られ  
勤めざるは自ら亡失し、方便も能く留むるに非ず  
猶し假借物の如し、智者は貪著せず

貪欲を勤苦して求め、得て以て愛著を増す

非常難散の時に、益復苦惱を増す

炬を執つて還つて自ら燒くがごとく、智者は著せざる所なり

愚癡卑賤の人は、饕食の毒もて心を焼く

終身長く苦を受け、未だ曾て安樂を得ず

貪患は蛇毒の如く、智者何に由つてか近づかん

勤苦して枯骨を嚼むとも、無味にして充飽せざらん

徒に自ら牙齒を圍む、智者の嘗めざる所なり

王と賊と水火とを分ち、惡子等財を共にすること

亦臭段肉に、一聚せる群鳥の争ふが如し

貪財も亦是の如し、智者の欣ばざる所なり

有財所集の處は、多く怨憎を起し

晝夜に自ら守衛すること、人の重怨を畏るるが如し

東市の標下を殺すは、人情の憎惡する所

貪志癡を長く擲するも、智者は常に遠離す

山林河海に入るは、多く敗れて少しく安し

樹高ければ條に果るが如く、貪取は多く死に墮す



【鳩羅步】(Kunava) クラゾ  
 子孫。  
 【弼慈賦】(Vijñā) ヤヅ  
 リ子孫。  
 【難陀】(Andaka) アンダカ  
 シネトリの孫。  
 【彌鄰利】(Mithila) マイテ  
 イ。  
 【檀荼】(Dandaka) ダンダカ  
 (Dandaka)  
 【孫陶】(Sunda) スンダ  
 (Sunda)  
 【鉢孫陶】(Pasunda) ウパス  
 ンダ  
 【阿修羅】(Asura) アシユ  
 ラ

貪欲の境是の如く、見ると雖も取るべきこと難し  
 苦の方便もて財を求むるは、集め難くして散じ易し  
 猶し夢の所得の如く、智者豈保持せんや  
 偽は火坑を覆ふが如く、踏む者は必ず焼死せん  
 貪欲の火も是の如く、智者の造ばざる所なり  
 彼鳩羅步、弼慈賦難陀  
 彌鄰利檀荼の如く、屠家の刀机の如し  
 愛欲の形も亦然り、智者の爲さざる所なり  
 束身して水火に投じ、或は高巖に投じて  
 而も天樂を求むるも、徒に苦しんで利を獲ず  
 孫陶と鉢孫陶と、阿修羅の兄弟は  
 同生して相愛念し、欲の爲に相殘殺せり  
 身死すれば名俱に滅す、皆貪欲に由るが故なり  
 貪愛は人を賤しましめ、鞭杖駭策の苦あり  
 愛欲は卑しき希望なれば、長夜に形神疲れ  
 麋鹿は貪聲に死し、飛鳥は色食に隨ふ  
 淵魚は鉤餌を食り、悉く欲の爲に困めらる

資生の具を觀察するに、自在法たるに非ず

食は以て飢患を療し、渴を除くが故に水を飲む

衣被は風寒を却け、臥して以て睡眠を治す

行きて疲るるが故に乘を求め、立つこ倦めば床座を求む

垢を除くが故に沐浴し、皆苦を息めんが爲の故なり

是故に應當に知るべし、五欲は自在に非ず

人熱病を得て、諸の冷治の薬を求むるが如し

食り求めて苦患を止むるを、愚夫は自在と謂ふ

而も彼資生の具は、亦定めて苦を止むるに非ず

又苦法を増さしむ、故に自在法に非ず

濕衣は常樂に非ず、時過ぎなば亦苦を生ず

月光 夏は則ち涼しく、冬は則ち寒苦を増す

乃至世の八法、悉く決定相に非ず

苦樂の知は不定なり、奴と王とに豈聞有らんや

教令を業の奉用せば、王を以て勝者と爲すも

教令は即ち是れ苦、猶し擔うて能く重きに任ふるがごとし

普く世の輕重を録るに、衆苦は其身に集る

王と爲りて多く怨憎せられ、親と雖も或は忠を成ず  
親無くして獨立するも、此れ復何の歡びか有らん  
四天下に王たりと雖も、用て皆一に過ぎざらん  
萬事を營求して、唐に苦んで何んが身を益せん  
貪求を止むるに若かず、息事は大安たり  
王に居しては五欲の樂あらんも、王たらざれば閑寂の歡びあらん  
歡樂既に同等なり、何んが王位を用て爲さん  
汝方便を作して、我を五欲に導くこと勿れ  
我情の期する所は、清涼なる虚通の道なり  
汝相饒益せんと欲して、我所求を助成す  
我怨家を畏れず、生天の樂を求めず  
心に俗利を懷かさざれば、而も天冠を捨つ  
是故に汝が情に違し、來旨に従はざるなり  
毒蛇の口を免るるが如し、豈復還つて執持せんや  
炬を執つて自ら焼く、何んが能く速に捨てざらん  
目有るに盲人を羨むごとく、已に解せるに復縛を求む  
富者は貧窮を願ひ、智者は愚癡を習ふ

世に此の如きの人有らば、則ち我應に國を樂むべし  
生老死を度せんと欲せば、身を節して乞食を行はじ  
寡欲にして空閑を守れば、後世に惡道を免れん  
是れ則ち二世の安なり、汝今我を哀む勿れ  
當に王者たるを哀むべし、其心常に虚渴し  
今世に安きを獲ず、後世に苦報を受く  
汝名勝の族を以て、大丈夫の禮義あり  
厚く懷うて我を處し、同世の歡娛を樂まんとす  
我も亦應に徳に報すべし、汝と其利と同じからんことを勸む  
若し三品の樂を習ふを、是を世の丈夫と名けば  
此亦非義たり、常に求めて足る無きが故なり  
若し生老死無くんば、乃ち大丈夫と名けん  
汝の言は少しく輕躁なり、老いて則ち應に出家すべしと  
我年の青いたる者を見るに、力劣つて堪ふる所無し  
盛壯時の、志猛く心決、定せるには如かじ  
死の賊劍を執りて隨ひ、常に其便を伺求せり  
豈年の老ゆるに至つて、志を遂げ出家せんを聽さん

無常は獵師たり、老は弓病は利箭なり  
生死の曠野に於て、常に衆生の鹿を伺ふ  
便を得ば其命を斷つ、孰か年壽の終るを聽かん  
夫れ人の所爲は、若は生若は滅の事なり  
少長及び中年、悉く應に勤めて方便すべし  
祠祀して大會を修する、是れ皆愚癡の故なり  
應當に正法を崇び、反殺して以て天を祠り  
生を害して福を求むるは、此れ則ち無慈の人なり  
生を害すれば果有ること常なり、猶尙應に殺すべからず  
況んや復無常を求め、而も生を害して祠祀せんをや  
若し戒聞慧無きに、禪寂靜を修せん者は  
應に世間に從つて、祠祀し大會を設くべからず  
殺生は現に樂を得んも、慧者は應に殺すべからず  
況んや復衆生を殺して、後世の福を求めんをや  
三界有爲の果は、悉く我所樂に非ず  
諸趣は流動の法なれば、風水の草を擲はすが如し  
是故に我の遠く來れるは、眞の解脱を求めんが爲なり



聞く阿羅藍有り、善く解脫の道を説くと

今當に往いて彼、大仙牟尼の所に詣るべし

誠言もて苦を抑斷せり、我今汝に誨謝す

願くば汝の闕安隱に、善く護ること帝釋の如く

慧明の天下を照すこと、猶し盛日の光の如くならん

殊勝の大地主、端心に其命を護れ

正化もて其子を護り、法を以て天下に王たれ

氷雪は火の怨たり、火に縁つて煙幢起る

煙幢は浮雲を成じ、浮雲は大雨を興す

鳥有り空中に於て、雨を飲み身を雨さす

重怨を殺して宅と爲し、居宅の怨を重殺す

重怨を殺す者有らば、汝今應に彼を伏すべし

其をして解脫を得しむること、飲むも身を雨らさざるが如くせよ、

時に王即ち叉手し、敬徳し心に歡喜し

汝の所求の如く、願くば果として速に成せしめよ

汝速に果を成じ已りなば、當に還つて我を攝受すべし

菩薩心内に許し、要す汝の隨に隨はしむんと

箭を交へて路に隨ひ、往いて阿羅藍に詣り、  
王諸の群屬と與に、合掌して自ら隨送す。  
咸く奇特の想を起し、王舍城に還る。

阿羅藍鬱頭藍品第十一

【阿羅藍鬱頭藍品】 太子が阿羅藍鬱頭藍二仙を訪れて道を求めしも得ずして去り、伽藍山苦行林中の苦行を經道場樹下の成道を説く。

【阿羅藍】 アラーダ (Arada) 數論派の論師といはる。【迦藍支族子】 カラーマサゴートラ (Kalamasgotra) (三)

【梵志】 ブラフマチャヤリン (Brahmacharin) 淨高と譯す。

甘蔗月光の宵、彼寂靜林に到り

牟尼、大仙阿羅藍に敬詣す

迦藍支族子、遠く菩薩の來るを見

高聲に遂に讚歎し、安慰して言はく、「善くぞ來りし」と

合掌交恭敬し、安吉なりや否やを相問ひ

相勞問し畢已り、庠序として坐に就く

梵志太子を見、容貌を審諦に儀し

沐浴して其德に伏すること、渴して甘露を飲むが如し

手を舉げて太子に告ぐらく、久しく汝の出家を知る

親愛纏鎖を斷すること、猶し象の羈を脱するが如し

深智覺慧明にして、能く斯毒果を免る

古昔の明勝王は、位を捨てて其子に付す

人の花蔓を佩び、朽つる故に棄捨する如くなるも

未だ汝が盛年にして、聖王の位を受けざるに若かず

汝の深固なる志を觀するに、正法の器たるに堪へたり

當に智慧の舟に乗じて、生死の海を超度すべし

凡そ人の誘ひ來つて學するには、才を審にして後教ふるも

我今已に汝の、堅固決定なる志を知る

但當に意に任せて學すべし、終に子に隱すこと無けん

太子其教を聞き、歡喜して報へて言はく

「汝平等の心を以て、善く海へて愛憎無し

但當に虚心に受けば、所願便ち已に獲べし

夜行くに炬火を得、迷方者は導を蒙り

海を渡るに輕舟を得るがごとく、我も今亦是の如し

今已に哀許を蒙り、敢て心の所疑を問はん

生老病死の患は、云何が免るべきや」

爾時阿羅藍、太子の所問を聞き

自ら諸經論を以て、略して其解説を爲す

【性】 プラクリテ  
イ (Prakriti) 物質  
的原理を現すに用  
ふる術語。  
【變】 ギカール  
(Vikar) 自性に  
對して變化する現  
象をいふ。  
【五大】 パンチャ  
ブータニーニ (Panc  
ahutani) 地水火  
風空の五要素をい  
ふ。  
【我】 アハムカー  
ラ (Ahamkara)  
【覺】 ブッテイ  
(Buddhi)  
【見】 アザヤクタ  
(Avyakta)  
【知因者】 クシエ  
ートラジニニヤ  
(Ksetrajña)  
【迦毘羅】 カピラ  
(Kapila)  
【波闍波提】 プラ  
ツヤーパ、テイ (Pr  
ajapati)  
【見】 ギヤクタ  
(Vyakta)

『汝は是れ機悟士、聰中の第一たり』

今當に我説を聴くべし、生死起滅の義とは

性と變と生と老と死となり、此五を衆生と爲す

性とは純淨たり、轉變とは五大

我と覺と及び見と、隨境根を變と名く

色と聲と香と味と觸と、是等を境界と名く

手と足と語と二道と、是五を業根と名く

眼と耳と鼻と舌と身と、是を名けて覺根と爲す

意根は二義を兼ね、亦業とも亦覺とも名く

性の轉變を因と爲す、知因者を我と爲す

迦毘羅仙人、及び弟子眷屬は

此我の要義に於て、修學して解脱を得たり

彼迦毘羅とは、今の波闍波提なり

生老死を覺知する、是を説いて名けて見と爲す

上と相違する者を、説いて名けて不見と爲す

愚癡と業と愛欲と、是を説いて轉輪と爲す

若し此三種に住せば、是衆生は離れず

【不見】 アガヤク  
タ (Avyakta)

【愚癡】 アアエニ  
ヤーナ (Ahiṃsā)

【業】 カルマ (Ka  
rma)

【愛欲】 アアエニ  
ナ (Iṃsā)

【不信】 ギブラト  
ヤヤ (Vipruṅgya)

【疑】 サムデーハ  
マ (Sāndeha)

【濫】 アアサム  
ブラ (Abhisampra  
va)

【不別】 アアエ  
ンヤ (Aviśaṅga)

【無方便】 アヌハ  
ラ (Anupāya)

不信と我と疑と濫と、不別と無方便と

境界に深く計著し、我所に纏縮し

不信は顛倒の轉じ、異作し亦異解す

我説き我知覺し、我去來し我住し

是の如き等の計我、是を我作轉と名く

諸性に於て猶豫し、是非實を得ず

是の如き不決定、是を説いて名けて疑と爲す

若し法は我と説けば、彼は即ち是れ意と説き

亦覺と業と説けば、諸數復我と説く

是の如く分別せざる、是を説いて總攬と名く

愚と黠と性と變と等しく、不了なるを不別と名く

禮拜して諸典を誦し、殺生して天祠を祀り

水火等しく淨と爲して、而も解脫の想を作す

是の如き種種の見、是を無方便と名く

愚癡に計著する所、意と言語と覺と業と

及び境界に計著する、是を説いて名けて著と爲す

諸物は悉く我所たり、是を名けて攝受と爲す



【癡】 アーラシ

【闇】 タマス (Tamas)

【癡】 モーハ (Moha)

【點慧】 プラテイ

【愚闇】 アバラブ

【顯現】 ボロクダ

此の如き八種の惑、生死に彌淪す

諸の世間の愚夫は、五節を攝受す

闇と癡と大癡と、瞋恚と恐怖となり

癡怖を名けて闇と爲し、生死を名けて癡と爲し

愛欲を大癡と名け、大人も惑を生ずるが故に

懐恨を瞋恚と名け、心懼るるを恐怖と名く

此愚癡の凡夫、五欲に計著す

生死は大苦の本、五道生に輪轉す

轉じて我見聞と、我知と我所作とを生じ

斯に縁て我を計するが故に、生死の流に隨順す

此れ因生に非ざれば、果も亦有生に非ず

謂く彼正思惟は、四法もて解脫に向ふ

點慧と愚闇と、顯現と不顯現と

若し此四法を知らば、能く生死を離る

生死既に盡きなば、無盡處を逮でせん

世間の婆羅門は、皆悉く此義に依る

梵行を修行し、亦人の爲に廣説す

太子斯説を聞いて、復阿羅藍に問はく、

「云何が方便と爲す、究竟して何所にか至る

何等の梵行を修行し、復應に幾時か齊むべき

何が故に梵行を修する、法應に何所に至るべきや

是の如きの諸の要義、我爲に具足して説け」

時に彼阿羅藍、其經論に説くが如く

自ら慧の方便を以て、更に爲に略して分別す

「初め俗を離れて出家し、乞食に依倚し

廣く諸の威儀を集め、正戒を奉持し

少欲知足に止り、精進を所得に任せて

樂んで獨り閑居を修し、諸の經論を勤習し

食欲の怖畏、及び離欲の清涼なるを見

諸根の聚落を擲め、寂黙に安心し

欲惡不善、欲界の諸の煩惱を離れ

遠離して喜樂を生じ、初覺觀の禪を得

而も奇特の想を生じ、愚癡心に樂著す

心遠離の樂に依りて、命終して梵天に生ず

【梵天】 プラフマ  
ローカ (Prāṇāloka)

【光音天】アーバー  
スラデーブ (Abh  
hasradeva) 色界  
第二禪中の第三。  
【遍淨天】シニユバ  
クリトスナ (Sahh  
nikhana) 色界第三  
禪中の第三。

【廣果天】デーブ  
ブリハトバラ (Dh  
vārahphala) 色  
界第四禪中の第三

慧者は能く自ら知り、方便して覺觀を止め  
精勤して上進を求め、第二禪相應す

彼喜樂に味著せば、光音天に生ずることを得

方便もて喜樂を離るれば、第三禪を増修す

安樂もて勝を求めざれば、遍淨天に生ず

彼意樂を捨つれば、第四禪を速得す

苦樂已に俱に息まば、或は解脫の想を生ず

彼四禪の報に任ぜば、廣果天に生ずることを得

彼久壽を以ての故に、之を名けて廣果と爲す

彼禪定に於て起つて、有身に過を爲せるを見

増進して智慧を修し、第四禪を厭離す

決定増進して求め、方便して色欲を除けば

始めて自身諸竅しく、漸次に虛空を修し

終に則ち堅固分し、悉く空觀を成す

空觀の境界を略して、進んで無量識を觀す

内の寂靜を善くし、我及び我所を離れ

無所有を觀察する、是れ無所有處なり

【文問】 ムンジャ  
(Munja) 菅の如き  
草。

【林祇沙】 ジャイ

ギーシヤギヤ (Ji  
Giyaya)

【閻那伽】 ジャナ

カ (Janaka)

【波羅沙】 パラー

シヤラ (Parasara)  
以上の四師は共に  
數論の論師なり。

文闍の皮骨離れ、野鳥の焚籠を離れ

境界を遠離することく、解脱し亦復然り

是れ上婆羅門、形を離れて常に書きす

慧者は應當に知るべし、是を眞の解脱と爲す

汝が所問の方便、及び解脱を求むとは

我上の所説の如し、深く信ずる者は當に學すべし

林祇沙仙人と、及び閻那伽と

毘陀と波羅沙と、及び餘の求道者とは

悉く此道に従へて、而も眞の解脱を得たり

太子彼説を聞いて、其義趣を思惟し

其先の宿縁を發し、復重ねて請問すらく

汝が勝智慧、微妙深細の義を聞くに

知因に於て捨せざる、則ち究竟道に非ず

性の轉變知因を、説いて解脱と言はば

我是生法を觀じて、亦種子法と爲す

汝謂ふ、我の清淨なる、則ち是れ眞の解脱なりと

若し因縁の會に遇はば、則ち應に邊つて復縛すべきこと

猶し彼種子の如し、時に地水火風

離散して生理乖くも、縁に遇はば種復生ず

無知業因の愛を、捨せば則ち解者と名く

我を存するの衆生は、畢竟して解脱無し

處處に三種を捨てて、復三勝を得

我常有を以ての故に、彼則ち微細に隨ふ

微細の過隨ふが故に、心則ち方便を離る

壽命長久を得ば、汝は眞の解脱と謂ふ

汝我所を離ると言ふ、離るれば則ち有ること無し

衆數既に離れず、云何が求那を離れん

是故に求那有れば、當に知るべし、解脱に非ず

求尼と求那と、義異にして體一なり

若し相離ると言はば、終に是處有ること無けん

暖色の火を離れて、別の火得べからず

譬へば身の前の如し、則ち身有ること無くんば

是の如き求那の前に、亦求尼有ること無し

是故に先に解脱するも、然る後に身の縛と爲る

【求那】ゲナ（ゴ  
ニ）性質の意。

【求尼】ゲニン  
(nim) 性質を具  
するもの、物質の  
意なり。



【偈讚】 ウツダラ  
カ (Ihanka)

【伽藍】 ガヤー  
(Gaya)

又知因身を離るれば、或は知或は無知なり  
 若し有知と言はば、則ち應に所知有るべし  
 若し所知有らば、則ち解脱を爲すに非ず  
 若し無知と言はば、我則ち所用無し  
 我を離れて知有らば、我は即ち木石に同じ  
 共に其精靈を知り、羸に背いて微を崇む  
 若し能く一切を捨てば、所作則ち畢竟せん  
 阿羅藍の説に於て、其心を悦ばすこと能はず  
 一切智に非ざるを知り、應に行いて更に勝を求むべし  
 往いて耆陀仙に詣るに、彼も亦有我を計す  
 細微の境を觀ずと雖も、想と不想との過を見ず  
 離想非想に住して、更に出塗有ること無し  
 衆生彼に至るを以て、必ず當に遇つて退轉すべし  
 菩薩出を求むるの故に、復耆陀仙を捨て  
 更に勝妙の道を求め、進んで伽藍仙に登る  
 城を善行林と名け、五比丘先に住せり  
 持戒もて苦行を修し、被善行林に居す

【尼連禪】 ナイラ  
ンジヤナー (Nairā  
ṇajana)

【鳩牟頭】 クムダ  
ーナー (Kumudā  
nī) 白蓮花のこと。

尼連禪河の側、寂靜甚だ樂むべし  
菩薩即ち彼に於て、一處にして靜に思惟す  
五比丘彼の、精進もて解脱を求むるを知り  
心を盡して供養を加ふること、自在天を敬ふが如し  
謙卑して師事し、進止に常に離れず  
猶し修行者の如く、諸根心に隨つて轉ず  
菩薩は勤方便もて、當に老病死を度すべし  
專心に苦行を修し、身を節して寢を忘る  
淨心に齋戒を守るは、行人の堪へざる所  
寂黙して禪思し、遂に六年を経歴せり  
日に一麻米を食ひ、形體極めて消瘦せり  
末度を度せんと欲求するも、重惑逾更に沈む  
道は慧解に由りて成じ、不食は其因に非ず  
四體微劣なりと雖も、慧心轉た増明し  
神虚しく體輕微に、名徳普く流聞せんこと  
猶し月の初生の如く、鳩牟頭量の敷くがごとし  
溢國に勝名流れ、士女競ひ來つて觀ん

【閻浮樹】 ジャム  
ブムラ  
mūla)

苦形枯木の如く、垂ど六年に満たんとす

生死の苦を怖畏し、専ら正覺の因を求む

自ら催ふに此に由つて、離欲寂觀生ずるに非ず

木だ若かず我先時、閻浮樹下に於ける

所得の未曾有なるには、當に知るべし彼は是れ道なり

道は靡身の得に非ず、要す身力もて求むべし

飲食は諸根を充し、根境をば心を安からしむ

心安ければ寂靜に顯ひ、靜を禪定の基と爲す

禪に由りて聖法を知る、法力は得るも得難し

寂靜は生死を離れ、第一に諸垢を離る

是の如き等の妙法は、悉く飲食に由りて生ず

斷義を思惟し已りて、尼連の濱に溼浴し

浴し已りて池を出でんと欲するに、癩考なれば流く起つこと無し

天神樹枝を按じ、手を舉げ攀ちて出づ

時に彼仙林の側に、一牧牛の長有り

長女を離陀と名く、淨居天來りて告ぐるく

菩提林中に在り、汝處に往いて供養すべし

【難陀婆羅闍】 ナンダバラ( Nanda )  
【珂釧】 白瑪璃の腕環。

【菩提】 ボーダイ ( Bodhi ) 覺の義。

【吉祥樹】 アシムラッタ ( Asvattha )

難陀婆羅闍、歡喜して其所に到りて、

手に白珂釧を貫き、身に青染衣を服し

青白の相映發して、水淨きに沈漫するが如し

信心踴躍を増し、菩薩の足を稽首し

香乳糜を敬奉し、惟哀愍を垂れて受けたまへ

菩薩受けて食し、彼現法果を得たり

食し已りて諸根悦び、菩提を受くるに堪へたり

身體に光澤を蒙り、徳問轉た崇高なり

百川の海に増し、初月日の明を増すが如し

五比丘見已りて、驚いて嫌怪の想を起し

謂く、『其れ道心退せり、捨して善居を擇ばん』と

人の解脫を得たるが如く、五大悉く遠離し

菩薩獨り遊行して、彼吉祥樹に詣り

當に彼樹下に於て等正覺の道を成すべし

其地廣平にして正しく、柔澤の軟草生じ

安祥として師子の歩むがごとく、歩歩に地震動す

地動いて盲龍に感じ、歡喜すれば目開明す

言はく、曾て先佛を見しに、地の動相今の如し  
牟尼の徳は尊長なれば、大地の勝へざる所なり  
歩歩足して地を履むに、轟轟たる震動の聲あり  
妙光天下を照し、猶し朝日の明かなるが若し  
五百の群青雀、右適して空中に旋り  
柔軟清涼の風は、隨順して廻轉す  
斯の如きの諸の瑞相、悉く過去佛に同じ  
是を以て知る菩薩、當に正覺の道を成すべきを  
彼種草人より、淨柔軟の草を得  
樹下に布施し、正身して安坐す  
加趺して傾動せず、龍の身を絞縛せるが如し  
要す斯坐を起たずして、其所作を究竟せん  
斯眞誓言を發せば、天龍は悉く歡喜し  
清涼の微風起り、草木は條を鳴さす  
一切の諸の禽獸、寂靜にして、悉く聲無く  
斯れ皆是菩薩の、必ず覺道を成するの相なり



破魔品第十三

【破魔品】 菩薩の成道に忿れる魔の種種の方便もて菩薩を瞋せしめんとするも遂にこれを破すを明す。

【五欲自在王】 カーマデーツ (Kama deva)

【波旬】 パービーヤン (Papiyan) 悪と譯す。

【欲染】 ラテイ (Kati)

【能悦人】 フリーテイ (Priti)

【可愛樂】 トリシヤ (Trisha)

仙王族大仙、菩提樹下に於て

堅固の誓を建立し、要す解脱道を成ぜん

鬼龍 諸の天衆、悉く皆大歡喜せざるに

法怨魔王、獨り憂へて悦ばず

五欲自在王は、諸の戰鬪の藝を具し

解脱者を憎嫉す、故に名けて波旬と爲す

魔王に三女有り、美貌と善儀容とあり

種種の惑人術、天女中の第一たり

第一を欲染と名け、次を能悦人と名け

三を可愛樂と名く、三女俱時に進みて

父波旬に白して言さく、「不審何ぞ憂戚せるや」

父は具に其事を以て、寫情して諸女に告ぐるく

「世に大牟尼有り、身に大誓の鏡を被

大我の弓、智慧剛利の箭を執持し

戰うて衆生を伏し、我境界を破壊せんと欲す  
我一旦は如かず、衆生彼を信じて

悉く解脱道に歸し、我土則ち空虛ならん

譬へば人の犯戒せば、其身則ち空虛なるが如し

及び慧眼未だ開かざれば、我國猶安きを得ん

當に往いて其志を壞し、其橋梁を斷截すべし

弓を執り五箭を持し、男女の脊馬を俱にし

彼吉安林に語り、衆生の安からざらんを願はん

牟尼の靜默なる、三有の海を度せんと欲せるを見て

左手に強弓を執り、右手に利箭を弾きて

菩薩に告げて言はく、『汝利利速に起て

死は甚だ怖畏すべくんば、當に汝自ら法を修し

解脱の法を捨離し、戰を得うて施福を會し

諸の世間を調伏し、終に生天の樂を得べし

此道は善き名稱、先勝の所行なり

仙王高宗の青なれば、乞士は所應に非ず

今若し起たずんば、且く當に汝が意を安んずべし

【三有】欲、色、無色  
の三界のこと

【利利】クニヤト  
リヤニヤト、  
種階級の第二位、  
武士の階級なり。

【暹羅】 イダー  
(Siam) 暹羅月光の  
孫とはラーマの孫  
イダーの子プルラ  
瓦斯 (Puravas)  
をいふ。

【惕然】 恥ぢおそ  
るる貌。

慎んで要誓を捨つる莫らんか、我一の放箭を試みん  
暹羅月光の孫は、亦我此箭に由る

小しく觸るれば風の吹くが如く、其心に狂亂を發す  
寂靜の苦行仙は、我此箭聲を聞いて

心即ち大いに恐怖し、惛迷して本性を失ふ  
況んや汝末世の中に、我此箭を脱せんことを望まんや  
汝今速に起たば、幸に安全を得べし

此箭は毒熾盛にして、慷慨して戰掉せん  
計力箭に堪ふる者も、自ら安きこと猶尙難し  
況んや汝箭に堪へず、云何が能く驚かさらん』

魔斯の如きの事を説いて、菩薩を迫脅す  
菩薩は心怡然たれば、疑はず亦怖れず  
魔王即ち箭を放ち、兼ねて三玉女を進ましむ

菩薩箭を視ず、亦三女を顧みず  
魔王惕然として疑ひ、心口に自ら相語らく  
『曾て雪山女の爲に、魔醜首羅を別て

能く其心を變ぜしめしに、而も菩薩を動かさず

復此箭、及び天の三玉女も

能く其心を移す所を以て、憂恚を起さしむるに非ず

當に更に軍衆を合し、力を以て強ひて逼迫すべし」と

此思惟を作す時、魔軍忽然として集る

種種に各異形にして、戟を執り刀劍を持し

戟樹に金杵を提り、種種戰鬥の具あり

猪魚驢馬の頭、駝牛兕虎の形

獅子龍象の首、及び餘の禽獸の類

或は一身多頭あり、或は面に各一目なるあり

或は復衆多の眼あり、或は大腹長身あり

或は縮瘦して腹無く、或は長脚大膝なるあり

或は大脚肥躡なるあり、或は長牙利爪なるあり

或は無頭目面なるあり、或は兩足多身あり

或は大面傍面あり、或は灰土の色を作し

或は明星の光に似、或は身に烟光を放ち

或は象耳の山を負ふごとく、或は被髮裸身なるあり

或は被服の皮革なるあり、面色半赤白なるあり

【髻】 からんだ  
【髮】 ほら貝の  
【螺髻】 如く束ねたものとど

或は虎皮の衣を著し、或は復蛇皮を著し  
或は腰に大鈴を帯び、或は髻髮螺髻あり  
或は散髮身を被ひ、或は人の精鬼を吸ひ  
或は人の生命を奪ひ、或は超擲大呼するあり  
或は奔走して相逐ふあり、逃して自ら相打害するあり  
或は空中に旋轉するあり、或は樹間に飛騰するあり  
或は呼叫吼喚するあり、惡聲は天地に震ふ  
是の如きの諸の惡類、菩提樹を圍遶し  
或は身を擘裂せんと欲し、或は復吞瞰せんと欲し  
四面より放つ火は燃え、烟焰盛に天を衝く  
狂風四に激起し、山林普く震動せり  
風火烟塵合し、黒闇にして見る所無し  
愛法の諸の天人、及び諸の龍鬼等  
悉く皆魔衆を忿り、瞋恚の血淚流る  
淨居の諸の天衆は、魔の菩薩を亂し  
離欲無瞋心なるを、哀愍して彼を傷けんを見て  
悉く來りて菩薩を見るに、端生して傾動せず



無量の魔圍遶して、惡聲天地を動かすも  
 菩薩は安堵として臥し、光顔に異相無し  
 猶し師子王の、群獸の中に處するが如し  
 皆敬じて嗚呼し呼ぶ、奇特未曾有なりと  
 魔衆相駭策し、各其の威力を進め  
 迭に共に相催切し、須臾に摧滅せしめんとす  
 目を裂き齒を切り、亂れ飛んで超推せんとす  
 菩薩は默然として觀ること、童兒の戯るるを看るが如し  
 衆魔益忿恚し、戰鬥力を倍増するも  
 石を抱くも擧ぐることも能はず、擧ぐる者も下すことも能はず  
 矛戟利箭を濞ばすも、虛に凝つて下らず  
 雷霆の大雹を雨らすも、化して五色の花を成す  
 惡龍蛇の噬ける毒も、化して香風の氣を成じ  
 諸の種種の形類の、菩薩を害せんと欲せる者も  
 顛動せしむること能はず、事に隨つて還つて自ら傷ふ  
 魔王に姉妹有り、彌伽迦利と名く  
 手に觸骸の器を執り、菩薩の前に在り

【彌伽迦利】  
 梅  
 伽利 (Megh  
 akali)

種種の異儀を作し、姪惑もて菩薩を亂す

是の如き等の魔衆、種種なる醜類の身

種種の惡聲を作して、菩薩を恐怖せんと欲するに

一毛だも動すこと能はず、諸魔悉く憂戚せり

空中負多の神、身を隠して音聲を出し

『我人牟尼を見るに、心に怨恨の想無し

衆魔の惡毒の心は、無怨處に怨を生ぜり

愚癡の諸の惡魔は、徒勞にして爲す所無し

當に悲害の心を捨てて、寂靜默然として住すべし

汝が口氣もて、吹くも須彌山を動すこと能はず

火を冷かならしめ水を熾然たらしめ、地性を平軟に濡はしめんも

菩薩の、歷劫に修せる善果を壞すること能はず

菩薩は正思惟し、精進に勤めて方便し

淨智慧光明もて、一切を慈悲す

此四の妙功德、能く中に斷截し

而も爲に留難を作し、正覺道を成ぜざらしむること無けん

日の千の光明の如く、必ず世間の闇を除かん

木を鑽つて火を得、地を掘つて水を得

精勤し正方便もて、求めて而も獲ざること無し

世間救護無ければ、中に貪恚癡の毒有り

衆生を哀愍するが故に、智慧の良薬を求む

世の爲に苦患を除く、汝云何が憊亂する

世間の諸の癡惑、悉く皆邪徑に著す

菩薩は正路を習ひ、衆生を引導せんと欲す

世尊師を憊亂するは、是れ則ち大不可なり

大曠野の中に、商人を欺誑して導くが如し

衆生は大冥に墮し、所至處を知ること莫し

智慧の燈を燃さんが爲なるに、云何が滅せしめんと欲するや

衆生は悉く、生死の大海に漂没せり

智慧の舟を修せんが爲なるに、云何が没せしめんと欲するや

忍辱を法芽と爲し、固志を法根と爲し

律儀戒を地と爲し、覺正を枝幹と爲し

智慧の大樹に、無上法を葉と爲し

諸の衆生を蔭護せんに、云何がして伐たんと欲するや

貪恚癡の枷鎖は、衆生を輓縛し

長劫に苦行を修し、衆生の縛を解せんとなす

決定して今に成じ、此正基に於て坐す

過去諸佛の如く、堅く金剛臺を堅て

諸方悉く輕動せるに、惟此地のみ安隱なり

能く妙定を受くるに堪へ、汝が能く壞する所に非ず

但當に輕下心もて、諸の傲慢の意を除くべし

應に知識の想を修して、忍辱して奉事すべし』

魔空中の聲を聞き、菩薩の安靜なるを見

慚愧して傲慢を離れ、復道を天上に還る

魔衆悉く憂戚し、崩潰して威武を失ふ

鬪戰の諸の器械を、縦横に林野に棄つること

人の怨主を殺せば、怨黨悉く摧碎するが如し

衆魔既に退散し、菩薩の心虚靜なり

日光倍増明し、摩霧悉く除滅し

月明に衆星朗かなり、復諸の闇障無く

空中より天花を雨らし、以て菩薩を供養す

【阿惟三菩提品】  
菩薩成等正覺の内  
容及び梵天勸請を  
明す。

【第一義】 パラマ  
ールタ (Paramar-  
ta)

【六趣】 地獄、餓  
鬼、畜生、修羅、  
人、天。

阿惟三菩提品第十四

菩薩摩訶薩を降し已つて、志固く心安隱なり  
 第一義を求盡し、深妙の禪に入る  
 自在の諸の三昧、次第に現在前し  
 初夜に正受に入り、過去の生を憶念するに  
 某處某名より、此に來生せり  
 是の如き百千萬の、死生を悉く了知するに  
 生死を受くること無量、一切衆生の類  
 悉く曾て親屬たり。而も大悲心を起す  
 大悲心もて念じ已り、又彼衆生の  
 六趣の中に輪廻し、生死窮極すること無く  
 虚偽にして堅固無きこと、芭蕉夢幻の如きを觀じ  
 即ち中夜時に於て、淨天眼を達得せり  
 一切衆生を見ること、鏡中の像を觀するが如し  
 衆生の生と生死と、貴賤と貧富と



【惡趣】 ツルガツト (Durgati)

【地獄】 ナラカ (Naraka)

【畜生】 テイリヤキヨーン (Tiryakya Gyon)

清淨と不淨業と、随つて苦樂の報を受く  
惡業を觀察する者は、當に惡趣の中に生ずべく  
善業を修習する者は、人天の中に生ぜん  
若し地獄に生ずる者は、無量種の苦を受け  
洋銅を呑飲し、鐵槍は其體を貫き  
之を沸鑊湯に投じ、嘶けて盛火聚に入らしめ  
長牙の群犬に食はれ、利嘴鳥は腦を啄み  
火を畏れて叢林に赴けば、劍葉其體を截ち  
利刀其身を解し、或は利斧の斫剗あり  
斯極苦の毒を受くるも、業行は死せしめず  
不淨業を樂修し、極苦して其報を受く  
味著は須臾の頃なるも、苦報は甚だ久長なり  
戲笑は過因を種え、號泣して罪を受く  
惡業の諸の衆生、若し自報を見ば  
氣脈則ち應に斷ずべく、恐怖崩血して死せん  
諸の畜生業を造り、業は種種各異り  
死して畜生道に墮し、種種に各異身あり

【尸毘】  
シビ(三)

或は皮肉<sup>くわにく</sup>爲<sup>な</sup>に死<sup>し</sup>し、毛角骨尾羽<sup>けつこつこつせうよく</sup>あり

更互<sup>さらひ</sup>に相殘<sup>あひあひ</sup>殺<sup>ころ</sup>し、親戚<sup>しんせき</sup>還<sup>かへ</sup>相厭<sup>あひあひ</sup>ふ

重<sup>おも</sup>きを負<sup>お</sup>ひて腕<sup>うで</sup>を抱<sup>かか</sup>き、鞭策<sup>むちさく</sup>鉤錐<sup>こうすい</sup>の刺<sup>さ</sup>あり

體<sup>からだ</sup>を傷<sup>いた</sup>くれば膿<sup>うみ</sup>血流<sup>けつりゅう</sup>れ、飢渴<sup>きかく</sup>能<sup>よ</sup>く解<sup>と</sup>する無<sup>な</sup>し

展轉<sup>てんでん</sup>して相殘<sup>あひあひ</sup>殺<sup>ころ</sup>し、自在<sup>じざい</sup>力<sup>りき</sup>有<sup>あ</sup>ること無<sup>な</sup>し

虛空<sup>こくう</sup>水陸<sup>すいりく</sup>の中<sup>なか</sup>、死<sup>し</sup>を逃<sup>に</sup>れんに亦<sup>また</sup>處<sup>ところ</sup>無<sup>な</sup>し

慳貪<sup>けんたん</sup>増上<sup>ぞうじやう</sup>せる者は、餓鬼<sup>がき</sup>趣<sup>しゆ</sup>に生<sup>な</sup>ず

巨身<sup>こしん</sup>大山<sup>だいざん</sup>の如<sup>ごと</sup>く、咽喉<sup>いこう</sup>猶<sup>なほ</sup>針鼻<sup>しんび</sup>のごとし

飢渴<sup>きかく</sup>の火毒<sup>かどく</sup>燃<sup>も</sup>え、還<sup>かへ</sup>自ら其<sup>その</sup>身<sup>み</sup>を燒<sup>や</sup>く

求<sup>もと</sup>むる者に慳<sup>けん</sup>んで與<sup>あ</sup>へず、或<sup>ある</sup>は人の惠<sup>ゑ</sup>施<sup>せ</sup>を遮<sup>さへ</sup>り

彼<sup>かの</sup>餓鬼<sup>がき</sup>中<sup>ちゆう</sup>に生<sup>な</sup>じ、食<sup>じき</sup>を求<sup>もと</sup>むるも得<sup>え</sup>ること能<sup>あた</sup>はず

不<sup>ふ</sup>淨<sup>じやう</sup>人の棄<sup>す</sup>つる所<sup>ところ</sup>、飲<sup>いん</sup>まん<sup>めん</sup>と欲<sup>ほつ</sup>すれば變<sup>へん</sup>失<sup>しつ</sup>す

若<sup>わか</sup>し人<sup>ひと</sup>慳<sup>けん</sup>貪<sup>どん</sup>の、苦<sup>く</sup>報<sup>ほう</sup>是<sup>こ</sup>の如<sup>ごと</sup>きを聞<sup>き</sup>かば

肉<sup>にく</sup>を割<sup>わ</sup>いて以<sup>も</sup>つて人<sup>ひと</sup>に施<sup>ほ</sup>すこと、彼<sup>かの</sup>尸<sup>し</sup>毘<sup>び</sup>王<sup>わう</sup>の如<sup>ごと</sup>くならん

或<sup>ある</sup>は人<sup>ひと</sup>道<sup>だう</sup>中<sup>ちゆう</sup>に生<sup>な</sup>ぜんも、身<sup>み</sup>は行<sup>ぎやう</sup>廁<sup>てい</sup>に處<sup>じよ</sup>するがごとく

動<sup>どう</sup>轉<sup>てん</sup>極<sup>ごく</sup>大<sup>だい</sup>の苦<sup>く</sup>あり、出<sup>しゅつ</sup>胎<sup>たい</sup>に恐<sup>おそ</sup>怖<sup>ふ</sup>を生<sup>しやう</sup>ず

軟<sup>なん</sup>身<sup>しん</sup>なれば外<sup>げ</sup>物<sup>ぶつ</sup>に觸<sup>ふ</sup>るる、猶<sup>なほ</sup>し刀<sup>たう</sup>劍<sup>けん</sup>の截<sup>せつ</sup>の如<sup>ごと</sup>く

【衰死の五相】欲  
 界等の有相の天衆  
 が命終せんとする  
 ときに生ずる異相  
 一衣服垢穢、二頭  
 上華萎、三身體臭  
 穢、四腋下汗流、  
 五不樂本座これな  
 り。

彼宿業分に任せて、時として死有らざる無し  
 勤苦して生を求め、生を得て永く苦を受く  
 福に乗じて天に生ずる者も、渴愛常に身を燒き  
 福盡き命終るの時、衰死の五相に至る  
 猶し樹華の萎んで、枯悴せば光澤を失ふが如し  
 眷屬存亡に分れ、悲苦能く留ること莫し  
 宮殿廓然として空しく、玉女悉く遠離し  
 塵土の中に坐臥し、悲泣相戀慕し  
 生者は墮落を哀み、死者は生を戀ひ悲しむ  
 精勤して苦行を修し、生天の樂を貪求せば  
 既に此の如きの苦有り、鄙むべき哉何をか貪るべき  
 大方便もて得る所、別離の苦を免れず  
 嗚呼 諸の天人、脩短差別無し  
 積劫に苦行を修し、永く愛欲を離る  
 謂く決定して長く存ぜんも、而も今悉く墮落す  
 地獄に衆苦を受け、畜生は相殘害し  
 餓鬼は飢渴に逼られ、人間は渴愛に疲る

【輪轉するは等】  
以下大仙の正覺成  
ぜりまでは十二因  
縁を説く。

諸天は樂なりと云ふと雖も、別離は最大の苦なり  
迷惑して世間に生ずるも、一の蘇息處無し  
嗚呼生死の海、輪轉して窮り已むこと無けん  
衆生は長流に没し、漂泊して所依無し  
是の如きを淨天眼もて、五道を觀察するに  
虚偽にして堅固ならず、芭蕉の泡沫の如し  
即ち彼第三夜に、深く正受に入り  
諸の世間を觀察するに、輪轉するは苦の自性  
數數の生老死は、其數量有ること無し  
食欲寢闇の障、由つて出づる所を知る莫し  
正念もて内に思惟せば、生死何に由つてか起る  
決定して老死を知らば、必ず生の致す所に由らん  
人に身有るが如きが故に、則ち身痛隨つて有り  
又生は何の因に觀る、諸有の業に従つて見る  
天眼もて有業を觀するに、自在天の生に非ず  
自性に非ず我に非ず、亦復無因に非ず  
竹の初節を破れば、餘節則ち離無きが如し

- 【觸】 スバルシヤ (Sparsa)
- 【六入】 シヤダーヤタナ (Sikṣayāna)
- 【名色】 ナ！マルーバ (Namarūpa)
- 【識】 ビジユニヤナ (Viññāna)
- 【受】 ェーダナー (Vedāna)
- 【愛】 トリシユナ (Tṛṣṇā)
- 【取】 ウバーダーナ (Upādāna)

既に生死の因を見れば、漸次に眞實を見る  
 有業の取より生ずること、猶し火の薪を得るが如し  
 取は愛を以て因と爲すこと、小火の山を焚くが如し  
 愛は受より生ずるを知り、苦樂を覺つて安きを求む  
 飢渴せば飲食を求む、受の愛を生ずるも亦然り  
 諸受は觸を因と爲し、三等しく苦樂生ず  
 鑽燧に火を加ふれば、則ち火を得て用を爲すごとし  
 觸は六入より生ず、盲に明覺無きが故に  
 六入より名色起ること、芽の莖葉を長ずるが如し  
 名色は識に由つて生ずること、種の芽葉を生ずるが如し  
 識は還名色に従ひ、展轉更に餘無し  
 識に縁つて名色を生じ、名色に縁て識を生ず  
 猶し人船俱に進み、水陸更相運ぶがごとし  
 識の名色を生ずるが如く、名色は諸根を生ず  
 諸根は觸より生じ、觸は復愛より生ず  
 受は愛欲より生じ、愛欲は取より生ず  
 取は業有より生じ、有は則ち生より生ず



【有】(Va) バヅ (Bha)  
 【生】(Jati) ジャヤーテイ  
 【老死】(Ya) ジャララー  
 ムリトヤ (Janani)

【八道】 正見、正  
 思、正語、正業、正  
 命、正進、正念、正  
 定、正定の八聖道  
 をいふ。

生は老死より生じ、輪廻の周ること窮り無し  
 衆生は因縁より起り、正覺は悉く覺知せり  
 決定して正覺し已れば、生盡き老死滅す  
 有滅すれば則ち生滅し、取滅すれば則ち有滅す  
 愛滅すれば則ち取滅し、受滅すれば則ち愛滅す  
 觸滅すれば則ち受滅し、六入滅すれば觸滅し  
 一切入の滅盡は、名色の滅するに由る  
 識滅すれば名色滅し、行滅すれば則ち識滅す  
 癡滅すれば則ち行滅し、大仙の正覺成ぜり  
 是の如く正覺を成じ、佛は則ち世間に興る  
 正見等の八道は、坦然たる平直の路なり  
 畢竟じて我所無く、薪盡きて火滅するが如し  
 所作者は已作し、先づ正覺道を得たり  
 第一義を究意じて、大仙人空に入る  
 閑謝の明相生じ、動靜悉く寂黙たり  
 無盡法を逮得し、一切智の明朗かなり  
 大仙の徳は淳厚、地爲に普く震動す

【摩訶曼陀羅】マ  
ハーマンドラ(Ma  
hamandra) 大白  
蓮と譯す。  
【牟尼尊】ムニイ  
ンドラ(Muni-ind  
ra)

宇宙は悉く清明、天龍神雲集し、  
空中に天樂を奏し、以て法を供養す  
微風清涼に起り、雲無きに香雨を雨らす  
妙華非時に敷き、甘蔗節に違うて熟す  
摩訶曼陀羅、種類の天寶花  
空より亂れ落ち、牟尼尊を供養す  
異類の諸の衆生、各慈心もて相向へば  
恐怖悉く消除し、諸の傲慢心無し  
一切の諸の世間、皆滿盡人に同じ  
諸天は解脫を樂み、惡道暫く安寧たり  
煩惱暫く休息し、智月漸く明を増す  
甘蔗族の仙人、諸有の生天者  
佛の世に出興せるを見て、歡喜身に充滿す  
即ち天の宮殿に於て、花を雨らして以て供養す  
諸の天神鬼神、同聲に佛徳を讃  
世人は供養を見、及び讚歎の聲を聞く  
一切皆隨喜し、踊躍自ら勝へず

囉摩天王のみ有つて、心に大變苦を生ず  
佛彼七日に於て、禪思して心清淨なり

菩提樹を觀察し、瞻視して日暉がす

我此處に依つて、宿心願を遂ぐるを得たり

無我の法に安住し、佛眼もて衆生を觀ん

上の哀憐心を發して、清淨を得しめんと欲するも

貪患癡の邪見に、飄流して其心を没す

所脱は甚深の妙なれば、何に由つてか能く宜ぶることを得んや」

勤めて方便を捨離して、默然に安住せるも

顧みて本誓の願を惟ひ、復說法の心を生ず

諸の衆生を觀察するに、煩惱は孰か増徴ならん

梵天其念を知り、法塵に請うて轉せしむべし

昔く梵光 明を放ち、苦の衆生を度せんが爲に

來つて牟尼尊を見る、說法大人相

妙義悉く顯現し、實智の中に安住し

留難の過を離れて、諸の虛偽心無し

恭敬して心に歡喜し、合掌し勸請して言さく

世間何の福慶ぞ、大世尊に遭遇せる

一切衆生の類、摩穢滓雜の心あり

或は重煩惱有り、或は煩惱の輕微なるあり

世尊は已に、生死の大苦海を免度したまへり

願くば當に彼、沈溺せる諸の衆生を濟度したまふべし

世間の義士の、利を得ば物を與ふるに同じきが如く

世尊は法利を得たまへり、唯應に衆生を濟ひたまふべし

凡人は多く自利、彼我利を兼ぬること難し

唯願くば慈悲を垂れ、世の難中の難と爲りたまはんことを

是の如く勸請し已りて、奉辭して梵天に還る

佛は梵天の請を以て、心悦び其誠を嘉す

大悲心を長養し、其說法の情を増す

當に乞食を行すべきを念せば、四王威く鉢を奉ず

如來法の爲の故に、四を受け合して一を成す

時に商人の行く有り、善友天神の告ぐらく

大仙牟尼尊、彼山林中に在り

世間の良福田たり、汝應に往いて供養すべし

命を聞いて大いに歡喜し、初飯を奉施す  
食し已りて顧みて思惟すらく、誰か應に先んじて法を聞くべき  
唯阿羅藍、憍頭羅摩子有るのみ

彼正法を受くるに堪へたるも、而も今已に命終せり

次に五比丘有り、應に初説法を聞くべし」

寂滅の法を説かんと欲す、日光の冥を除くが如し

波羅捺、古仙人の住處に行詣し

牛王の目平視し、安庠として師子のごとく歩み

衆生を度せんが爲の故に、往いて迦尸城に詣る

歩歩獸王は顧み、顧みて菩提林を瞻る

【波羅捺】 ヴァーラ

ーナシー (Varanasi)

【迦尸】 カーシー

(Kashi)

【轉法輪品】 法輪  
を轉じて五比丘等  
を化度するを明す

轉法輪品第十五

如來善く寂靜にして、光明顯かに照曜し

眼儀もて獨り遊歩するに、猶し大衆の隨ふが若し

道に一梵志に逢ふ、其を憂波迦と名く

比丘の儀を執持し、恭しく路傍に立つ



未曾有に欣遇し、合掌して啓問すらく、  
 『群生皆染著するに、而も無著容有り』  
 世間の心動搖するに、而も獨り諸根を靜む  
 光顔は滿月の如く、甘露の津を味ふに似たり  
 容貌大人の相、慧力自在の王  
 所作必ず已に辨じ、宗稟を爲せるは何の師ぞ  
 答へて言はく、『我に師無し、宗無し所勝無し』  
 自ら甚深の法を悟り、人の得ざる所を得たり  
 人の應に覺るべき所、世を擧げて覺する者無し  
 我今悉く自覺せり、是故に正覺と名く  
 煩惱は怨家の如く、伏するに智慧の劍を以てす  
 是故に世の稱する所、之を名けて最勝と爲す  
 當に波羅捺に詣り、甘露の法鼓を撃つべし  
 慢無く名を存せず、亦利樂を求めず  
 唯爲に正法を宣べ、苦の衆生を拔濟せん  
 昔弘誓を發せるを以て、喟の未度者を度せん  
 誓果今に成じ、當に其本願を遂ぐべし

財を自供にのみ當つるは已に、名義士と稱せず  
 貧れて天下を利するは、乃ち大丈夫と名く

危に墮んで溺るるを濟はずば、豈勇健の士と云はんや  
 疾病の救療せざるに、何んが名けて良醫と爲さん  
 迷ふを見て路を示さずば、孰か善導師と云はん

燈の幽冥を照すが如く、無心にして自ら明し

如來は慧燈を然し、諸の求欲の情無し

機を鑽れば必ず火を得、穴中の風は自然なり

地を穿てば必ず水を得、此れ哲理の自然なり

一切諸の牟尼の、成道は必ず伽耶なり

亦何なく迦尸國にして、正法輪を轉せん

梵志優波迦、嗚呼して奇特を歎す

心に隨つて先づ期する所に、路に従つて各分華せり

計念未曾有なれば、歩歩顧みて踟躕す

如來漸く前行して、迦尸城に至る

其地勝れたる莊嚴あり、天帝釋の宮の如し

恆河波羅捺、二水雙流の間

林木花果茂り、禽獸同じく群遊し

閑寂にして喧俗無く、古仙人の居る所なり

如來の光は照耀して、其鮮明を倍增し

憍隣如族子、次で十力迦葉

を婆濕波と名け、四を阿濕波

五を跋陀羅と名く、苦を習ひ山林を樂しむ

遠く如來の至れるを見、集り坐し共に議して言はく

「罪業は世樂に染り、諸の苦行を放捨せり

今復還つて此に至る、愼んで起つて奉迎すること勿れ

亦禮し問訊して、其所須を供給すること莫れ

已に本誓を壞せるが故に、應に供養を受くべからず

凡そ人來賓を見ば、應に先後に宜しきを修すべし

且爲に床座を設け、彼所安に任せよ

此要言を作し已つて、各各正基に坐せり

如來漸次に至れば、覺えず要言に違し

請うて其坐を讓る有り、爲に衣鉢を攝する有り

爲に足を洗摩する有り、所須を請問する有り

【憍隣如】 アーリ

ユニヤータカウン

デイニヤ (Ajñata-

Kaundhya)

【十力迦葉】 ダシ

ヤバラ、カーシヤ

バ (Dasabala-Kas-

ya-ha)

【婆濕波】 プーシ

ヤハ (Vaspi)

【阿濕波耆】 アシ

ユヅジツト (Aśi-

ni)

【跋陀羅】 バドリ

ガ (Bhadrika)

【阿羅呵】アロハ  
ン(Arhan) 應供と  
譯す。

是の如き等の種種もて、師を尊敬し奉事す

唯其族を捨てず、猶瞿曇の名を稱す

世尊彼に告げて言はく、「我本性を稱し

阿羅呵の所に於て、褻慢言を生ずること莫れ

敬と不敬とに於て、我心悉く平等なるも

汝等心に恭はす、當に自ら其罪を招くべし

佛は能く世間を度せり、是故に稱して佛と爲す

一切衆生に於て、等心にして子想の如し

而も本名字を稱するは、慢父の罪を得るが如し」

佛は大悲心を以て、哀愍して彼に告ぐらく

「彼愚昧の心を率ゐて、正眞覺を信ぜず

先に苦行を修すと云ふも、猶尙得る所無し

今身口の樂を恣にす、何に因つてか成佛を得ん

是の如き等の疑惑は、佛道を得

眞實義を究竟し、一切智の具足せるを信ぜず」

如來は即ち彼が爲に、略して其要道を説きたまはく

「愚夫は苦行を習ひ、樂行して諸根を悦ばしめ

【二邊】  
なり。

有無兩邊

彼二に差別を見る、斯れ則ち大過たり  
是れ正眞道に非ず、解脫に違するを以ての故に  
疲身に苦行を修するも、其心猶馳亂し  
尙世智を生ぜず、況んや能く諸根を超えんをや  
水を以て燈を燃すが如く、爲に破闇の期無し  
疲身に慧燈を修するも、愚癡を壊すること能はず  
朽木に火を求むるも、徒勞にして獲ず  
鑿を鑽るは人の方便、即ち火を得て用と爲す  
道を求むるは苦身にして、甘露法を得るに非ず  
著欲を非義と爲し、愚癡は慧明を障ふ  
尙經論を了せず、況んや離欲の道を得んや  
人重病を得て、病に隨はざるの食を食するが如く  
無知の重病は、著欲豈能く除かんや  
火を曠野に放てば、乾草猛火を増す  
火盛なれば孰か能く滅せん、貪愛の火も亦然り  
我已に二邊を離れ、心を中道に存す  
衆苦は畢竟じて息み、安靜として諸過を離る



正見は日光に踏え、平等に佛を覺觀す

正語を舍宅と爲して、正業の林に遊戯し

正命を豐姿と爲し、方便の正修もて塗る

正念を城郭と爲し、正定を床座と爲す

八道は坦として平正なり

生死の苦を免脱し、此塗より出づる者は

所作已に究竟し、此彼に墮せず

二世の苦數の中、三界は純苦衆なり

唯此道のみ能く滅す、本末大會て聞かざる所なり

正法清淨眼の、等しく見るは解脫道なり

唯我今始めて、生老病死の苦を超えたり

愛戀と怨憎會とは、所求の事を果さず

及び餘の種類の苦、離欲と未離欲と

自身及び無身、淨功徳を離るる者

略説して斯れ皆苦とせること、猶し盛火の息むが如し

微と雖も熱を捨てざるがごとく、寂靜なるも微細の我有らば

大苦性猶存し、貪等の諸の煩惱

及び種種の業過は、是れ即ち苦因なり  
捨離すれば則ち苦滅すること、猶し諸の種子の  
池水等を離れては、衆縁和合せざるが如し  
芽葉則ち生ぜず、有性の相續有れば  
天より惡趣に至り、輪廻して息まず  
斯れ食欲に由つて生ず、軟中上差に降るは  
種種の業を因と爲す、若し貪等滅せば  
則ち相續有ること無く、種種の業盡くれば  
差別の苦長く息む、此有れば則ち彼有り  
此滅すれば則ち彼滅す、生老病死無く  
地水火風無く、亦初中邊無し  
亦軟誑の法に非ず、賢聖の所住なり  
無盡の寂滅なり、所説の八正道は  
是れ方便にして餘に非ず、世間の見ざる所なり  
彼彼長く迷惑す、我は苦を知り集を斷じ  
滅を證し正道を修す、此四眞諦を觀じて  
遂に等正覺を成せり

明く、一我己に苦を知り、己に有漏の因を斷じ  
己に滅盡作證し、己に八正道を修す  
己に四眞諦を知り、清淨法眼成ぜり」  
此四眞諦に於て、未だ平等眼を生ぜずんば  
解脫を得と名けず、作己に作せりと言はず  
亦一切、眞實知覺成ずとは言はず  
己に眞諦を知るが故に、自ら解脫を得と知る  
自ら作己作と知り、自ら等正覺を知る」  
是眞實を説く時、憍隣族姓子  
八萬の諸の天衆、眞實義を究竟じ  
諸の塵垢を遠離し、清淨法眼を成ぜり  
天人師は彼、所作事己に作せるを知り  
歡喜して師子吼し、憍隣如、來れるや」と問ふ  
憍隣即ち佛に白さく、「己に大師の法を知れり」  
彼法を知るを以ての故に、阿若憍隣と名く  
佛弟子中に於て、最先第一の悟なり  
彼正法の聲を知り、諸の地動に聞く

咸く共に聲を擧げて唱ふらく、『善い哉深法を見たり  
 如來今日に於て、未曾の所轉を轉じ  
 普く諸の天人の爲に、廣く甘露の門を開きたまふ  
 淨戒を衆輻と爲し、調伏と寂定と齊しく  
 堅固智を網と爲し、慚愧其間を楔し  
 正念以て轂と爲し、眞實の法輪を成ず  
 正眞に三界を出で、退いて邪師に従はず』  
 是の如く地神唱へ、虚空神傳稱す  
 諸天轉た讚歎し、乃至梵天に徹せり  
 三界の諸の天神、始めて大仙の説を聞き  
 展轉し驚いて相告ぐらく、『普聞佛世に興り  
 廣く群生類の爲に、寂靜の法輪を轉ず』と  
 風雲雲霧は除り、空中に天華を雨らし  
 詔天天樂を奏し、未曾有なりと嘉歎す

佛所行讚卷第三 終

# 佛所行讚

卷第四

亦佛本行  
經と云ふ

【瓶沙王諸弟子品】  
長者子耶舍、瓶沙  
王、迦葉等の出家  
を説く

【鳩尸城】ケミナ  
リヤ (Kumina) (Kumina)  
香茅城と説す。毘  
舍利の東北にあり

## 瓶沙王諸弟子品第十六

時に彼五比丘、阿濕波誓等

彼の知法の聲を聞き、慨然として自ら懐ぢ

合掌して敬を加へ、尊顔を仰瞻す

如來善方便もて、次で正法に入らしむ

前後して五比丘、道を得諸根を調ふ

猶し五星の天に麗かにして、明月に列侍するがごとし

時に彼鳩尸城の、長者子耶舍は

夜睡より忽ち覺悟して、自ら其眷屬の

男女の身裸にて臥せるを見、即ち厭離の心を生じ  
此れ煩惱の木、愚夫を誑惑するを念じ

馬鳴菩薩造  
北涼天竺三藏曇無讖譯す



【耶舍】 ヤシヤ  
（ヨハネ） 名聞と譯す。佛成道後最初の優婆塞。

【漏盡】 諸の煩惱のつきたこと。

服を嚴にし瓔珞を佩び、家を出でて山林に詣る路に尋ねて普く唱ふらく、「憊亂せん憊亂して亂れん」と如來夜經行して、憊亂と唱ふる聲を聞き、即ち命じて「汝善くぞ來りし、此に安隱處有り、涅槃は極めて清淨なり、寂滅は諸惱を離る」と耶舍佛の教を聞いて、心中大いに歡喜し、本厭離の心なるに乗じて、聖慧冷然として聞くこと清涼の色に入るが如く、肅然として佛の所に至る、其身猶俗容あるも、心已に漏盡を得たり、宿殖の善根力は、疾に羅漢果を成ぜり、淨智の理清明なれば、法を聞いて能く即悟すること猶し鮮なる素繪の、其色に染せらるること易きが若し彼已に自ら覺知し、應に作すべき所を已に作せるに身を顧みれば猶莊嚴あれば、而も慚愧の心を生ず、如來彼の念を知り、而も爲に偈を説いて言はく、「嚴飾するに瓔珞を以てし、心に諸根を調伏せり、平等に衆生を觀ぜば、行法は形を計らず

身に出家の服を被たるも、其心の累未だ忘れず

林に處するも世榮を貪るは、是れ則ち俗人たり

形俗儀を表すと雖も、心は高勝の境に住めば

在家も山林に同じく、則ち我所を離る

縛解は心に存す、形豈定相有らんや

罽を佩ぎ重袍を衣、謂く、「能く強敵を制せり」と

形を改め染衣を著するも、煩惱の怨に伏せらる

即ち比丘來れと命せられなば、聲に應じて俗容を廢し

出家の儀を具足せば、皆沙門を成せん

先に俗遊の期有り、其數五十四

善友の出家を尋ねて、次でに隨つて正法に入る

斯れ宿善の業に由り、妙果を今に成ずるなり

淳灰の治ふ已に久しきも、水を経ば速に鮮明たり

上行の諸の聲聞、六十の阿羅漢

悉く維漢法の如く、隨順して教誡したまふ

「汝今已に、生死河を彼岸に濟度せり

所作已に畢竟じ、一切の供を受くるに堪へたり

【迦葉】 ウルギル  
ワ、カーシヤバ  
(Uruvilva-kasyapa) S. 20.

各應に諸國に遊んで、諸の未度者を度すべし  
衆生の苦熾然たるも、久しく救護者無し  
汝等各獨遊し、哀愍して攝受せよ  
吾今亦獨行して、彼伽闍山に還らん  
彼に大仙人有り、王仙及び梵仙  
悉く皆彼に在り、舉世の宗ぶ所なり  
迦葉苦行仙は、國人悉く奉事し  
受學者甚だ衆し、我今往いて之を度せん  
時に六十の比丘、教を奉じて法を廣宣せんとし  
各其宿縁に従ひ、意に隨つて諸方に詣る  
世尊は獨り遊歩して、往いて伽闍山に詣り  
空靜法林に入り、迦葉仙人に詣る  
彼事火窟に在り、惡龍の居る所なり  
山林極めて清曠にして、處處に不安無し  
世尊教化せんが爲に、彼に告げて宿を請ふ  
迦葉佛に白して言さく、「宿止處有ること無し  
唯事火窟のみ有りて、善く清淨なれば居すべし

而も惡龍の止る有り、必ず能く人を傷害せん。  
佛の言はく、「但與へられよ、且つ一宿の止住のみ。」  
迦葉種種に難するも、世尊請うて已ます。  
迦葉復佛に白さく、「心に相與なるを欲せざるも  
我に憐愍有り」と謂はん、且自ら所乘に隨へし。  
佛即ち火室に入り、端坐正思惟す。  
時に惡龍佛を見、瞋恚もて毒火を縱にす。  
室洞を擧げて熾然たるも、而も佛身に觸れず。  
舍盡きて火自ら滅するも世尊猶安坐したまふこと  
猶し劫火の起りて、梵天宮洞然たるも。  
梵王正基に坐して、恐れず亦畏れざるが如し。  
惡龍世尊の、光顯に異相無きを見。  
毒息み善心生じ、稽首して歸依したてまつる。  
迦葉夜火を見、歎すらく、「嗚呼怪しい哉。  
此の如きの道徳人、而も龍火の爲に燒かる」と。  
迦葉及び眷屬、晨朝に悉く來りて看之に。  
佛已に惡龍を降し、鉢中に置在せしめたまへば。

彼佛の功德を知り

而も奇特の想を生ぜしも、傲慢久しく習へるが故に

猶我道尊しと言ふ、佛以て時宜に隨ひ

種種の神變を現じて、其心の念ずる所を察し

變化して之に應じ、彼心を柔軟にし

正法の器たるに堪へしめ、自ら其道の淺く

世尊に及ばざるを知らしめば、決定謙下の心もて

隨順して正法を受け、鬻毘羅迦葉は

弟子五百人と、師の善調伏に隨ふ

次第に正法を受け、迦葉并に徒衆

悉く正化を受け已りて、仙人資生の物

并に諸の事火の具、悉く水中に乗つれば

漂没し流に隨つて遷る、那提伽闍等

二弟の下流に居す、被服諸物

流に隨つて亂下せるを見て謂く、「其れ大變に遭ふ」と

憂怖して自ら安からず、二衆五百人と

江を尋ねて兄を求め、兄の已に出家し

【那提】 ナダイ、  
カーシャバ (Nadi-  
kashyapa)  
【伽闍】 ガラー、  
カーシャバ (Gaya-  
kashyapa)



諸の弟子も亦然るを見、未曾の法を得たりと知る  
而して奇特の想を起し、見今已に道に服せり

我等も亦當に隨ふべし」と、彼兄弟三人

及び弟子眷屬に、世尊爲に說法したまふ

「即ち事火を以て、愚癡の黒烟起り

亂想して鑽燈生じ、貪欲瞋恚の火

衆生を梵燒し、是の如きの煩惱の火

熾然として休息せず、生死に輪淪せるに譬ふ

苦火も亦常に然り、能く二種の火を見る

熾然として依怙無し。云何が有心の人

而も厭離を生ぜざらん。厭離は貪欲を除く

貪盡くれば解脱を得、若し已に解脱を得ば

解脱知見生じ、生死の流を観察して

而も梵行を擧げ、一切の作已作し

更に後行を受けず」是の如く千比丘

世尊の說法を聞いて、諸漏永く起らず

一切心解脱す 佛迦葉等

【摩竭王】 瓶沙王  
のこと、

千比丘の爲に説法せば、所作者は已作し  
淨慧の妙莊嚴もて、諸の功德眷屬は  
施戒し諸根を淨め、大徳仙道に從ふ  
苦行林業を失ふこと、人の戒徳を捨て  
空身にして徒生するが如し。世尊大眷屬と  
進んで王舍城に詣り、摩竭王の  
先に修せし所の要誓を憶念す。世尊既に至り已りて  
杖林に止住す、瓶沙王之を聞いて  
大眷屬と俱に、擧國の士女從ふ  
往いて世尊の所に詣り、遠く如來の坐を見  
降心もて諸根を伏し、諸の俗容を除去し  
下車して歩み進む、猶し天帝釋の  
往いて梵天王に詣るが如し、前んで佛足を頂禮し  
體の和安を敬問す、佛邊慰勞し畢りて  
命じて一面に坐せしむ、時に王心に默念たり  
『釋迦の大威力は、勝徳の迦葉等  
今皆弟子たり』佛衆の心念を知り

而も迦葉に問ひたまふらく、「汝何の福利を見て

而も事火の法を棄てしや、迦葉佛命を聞き

大衆の前に驚起し、胡跪して合掌し

高聲に佛に白して言さく、「修福して火神に事ふるも

果報悉く輪廻し、生死の煩惱増す

是故に我棄捨せり、精勤もて事火を奉ずるは

五欲の境を求めん爲なり、愛欲増して窮り無し

是故に我棄捨せり

事火もて呪術を修し、解脱を離れて生を受く

受生は苦の本、故に捨てて更に安きを求む

我本謂へる苦行は、祠祀し大會を設くるを

最第一勝と爲せり、更に正道に違せり

是故に今棄捨して、更に勝れたる寂滅を求む

生老病死を離れたる、無盡の清涼處あり

此義を知るを以ての故に、事火の法を放捨せり

世尊迦葉の、自ら知見せる事を説けるを聞きたまひ

諸の世間をして、普く淨心を生ぜしめんと欲するが故に

迦葉に告げて言はく、「汝大士善くぞ來りし

種種の法を分別して、勝道に從へり

今大衆の前に於て、汝が勝功徳を顯さん

巨富長者の、寶藏を開現するが如く

貧苦の衆生をして、其厭離心を増さしめよ」

『善い哉尊教を奉せん』、即ち大衆の前に於て

身を斂めて正受に入り、飄然として虚空に昇り

行任半臥を経て、或は舉身洞然たり

左右に水火を出し、燒けず亦濡れず

身より雲雨を出し、雷電は天地を動かす

舉世悉く瞻仰し、目を縦つて觀るも厭くこと無し

異口にして同者に、未曾有と稱歎す

然る後神通を攝して、世尊の足を敬禮し

『佛は我大師なり、我は尊が弟子たり

奉教して斯行を聞き、所作已に畢竟せり』

舉世普く彼、迦葉の弟子たるを見

決定して世尊の、眞實一切智を知る

佛は諸の會衆の、受法器たるに堪へたるを知りて  
 而も瓶沙王に告ぐらく、汝今能く諦かに聽け  
 心意及び諸根は、斯れ皆生滅の法なり

生滅の過を了知すれば、是れ則ち平等觀なり  
 是の如き平等觀を、是れ則ち身を知ると爲す  
 身の生滅法たるを知らば、取無く亦受無し  
 如し身の諸根を覺らば、我無く我所無し

純一の苦の積聚は、苦生じ苦滅す

已に諸の身相に、我無し我所無しと知らば  
 是れ則ち第一の、無盡清凉處なり

我見等の煩惱に、繫縛せらるる諸の世間に  
 既に我所無しと見れば、諸縛悉く解脱す

不實見の縛する所も、實を見れば則ち解脱す  
 世間攝受の戒は、則ち邪攝受たり

若し彼に我有れば、或は常といひ或は無常といふ  
 生死二邊の見にして、其過最尤も甚し

若し無常ならしめば、修行するも則ち果無く



亦後身を受けず、無功にして解脱す  
若し有常ならしめば、死生の中間無く  
則ち應に虚空に同じく、生無く亦滅無かるべし  
若し有我ならしめば、則ち應に一切同じく  
一切皆有我にして、業果自ら成ずること無し  
若し我作者有らば、苦の修行に應ぜざらん  
彼自在主有らば、何んが造作を須ふることを作さん  
若し我則ち有常なれば、理變異すべからず  
苦樂の相有るを見れば、云何が有常と言はん  
知生すれば則ち解脱し、諸の塵垢を遠離す  
一切は悉く有常なれば、何んが解脱を用ふることを爲さん  
無我とは唯言ふのみならず、理實に實性無し  
我の作事を見ざるに、云何が我作と説かん  
我既に所作無し、亦作我者無し  
此二事無きが故に、眞實に我有ること無し  
作者知者無く、無主にして常に違ふ  
生死日夜に流る。汝今我説を聽け

六根と六境界と、因縁の六識を生ずると

三事會して業を生じ、心念の業隨轉す

陽珠の乾草に遇ひ、日を縁じて火隨つて生ずるが如く

諸根境界識なる、士夫の生も亦然り

芽は種子に因りて生ずるも、種は即ち是れ芽に非ず

即せず亦異せず、衆生の生も亦然り

世尊は眞實、平等第一義を説く

瓶沙王歡喜すれば、離垢し法眼生じ

王の眷屬人民、百千の諸の鬼神

甘露の法を説くを聞き、亦隨つて諸塵を離る

### 大弟子出家品第十七

爾時に瓶沙王、稽首して世尊に

竹林に遷住せんことを請ふ。哀受の故に默然たり

王已に眞諦を見、奉拜して宮に還る

世尊大衆と與に、徙居して竹園に安んず

【大弟子出家品】  
舍利弗、目連等の  
大弟子の出家を説

【竹林】　　ナ　　メヅ  
ナ　　メヅ  
舎城の北に在りし  
精舎

【舍利弗】 シヤ!  
リプトラ (S. P. 111)  
三) 身子或は鶖鷲  
子と譯す。

衆生を度せんが爲の故に、慧證明を建立し  
梵住天住、賢聖住を以て住す

時に阿濕波誓、調心して諸根を御し

時至つて乞食を行じ、王舍城に入る

容貌世に挺特し、威儀安んじ序庠たり

城中の諸の少女、見る者歡ばざる莫し

行者住歩を爲し、前に迎ふれば後に風馳す

迦毘羅仙人は、廣く諸の弟子を度し

第一の勝多聞、其名を舍利弗といふ

比丘の庠序として、閑雅に諸根を靜めるを見て

蹶路にして至るを待ち、擧手して請問して言はく、

『年少なるも靜かなる儀容は、我の曾て見ざる所なり

何の勝妙の法を得たるや、何の師に宗事せしや

師の教は何の説く所ぞ、願くば告げて所疑を決せん』と

比丘彼の問を欣び、和顏遜辭もて答ふらく

『一切智具足の、甘蔗勝族より生じ

天人中の最尊、是れ則ち我大師なり

我年既に幼稚にして、學の日又初淺なり

豈能く大師の、甚深微妙の義を宣べんや

今當に淺智を以て、略して師の教法を説くべし

一切行法の生ずる、皆因縁より起る

生滅の法は悉く滅し、道を護くも方便たり

二生變波提、聽くに隨つて心内融け

諸の塵垢を遠離し、清淨法眼生ぜり

先の所脩決定し、因及び無因を知り

一切は所作無く、皆自在天に由る

因縁法を聞いて、無我智を開明せしむ

微の語の煩惱増し、能く究竟じて除く無し

唯如來の教のみ有りて、永く盡きて遺無し

我所の攝受に非ず、而も能く吾我を離る

明は日燈に因つて興り、孰か能く光を無からしめん

蓮花の華を鬪するが如く、微絲猶速綿たり

佛教は煩惱を除くこと、猶し斷有して餘無きがごとし

比丘の足を敬禮し、退辭して家に還る

【大目連】 マハー  
マールドガルヤ  
ヤナ (Mahamardg  
alyana) 大胡豆  
と譯す。

比丘乞食し已りて、亦竹園に還歸せり  
舍利弗家に還りて、貌色甚だ和雅なり  
善友大目連は、同體にして聞才均し  
遙に舍利弗の、顏儀甚だ懇怡なるを見  
告げて言はく、「今汝を見るに、而も常容に異る有り  
素性至つて沈隱なるに、歡相を今に見る  
必ず甘露法を得たらん、此相因無きに非ず」  
答へて言はく、「如來の告もて、實に未曾法を獲たり」と  
即ち請へば爲に説く。聞いて則ち心開解し  
諸の塵垢亦除こり、隨つて正法眼を生ず  
久しく妙因果を殖うることを、掌中の燈を見るが如し  
佛の不動信を得て、俱に行つて佛の所に詣り  
徒衆弟子、二百五十人と與なり  
佛遙に二賢を見て、諸衆に告げて言はく  
「彼に來れる者二人は、吾上首の弟子たり  
一は智慧無雙にして、二は神足第一なり」  
深淨の梵音を以て、即ち「汝善くぞ來りし」と命す



【沙門】 シユラマ  
ナ(Sramana)勤息  
と譯す、諸善法を  
修し、諸惡法を止  
息するの意なり。

【釋迦文】 釋迦牟  
尼(Sakyamuni)  
に同じ。

「此に清涼法有り、出家の究竟道なり」と  
 手に三椀杖を執り、髮髮して深瓶を持せるも  
 佛が善來の聲を聞いて、即ち髮して沙門を成ぜり  
 二師及び弟子、悉く其丘の嶺を成ず  
 世尊の足を稽首し、却いて一面に坐す  
 隨順して爲に說法せば、昔阿羅漢を得たり  
 爾時に二生有り、迦葉族の明燈なり  
 多聞にして身相具し、財盈ち妻極めて賢なるも  
 厭捨して出家し、解脫道を志求す  
 路に多子塔に由るに、忽ち釋迦文に遇ふ  
 光儀顯かに明瞭たること、猶し阿天幢の若し  
 肅然として擧身に敬ひ、稽首して足を頂禮す  
 尊は我大師たり、我は是れ尊の弟子たり  
 久遠の癡冥を積めり、願くば爲に燈明となりたまへ  
 佛彼生の、心に樂うて解脫を崇むるを知り  
 清淨軟和の音もて、之に命するに善來を以てす  
 命を聞いて心融泰し、形神の疲勞息み

【四無礙辯】法、義、詞、樂、解の如來の四種の解智。  
【大迦葉】マハーカシーヤバ (Mahākāśyapa)

心は勝解脫に觸み、寂靜にして諸塵を離る  
大悲所應に隨つて、略して其が爲に解説せるに  
諸の深法を領解し、四無礙辯を成ぜり  
大德普く流聞せば、故に大迦葉と名く  
『本身我異ると見、或は我即身  
我及び我所有りと見しも、斯見已に永く除こり  
唯衆苦の聚のみを見、苦を離れて則ち餘無し  
持戒もて苦行を修し、非因に因を見る  
平等に苦性を見、永く他の聚心無し  
若は有若は見無くんば、二見に猶豫を生ず  
平等に眞諦を見ば、決定して復疑無し  
財色に染著し、迷醉に貪欲生ず  
無常不淨想と、貪愛と永く已に乖く  
慈心平等に念すれば、怨親に異想無く  
一切を哀愍し、則ち瞋恚の毒を消す  
色に依つて諸有は對し、種種に雜想を生ず  
思惟して色想を壞せば、則ち色に愛を斷ず

無色天に生ずと雖も、命も亦要す盡きん  
 四正受到に愚なるも、而も解脱の想を生じ  
 寂滅して諸想を離れば、無色貪永く除こる  
 動亂心變逆せば、猶し狂風の鼓浪せるがごとし  
 深く堅固の定に入り、掉亂心を寂止せよ  
 法に我所無しと觀じ、生滅に堅固ならざれ  
 軟中上を見ず、我慢心自ら忘れ  
 智慧の燈熾然たれば、暗の癡冥闇を離れ  
 盡無盡の法を見、無明悉く餘無けん  
 思惟の十功德は、十種の煩惱を滅し  
 麤息して作已作し、深く感じて尊顏を仰ぎ  
 三を離れて三を得、三弟子三を除き  
 猶し三星の布列し、三十三の司弟  
 三五に列侍するがごとく、三侍佛も亦然なり

化給孤獨品第十八

【化給孤獨品】 給  
 孤獨長者を化す  
 の本り、祇園精舍  
 を納受したまふを  
 明す。

【給孤獨】 アナー  
タピンドラダ  
hapindata.

【橋薩羅】 コトサ  
ラ (Kosala) 迦里羅  
城の西、摩伽陀國  
の北、波斯匿王の  
所領。  
【首羅】 チューラ  
カ (Utkala)

時に大長者有り、名けて給孤獨と曰ふ  
巨富の財無量にして、廣く施して貧乏を濟ふ  
遠く北方、橋薩羅國より來り

一知識の舍に止る、主人は首羅と名く

佛の世に興り、近く竹園に住せるを聞き

名を承け其徳を重んじ、即夜に彼林に詣る

如來已に彼の、根熟し淨信の生せるを知り

宜きに隨つて其實を稱し、爲に說法して言はく

「汝已に正法を樂しむ、淨信心もて虚渴し

能く睡眠を減じて、而も來つて我を敬禮す

今日當に汝が爲に、具に初賓の儀を設くべし

汝宿徳本を殖ゑ、堅固にして其望を淨くし

佛名を聞いて歡喜し、正法の器たるに堪へたり

虚懐に廣く惠を行じ、周く貧窮に給す

名徳普く流聞し、果成せるは宿因に由る

今當に法施を行じ、至心精誠に施すべし

時に寂靜施を施し、兼ねて淨戒を受持せよ

戒を莊嚴具とし、能く惡趣に轉じ

人を天に上昇せしめ、報ずるに天の五樂を以てす

諸求は大苦たり、愛欲は諸過を集む

當に遠離惡と、離欲と寂靜樂とを脩すべし

老病死の苦は、世間の火患たるを知り

正に世間を観察し、生老病死を離れよ

既に世間に、生老病死行るを見ば

生天も亦復然り、常存者有ること無し

無常は則ち是れ苦、苦は則ち我有ること無し

無常苦非我に、何んが我我所有らんや

苦即ち是れ苦と知れば、集とは則ち集たり

苦滅すれば即ち寂靜、道は即ち安隱處たり

群生流動の性は、當に知るべし是れ苦の本

際本は具源を棄ぎ、有非有を顧みず

生老死の盛火は、世間に普く熾然たり

生死の動搖するを見ば、當に無想を習ふべし

三摩提究竟せば、甘露寂靜の處たり

【三摩提】 サマリ  
 デイ (samadhi) 三  
 昧のこと。



空に我我所無く、世間悉く幻の如し  
當に此身を觀すべし、諸大衆行の聚なり  
長者説法を聞き、即ち初果を得たり

『生死の海消滅するも、唯一滴の餘有れば  
空閑に離欲を修し、第一有無身なるも

如かず今俗人の、見諦し眞解脱なるには

諸の苦行を離れず、種種異見の網有るは

第一有に至ると雖も、眞實の義を見ず

邪想もて天福に著すれば、有愛の縛轉た深し』

長者説法を聞き、陰蓋喚然として開き

正見を逮得し、諸の邪見永く除ころこと

猶し秋風風の、重雲を飄散するが如し

『自在の因を計らず、亦邪因の生に非ず

亦復無因にして、世間に生ずるに非ず

若し自在天の生なれば、長幼先後無く

亦五道輪無く、生者は滅せざるべく

亦災患に應ぜず、惡を作すも亦過に非ず

淨と不淨業と與なる、斯れ自在天に由ればなり

若し自在天の生なれば、世間は疑ふべからず

子の父より生ずるが如く、孰か其尊を識らざらん

人窮苦に遭ふの時、應に反つて天を怨むべからず

悉く應に自在を宗むべく、應に餘神を奉ずべからず

自在は是れ作者なれば、應に自在と名くべからず

其れ是作を以ての故に、彼則ち應に常作たるべきも

常作は則ち自ら勞す。何を名けてか自在と爲さん

若し無心にして作さば、嬰兒の所作の如く

若し有心にして作さば、有心は自在に非ず

苦樂は業生に由り、則ち自在の作に非ず

自在は苦樂を生ぜば、彼に應に愛憎有るべし

已に愛憎有るが故に、自在と稱すべからず

若し復自在の作ならば、業生は默然すべし

彼自在力に任せば、何の修善をか用ふるを爲さん

止に復善業を修して、應に業報有るべからず

自在若し業を生ぜば、一切は則ち其業たり

若し是れ共業なれば、皆應に自在と稱すべし  
自在若し無因なれば、一切も亦應に無なるべく  
若し餘の自在を因とせば、自在は應に窮り無かるべし  
是故に諸の衆生は、悉く作者有ること無けん  
當に知るべし自在の義の、此論に於て則ち壞するを  
一切の義相違し、無説なれば則ち過有り  
若し復自性の生なれば、其過も亦是の如し  
諸の明因論者は、未だ曾て是の如きを説かず  
所依無く因無きに、而も能く所作有らんや  
彼彼皆因に由ること、猶し種子に依るが如し  
是故に知る一切は、則ち自性の生に非ざることを  
一切の所作は、唯一因の生に非ず  
而も一の自性と説く。是故に則ち因に非ず  
若し彼自性、一切處に遍満すと言はば  
若し一切に周満するも、亦能所作無けん  
既に能所作無くば、是れ則ち因と爲すに非ず  
若し一切處に遍ぜば、一切の有作者は

是れ即ち一切時に、常に應に所作有るべし  
若し常作と言はば、時を待つて物を生ずること無けん  
是故に應當に知るべし、自性を因と爲すに非ざるを  
又彼自性は、一切の求那を離ると説く  
一切所作の事、亦應に求那を離るべし  
一切諸の世間に、悉く求那有るを見ればなり  
是故に知る自性は、亦復因たるに非ざるを  
若し彼自性は、求那に異なると説かば  
常を以て因と爲すが故に、其性は應に異るべからず  
衆生の求那異なる、故に自性は因に非ず  
自性若し常ならば、事亦應に壞すべからず  
自性を以て因と爲せば、因果の理應に同すべし  
世間壞せらるるが故に、當に知るべし別に因有るを  
若し彼自性因なれば、應に解脱を求むべからず  
自性有るを以ての故に、應に彼生滅に任ずべし  
假令解脱を得るも、自性還縛を生ず  
若し自性を見ずして、見法の因たらば

【陀羅驪】 ドラギヤ(Dravya) 勝論所立六諦の一、主諦、所依諦と譯す地水火風空時方神意の九種の實法をいふ。

此れ亦因たるに非ず、因果の理殊なるが故に  
世間諸見の事は、因果悉く俱に見る  
若し自性に心無くんば、應に心の因有るべからず  
烟を見ても火を知るが如く、因果は類相求む  
彼因見ざるに、而も見事を生ずるに非ず  
猶し金の器服を造るがごとく、始終金を離れず  
自性は是れ事の因、始終豈殊なるを得んや  
若し時として作者たらしめば、應に解脱を求むべからず  
彼時の常なるを以ての故に、應に彼時節に任ずべし  
世間に邊有ること無く、時節も亦復然り  
是故に修行者は、應に方便もて求むべからず  
陀羅驪と求那と、世間に一異の論あり  
種種の説有りと雖も、當に知るべし一因に非ざるを  
若し我作と説かば、應に欲に隨つて生ずべし  
而も今欲に隨はず、云何が我作と説かん  
欲せざるに更に得ば、欲する者反つて更に達せん  
苦樂は自在ならず、云何が我作と言はん



若し我をして作者たらしめば、應に惡趣の業無かるべし  
種種の業果生ずる、故に我作に非ずと知る

我は時に随つて作すと云はば、時は應に唯善のみを爲すべし

善惡は縁に随つて生ず、故に我作に非ざるを知る

若し無因をして作爲らしめば、應に方便を修すべからず

一切は自然に定る、修因何の所爲たるや

世間に種種の業あり、而も種種の果を獲

是故に知る一切は、無因の作たるに非ざるを

有心及び無心は、悉く因縁に従つて起る

世間一切の法、因無くして生ずるに非ざるものなり』

長者心に聞解し、勝妙の義に通達し

一相の實智生じ、決定して眞諦を了せり

世尊の足を敬禮し、合掌して啓請すらく

「舍婆提に居在したまへ、土地豐かに安樂なり

波斯匿大王は、師子元族の貴

福德の名稱流れ、速近に宗敬せらる

精舍を造立せんと欲せば、唯願くば哀愍して受けたまへ

【舍婆提】 舍衛城  
(Savathi) のこと  
【波斯匿】 プラセ  
ーナジット (Prajna  
nathi)  
【精舍】 精にせいふ  
ザハール (Vihara)  
の譯

佛心は平等なれば、所居安きを求めたまはざらんも  
彼衆生を愍むが故に、我所請に違せざらんことを知る  
佛長者の心を知り、大施を今に發せ  
染無く所著無く、善く衆生の心を護る  
汝已に眞諦を見、素心好んで施を行ぜば  
錢財非常の寶を、宜く應に速に施爲すべし  
藏庫の燒を被るが如く、已に出づるを珍と爲す  
明人は無常を知れば、出財して廣く惠を行せよ  
慳貪者は守惜して、恐らく盡く受用せず  
亦無常を畏れざらんも、徒に失うて憂悔を増さむ  
時に應じ器に應じて施すこと、健夫の敵に臨んで  
能く施して能く戰ふが如くなれ、是れ則ち勇慧の士なり  
施者は衆に愛せられ、善稱廣く流聞す  
良善を樂んで友と爲さば、命終するも心常に歡ばん  
悔無く亦怖れ無し、餓鬼趣に生ぜず  
此れ則ち花報たり、其果は思議し難し  
六趣中に輪廻するも、良伴たるは無過の施なり

若し天人中に生ずれば、衆の爲に奉事せられ  
畜生道に生ずるも、施報有れば随つて樂を受けん  
智慧もて寂靜を修すれば、依無く數有ること無し  
甘露道を獲と雖も、猶資施以て成ぜん  
彼惠施を緣するが故に、八大人の念を修し  
念に随つて歡喜心あり、決定して三摩提あり  
三昧は智慧を増し、能く正しく生滅を觀ず  
正しく生滅を觀じ已りて、次第に解脫を得ん  
財を捨して惠施する者は、貧者を蠲除し  
慈悲と恭敬とは、嫉恚慢を兼除す  
明なるは惠施果を見、無施癡は除かれ  
諸結煩惱は滅し、斯れ惠施に由るなり  
當に知るべし惠施者は、則ち解脫の因たるを  
猶し人の種裁して、蔭果花を爲すが如き故に  
布施も亦是の如し、報樂は大涅槃なり  
不堅固なるも財施は、獲報は堅固果たり  
食を施して唯力を得、衣を施して好色を得

【優波低舍】 ウバ  
デージャ (Uppala)  
二) 大光と譯す。

【祇園】 シエータ  
ゾナ (Jivana) 勝  
林と譯す。

【祇】 祇陀 (シエタ)  
太子のこと、波斯  
匿王の太子。

若し精舎を建立せば、累果具足して成ぜん  
或は施して五欲を求め、或は大財を貪求し  
或は名聞施を爲し、生天の樂を求むる有り  
或は貧苦を免れんが爲にするあり、唯汝のみ無想の施なり  
施中の最上、無利にして而も獲ざるなり  
汝心に弘むる所有らば、宜しく速に成就せしむべし  
癡愛心の來遊するあらば、清淨眼もて閉還せよ  
長者佛の教を受けて、惠心轉た増明せり  
優波低舍を請うて、賢友として同歸せり  
彼憍薩羅に還り、周行して良墟を擇ぶに  
太子の祇園は、林流極めて清閑なるを見  
往いて太子の所に詣りて、請うて其田を買はんと求む  
太子甚だ寶惜し、元より賣心を出すこと無ければ  
「我は黄金を布いて滿てらんも、猶尚地は遷らざらん」  
長者心に歡喜し、即ち黄金を遍布せり  
祇言はく、「我與へざるに、汝云何が金を布けるや」  
長者言はく、「與へざるに、何んが黄金を滿たせと言はん」

【經始】 誓み始め

二人共に諍訟し、延いて斷事官に及び、衆皆奇特なりと歎じ、祇も亦其誠を知る。廣く其因縁を問ふに、辭に言はく、精舍を立て如來、并に比丘僧を供養せん」と。太子佛名を聞いて、其心即ち開悟し、唯其半金を取り、和を求めて同じく建立せんとし、汝は地もてし我は樹林もてし、共に以て佛を供養せん」と。長者は地紙に林をもて、以て舍御佛に付し、經始して精舍を立て、晝夜に勤めて速に成す。高懸せる勝れたる莊嚴は、猶し四天王宮のごとし、法に隨ひ道宜に順じ、如來の所應に稱へり。世間に未曾有なる、増進せる舍衛城に如來は顯蔭を現じ、衆聖集りて安居す。無侍者は哀降し、有侍は道宜に資す。長者は斯福に乗じて、壽盡きて天に上昇し、子孫其業を履ぎ、歷世福田を植ゑたり。



父子相見品第十九

【父子相見品】世尊が淨飯王と再會し爲に説法し、父王眷族等の出家せるを説く。

佛は摩竭國に於て、種種の異道を化し  
悉く一味の法に従ふこと、日の衆星に映くが如し  
彼五山城を出でて、千弟子と俱に  
前後眷屬従ひ、往いて尼金山に詣る  
迦維羅衛に近いて、而も報恩の心を生じ  
當に法供養を修して、以て父王に奉ずべしと  
王師及び大臣、先に伺候人を遣し  
常に尋ねて左右に従ひ、其進止を瞻察せしむ  
佛の國に還らんと欲するを知り、驅馳して先んじて白さく  
『太子遠く遊學し、願滿じて今來還したまはんとす』と  
王聞いて大いに歡喜し、駕を嚴にし即ち出迎す  
學國の諸の士庶、悉く皆王に従つて行く  
漸く近き遙に佛を見るに、光相昔容に倍し  
大衆の中に處するも、猶し梵天王の如し

車を下つて徐に進み、恐くは法留剎を爲さんも  
顔を瞻るに内に欣踊し、日に所言を知る莫し  
貪りて俗累に居するに、子は超然として登仙せるを顧る  
子は道尊に居すと雖も、未だ何の名を稱するやを知らず  
自ら惟ひ久しく思渴せるも、今日宜ぶるに由無けん  
子今默然として坐し、安隱として容を改めず  
久しく別れしも感情無く、我心を獨り悲しましむ  
人の久しく虚渴して、路に清冷の泉に逢へば  
奔馳して飲まんと欲するに、泉に臨んで忽ち枯渴するが如し  
今我其子を見るに、猶是れ木よりの光顔の如し  
心は疎く氣は高絶にして、都て蔭流の心無し  
情を抑へて虚しく望を斷すること、渴して枯泉に對するが如し  
未だ見ざるに繁き想の馳せ、對目するも則ち歡び無し  
人の離觀を念すれば、忽ち畫ける形像を見るが如し  
塵に四天下に王たるべきこと、猶し曼陀王の若きに  
汝今乞食を行せり、斯道何んが榮とするに足らん  
安靜たること如彌の如く、光相は日明の如きも

摩行すること牛王の歩むごとく、無畏なる師子吼のごときも  
四天の封を受けず、乞求して身を養ふ」と  
佛父王の心を知るに、猶子想に存す  
其心を聞かんが爲の故に、並に一切衆を哀んで  
神足もて虚空に昇り、兩手に日月を捧げ  
空中に遊行し、種種に異變を作す  
或は分身無量となり、還つて復合して一と爲し  
或は水に入ること地の如く、或は地に入ること水の如く  
石壁も身を礙へず、左右に水火を出す  
父王大いに歡喜し、父子の情悉く除けり  
空中蓮花の座にして、王の爲に說法したまはく  
「王心に慈念を知るも、子の爲に憂悲を増す  
纏綿として子を愛念するも、宜しく應に速に除滅すべし  
愛を息め其心を静め、我が子の養法を受けよ  
人子の未だ奉せざる所、今以て父王に奉ぜん  
父は子に従つて得ざるも、今子に従つて之を得  
人王の希特なり、天王も亦希有なり

【三業】

身口意の

勝妙の甘露道を、今以て大王に奉ぜん  
 自業の業もて受生し、業は業果報に依る  
 當に知るべし業の因果は、度世の業を勤習するにあるを  
 世間を諦観するに、唯業のみを良朋と爲し  
 親戚と及與身とは、深く愛し相纏慕するも  
 命終せば神は獨り往き、唯業の良朋のみ隨ふ  
 五趣に輪廻し、三業に三種の生あるは  
 愛欲を其因と爲し、種種の類差別あり  
 今當に其力を竭して、身口業を淨治すべし  
 晝夜に勤めて修習し、亂心を息めて寂然たれ  
 唯此を己利と爲す、此を離れては我が非ず  
 當に知るべし三界の有は、猶し海の濤波の若く  
 樂み難く習近し難し、當に第四の業を修すべし  
 生死五道の輪は、猶し衆生の旋轉するがごとく  
 諸天も亦遷變す、人中豈常なることを得んや  
 涅槃は最安たり、禪寂は樂中の勝なり  
 人王五欲の業は、危険にして恐怖多し

猶し毒蛇なげと同居どうこするがごとく、何んが須臾しゆゆの觀行くわんぎやうらんや  
 明人みやうにんは世間せけんを見ることが、盛火じやうくわの圍遶ゐねわうせるが如く  
 恐怖くふふして暫くも安やすきこと無く、生老死しやうらうしを離れんと求む  
 無盡むじんの寂靜じやくじやう處しよは、慧者ゑしやの居るところ  
 利器杖りきじやう、象馬さうま以て兵車ひやうしやを須もちひずして  
 貪どん患癡いふくを調伏てうふくせば、天下てんげの敵てきの勝つこと無けん  
 苦くを知り苦因くゐんを斷たんじ、滅めつを證しやうし方便ほうべんを修しゆす  
 正覺しやうかくの四眞諦ししんたひもて、惡趣あくしゆの恐怖くふふは除のぞく  
 先づ妙神通めうしんたうを現げんじ、王わうの心こころをして歡喜くわんぎせしむるに  
 信樂しんらくの情じやう已すでに深く、正法しやうぽうの器きたるに堪たへたり  
 合掌がっしやうして讚歎さんたんすらく、奇きなる哉誓果かいかいの成じやうぜるや  
 奇きなる哉大苦かんだくの離りるは、奇きなる哉我かわれを饒益ねうやくせるは  
 先に憂悲ゆうひを増ますと雖いも、悲ひを緣えんするが故ゆゑに利りを獲えたり  
 奇きなる哉我かわれ今日こんにち、生子しやうしの果報くわほう生せいぜるは  
 宜よろしく勝妙しやうめうの樂らくを捨すつべし、宜よろしく精勤しやうきんもて習苦しゆくすべし  
 宜よろしく親族しんぞくの榮やうを離りるべし、宜よろしく恩愛おんあいの情じやうを割きくべし  
 古昔こせきの諸仙王しよせんわうは、唐いたたらに苦くるんで功無くふなし



清涼安隱の處、汝今悉く已に獲たり

自ら安んじ而も彼を安んず、大悲衆生を濟へり

昔本世間に住して、轉輪聖王たらば

自在の神通もて、我心をして開解せしむること無く

亦此妙法もて、我をして今日の歡あらしむること無けん

設し轉輪王たらんも、生死の緒は絶えず

今已に生死を絶し、輪廻の大苦滅せり

能く衆生類の爲に、廣く甘露の法を説く

此の如きの妙神通は、智慧甚だ深廣なり

永く生死の苦を滅し、天人の上と爲る

聖王の位に居すと雖も、終に斯利を獲ざらん

是の如く讚歎し已りて、法愛に恭敬を増し

王父の尊位に居るも、謙卑し稽首して禮す

國中の諸の人民、佛の神通力を視

深妙法を聞説し、兼ねて王に敬重し

合掌し頭面に禮せるを見て、悉く奇特の想を生じ

俗累に居ることを厭患し、咸く出家の心を生ぜり

【阿難陀】アーナンダ (Ananda) 歡喜と譯す、佛の從弟。

【難陀】ナンダ (Nanda) 歡喜と譯す、佛の異母弟。

【金毘】劫賓那、(Kāṣṭhīya) 房宿と譯す。

【阿那律】アヌルツダ (Anuruddha) 無滅と譯す。

【難圖跋難陀】ナンダ、ウパナンダ (Nanda-upananda)

【優陀夷】ウダーイン (Udayin) 出現と譯す。

【優波離】ウパリー (Upali) 近取と譯す。

釋種の諸王子は、心悟り道果成じ

悉く世榮の樂を厭うて、親愛を捨して出家す

阿難陀と難陀と、金毘と阿那律と

難圖跋難陀、及び軍荼陀那

是の如き等の上首、及び餘の釋種子

悉く佛の教に従ひ、法を受けて弟子と爲る

匡國の大王子、優陀夷を首と爲し

諸の王子と俱に、次でに隨つて出家せり

又阿低利子、名を優波離と曰ふ

彼諸の王子、大臣の子の出家せるを見て

心の感情開解し、亦出家の法を受けたり

父王其子の、神力諸の功德を見

自ら亦清流の、甘露正法の門に入る

王位と國土とを捨て、禪一の甘露飯あり

閑居して靜默を修し、宮に處して王仙を習ふ

如來悉く隨つて、木族の知識を攝し已りて

道中しく顔和悦し、親戚歡喜して隨ふ

【悉達阿羅陀】シ  
ンダールタ(Siddha  
rtha)一切義成と  
譯す。

【羽寶蓋】王侯の  
車をおふもの。

時至りて應に乞食すべく、迦維羅衛に入る  
城中の諸の士女、驚喜し聲を擧げて唱ふらく  
「悉達阿羅陀、學道成じて歸る」  
内外轉た相告げて、巨細馳せ出でて看る  
門戸窓牖の中、肩を比し目を側て  
佛身の相好を見るに、光明甚だ暈曜し  
外に袈裟衣を著け、身光内に徹照せること  
猶し日の圓輪の、内外相映發せるが如し  
觀る者心に悲み喜び、合掌し涕淚を流し  
佛の庠序として歩み、形を斂め諸根を攝し  
妙身に法議を顯せるを見、敬惜して悲歡を増せり  
「剃髮して形好を毀ち、身に染色衣を被  
堂堂たる儀雅の容は、東身地を視て行く  
應に羽寶蓋を戴き、手に飛龍の轡を攬るべきに  
如何が游摩を冒し、鉢を執りて行乞するや  
藝は怨敵を伏すべく、貌は婦女の歡ぶに足る  
華服に天冠を冠し、黎民成く首陽せんに

如何が茂容を屈して、拘心して其形を制し  
妙欲の光服を捨てて、素身に染衣を著け  
何の相をか見何をか求めて、與世の五欲の怨たるや  
賢妻愛子を捨てて、獨を樂み孤遊せるや  
難い哉彼賢妃、長夜に憂思を抱いて  
而も今出家を聞くに、性命猶能く全うせり  
不審し淨飯王、竟に此子を見るや不や  
其妙相の身を見て、形を毀ちて出家せり  
怨家すら猶痛惜せんに、父見て豈能く安からんや  
愛子羅睺羅は、泣涕し常に悲戀せり  
見るも撫慰の心無く、此道を學ぶを用て爲す  
諸の相法を明す者は、咸く言はく『太子生ず  
大人相を具足し、四海を應に享食すべし』と  
今之所爲を見るに、斯れ則ち皆虚談なり  
是の如く比衆多く、紛紜として亂説せり  
如來は心無著なれば、欣無く亦成無し  
慈悲もて衆生を憐み、貧苦を脱せしめんと欲す

彼善根を増長し、并に當來世の爲に  
 具少欲の跡を顯し、兼ねて俗摩の謗を除かんとし  
 貧里に入りて乞食し、精盡所得に任じ  
 巨細門を擇ばず、鉢に満てて山林に歸りたまふ

受祇桓精舍品第二十

【受祇桓精舍品】  
 給孤獨長者の祇桓  
 精舍を奉施、並に  
 その處にありて瓶  
 沙王等に説法し、  
 初利天に於て母の  
 爲に説法するを明  
 す。

【稽羅】ヒラ(二三)  
 (一)佛が過去世に  
 半偈を聞かんとため  
 捨身せしところと  
 いふ。

世尊已に、迦維羅衛の人を開化し  
 緣に隨つて度し已畢りて、大衆と俱に行きたまふ  
 憍薩羅國に往いて、波斯匿王に詣りたまふに  
 祇桓已に莊嚴せられ、堂舎悉く周備せり  
 流泉相洗注し、花果悉く敷榮し  
 水陸の衆の奇鳥、類に隨つて群れて和鳴す  
 衆美世に比無く、稽羅山宮の若し  
 給孤獨長者、眷屬と路に導ねて迎ふ  
 花を散じ名香を燒き、奉請して祇桓に入る  
 手に金龍の瓶を執り、躬跪いて長水を注ぐ



祇桓精舍を以て、十方僧に奉施す

世尊呪願して受け、鎮國久安ならしむ

給孤獨長者、福慶流れて窮り無し

時に波斯匿王、世尊已に至りたまふと聞き

我を嚴りて祇桓を出で、世尊の足を敬禮し

却りて一面に坐し、合掌して佛に白して言はく

「圖、らごりき卑小國の、忽ち大吉祥を成ぜんとは

惡逆にして殃災多し、豈能く大人に感ぜんや

今卑顔を視たてまつることを得て、沐浴し清化を飲む

鄙にして凡品に處すと雖も、聖を蒙りて清流に入る

風香林を拂ふが如く、氣合して薰廳を成す

衆鳥須彌に集れば、異色は金光に齊しく

明人と會ふを得ば、蔭を蒙りて榮を同じうす

野夫仙人と供たれば、生れては足星たり

世利皆盡くる有るも、聖利は永くして窮無けん

人王は多く愆咎なるも、聖に遇はば利常に安からん

佛王の心の至りて、樂法すること帝釋の如くなるを知り

唯二種の著有り、財と色とを忘るること能はず  
時を知り心行を知り、而も王の爲に説法したまふ  
『惡業卑下の上も、善を見れば猶敬ふを知る』

況んや復自在王の、積徳もて宿因に乗ずるをや  
佛に遇うて恭敬を加ふ、此れ乃ち難しと爲すに非ず  
國素より靜けく民安し、見佛の所増に非ざるなり  
今當に略して説法すべし、大王目く諦に聽け  
我所説を受持せば、我功果の成せるを見ん  
命終せば形と神とは乖き、親戚は悉く別離す  
唯善惡の業のみ有りて、始終して影隨せん  
當に法王の業を崇め、萬民を子養せば  
現世に名稱流れ、命終して天に上昇せん  
情を縦にし法に順はずんば、今苦み後に歡び無けん  
古昔の彌馬王は、法に隨つて天福を受け  
金歩王は惡を行じ、壽終りて惡道に生ぜり  
我今大王の爲に、略して善惡の法を説かん  
大要は當に慈心もて、民を觀ること猶し一子のごとくなるべし

迫らず亦害せず、善く諸根を攝持し  
邪を捨て正路に就き、自舉して人を下さず  
友を苦行に結んで、邪見の朋に習ふこと勿れ  
王の威勢を恃むこと勿れ、邪佞の言を聴くこと勿れ  
諸の苦行に憊むこと勿れ、王の正典を踏ゆること莫れ  
念佛して正法を維ぎ、非法者を調伏せよ  
現に人中の上となり、徳將に隆に道中しからん  
深く無常の想と、身命の念念に遷るを思ひ  
心を高勝の境に栖ましめ、清涼の津を志求せよ  
保つに慈なれば自在樂にして、來世に其歡を増さん  
名を曠劫に傳へ、必ず如來の恩を報ぜん  
人の甜果を愛せば、必ず其良莠を種うるが如く  
明より暗に入る有り、闇より明に入る有り  
闇闇の相續有り、明明の相因相り  
智者は三品を捨し、當に始終の明を學すべし  
言の悪なるは群鴉應じ、善唱に隨ふ者は難し  
不作は果有ること無く、作者は敗亡せず

創業に勤習せずんば、至竟に能く爲すこと莫けん  
素善因を修せず、後樂を致すは斯れ無し  
既往に息期無し、是故に當に修善すべし  
自ら省みて惡を爲さず、自作自受の故に  
猶し四石山の合するごとく、衆生に逃處無けん  
生老病死の由は、群生脱するに由無し  
唯正法を行するのみ有りて、斯苦重山を出づ  
世間は悉く無常なり、五欲の境は電の如し  
老死は錐鋒の端なり、何んが應に非法を習すべけんや  
古昔の諸勝王は、猶し自在天の若し  
勇健の志は虚に騰り、暫顯し已りて磨滅す  
劫火は寶網を鎔し、海水悉く枯竭す  
洗んや身は泡沫の如きに、而も久しく世に存せんと望む  
猛風は隨蕪に止み、日光は須彌を翳す  
盛大も水の消す所、物有るも悉く滅に歸せん  
此身は無常の器なるに、長夜に苦んで守護す  
廣く資するに財色を以てし、放逸して憍慢を生ず

死時忽然として至り、挺直なる枯木の如し  
明人は斯變を見ろ、勤修して覺睡眠せんや  
生死獨り機を搖がし、止まらずんば會ず墮落せん  
不續の樂を習はず、苦報者は爲さず  
不勝の友に近づかず、不學にして智を斷ぜず  
不受有智を學せば、受必ず身を無からしめん  
有身は染境ならず、染境は大過たり  
無色天に生ずと雖も、時の變遷を免れず  
當に不變身を學すべし、不變は則ち過無し  
此身有るを以ての故に、衆苦の本たり  
是故に 諸の智者は、本を無身に息む  
一切衆生類は、斯れ欲に由りて苦を生ず  
是故に欲有に於て、應に厭離の心を生ずべし  
欲有を厭離せば、則ち衆苦を受けず  
色無色に生ずと雖も、變易は大患たり  
不寂靜を以ての故に、況んや欲を離れざるをや  
是の如く三界を觀ぜば、無常に主有ること無し



衆苦常に熾然たり、智者豈願樂せんや

樹に盛火然ゆるが如く、衆鳥豈群集せんや

覺者は明士たり、此を離るれば則ち無明なり

此れ則ち聞覺の士、此を離れば則ち覺に非ず

此れ則ち所作に應ず、此を離れては則ち應ぜず

此れ則ち近宗たり、此を離れては理と乖く

言はく此れ殊勝の法、在家の所應に非ず

此れ則ち非説と爲す、法は唯人弘に在り

熱を患へば冷水に入り、一切清涼を得

冥室の燈火明く、悉く五色を覩る

修道亦是の如く、道俗に異方無し

或は山に居り罪に墮し、或は在家するも仙に昇る

癡冥は巨海たり、邪見は濤波たり

群生は愛流に隨ひ、漂轉して能度莫けん

智慧は輕舟たり、三昧の正

方便鼓念の楫を堅持し、能く無知海を濟ふ

時に王專心に、一切智の所説を聽き

俗榮を厭薄し、王者に歡無きを知る  
逸醜せる狂象の如く、醜陋純ら熟還す

時に諸の外道有り、王の佛を信敬せるを見て

咸く大王に、佛と神通を決せんと求む

時に王世尊に白さく、『願くば彼の所求に従はれんことを』

佛即ち默然として許したまふ。種種の諸の異見

五通神仙の士、悉く佛の所に來詣す

佛即ち神力を現し、正基に空中に坐す

普く大光明を放ち、日の朝陽に耀くが如し

外道悉く降伏し、國民普く歸宗せり

母の爲に說法せんが故に、即ち切利天に昇り

三月天宮に處し、普く諸の天人を化し

母を度し報恩を畢り、安居時過ぎて還る

諸の天衆羽從し、七寶階に乗じ

下りて閻浮提の、諸佛の常下の處に至る

無常の諸の天人、宮殿に乗じて隨送す

閻浮提の君民、合掌して仰瞻せり

【守財醉象調伏品】  
諸の外道鬼神等を  
伏し、並に提婆の  
加害を除伏するを  
明す。

守財醉象調伏品第二十一

天上に母、及び餘の諸の天衆を教化し  
還つて人中に遊び、縁に隨つて化を行す  
樹提迦耆婆、首羅輸盧那  
長者子央伽、及び無畏王子  
尼置屢陀等、戸利攝多迦  
尼提曼波離、悉く解脫を得しむ  
乾陀羅國王、其名は弗迦羅  
微妙法を説くを聞き、國を捨てて出家す  
醜度鉢低鬼、及び波多耆利は  
毘富羅山に於て、調伏せられて化を受け  
波羅延梵志は、波沙那山中にて  
半偈微細の義もて、調伏し信樂せしむ  
他那摩帝村に、鳩吒檜軌あり  
是れ二生の首、廣く殺生して祠祀す

【央瞿利摩羅】ア  
ンクリマールヤ  
(Angulimalya) 指  
鬘と譯す。

如來方便もて化し、其をして正道に入らしむ  
毘提訶山に於て、大威徳天神あり  
般遮尸咤と名く、法を受けて決定に入る  
毘紐瑟吒村に、彼難陀の母を化し  
央伽富梨城に、大力神  
富那跋陀羅、輪屢那檀那なる  
兇惡の大力龍を降伏し、國王及び後宮  
悉く皆正法を受け、以て甘露の門を開けり  
彼侏儒村に於て、稽那及び尸盧の  
生天の樂を志求せるを、化して正道に入らしむ  
央瞿利摩羅は、彼脩侏村に於て  
爲に神通力を現じ、化して即ち調伏せしむ  
大長者子有り、浮梨耆婆男あり  
大富にして多錢財、富那跋陀の如し  
即ち如來の前に於て、化を受けて廣く施を行す  
彼跋提村に於ては、彼跋提梨と  
及與跋陀羅との、兄弟二鬼神を化し

毘提訶富利に、二の婆羅門有り

一の名を大壽と爲し、二の名を梵壽と曰ふ  
論議して以て降伏し、正法に入らしむ

毘舍離城に至り、諸の羅刹鬼

並に離車師子、及び諸の離車衆

薩遮尼乾子を化し、悉く正法に入らしむ

阿摩勒迦波に、鬼跋陀羅

及び跋陀羅迦、跋多羅劫摩あり

又阿臘山に至り、鬼阿鬘婆を度せり

二を鳩摩羅、三を訶悉多迦と名く

還伽闍山に至り、鬼靑迦那

及び針毛夜叉、及び其姉妹子を度す

又波羅奈に至り、彼迦旃延を度し

然る後神通に乗じて、摩盧波羅に至り

彼諸の商人、多波提尼劍を化し

其旃檀堂を受け、妙香令に流る

摩醯波低に至つて、迦毘羅仙を度し

【毘舍離】(Vaisali) ヴァリ

【離車】(Licchavi) リッチャ

【薄皮と譯す、毘舍離城の刹利種の名】

【薩遮尼乾子】(Sakyan) ニ

【迦旃延】(Kassapa) カート

【摩醯波低】(Mucalinda) ムカランダ

【迦旃延】(Kassapa) カート

【摩醯波低】(Mucalinda) ムカランダ

【迦旃延】(Kassapa) カート

【摩醯波低】(Mucalinda) ムカランダ

【迦旃延】(Kassapa) カート

【摩醯波低】(Mucalinda) ムカランダ

【迦旃延】(Kassapa) カート

【摩醯波低】(Mucalinda) ムカランダ

【迦旃延】(Kassapa) カート

【摩醯波低】(Mucalinda) ムカランダ



【賴吒波羅】 ラン  
ユトラパーラ (Rā-  
strapāla)

【阿輪閣】 アヨリ  
ドヤー (Avalokiteśvara)  
中印度ベナレス北  
方の國名。  
【金毘羅】 クムビ

牟尼彼に住して、是石上を踏むに  
千輻の雙輪現じ、終に則ち磨滅せず  
波羅那處に至つて、波羅那鬼を化し  
摩偷羅國に至つて、鬼竭曇摩を度し  
偷羅俱瑟吒に、賴吒波羅を度し  
犍蘭若村に至つて、諸の波羅門を度し  
迦利摩沙村に、薩毘薩深を度し  
亦復彼、阿耆尼毘舍を化す  
復舍衛國に還り、彼瞿曇摩  
闍帝輪盧那、道迦阿低梨を度し  
憍薩羅國に還り、外道の師  
弗迦羅婆梨、及び諸の梵志衆を度し  
施多毘迦、寂靜空閑處に至つて  
諸の外道仙を度して、佛の仙路に入らしむ  
阿輪閣國に至つて、諸の鬼龍衆を度し  
舍毘羅國に至つて、一惡龍王の  
一を金毘羅と名け、二を迦羅迦と名くるを度す

一ラ (Kamhina) 鰐魚と譯す。  
【迦羅迦】カ一ラカ (Kalaka) 黒と譯す。

【提婆達】デーバダツタ (Devadatta) 天授と譯す、佛の從兄弟。

又跋伽國に至つて、夜叉鬼を化度す

其名を毘沙と曰ふ、那鳩羅の父母

并に及び長者をして、正法を信樂せしむ

俱舍彌國に至つて、瞿師羅

及び二の優婆夷、波闍鬱多羅

伴等優婆夷を化度し、衆多を次第に度せり

憍陀羅國に至つて、阿婆羅龍を度す

是の如く次第に、空行水陸の性を

皆悉く往いて化度せること、日の幽冥を照すが如し

爾時提婆達、佛徳の殊勝なるを見て

内心に嫉妬を懷き、諸の禪定を退失し

諸の惡方便を造り、正法僧を破壊し

耆闍崛山に登り、石を崩して以て佛を打ち

石分れて二分と爲り、佛の左右に墮つ

王の平直路に於て、狂醉せる惡象を放つ

震吼せること雷霆の若く、勇氣奮つて雲を成す  
横泄して奔走し、逸越せること暴風の如し

鼻牙尼四足、觸るれば則ち摧けざる莫し

王舎城の巷路、狼藉人を殺傷す

横尸而も路に布き、髓腦血は流漣す

一切の諸の士女、恐怖して門を出でず

合城悉く戦慄し、但驚喚の聲のみを聞く

城を出でて馳走する有り、窟穴に自ら藏るる有り

如來衆五百と、時至つて城に入る

高閣窓牖の人、佛に啓して行く勿らしめんとす

如來心安泰なれば、怡然として懼るる容無く

唯貪嫉の苦を念じ、慈心もて安からしめんと欲す

天龍衆營從して、漸く狂象の所に至る

諸の比丘は逃避し、唯阿難のみと俱なり

猶し法に種種相あるも、一の自性も移さざるがごとし

醉象奮狂して怒れるも、佛を見て心即ち醒め

身を投じて佛足を禮すること、猶し太山の崩るるが若し

蓮花の掌もて摩頂し、日の烏雲を照すが如く

佛の足下に跪伏す、而も爲に説法して言はく

象大龍を害すること莫れ、象と龍と戦ふは難し

象大龍を害せんと欲すれば、終に善處に生ぜず

貪患癡の迷に醉へるは、降すこと難きも佛は已に降す

是故に汝今日、當に貪患癡を捨すべし

已に苦の淤泥に没せり、捨てずんば轉た更に深からん

彼象佛説を聞いて、醉解けて心即ち悟り

身心に安樂を得しこと、渴せるが甘露を飲むが如し

象已に佛の化を受け、國人悉く歡喜し

威く歡じて希有と唱し、種種の供養を設く

下善は轉じて中を成じ、中善は進んで増上す

不信者は信を生じ、已信者は深固たり

阿闍世大王、佛の醉象を降せるを見て

心に奇特の想を生じ、歡喜して倍、敬を増せり

如來は善方便もて、種種の神力を現じ

諸の衆生を調伏し、力に隨つて正法に入らしむ

舉國善業を修すること、猶し劫初の人の如し

彼提婆達兜、惡の爲に自ら纏縛し

【阿闍世】 アジャ  
ータシヤトル (Ajā  
tasatthi) 未生怨と  
譯す。

【菴摩羅女見佛】毘舍離に菴摩羅女を度しその供を受くるを明す。

【巴連弗邑】(Pāṭalīputra) 華氏城。【支提】チャイトヤ (Chaitya) 積衆の義なるも、義翻して靈廟といふ。

先に神力もて飛行せるも、今は無擇獄に墮せり

菴摩羅女見佛品第二十二

世尊廣く化し畢りて、而も涅槃の心を生じ  
王舍城を發つて、巴連弗邑に詣る  
到り已りて彼、娑吒利支提に住す  
彼は是れ摩竭提の、邊邑附庸の國なり  
國主婆羅門は、多聞にして經典に明あり  
土の安危を瞻相せば、國の仰觀師たり  
摩竭王使を遣し、勅して彼に告げて仰觀せしめ  
命じて牢城を起し、以て強隣に備ふ  
世尊彼地を記して、天神の保持する所  
中に於て城郭を起せば、永く固くして危亡せざらんと  
仰觀して心に歡喜して、佛法僧を供養す  
佛彼城門を出で、往いて恆河の濱に詣る  
仰觀して深く佛を敬ひ、名けて瞿曇門と爲せり



恆河の側の人民、皆出でて世尊を迎ふ。種種の供養を興し、各船を嚴にして渡らしむ。世尊船多きを以て、偏受の衆心に違するをもて、即ち神通力を以て、隱身し及び大衆も忽ち此岸より没して、彼岸に出づ。以て智慧の船に乗じ、廣く衆生を濟ひたまへば、斯功徳力に緣つての故に、河を濟るに舟に憑らず。恆河の側の人民、同聲に奇なる哉と唱ふ。成く言ひて此津を名け、名けて瞿曇津と爲す。城門は瞿曇門、津を瞿曇津と名く。斯名世に流れ、歷代共に稱傳せり。如來復前行して、彼鳩梨村に至る。說法して化する別多く、復那提村に至る。人民多く度にて死せり、親戚悉く來りて問はく、「諸親の疾にて死せる者、命終して何所に生ずるや。佛善く業報を知れば、悉く問に隨つて記説したまふ。」前んで禪舍離に至り、菴羅林に住したまふ。

【菴摩羅】アーム  
ラバーリー (Amr  
pali) 菴羅林はそ  
の守護せし園。

彼菴摩羅女、佛の其園に詣るを承けて

侍女衆隨從し、庠序として出でて奉迎す

善く諸の情根に執するも、身に輕素衣を服し

莊嚴の服を捨離し、自ら沐浴し香花あること

猶し世の貞賢女の、潔素以て天を祠るがごとし

端正にして妙なる容姿は、猶し天の玉女の形のごとし

佛遙に女の來れるを見、諸の比丘衆に告げたまはく

『此女極めて端正なれば、能く行者の情を留めん

汝等當に正念に、慧を以て其心を鎮むべし

寧ろ暴虎の口、狂夫の利劍の下に在るより

女人の所に於て、愛欲の情を起さざれ

女人は姿體を顯すに、若し行住坐臥

乃至畫像形にも、悉く妖なる姿容を表す

人の善心を劫奪す、如何が自ら防がざる

啼笑喜怒を現じ、體を縦にして肩を垂れ

或は散髮して髻は傾き、猶尙人心を亂す

況んや復容儀を飾り、以て妙なる姿顏を顯し

莊嚴もて陋形を隠し、愚夫を誘誑し、  
迷亂もて徳想を生じ、醜穢の形を覺らす  
當に無常苦、不淨無我所を觀すべし  
其眞實を諦見し、食欲の想を滅除し  
正しく自境を觀せよ、天女尙樂します  
況んや復人間の欲の、而も能く人心を留めんや  
當に精進の弓を、智慧の鋒利箭を執り  
正念の重鎧を被、五欲と決戦すべし  
寧ろ熱鐵槍を以て、雙目を貫徹せんより  
愛欲心を以て、女色を觀せざれ  
愛欲は其心を迷はしめ、女色に炫惑す  
亂想して命終せば、必ず三惡道に墮せん  
彼惡道の苦を畏れ、女人の欺を受けざれ  
根を境界に繫けず、境界を根に繫けず  
中に於て食欲想は、根を境界に繫ぐるに由る  
猶し二耕牛の、同じき一轆一鞅なるが如し  
牛は轉た相縛せず、根境界も亦然り

【治情】 なまめき  
たる心。

是故に當に心を制し、其をして放逸せしむること勿るべし。  
佛は諸の比丘の爲に、種種に說法し已るに  
彼菴摩羅女、漸く世尊の前に至る  
佛の樹下に坐し、禪定もて靜かに思惟したまふを見  
佛の大悲心は、我樹林を哀受せんと念じ  
端心に儀容を歛め、素妖治情を止め  
恭しく形心を純らにして至り、稽首して足を接して轉す  
世尊命じて坐せしめ、隨心に說法を爲す  
一汝心已に純情たり、表徹外徳の容あり  
壯年なるに財寶豊に、徳に兼ねて姿顏を備へ  
能く正法を信樂す、是れ則ち世の難き所なり  
丈夫の宿智慧なり、樂法は奇たるに非ず  
女人の情志は弱く、智淺く愛欲深し  
而も能く正法を樂しむ、此れ亦甚難たり  
人世間に生れなば、唯應に法を自ら娛しむべし  
財色は常寶に非ず、唯正法を珍と爲す  
強良も病の壞する所、少壯も老の遷す所

命は死に困めらる、行法のみ能く侵す無し  
所愛も離れざる莫し、愛せざるも強ひて隣る  
所求も意に隨はず、唯法のみ心に從ふことを爲す  
他力は大苦たり、自在力のみ觀を爲す  
女人は悉く他に由り、兼ねて他子の苦を懷く  
是故に當に思惟して、女身を厭離すべし  
彼菴摩羅女、法を聞いて心に歡喜し  
堅固智明を増し、能く愛欲を斷じ  
卽ち自ら女身を厭ひ、境界に染せず  
陋形を棄つと雖も、沙方具心に勸む  
稽首して佛に白さく、「已に尊の攝受を蒙れり  
明の供養を哀受して、其志願を滿せしめられんことを」  
佛 彼誠心を知り、兼ねて諸の群生を利せんとし  
默然として其請を受け、卽ち隨つて歡喜せしめ  
視聽に轉た明を増し、禮を作して家に還れり

佛所行讀卷第四



佛ぶつ所しょ行ぎやう讚さん 卷まき第五のだいご

亦佛本行 經と云ふ

馬ま 鳴なり 菩ぼ 薩さつ 造ぞう

北涼天竺三藏雲無識譯ほくりやうてんぢくさんざうどんげんしんめく 譯やくす

神力住壽品第二十三じんりきぢうじゆのほんだいにがふさん

【神力住壽品】 菴羅女の施食を受け已りて後、轉舍離の彌猴池側に在りて業畢の壽を捨するを明す。

爾時轉舍離の、諸の離車長者そのときがしやり、もろくのりしやちやうじや

世尊の國に入り、菴摩羅園に住したまふと聞きせそんのくにいり、あまらだんぢう

素車輿に乘じ、素蓋素衣服そしやうにまよう、そがさいそんえぶく

青赤、黄緑の色あり、其衆各異儀ありあうしやうわうりよく、せいしやく

導從して前後に翼し、塗を争ひ路を競うて前むだうじゆ、ぜんごよく、みちあらそみち

天冠袞花の服、寶飾以て莊嚴してんくわんこんけのふく、ほうじきもつしやうこん

威容盛に明曜し、彼園林を増暉せりゐようさかんみんぎょう、かのえりんぞうき

五威儀を除捨し、車を下つて歩み進みごゐぎをぢゆしや、くるまくだつてあひま

慢を息めて形恭しく、佛足を頂禮すまんをいきめてかたちかう、ぶつそくをちやうらい

大衆佛を圍遶せること、日の重輪光の如しだいじゆぶつをゐわうせること、ひぢゆうりんくわうのじゆ

離車に師子と名くるあり、諸の離車の長たり  
徳貌は師子の如く、位は師子の臣に居るも  
師子の慢を滅除し、誨を釋師子に受く  
「汝等天威徳、名族にして美色の容あり  
能く世の橋慢を除き、受法以て明を増す  
財色香花の飾も、戒の莊嚴なるには如かず  
國土豊に安樂なるも、唯汝等の榮のみを以てす  
身榮えて民安きは、調御の心に有り  
加ふるに樂法の情を以てせば、徳をして轉た崇高ならしむ  
薄土群鄙にして、而も能く衆賢を集むるに非ず  
當に日に其徳を新にし、萬民を撫養すべし  
衆を導くに明正を以てし、牛王の津を涉るが如くし  
若し人能く自ら、今世及び後世を念じ  
唯當に正戒を脩すべくんば、福利二世に安かるべし  
衆の爲に敬重せられ、名稱普く流聞せん  
仁者に樂うて友とせば、徳流れ永くして、疆無けん  
山林寶玉石は、皆地に依りて生じ

戒徳も亦地の如く、衆善の由る所なり  
翅無くして虚に騰らんと欲し、河を渡るに良舟無きごとく  
人而も戒徳無くば、苦を濟ること實に難たり  
樹に美花果あるも、針刺あれば攀づべきこと難きが如く  
多聞の美色力ある、破戒者も亦然り  
勝堂閣に端坐し、正心自ら莊嚴し  
淨戒の功徳を具し、大仙に隨うて征せよ  
染服衣に毛羽あり、螺髻して鬚髮を剃るも  
戒徳を修せずんば、方に衆苦の難を涉らん  
日夜に三たび沐浴し、奉火して苦行を修し  
遺身の穢せること野獸のごとく、水火に赴き巖に投じ  
菓を食ひ草根を餌とし、風を吸ひ恆水を飲み  
氣を服して以て糧を絶し、正戒を遠離す  
是れ禽獸の道を習ふもの、正法の器たるに非ず  
戒を毀す誹謗を招ぐは、仁者の親しまざる所  
心に常に恐怖を懷き、惡名影の如く隨ふ  
現世に利益無し、後世豈安きを獲んや

是故に智慧の士は、當に淨戒を修すべし

生死の曠野に於て、戒は善導師たり

持戒は自力に由る、此れ則ち難しと爲さず

淨戒は梯橙たり、人をして天に上昇せしむ

淨戒を建立する者は、斯れ煩惱の微なるに由れり

諸過は其心を壞し、善功德を喪失す

先づ當に我所を離るべし、我所は諸善を覆ふ

灰の火上を覆ふが如く、足踏んで焼を覺る

憍慢の其心を覆ふこと、日の重雲に隠るるが如し

慢意は慚愧を滅し、憂悲は強志を弱む

老病は壯容を壞し、我慢は諸善を滅す

諸天阿修羅は、貪嫉もて諍訟を興し

諸の功德を喪失する、悉く我慢を懐くに由る

我は勝中に於て勝れば、我の徳は勝者に同じく

我勝小に於て劣れば、斯れ則ち愚夫たり

色放は悉く無常なり、動搖暫くも停らず

終に磨滅の法たらん、何んが憍慢を用ふるを爲さんや

【阿修羅】 アスラ  
(Asura) 非天、非  
類と譯す。

貪欲は巨患たり、親を詐り而も密に怨む

猛火の内より發するがごとく、貪火も亦復然り

貪欲の熾然たること、世界火よりも甚し

火盛なるも水能く滅するも、貪愛は消すべきこと難し

猛火曠野を焚き、草盡くるも還復生ぜんも

貪欲の火の心を焚くは、正法生ぜんも則ち難し

貪欲は世樂を求む、樂は不淨業を増す

惡業は惡道に墮し、怨貪欲に過ぎたる無し

貪は則ち愛を生じ、愛は則ち諸欲を習ふ

欲を習はば衆苦を招き、元惡は貪に過ぎたる無し

貪は則ち大病たり、智藥を愚夫は止む

邪覺して正思せず、能く貪欲を増さしむ

無常苦不淨に、我無く我所無し

智慧眞實觀は、能く彼邪貪を滅す

是故に境界に於て、當に眞實觀を修すべし

眞實觀已に生ぜば、貪欲も解脫を得

徳を見て貪欲を生じ、過を見て瞋恚を起す



徳海二つながら俱に忘れ、貪恚除滅することを得ん  
瞋恚は素容を改め、能く端正の色を壞す  
瞋恚は明日を驕し、法義を聞かんと欲するを害し  
親愛の義を斷絶し、世の爲に輕賤せらる  
是故に當に恚を捨すべし、瞋心に隨ふこと勿れ  
能く狂恚の心を制する、是を善御者と名く  
世に稱する善調馴とは、是れ攝縛の容を爲すなり  
恚を縱にして自ら禁ぜずんば、懊悔の火隨つて燒かん  
若し人瞋恚を起さば、先づ自ら其心を燒き  
然る後彼に加へて、或は燒け或は燒けず  
生老病死の苦、衆生に逼迫せるに  
復恚害を加へなば、多怨に復怨を増さん  
世の衆苦に迫られなば、應に慈悲の心を起すべし  
衆生の煩惱を起すに、増微無量の差あり  
如來は善方便もて、病に隨つて略説したまふ  
譬へば世の良醫の、病に隨つて藥を投するが如し  
爾時諸の讎事、佛の説きたまふ所の法を聞き

【安居】（くつぎ） 印度の僧徒の雨期三ヶ月間外出を禁じて坐禪修學を勤むるをいふ。雨安居の略。坐夏坐臘ともいふ。【彌猴池】毘舍離國菴羅園の側にあり、天竺五精舎の一。

即ち起つて佛足を禮し、歡喜して頂受しぬ  
 佛及び大衆に請ふ、「明日薄供を設けん」と  
 佛諸の離車に告げたまはく、「菴摩羅已に請へり」と  
 離車感愧を懷く、「彼何んが我利を奪へる」と  
 佛心の平等なるを知り、而も隨喜の心を起す  
 如來は善く隨宜に、安慰して心を悦ばしむ  
 化に伏して純熟して歸すること、蛇の嚴呪を被るが如し  
 夜過ぎて明相生じ、佛大衆と俱に  
 菴摩羅の舎に詣り、彼の供養を受け畢りて  
 往いて毘紐村に詣り、彼に於て夏安居す  
 三月安居し竟りて、復讐舎離に還り  
 彌猴池の側に住して、林樹の間に坐したまふ  
 普く大光明を放ちたまふに、以て魔波旬に感ず  
 來りて佛の所に詣り、合掌して勸請して言さく  
 「吾尼連禪の側に、已に眞實の要を發し  
 我所作事畢りなば、當に涅槃に入るべしと  
 今所作已作せば、當に本心を遂ぐべし」と

時に佛波旬に告げたまはく、「滅度の時遠からず  
 却後三月満じなば、當に涅槃に入るべし」と  
 時に魔如來の、滅度し己るの期有るを知り  
 情願既己に滿ぜりとし、歡喜して天宮に還る  
 如來樹下に坐し、正受三摩提もて  
 業報の壽を放捨し、神力もて住命を存す  
 如來壽を捨せるを以て、大地普く震動し  
 十方虚空の境は、周遍して大火然え  
 須彌の頂は崩頽し、天雨り礫石を飛ばす  
 狂風四に激起し、樹木悉く摧折す  
 天樂は哀聲を發し、天人は心に觀を忘る  
 佛は三昧より起つて、普く諸の衆生に告げたまはく  
 「我今己に壽を捨し、三昧力もて身を存す  
 身は朽敗車の如く、復往來の因無し  
 已に三有を脱せること、鳥の卵を破りて生ぜるが如し

【離車辭別品】佛捨壽の後阿難諸佛等並に諸行無常の理を説きて辭別するを明す。

離車辭別品第二十四

尊者阿難陀、地と普天の動くを見て  
心驚き身毛豎つ、佛に問はく、「何の因縁なりや」と  
佛は阿難陀に告げたまはく、「我住すること三月の壽なり  
餘命の行悉く捨せり、是故に地大いに動く」  
阿難佛の教を聞いて、悲感し涙交流る  
猶し大力象の、彼梅檀樹を搔すが如く  
擾動し理迫進し、香汗の涙流れ下る  
『大師尊を親重せば、恩深くして未だ欲を離れず  
惟此四事の故に、悲苦自ら勝へず  
今我世尊の、涅槃決定の教を聞いて  
舉體悉く萎消し、方に迷うて常音を失ひ  
所聞の法は悉く忘れ、荒悖して天地を亡ふ  
怪しい哉救世主、滅度一に駛かるべし  
寒水に遭うて死に垂んとし、火に遇うて忽ち復滅し

煩惱の曠野に於て、迷亂して其方を失ふに  
忽ち善導師に遇ふも、未だ度せざるに忽ち復失ふ  
人の長漠を涉るに、熱渴久しく水に乏しく  
忽ち清涼池に遇ひ、奔趣するに悉く枯渴せるが如し  
紺睫瞳睛の目、明は三世に鑒たり  
智慧幽冥を照せるに、昏冥一に何ぞ速なるや  
猶し旱地の苗の、雲興らば雨を仰希するに  
暴風の雲速に滅し、望絶え空田を守るが如し  
無智の大闇冥に、群生は悉く方に迷へり  
如來慧燈を燃ぜしに、忽ち滅せば出づるに由莫けん』  
佛阿難の説を聞いて、酸訴の情悲切なるもの  
軟語もて安慰して言はく、『爲に眞實の法を説かん  
若し人自性を知らば、應に憂悲に處すべからず  
一切諸の有爲は、悉く皆磨滅の法なり  
我已に汝が爲に説けり、合會の性は別離し  
恩愛の理は常ならず、當に悲戀の心を捨すべし』と  
有爲流動の法は、生滅自在ならず



長存せしめんと欲せん者も、終に是處有ること無し  
有爲若し常に存せば、遷變者有ること無し  
此を則ち解脱と爲す

此を則ち解脱と爲す

何に於てか更に求むる、汝及び餘の衆生

今我に於て何をか求むる、汝等應に得べき所

我以て説き竟れりと爲す、何んが我此身を用ひん

妙法身長く存し、我は我の寂靜に住す

要する所は唯此にあるのみ、然も我衆生に於て

未だ曾て所倦有らず、當に厭離想を修し

善く自洲に住すべし、當に知るべし自洲とは

専ら精勤方便して、獨り靜に閑居を修し

他信に從はず、當に知るべし法洲とは

決定明慧の燈なり、能く癡暗を滅除し

四境界を觀察し、勝法を逮得し

我を離れ我所を離る、骨竿皮肉塗

血澆ぐに筋纏を以てするも、諦觀せば悉く不淨なり

云何が此身を樂まん、諸受は緣より生ずること

猶し水上の泡の如し、生滅無常の苦は  
 樂想を遠離し、心識生住滅し  
 新新として暫くも停らず、寂滅を思惟せば  
 常想は永く已に乖けり、衆行は因縁より起り  
 聚散常に俱ならず、愚癡は我相を生ず  
 慧者は我所無く、此四境界に於て  
 思惟し正觀察す、此れ則ち一乘の道なり  
 衆苦悉く皆滅す、若し能く此に住せば  
 眞實正觀の者、佛身の存亡有るも  
 此法は常に盡くること無し、佛此妙法を説き  
 阿難を安慰したまふ時、諸の離車之を聞いて  
 惶怖して威く來集し、悉く俗威儀を捨て  
 驅馳して佛の所に至り、禮し畢りて一面に坐す  
 問はんと欲するも宣ぶること能はず、佛已に其心を知り  
 逆に方便説を爲したまはく、我今汝を觀察するに  
 心に異常の想有り、俗縁の務を放捨し  
 唯念法のみを精と爲す、汝今我に従つて

【婆私吒】 ヲッシ  
タ (Vasista)  
【曼陀】 マンダ  
ートリ (Mantra)

所聞所知せんと欲せば、我存亡の際に於て  
慎んで憂悲を生ずること莫れ、無常有爲の性は  
躁動にして變易の法なり、不堅は利益に非ず  
久住相有ること無し、古昔の諸の仙王  
婆私吒仙等、曼陀轉輪王  
其比亦衆多なり、是の如きの諸の先勝は  
力は自在天の如きも、悉く已に久しく磨滅せり  
一として今に存すること無し、日月天帝釋  
其數亦甚だ衆きも、悉く皆磨滅に歸せん  
長存者有ること無し、過去世の諸佛  
數恆邊沙の如く、智慧は世間を照すも  
悉く皆燈の滅するが如し、未來世の諸佛も  
將に滅せんとする亦復然り、我今豈獨り異らんや  
當に涅槃に入るべし、彼應度者有らば  
今宜しく進んで前行すべし、毘舍離の快樂に  
汝等曰く自ら安んぜよ、世間に依怙無く  
三界は歡ぶに足らず、當に憂悲の苦を止めて

離欲の心を生ずべし、決斷して長別しにりて  
而も北方に遊ぶ、摩羅として長路を涉ること  
日の西山に傍ふが如し

爾時諸の離草、悲吟し路を逐うて隨ふ  
天を仰いで哀歎す、嗚呼何ぞ怪しきや

形は眞金山の如く、衆相具に莊嚴せるに

久しからずして將に崩壞せんとは、無常何んが慈無き

生死に久しく虚渴せるに、如來智慧の母は

而も今頓に放捨す、救無きの苦を奈何せん

衆生は久しく闇冥ならん、明慧を假りて以て行ぜんも

如何なる智慧の日か、忽然として光を濟むる

無智は迅流たり、諸の衆生を漂浪す

如何なる法の橋梁か、一旦忽然として摧かれん

慈悲の大醫王は、無上智の良藥もて

衆生の苦を療治せしに、如何が忽ち遠逝せる

慈悲の妙天幢、智慧を以て莊嚴たり

金剛心の紋絡あり、世間觀て厭ふ無し

【迦尼】 カルニカ  
ーラ (Karnikara)

【涅槃品】 特に涅槃に入らんとせる直前に於ける離車諸力士等への説法を明す。

祠祀ししの嚴勝幢ごんしょうどう、云何いんかが一旦いつたんにして崩くづる  
衆生しゆじやう何んが薄福はくふくにして、生しやうの盡流じんりゅうに輪廻りんませる  
解脱げだつの門もん忽たちちに閉とぢ、長苦ちやうくに二期しにど無なし  
如來にょらいは善ぜんき安慰あんゐなるに、情じやうを割わいて長ながく辭なせり  
心こころを制せいし悲戀ひれんを忍しのぶも、萎なえたる迦尼花かにかの如ごとし  
徘徊徘徊して遲遲ちぢぢたり、長快ちやうくわいとして路みちに隨したがつて行ゆくこと  
人の其親そのおやを喪なひ、葬さう畢はりて長ながく訣わかれて還かへるが如ごとし

涅槃品第二十五

佛ほとけ涅槃處ねはんぢよに至いたれば、轉舍離てんしゃりは空虛くうこなること  
猶なほし夜雲やうんの冥くらくして、星月しやうげつの光くわう明みやうを失うしなへるが如ごとし  
國土こくど先に安樂あんらくなりしも、而しかも今頃いまぎらに凋悴てうすいせり  
猶なほし慈父じふを喪なへる、孤女こによの常つねに獨ひとりり悲かなしめるが如ごとし  
端正たんとしやうなるも聞きくこと無なく、聰明ごうみやうにして薄德はくとく  
心こころに辯べんずるも口くちに吃どり、明慧みやうゑなるも才さいに乏とほしく  
神通じんつうあるも威儀ゐゐ無なく、慈悲じひ心しんあるも虛偽こぎにして



高勝なるも力無く、威儀あるも法無きが如し

轉舍離も亦然り、素榮ゆるも而も今悴る

猶し秋田の苗の、水を失へば悉く枯萎せるが如し

或は火を斷じ燂を滅し、或は食に對するも食ふを忘る

悉く公私の業を廢し、諸の俗縁を修せず

佛を念じ恩を感ずること深く、默默として各言はず

時に師子離車、強ひて其憂悲を忍び

泣かんとして哀聲を發し、以て眷戀の心を表す

『諸の邪徑を破壊し、正法を顯示す

已に諸の外道を降し、遂に往いて復還らず

世に世道を絶離し、無常は大病たり

世尊は大寂に入れば、依無く救有ること無し

方便の最勝尊、潜光の究竟處

我等強志を失へること、火の其薪を絶するが如し

世尊は世尊を捨つ、群生甚だ悲しむべし

人の神力を失ふが如く、舉世共に之を哀れむ

暑を逃れて涼池に投じ、寒に遭へば以て火に憑る

【不請の友】 佛菩薩は大悲の故に請はれざるに自ら友たり。

【摩錫】 マカラ (Makara) 大身と譯す。鯨のこと。

一旦いつたん悉くわんく靡わ然れんたるも、群生ぐんじやう何いづれの所ところにか歸かへせん  
殊勝しゆしやうの法ほふに通つう達たつし、世よの陶鑄たうしゆ師したり  
世間せけん幸さい正しやうを失うしなふごとく、人道ひんたうを喪うしなへば則すなはち亡ぼぶ  
老病らうびやう死しは自在じざいなれば、道喪だうしやうへば非道ひだうの通つうずるあり  
能よく大苦だいこの機きを壞くわいす、世間せけんに何いづんが雙さう有あらん  
猛熱まうねつ極ごくめて焔盛えんじやうなるも、大雲だいぐん雨うは消けえしむ  
貪欲こんよくの火熾かしかん然ぜんなれば、其それ誰たれか能よく滅めつせしめん  
堅固けんこなる能つうたう膽たん者しやは、已すでに世よの重任じゆうんを捨すせり  
復何またなんの智慧ちゑ力りきあつてか、能よく不請ふじやうの友ともたる  
彼刑かのぎやうに臨りんめる因いんの、死しなんとし酔よへるが如ごとく  
衆生じゆじやう迷惑まわくの識しは、惟これ死しの受生じゆじやうたり  
利鋸りこは以もつて材ざいを解げし、無常むじやうは世間せけんを解よく  
癡闇ちいんは深水しんすいたり、愛欲あいよくは巨浪こらうたり  
煩惱ぼんノウは浮沫うまつたり、邪見じやけんは摩竭まかつ魚ぎよたり  
唯智慧ただちゑの船ふねのみ有あつて、能よく斯大すだい海かいを度どせん  
衆病じゆびやうは樹花じゆけたり、衰老すいろうは纒せん條じょうたり  
死しは樹じゆの深根しんこんたり、有業うごふは其芽そのめたり

智慧剛利の刀もて、能く三有の樹を斷ず

無明は鑽燈たり、貪欲は熾焰たり

五欲境界の薪を、之を滅するに智水を以てし

殊勝の法を具足し、已に癡冥を壊し

安隱の正路を見、諸の煩惱を究竟せり

慈悲もて衆生を化し、怨親に異相無し

一切智に通達せるに、而も今悉く棄捨せり

軟美清淨の音、方身纖長の臂ある

大仙にして邊有り、何人か無窮を得んや

當覺の時遷ること速かなり、應に正法を勤求すべし

險道に水に遇ふが如く、時の飲は速に路を進む

非常は甚だ暴逆なり、普く壞して貴賤無し

正觀は心に存し、眠ると雖も亦常に覺れり』

時に離車師子、常に佛の智慧を念じ

生死を厭離し、人の師子を敬慕し

世の恩愛に存せず、深く離欲の徳を崇む  
輕躁の意を折伏し、心を寂靜處に栖ましめ

【堅固林】 沙羅樹の譚。

【修多羅】 スートラ (Sutra) 契經の義。

「えんぶ 勤修してせせ 惠施を行じ、けんまろ 傲慢を遠離し

樂たのしみ して獨り閑居を修し、眞實しんじつ の法ほふ を思惟しゆい せり

爾時一切智、圓身えんしん の師子顧みて

彼韓舍離かんのしり を瞻み、而も長爾ちやうじ の偈げ を説けり

『是れ五百最後、此韓舍離かんのしり に遊あそぶなり

力士生地りきしじやうち に往ゆき、當まさ に涅槃ねはん に入るべし』と

漸やうく次第しだい に遊行ぎやうぎやう して、彼蒲伽城かほがきやう に至いたる

堅固林けんこりん に安住あんぢう して、諸もろ の比丘びく を教誡けうかい し

『吾われ 今いま 中夜ちゆうや を以もつて、當まさ に涅槃ねはん に入るべし

汝等なんぢら 當まさ に法ほふ に依よるべし、是れ則すなはち尊勝そんじやう 處じよ なり

脩多羅しゆたら に入いらず、亦また 律儀りつぎ を愼つします

眞實しんじつ の義ぎ に相違さうゐ せるは、則すなはち應まさ に攝受しやくじゆ すべからず

法ほふ に非あらず亦また 律りつ に非あらず、又また 我所まが 説しつてに非あらず

是れ則すなはち聞説もんせつ たり、汝等なんぢら 應まさ に速すみ に捨すてて

明説めいせつ を執受しやくじゆ すべし、是れ則すなはち顛倒てんたう に非あらず

是れ則すなはち我所まが 説しつなり、法ほふ に如ごと たり律りつ に如ごと たるの教けなり

我わが 法律ほふりつ の如ごと く受うくるは、是れ則すなはち信しんずべしと爲なす

我法律を非と言ふは、是れ則ち信ずべからず

微細の義を解せず、謬つて文字に隨ふ

是れ則ち愚夫たり、非法にして妄説たり

其眞僞を別たす、無見にして闇受す

猶し鉢金と共に肆ねて、世間を誑惑するごとく

愚夫は淺智を習ひ、眞實の義を解せず

相似の法を受けて、而も眞の法受と作す

是故に當に審諦に、眞の法律を觀察すべし

猶し鉢金師の、焼打して眞を取るが如し

諸の經論を知らず、是れ則ち點慧に非ず

應に所應を説くべからず、應作應に見るべからず

當に平等の受を作すべし、句義は説の如く行ぜよ

劍を執るに方便無くんば、則ち反つて其手を傷けん

辭句に巧便ならざれば、其義了知し難し

夜行いて室を求むるが如く、宅曠しければ處を知ること莫し

義を失へば則ち法を忘れ、法を忘るれば心馳亂す

是故に智慧の士は、眞實の義に違せず』



【波婆城】 パーゾ  
ド(Parvati) 今のパ  
ドラーマの地。

【純陀】 チュンダ  
(Cunda) 工師の子

【鳩夷城】 クシナ  
ガラ(Kusinagara)  
【照連】 ヒラニヤ  
ツナイー(Hirany  
avat) 金河と譯す

斯教識を説き已りて、波婆城に至る

彼諸の力士衆、種種の供養を設く

時に長者子有り、其名を純陀とす

佛を請うて其舍に至り、最後の飯を供設す

飯食説法し畢りて、行いて鳩夷城に詣り

藏巖河、及び照連の二河を度る

彼に堅固林有り、安隱閑靜の處なり

金河に入りて洗浴せるに、身は眞金山の若し

阿難陀に告勅して、彼雙樹の間に於て

掃灑清淨ならしめ、繩床を安置せしむ

『五入中夜時に、當に涅槃に入るべし』

阿難佛の教を聞き、氣寒り心悲しみ

行いて泣くも教を奉じ、布置し訖り還りて白す

如來繩床に就き、北首し右脇して臥したまふ

手を枕にし雙足を累ぬること、猶し師子王の如し

苦を畢れる後邊身は、一たび臥して永く起たず  
弟子の衆圍遶して、哀歎すらく『世眼滅せり』と

【力士】 拘尸那城  
にありし一族。

風止み林流静まり、鳥囀は寂として聲無し

樹木には汗涙流れ、華葉非時に零る

未離欲の人天も、悉く皆大いに怖す

人の曠澤に遊んで、道險なるに未だ村に至らず

但行いて至らざるを恐るるが如く、心に懼れ形忽忽たり

如來畢竟じて臥して、阿難陀に告げたまはく

「往いて諸の力士に告げよ、我涅槃の時至れりと

彼若し我を見ずんば、永く恨み大苦を生ぜん」

阿難佛の教を受け、悲泣して路に隨ひ

彼諸の力士に告ぐらく「世尊已に畢竟せり」

諸の力士之を聞いて、極めて大恐怖を生じ

士女は奔馳して出で、號泣して佛の所に至る

弊衣にして散髮し、塵を蒙り身には流汗せり

號慟して彼林に詣ること、猶し天龍の盡きたるが如し

涙を垂れて佛足を禮し、憂悲して身は萎熟せり

如來安慰して説きたまはく「汝等憂悴すること勿れ

今や應に隨喜すべきの時、憂戚を生ずべからず

長劫の規せる所、我今始めて獲得せり

已に根境界を度して、無盡の清涼處にあり

地水火風を離れて、寂靜にして生滅せず

永く憂患を除けるに、云何が我爲に憂ふる

我昔伽闍山に、此身を捨てんと欲せしが

本因縁を以ての故に、世に存して今に至る

斯危脆の身を守ること、毒蛇と同居するが如し

今大寂に入り、衆の苦縁已に畢れり

復更に身を受けず、未來の苦長く息めり

汝等復、應に我爲に恐怖を生ずべからず

力士佛の、大寂靜に入るを説きたまふを聞き

心亂れて目冥く、大黒闇を觀るが如し

合掌して佛に白して言さく「佛は生死の苦を離れ

永く寂滅の樂に之きたまへり、我等實に欣慶すること

猶し被燒舎の、親しく盛火より出づるが如し

諸天すら猶歡喜せん、何に況んや世人に於てをや

如來既に滅したまひての後は、群生觀る所無く

永く救護に達せん、是故に憂悲を生ず

譬へば商人衆の、遠く曠野を渉るに

唯一の導師のみ有り、忽然として中道に亡へば

大衆の怖る所無きが如し、云何が憂悲せざらんや

現世に自ら證知し、一切を觀て知見せるに

而も勝利を獲ずんば、舉世の應に笑ふべき所たり

譬へば寶山に經るも、愚癡は貧苦を守るが如し』

是の如く諸の力士、佛に向ひて悲み訴ふ

猶し人の一子の、慈父に悲訴するが如し

佛善誘の辭を以て、第一義を顯示し

諸の力士衆に告げたまはく、『誠に汝が言ふ所の如し

求道は須らく精勤すべし、但私の得のみを見るに非ず

我所説の如く行ぜば、衆の苦網を離るることを得ん

行道は心に存し、必ずしも我を見るに由らず

猶し疾病人の、方に依つて良藥を服せば

衆病自然に除り、醫師を見るを待たざるが如し

我説の如く行ぜず、空しく我を見るも益無けん

【大般涅槃經品】最  
後に須跋陀羅を度  
法を畢りて涅槃の説  
入るを説く。  
【須跋陀羅】スバ  
ドラ (Subhadrā) 善  
賢と譯す。

我と相遠しと雖も、法を行ぜば我に近しと爲す  
同く止るも法に隨はずんば、當に知るべし我を去ること遠きことを  
心を攝し放逸なること莫れ、精勤に正業を修せよ  
人世間に生れ、長夜衆苦に迫められ  
擾動して自ら安かならず、猶し風中の燈の如し  
時に諸の力士衆、佛の慈悲の教を聞き  
内に感じて涙を收め、強ひて自ら抑止して歸れり

大般涅槃經品第二十六

爾時梵志有り、須跋陀羅と名く  
賢徳悉く備足し、淨戒もて衆生を護れり  
少くして邪見を棄け、外道を修して出家せり  
來りて世尊に見えんと欲し、阿難陀に告語すらく  
『我如來の道を聞くに、厭義深くして測り難し  
世間の無上覺たり、第一調御師たり  
今般涅槃せんと欲したまへば、復再び遇ふべきこと難し』



見難きを見るは難し、猶し鏡中の月の如し

我今、無上の善導師を見奉らんと欲す

爲に衆苦を免れ、生死の彼岸に度らんことを求む

佛日光を濟めんと欲す、願くば我をして暫く見しめよ

阿難心に悲感せるも、兼ねて謂ふ譏論たり

或は世尊の滅を欣ばん、宜しく佛を見しむべからず」と

佛彼の希望の、正法の器たるに堪ふることを知り

阿難に告げて言はく、「彼は外道に前むと聽けり

我人生を度せんとす、汝留難を作すこと勿れ」

須跋陀羅聞いて、心に大歡喜を生じ

樂法の轉情深く、敬を加へて佛道に至る

時に應じて隨順して言ひ、軟語して問訊し

和藹合掌して請ふらく、「今所問有らんと欲す

世に知法者有り、我比の如きは甚だ衆し

唯佛の所得の、解脱のみは異要の道を聞けり

願くば我爲に略説し、虚濁の心を清潤したまへ

論議を爲さざるが故に、亦勝負の心も無し」

佛彼梵志の爲に、略して八正道を説きたまふ  
聞いて即ち虚心もて受けば、猶し迷ふも正路を得るがごとし  
先の所學の、究竟道たるに非ざるを覺知せば  
即ち未曾聞を得、邪徑を捨離し

兼ねて癡闇の障に背き、先の所習を思惟す

「嗔恚癡の冥と俱なれば、不善業を長養す

愛恚癡等しく行ぜば、能く諸の善業を起し

多聞慧精進は、亦有愛に由つて生ず

恚癡若し斷ぜば、則ち諸業を離る

諸業既に除きなば、是を業解脱と名く

諸業の解脱者は、義を相應せず

世間の説く一切は、悉く皆自性有り

愛瞋恚癡有り、而も自性有らば

此則ち常に應に存すべし、云何が解脱せんと

正しく恚癡を滅せしめんも、有愛還つて復生ぜん

水の自性は冷かなるも、火に縁つての故に熱を成するが如し

熱息めば冷に歸す、自性常なるを以ての故なり

當に知るべし、愛性有れば、聞と慧と進とは増さず  
増さず亦滅せざる、云何が是れ解脱なる

先に謂ふ彼生死は、本性中より生ずと

今彼義を觀するに、解脱を得る者無し

性とは則ち常性なり、云何が究竟有らんや

譬へば明燈の燃ゆるが如く、何んが能く光を無からしめんや

佛道眞實の義は、愛に緣つて世間に生ず

愛滅すれば則ち寂靜なり、因滅するが故に果亡ぶ

本謂ふ我は身に異り、作者無きを見ずと

今佛の正教を聞くに、世間に我有ること無し

諸法は因縁の生なり、自在有ること無きが故に

因縁生の故に苦なり、因縁滅するも亦然り

世の因縁生を觀すれば、則ち斷見を滅す

離世間滅を緣すれば、則ち常見を離る

悉く木の所見を捨てて、深く佛の正法を見たり

宿命に善因を種うれば、開法して能く則ち悟る

已に善寂滅を得て、清涼無盡處にあり

『波羅提木叉』  
ラーテイモークシ  
ヤ (Pratimokṣa)  
別解脱と譯す。

心開け信増廣し、如來の臥せるを仰瞻するに  
如來の、世を捨てて般涅槃するを觀るに忍びず  
及び佛未だ究竟せざるに、我當に先に滅度すべし』  
合掌して聖顏を禮し、一面にして正基坐す  
壽を捨し涅槃に入ること、雨の小火を滅するが如し  
佛諸の比丘に告げたまはく、『我最後の弟子  
而も今已に涅槃せり、汝當當に供養すべし』  
佛初夜過ぎて、月明かに衆星朗かに  
閑林靜かに聲無きを以て、而も大悲心を興し  
諸の弟子に遺誡したまはく、『吾般涅槃の後  
汝等當に、波羅提木叉を恭敬すべし  
即ち是れ汝が大帥たり、五夜の明燈なり  
貧人の大寶たり、當に教誡せらるべき者  
汝等當に隨順し、我に事ふるが如く異なること無かるべし  
當に身口行を淨くし、諸の治生業を離るべし  
田宅もて衆生を畜へ、財及び五穀を積む  
一切當に遠離すべきこと、大火坑を避くる如くすべし

土を掘り草木を截り、醫もて諸病を療治し  
 仰いで曆數を觀じ、吉凶の象を歩推し  
 利害を占相す、此れ悉く應に爲すべからず  
 身を節し時に隨つて食し、位を受くをも術を行せず  
 湯藥を合和せず、諸の詔曲を遠離し  
 順法資生の具は、應當に量を知つて受くべし  
 受くれば則ち積聚せず、是れ則ち略して戒を説く  
 衆戒の根たり、亦解脱の本たり  
 此法に依りて能く、一切の諸の正受を生ず  
 一切の眞實智は、斯に緣りて究竟を得  
 是故に當に執持して、其をして斷壞せしむること勿るべし  
 淨戒斷ぜざるが故に、則ち諸の善法有り  
 無くんば則ち諸善無し、戒を建立するを以ての故なり  
 已に清淨の戒に住し、善く諸の情根を攝むること  
 猶し善く牛を牧ふがごとく、其をして縱暴ならしめざれ  
 諸根馬を攝めずして、六境に縱逸せしめば  
 現世に殃禍を致し、將に惡病に墮せんとす



譬へば不調馬の、人をして坑路に墮せしむるが如し

是故に明智者は、應に諸根を繫にすべからず

諸根は甚だ凶惡にして、人の重怨たり

衆生は諸根を愛し、還彼爲に傷害せらる

深怨の盛れる毒蛇、暴虎及び猛火

世間の甚惡も、慧者は畏れざる所なり

唯輕躁の心の、人をして惡道に入らしめんとするをのみ畏る

彼樂に小恬なるを以て、深險を觀ぜざるが故に

狂象の利鉤を夫ひ、猿猴の樹林を得たるごとく

輕躁心は是の如し、慧者は常に攝持すべし

放心自在ならしむれば、終に寂滅を得ず

是故に當に心を制し、速に安靜處に之くべし

飯食に節量を知り、應に服藥法の如くすべし

飯食に囚りて、而も貪恚心を生ずること勿れ

飯食の飢渴を止むること、膏朽せる敗車の如し

譬へば蜂の花を採るに、其色香を壞せざるが如し

比丘乞食を行じて、彼信心を傷くること勿れ

若し人聞心に施さば、當に彼所堪を推すべし  
牛の力を籌量せずして、重載せば其を傷けしめん  
朝中咄の三時に、次第に正業を修せよ  
初後二夜分に、亦睡眠に著すること莫れ  
中夜には端心に臥し、係念明相に在り  
終夜睡眠して、身命を空しく過さしむること勿れ  
時火常に身を焼く、云何が長く睡眠せん  
煩惱は衆の怨家なり、虚に乗じて随つて害せん  
心睡眠に昏くば、死至るも孰か能く覺らん  
毒蛇宅に藏せば、善呪能く出でしむ  
黒虺其心に居せば、明覺の善呪もて除け  
術無くして長く眠るは、是れ則ち無慚の人なり  
慚愧は嚴服たり、慚は制象の鈎たり  
慚愧は心を定まらしめ、無慚は善根を喪ふ  
慚愧は世に賢と稱せられ、無慚は禽獸の倫たり  
若し人利刀を以て、節節に其身を解するも  
應に慧根を懷くべからず、口に惡言を加へざれ

惡念にして惡言せば、自ら傷け彼を害せず  
 身を節して苦行を修するは、忍辱の勝れたるに過ぎたるは無し  
 唯忍辱を行するのみ有りて、難伏堅固力あり  
 是故に恨を懐くこと勿れ、惡言以て人に加へなば  
 瞋恚は正法を壞し、亦端正の色を壞す  
 美名の稱を喪失し、瞋火は自ら心を燒く  
 瞋は功德の怨たり、愛徳に恨を懐くこと勿れ  
 在家に諸惱多きも、瞋恚の故に怪に非ず  
 出家にして瞋を懐くは、是れ則ち理と乖く  
 猶し冷水中にして、盛火の燃ゆるが如し  
 憍慢心若し生ぜば、當に自ら手もて摩頂すべし  
 剃髮して染衣を服し、手に乞食の器を持ち  
 邊生裁つて自ら生くれば、何爲れぞ憍慢を生ぜん  
 俗人は衣色の族、憍慢亦過たり  
 何に況んや出家人の、解脫道を志求し  
 而も憍慢心を生ぜば、此れ則ち大いに不可なり  
 曲直の性の相違して、俱ならざること猶し霜と炎とのごとし

出家せば直道を修すべし、謂曲は所應に非ず

謂偽の<sup>も</sup>もて虚詐するも、唯法のみ欺誑せず

多求は則ち苦たり、少欲は則ち安穩たり

安からん爲に應に少欲なるべし、況んや眞解脱を求むるをや

價格は多求を畏れ、其財寶を損せんことを恐る

好施者も亦畏れて、財の供足せざらんことを愧づ

是故當に小欲もて、彼無畏心を施すべし

此少欲心に由りて、則ち解脱道を得ん

若し解脱を求めんと欲せば、亦應に知足を習ふべし

知足は常に歡喜す、歡喜は即ち是れ法なり

資生の具陋しと雖も、知足の故に常に安し

不知足の人、生天の樂を得と雖も

不知足を以ての故に、苦火常に心を燒く

富んで而も知足せざるは、是れ亦貧苦と爲す

貧しと雖も足るを知るは、是れ則ち第一の富なり

其れ足るを知らざる者は、五欲の境彌廣く

猶更に求めて厭くこと無く、長夜に馳騁して苦しむ

波<sup>なみ</sup>波<sup>なみ</sup>として憂慮<sup>ううれい</sup>を懷<sup>いだ</sup>き、反<sup>かへ</sup>つて知足<sup>ちそく</sup>に哀<sup>あは</sup>れまる  
多<sup>おほ</sup>く眷屬<sup>けんじやく</sup>を受けざれば、其心常<sup>こころじょう</sup>に安隱<sup>あんいん</sup>たり  
安隱<sup>あんいん</sup>寂靜<sup>じやくじやう</sup>の故<sup>ゆゑ</sup>に、人天<sup>にんてん</sup>悉<sup>ことごと</sup>く奉事<sup>ほうじ</sup>せん  
是故<sup>ゆゑ</sup>に當<sup>あた</sup>に、親疎<sup>しんそ</sup>二眷屬<sup>にけんじやく</sup>を捨離<sup>しつり</sup>すべし  
曠澤<sup>くわうたく</sup>孤樹<sup>こじゆ</sup>に、衆鳥<sup>しゆじゆ</sup>多く集<sup>あ</sup>つて栖<sup>すま</sup>むが如<sup>ごと</sup>く  
多畜<sup>たちく</sup>衆<sup>しゆ</sup>も亦然<sup>またし</sup>り、長夜<sup>ちやうや</sup>に衆<sup>しゆ</sup>の苦<sup>くる</sup>を受<sup>う</sup>く  
多衆<sup>たしゆ</sup>と多纏<sup>たてん</sup>累<sup>るい</sup>とは、老象<sup>らうじやう</sup>の泥<sup>でい</sup>に溺<sup>おぼ</sup>るるが如<sup>ごと</sup>し  
若<sup>も</sup>し人勤<sup>ひとつと</sup>めて精進<sup>しやうじん</sup>すれば、利<sup>り</sup>として獲<sup>え</sup>ざる無<sup>な</sup>し  
是故<sup>ゆゑ</sup>に當<sup>あた</sup>に晝夜<sup>ちゆうや</sup>に、精勤<sup>しやうきん</sup>して懈怠<sup>せたい</sup>せざるべし  
山谷<sup>さんこく</sup>の微流<sup>みりゆう</sup>の水<sup>みづ</sup>も、常<sup>つね</sup>に流<sup>なが</sup>るるが故<sup>ゆゑ</sup>に石<sup>いし</sup>を決<sup>けつ</sup>す  
火<sup>ひ</sup>を鑽<sup>く</sup>るに精進<sup>しやうじん</sup>ならざれば、徒勞<sup>とらう</sup>にして獲<sup>え</sup>ず  
是故<sup>ゆゑ</sup>に當<sup>あた</sup>に精進<sup>しやうじん</sup>すべきこと、壯夫<sup>すたふ</sup>の火<sup>ひ</sup>を鑽<sup>く</sup>るが如<sup>ごと</sup>し  
善友<sup>ぜんゆう</sup>は良<sup>らう</sup>たりと雖<sup>いへど</sup>も、正念<sup>しやうねん</sup>に及<sup>およ</sup>ばず  
正念<sup>しやうねん</sup>は心<sup>こころ</sup>に存<sup>ぞん</sup>ず、衆惡<sup>しゆあく</sup>は悉<sup>ことごと</sup>く入<sup>い</sup>らず  
是故<sup>ゆゑ</sup>に修行者<sup>しゆじやうじや</sup>は、常<sup>つね</sup>に當<sup>あた</sup>に其身<sup>そのみ</sup>を念<sup>ねん</sup>すべし  
身<sup>み</sup>に於<sup>お</sup>て若<sup>も</sup>し失念<sup>しつねん</sup>せば、一切<sup>いっせつ</sup>の善則<sup>ぜんそく</sup>も忘<sup>わす</sup>る  
譬<sup>たと</sup>へば勇猛<sup>ゆうまう</sup>將<sup>しやう</sup>の、被<sup>ひ</sup>卸<sup>お</sup>して強敵<sup>きやうてき</sup>を御<sup>お</sup>するが如<sup>ごと</sup>し



正念は重鑑たり、能く六境の賊を制す

正定もて覺心を檢し、世間の生滅を觀す

是故に修行者は、當に三摩提を習ふべし

三昧中に寂靜なれば、能く一切の苦を滅す

智慧は能く照明して、攝受を遠離し

等觀もて内に思惟し、隨順して正法に趣く

在家及び出家は、斯れ順に此路に由るべし

生老死の大海に、智慧は輕舟たり

無明の大闇冥に、智慧は明燈たり

諸の纏結垢の病に、智慧は良藥たり

煩惱棘刺の林に、智慧は利斧たり

癡愛飲水の流に、智慧は橋梁たり

是故に當に勤修して、聞思修の慧を生ずべし

三種の慧を成就せば、盲と雖も慧眼通す

慧無きは心虚偽なり、是れ則ち出家に非ず

是故に當に覺知すべし、諸の虚偽の法を離るれば  
微妙の樂を逮得し、寂靜安隱に處することを

【聞思修の慧】こ  
れを三慧といふ、考  
へて得る智、實踐  
して得る智の三なり。

不放逸を遵崇せよ、放逸は善怨たり

若し人不放逸なれば、帝釋處に生ずることを得

縱心放逸なる者は、則ち阿修羅に墮す

安慰慈悲の業あらば、所應の我已に畢らん

汝等當に精勤して、善く自ら其業を修むべし

山林空閑の處に、寂靜心を増長し

當に自ら勤めて勸勉し、後に悔恨せしむること勿るべし

猶し世の良醫の、病に應じて方藥を説くが如し

病を抱いて而も服せざるは、是れ良醫の過に非ず

我已に眞實を説き、平等の路を顯示せり

聞いて奉用せざるは、此説く者の咎に非ざるなり

四眞諦の義に於て、了せざる所有らば

汝今悉く應に問ふべし、復所懷を隱すこと勿れ

世尊哀愍して教へ、衆會默然として住せり

時に阿那律陀、諸の大衆を觀察するに

默然として所疑無し、合掌して佛に白さく

「月温かに日光冷かに、風靜かに地性動く

是の如きの四種の惑は、世間悉く已に無し  
 苦集滅道の諦は、眞實として未だ曾て違せず  
 世尊の所説の如きは、衆會して悉く疑無し  
 唯世尊涅槃したまひ、一切悉く悲感せるも  
 世尊の説に於て、不究竟の想を起さず  
 正使新に出家して、情に未だ深解せざる者も  
 今慇懃の教を聞いて、疑惑悉く已に除り  
 已に生死の海を度して、欲無く所求無きも  
 今皆悲戀を生ぜるは、佛滅の何んが速なると歎するなり』  
 佛阿那律の、種種に憂悲して説けるを以て  
 復慈愍心を以て、安慰して告げて言はく  
 『正使劫を経て住すとも、終に歸して當に別離すべし  
 異體にして而も和合する、理自ら常に俱ならざるなり  
 自他の利己に畢れば、空しく住すとも何の爲す所ぞ  
 天人の應に度すべき者は、悉く已に解脱を得たり  
 汝等諸の弟子、展轉して正法を維き  
 必ず磨滅有るを知つて、復憂悲を生ずること勿れ

當に自ら勤めて方便して、不別離處に到るべし  
我巳に智燈を燃して、世の闇冥を照除せり  
世は皆牢固ならず、汝等當に隨喜すべし  
親の重病に遭ふや、療治して苦患を脱するが如し  
巳に苦器を捨てて、生死海の流に逆ふ  
永く衆の苦患を離る、是れ亦應に隨喜すべし  
汝等善く自ら護りて、放逸を生ずること勿れ  
有者は悉く滅に歸す、我今涅槃に入る  
言語是より斷ぜん、此れ則ち最後の教なり』  
初禪三昧に入り、次第に九たび正受し  
逆に次第に正受し、還初禪に入り  
復初禪より起つて、第四禪に入る  
出定、心寄る無くして、便ち涅槃に入りたまふ  
佛涅槃を以ての故に、大地普く震動し  
空中に普く火を雨らし、薪無くして自ら焰ゆ  
又復地より起りて、八方俱に熾燃たるも  
乃至諸の天宮の、熾燃たるも亦是の如し

【八方】 四方四維

雷霆天地を動かし、霹靂山川を震はす

猶し天阿修羅の、鼓を撃つて戦闘する聲のごとし

狂風は四に激起し、山崩れて灰塵を雨らし

日月に光暉無く、清流悉く沸涌し

堅固林萎悴し、華葉非時に零つ

飛龍黒雲に乗じ、五首を垂れて涙流る

四王及び眷屬、悲みを含み供養を興す

淨居天は來下して、虚空中に列侍し

無常變を觀察し、無變にして亦無喜なり

世の天師に違するを數じ、眼滅一に何んが速なる

八部の諸の天神は、虚空中に遍滿し

華を散して以て供養し、成成として心に歡ばす

唯魔王のみ有りて喜び、奏樂して以て自ら娛む

閻浮提榮を失し、猶し山頽れ巔の崩れ

大象の素牙折れ、牛玉の雙角の摧け

虚空に日月無く、蓮花の嚴霜に遭ふがごとし

如來般涅槃し、世間の悴るるも亦然り

【八部】天、龍、  
夜叉、乾闥婆、阿  
修羅、迦樓羅、緊  
那羅、摩睺羅伽。  
【成威】憂悲の貌。



【歎涅槃品】 諸天子諸羅漢等の佛滅を哀歎するの辭並に佛身を茶毘に附すを説く。

歎涅槃品第二十七

時<sup>とき</sup>に一の天子<sup>いちのてんし</sup>有り、千白鶴宮<sup>せんびやくくわくぐう</sup>に乗<sup>のり</sup>じ  
上<sup>かみ</sup>虚空<sup>こくう</sup>の中に於<sup>お</sup>て、佛<sup>ほとけ</sup>の般涅槃<sup>はんねはん</sup>を觀<sup>み</sup>る  
普<sup>あま</sup>く諸<sup>しよ</sup>の天衆<sup>てんしゆ</sup>の爲<sup>ため</sup>に、廣<sup>ひろ</sup>く無常<sup>むじやう</sup>の偈<sup>げ</sup>を説<sup>と</sup>くらく  
『一切<sup>いっさい</sup>の性は無常<sup>むじやう</sup>なり、速<sup>すみやか</sup>に生<sup>な</sup>じて速<sup>すみやか</sup>に滅<sup>めつ</sup>す  
生<sup>しやう</sup>は則<sup>すなは</sup>ち苦<sup>く</sup>と俱<sup>とも</sup>なり、唯<sup>ただ</sup>寂滅<sup>じやくめつ</sup>のみを樂<sup>らく</sup>と爲<sup>な</sup>す  
行業<sup>ぎやうごふ</sup>の薪<sup>たき</sup>積<sup>た</sup>聚<sup>じゆ</sup>し、智慧<sup>ちゑ</sup>の火<sup>ひ</sup>熾<sup>し</sup>然<sup>ぜん</sup>たり  
名<sup>な</sup>稱<sup>しやう</sup>の烟<sup>けむり</sup>は天<sup>てん</sup>を衝<sup>つ</sup>き、時<sup>とき</sup>雨<sup>う</sup>の雨<sup>あめ</sup>を滅<sup>めつ</sup>せしむ  
猶<sup>なほ</sup>劫火<sup>せつくわ</sup>の起<sup>お</sup>つて、水災<sup>すゐさい</sup>の滅<sup>めつ</sup>せらるるが如<sup>ごと</sup>し』  
復<sup>また</sup>梵仙<sup>ぼんせん</sup>天<sup>てん</sup>有り、猶<sup>なほ</sup>第一<sup>だいいち</sup>義仙<sup>ぎせん</sup>のごとし  
天<sup>てん</sup>の勝妙<sup>しょうめう</sup>樂<sup>らく</sup>に處<sup>しよ</sup>して、天報<sup>てんほう</sup>に染<sup>せん</sup>せず  
如<sup>ごと</sup>來<sup>らい</sup>の寂滅<sup>じやくめつ</sup>を歎<sup>たん</sup>じ、心<sup>こころ</sup>定<sup>じやう</sup>りて口<sup>くち</sup>に言<sup>い</sup>はく  
『三世<sup>さんぜ</sup>の法<sup>ほふ</sup>を觀<sup>くわん</sup>察<sup>さつ</sup>するに、始<sup>し</sup>終<sup>しゆう</sup>壞<sup>わい</sup>せざる無<sup>な</sup>し  
第一<sup>だいいち</sup>義<sup>ぎ</sup>に通<sup>つう</sup>達<sup>たつ</sup>せる、世間<sup>せけん</sup>無<sup>む</sup>比<sup>ひ</sup>の士<sup>し</sup>  
慧<sup>え</sup>知<sup>ち</sup>見<sup>けん</sup>の士<sup>し</sup>の、世間<sup>せけん</sup>を救<sup>きう</sup>護<sup>ご</sup>せる者<sup>もの</sup>も

悉く無常に壞せらる、何人か長存を得んや  
哀しい哉世間を擧げて、群生は刑徑に墮せり  
時に阿那律陀、世に於て不律陀

已滅して不律陀、生死尼律陀

如來の寂滅を歎じ、群生悉く盲冥たり

諸行の聚は無常なり、猶し輕雲の淨びて

速に起りて速に滅するが若く、慧者も保持せず

無常金剛の杵は、牟尼山王を壞せり

鄙しい哉世の輕躁なる、破壞して堅固ならず

無常の暴師子は、龍象大仙を害せり

如來の金剛幢も、猶し非常に壞せらる

何に沉んや未離欲にして、而も怖畏を生ぜざるをや

六種子の一芽も、一水の雨らす所

四引の深根、二觚五種の菓

實際一體なる、煩惱の大樹も

牟尼の大象の抜けるに、而も無常を免れず

猶し飾樂鳥の、水を樂んで毒蛇を呑むが如く

忽ち天の大早に遇うて、水を失して身亡ぶ  
 駿馬は戦に勇み、戦畢り純熟して還る  
 猶し火の薪に緣りて熾え、薪盡くれば則ち自ら滅するが如し  
 如來も亦是の如く、事畢りて涅槃に歸す  
 猶し明月光の、普く世の爲に雲を除き  
 衆生悉く照を蒙り、而も復須彌に隱るるが如し  
 如來も亦是の如く、慧光幽雲を照し  
 衆生の爲に雲を除き、而して涅槃の山に隱る  
 名稱の勝光明は、普く世間を照し  
 一切の雲を滅除し、停らざること迅流の若し  
 善く御せる七駿馬、軍衆羽從して遊べる  
 光光の日天子の、猶し崦嵫に入るがごとし  
 日月に五障の翳あり、衆生は光明を失ふ  
 火祠もて天に奉り畢る、唯焦黒烟のみ有り  
 如來已に潜輝し、世の榮を失ふことも亦然り  
 恩愛の希望を斷つて、普く衆生の望に應じ  
 衆生の望已に滿じて、事畢り希望を絶す

煩惱身の縛を離れて、而も眞實の道を得

群聚憤亂を離れて、寂靜處に入る

神通もて虚に騰り遊ぶも、苦器の故に喜捨す

癡冥の重闇は、智慧の光もて照除し

煩惱の埃塵は、智水もて洗ひ浄めしむ

復數數還らず、永く寂靜處に之く

一切の生死を滅し、一切悉く宗敬し

一切に樂法せしめ、慧を以て一切を充つ

悉く一切を安慰し、一切の徳普く流る

名聞は一切に遍く、重照して今に迄る

諸有ゆる徳を競ふ者、彼を哀愍心に於てす

四利も欣と爲さず、四衰も以て成とせず

善く諸情を攝し、諸根悉く明徹たり

澄心もて平等觀し、六境に染著せず

所得未曾有にして、人の得ざる所を得たり

諸の出要水を以て、虚渴を飽滿せしめ

人の施さざる所を施し、亦其報を望まず

寂靜妙相身、悉く一切念を知る  
好惡に傾動せず、力は一切の怨に勝る  
一切病の良薬も、而も無常に壊せらる  
一切の衆生類は、樂法各異端なるも  
普く其所求に應じ、悉く其所願を滿す  
聖慧大施主は、一たび往いて復還らず  
猶し世の猛火の、薪盡くれば復燃えざるが若し  
八法は染せられざる所、五難を降し群を調め  
三を以て三を見、三を離れて三を成す  
一を藏して以て一を得、七を超えて長眠せり  
究竟寂滅の道は、賢聖の宗ぶ所なり  
已に煩惱の障を斷じ、宗奉者は已に度し  
飢虚渴乏の者、之を飲むに甘露を以てし  
忍辱の重鎧を被て、諸の忿怒を降伏す  
勝法微妙の義は、以て衆心を悦ばしめ  
世界の善を修する者は、植うるに聖種子を以てす  
正不正を習ふ者も、等しく擣して捨てず



無上の法輪を轉じて、普く世の歡喜を受く  
 人間に遊行して、諸の未度者を度し  
 眞實を見ざる者には、悉く眞實を見しむ  
 諸の外道を習ふ者には、之に授くるに深法を以てし  
 生死の無常を説く、主無く樂有ること無く  
 大名稱幢を建てて、衆の魔軍を破壊し  
 進却に欣寂無く、生を薄うし寂滅を歎す  
 未度者を度せしめ、未脱者を脱せしめ  
 未寂者を寂せしめ、未覺者を覺せしめ  
 牟尼寂靜の道に、以て衆生を攝す  
 衆生は聖道に違し、諸の不正業を習ふ  
 猶し大劫の盡くるが若く、持法者長眠せり  
 密雲の霹靂を震はし、林を摧き甘澤に雨らし  
 少象の棘林を摧くがごとく、識養あるは能く人を利す  
 雲離れ象の老悴する、斯れ皆堪ふる所無し  
 見を破して能く見を成じ、世度に於て度す  
 已に諸の邪論を壞して、而も自在道を得たり

今大寂いまおほいそくに入れり、世間よげんに救護きうご無し

魔王まわうの大軍衆だいぐんしゆは、武ぶを奮ふるひて天地てんちを震ふるはし

牟尼尊むにそんを害がいせんと欲ほつせしも、傾動かやうどうせしむる能あたはざるに

如何いかが忽たちまちち一朝いちぢやうにして、非常ひやうま魔まの壞こわする所ところたる

天人てんにん普あまねく雲集うんしふし、虚空こくうの中に充満みみし

無窮むきゆうの生死しやうじを畏おそれ、心に大憂怖だいゆうふを生おこぜり

世間よげんは遠近えんこんと無く、天眼てんげん悉しつく照見ぢやうけんし

業報ごうほうの諦たひに明了みやうりやうなる、鏡中きやうぢゆうの像さうを觀みるが如ごとし

天耳てんには勝かちれて聰達そうたつに、遠とほしとして聞きかざること無く

虚こゝろに昇のぼりては諸天しよてんに教おしへ、化人けにんの境やうぢを遊歩ゆふし

身みを分わつて體たいを合あひ、水みづを涉わたつて濡ぬれず

過去くわこの生じやうを憶念おくねんして、劫くわつを彌みるも而しかも忘わすれず

諸根しよこんを境界きやうがいに遊あそばせ、彼彼ひひ各異念かくいねんなり

知他心ちたしん通智つうちは、一切いっせつ皆みな悉しつく知しり

神通淨妙じんつうじやうめう智ちは、平等びやうどうに一切いっせつを觀くわんず

悉しつく一切いっせつの漏ろうを盡つくして、一切いっせつの事こと已すでに畢おひれり

智ちもて有餘界うよかがいを捨すし、智ちを息やすめて長眠ちやうめんす

衆生剛強心なるも、見れば則ち柔軟を得  
鈍根の諸の衆生も、見れば則ち慧明利なり  
無量の惡業過も、見れば各通塗を得たるも  
一日忽ち長眠す、誰か復斯徳を顯さんや  
世間に救護無く、望斷ち氣息絶ゆ  
誰か清涼の水を以て、之に灑いで蘇息せしむるや  
所作自ら事畢り、大悲已に長息せり  
世間愚癡の網を、誰か當に壞裂を爲すべき  
生死の迅流に向へるを、誰か當に説いて反さしむべき  
群生癡惑の心有るを、誰か寂靜の道を説くや  
誰か安隱處を示し、誰か眞實義を顯す  
衆生大苦を受く、誰か慈父の救を爲す  
殆し多く愁ひ志を忘れ、馬易つて土威を失ひ  
王者亡びて國を失ふがごとく、世に佛無きも亦然り  
多聞なるも辭辯無く、醫たるも而も慧無く  
人王は光相を失ひ、佛滅して俗は榮を失ふ  
良駒は善御を失ひ、乘舟の船師を失ひ

三軍の英將を失ひ、商人の其導を失ひ  
 疾病の良醫を失ひ、聖王の七寶を失ひ  
 衆星の明月を失ひ、愛壽するも命を失ふがごとく  
 世間も亦是の如く、佛滅して大明を失ふ』  
 是の如く阿羅漢の、所作皆已に畢り  
 諸漏悉く已に盡きたるが、知界報恩の故に  
 纏綿悲戀して説き、徳を歎じ世苦を陳ぶ  
 諸の未だ離欲せざる者は、悲泣して自ら勝へず  
 其諸の漏盡者は、唯生滅の苦を歎ず  
 時に諸の力士衆、佛已に涅槃したまへるを聞き  
 亂聲もて慟いて悲泣し、群鶻の鷹に遇へるが如く  
 悉く來つて雙樹に詣り、如來の長眠を覩るに  
 復覺悟の容無く、胸を椎いて天を呼び  
 猶し師子の犢を搏つに、群牛の亂呼する聲のごとし  
 中に一力士有り、心に已に正法を樂む  
 聖法王の、已に大寂に入れるを諦觀し  
 言はく『衆生悉く眠れるに、佛は開發して覺せしむ

今大寂に入り、畢竟じて長眠したまふ  
 衆の爲に法幢を建つるに、而も今一旦に崩る  
 如來は智慧の日、大覺は照明たり  
 精進は炎熱たり、智慧は千光より耀く  
 一切の闇を滅除せるに、如何が復長く冥きや  
 一慧は三世を照らし、普く衆生の眼たるに  
 而も今忽然として盲ひば、世を擧りて路を知ること莫けん  
 生死の大河流、貪患癡の巨浪  
 法橋一旦崩るれば、衆生長く没溺せん  
 彼諸の力士衆、或は悲泣號咷し  
 或は密に感じて聲無く、或は身を投じて地に蹴れ  
 或は寂默禪思し、或は煩冤長吟して  
 金銀の寶典、香花具の莊嚴を辨じ  
 如來の身を安置し、寶帳を其上に覆へり  
 幢幡華蓋を具へ、種種の諸の伎樂もて  
 諸の力士男女、導從して供養を修す  
 諸天は香花を散じ、空中に天樂を鼓し



【牛頭梅檀】 ゴー  
シールンヤ、チャ  
ンダナ (Gosira-ca  
ndana)

人天一に悲歎し、聲合して同じく哀れむ  
城に入り士女の、長幼の供養を見畢り  
龍象門を出でて、飄連河の表を度り  
諸の過去佛の、滅度支提所に到り  
牛頭梅檀、及び諸の名香木を積み  
佛身の上に置き、灌ぐに衆の香油を以てし  
火を以て其下を焼くに、三たび焼くも而も燃えず  
時に彼大迦葉、先に王舍城に住す  
佛の涅槃せんと欲したまふを知り、眷屬彼に従つて來り  
淨心に妙願を發し、願くば世尊の身を見んと  
彼誠願を以ての故に、火滅して燃えざるなり  
迦葉の眷屬至り、悲歎して俱に瞻顔し  
雙足を敬禮せるに、然る後火乃ち燃ゆ  
内に煩惱の火を絶し、外火も焼くこと能はず  
外の皮肉を焼くと雖も、金剛の眞骨は存せり  
香油悉く燒盡し、骨を盛るに金瓶を以てし  
法界盡きざるが如く、骨の盡きざるも亦然り

【金翅鳥】  
(Garuda)

ガルダ  
と梵に

金剛智慧果の、動じ難きこと須彌の如く  
 大力の金翅鳥も、傾移する能はざる所なり  
 而も寶瓶に處する、世に應じて流遷す  
 奇なる哉世間の力、能く寂滅の法を轉ずるや  
 德稱廣く流布して、十方に周滿せるも  
 世に隨つて長く寂滅し、唯餘骨の存する有るのみ  
 大光は天下に耀き、群生悉く照を蒙る  
 一旦にして暉を潜め、骨を瓶中に遺す  
 金剛利の智慧は、煩惱の苦山を壞し  
 衆苦其身に集るも、金剛の志能く安んじて  
 大苦を受くる衆生、悉く除滅を得しむ  
 是の如きの金剛體は、今火の爲に焚かる  
 彼諸の力士衆は、勇健なること世に雙無し  
 怨家の苦を摧伏して、能く苦を救ひて歸依す  
 親愛苦難に遭ふも、志強くして能く憂無し  
 今如來の滅を見て、悉く憂悲を懷いて泣く  
 壯身の氣強盛に、憍慢は天歩も虚しきに

【分舍利品】佛舍利の八分起塔供養並に阿育王の佛法興隆を説く。

憂苦其心に迫り、城に入ること猶し曠澤のごとし  
舍利を持して城に入るに、巷路普く供養す  
高樓閣に置いて、天人悉く奉事す

分舍利品第二十八

彼諸の力士衆、舍利に奉事するに  
勝妙の香花を以てし、無上の供養を興す  
時に七國の諸王、佛已に滅度したまふと承けて  
使を遣して、諸の力士に詣り、佛舍利を請求す  
彼諸の力士衆は、如來の身を敬重し  
兼ねて其勇健を恃んで、而も憍慢心を起し  
寧ろ自らの身命を捨てずとも、佛舍利を捨てず  
彼使悉く空しく還る、七王大いに忿恨し  
軍を興すこと雲雨の如く、來りて鳩夷城に詣る  
人民の城を出づる者は、悉く皆驚怖して還れり  
諸の力士衆に告ぐらく、「諸國の軍馬來り

【生業】 くちすぎ  
のわざ。

象馬車歩業、鳩夷城を圍遶し、  
城外の諸の園林、泉池花果樹を  
軍業は悉く踐踏し、榮觀悉く摧碎せり」と  
力士城に登りて觀るに、生業は悉く破壞せり  
戰鬪の具を嚴備して、以て外敵に擬し  
弓弩拋石車、飛炬獨り發來す  
七王城を圍遶し、軍業は各精銳なり  
羽儀の盛に明顯なること、猶し七曙光の如し  
鐘鼓すること雷霆の如く、勇氣は雲霧より盛たり  
力士大いに奮怒し、門を開いて敵に命ぐ  
長宿の諸の士女、心に佛法を信する者は  
驚怖して誠願を發し、彼を伏して害せず  
親に隨つて相勸諫し、鬪戰せしめんと欲せず  
勇士は重鎧を被、戈を揮ひ長劍を舞はしめ  
鐘鼓して亂鳴し、仗鋒を執つて未だ交へず  
一渡羅門有り、名けて獨樓那といふ  
多聞にして智略勝れ、謙虚業の宗ぶ所たり

慈心もて正法を樂み、彼諸王に告げて言はく

「彼城の形勢を觀するに、一人も亦當るに足る

況んや復心力を齊うして、而も彼を伏すること能はざらんや

正使相摧滅せしむるも、復何の德稱か有らん

利鋒双既に交りて、勢の兩全有ること無し

此を困じて彼を害す、二俱に所傷有り

鬪戦は機變多く、形勢は測量し難し

或は強きが弱きに勝つ有り、或は弱くして強きに勝つ

健夫を毒蛇を輕んぜば、豈其身を傷げざらんや

人性の柔弱なる有り、群女子の獎むる所

陣に臨んで戰士と成らば、火の膏油を得たるが如し

鬪ふに弱敵を輕んずること莫れ、謂く彼堪ふる所無しと

身力は恃むに足らず、法力の強きには如かじ

古昔に勝王有り、迦蘭陀摩と名く

端坐して慈心を起し、能く大怨敵を伏す

四天下に王たり、名稱財利豐なりと雖も

終に歸し亦皆盡くること、牛飲の飽歸するが如し



應に法を以てし義を以てすべく、應に和の方便を以てすべし。

戰勝つも其怨を増し、和して勝たば後患無し。

今飲血の響を結ぶ、此事甚だ不可なり。

爲に佛を供養せんと欲せば、應に佛の忍辱に隨ふべし。

是の如く婆羅門、決定して誠實を吐く。

方宜しく義和して理あり、而も無畏の説を作す。

爾時、彼諸王、婆羅門に告げて言はく、

「汝今善く時に應じ、智慧の義もて僥益す。

親密なる至誠の言は、法に順じ強理に依る。

且く我所説を聽け、王者の法たるや。

或は五欲に因つて諍ひ、嫌恨もて強力を競ひ。

或は其嬉戯に因つて、急に戰鬥を致さず。

吾等今法の爲に、戰爭する復何をか怪しまん。

憍慢にして義に違するも、世人尙伏從す。

況んや佛の憍慢を離れ、人を化して謙下せしむるをや。

我等にして、身を亡して供養すること能はずんば。

昔の諸の大地主と、彌瑟阿離陀は。

一の端正女の爲に、戦争して相摧滅す

況んや今、清淨離欲師を供養せん爲にをや

身を愛して命を惜めば、力を以て争ひ求めず

先王驕維婆は、般那婆と戦ひ

展轉して更に相破す、正しく貪利を爲すが故に

況んや無貪師の爲に、而も復其生を食らんや

羅摩仙人の子は、仙臂王を瞋恨し

國を破り人民を殺す、正しく瞋恚の爲の故なり

況んや無慧師の爲に、而も身命を惜まんや

羅摩は私陀の爲に、諸の鬼國を殺害せり

況んや無攝受師の、其爲に命を没せざらんや

阿利及び婆具は、二鬼常に怨を結ぶ

正しく愚癡の爲の故に、廣く衆生を害す

況んや智慧師の爲に、而も復身命を惜まんや

是の如きの比衆多なり、義無きは而も自ら喪ふ

況んや今天人師の、普く世に恭敬せらるるをや  
身を計して命を惜み、勤めて供養を求めず

汝若し争を止めんと欲せば、吾等の爲に城に入り  
彼に勧めて開解せしめ、我願をして満ずることを得しめよ  
汝が法言を以ての故に、我心を小息せしめしこと  
猶し盛なる毒蛇の、呪力の故に暫く止まるが如し』  
爾時、婆羅門、彼諸王の教を受けて  
城に入り力士に詣り、問訊して以て誠を告ぐ

「外の諸の人中の王は、手に利器杖を執り  
身に重鉦を被、精銳日光に耀く

師子の勇氣を奮つて、威く此城を滅せんと欲す

然れども其法の爲の故に、猶非法行を畏る

是故に我を遣はし來り、旨に所白有らんと欲す

我土地の爲にせず、亦錢財を求めず

憍慢心を以てせず、亦懷恨心無し

大仙を恭敬するの故に、而も此に來せざるなり

汝當に我意を知るべし、何の爲にか苦んで相違する

尊を奉ずる彼我同じく、則ち法の兄弟たり

世尊の遺靈を、一心に共に供養せんとて

錢財を慳惜するは、此れ則ち大過に非ず  
 法慳の過は最も甚しく、普く世の薄んずる所なり  
 決定して通ぜざる者は、當に待賓の法を修すべし  
 利利の法有ること無く、門を閉ぢて自ら防ぐ  
 彼等悉く是の如くんば、此吉凶の法を告げん  
 彼此相違する莫く、理應に共に和合すべし  
 世尊の世に在るや、常に忍辱の教を以てしたまふ  
 聖教に順ぜずんば、云何が供養と名けんや  
 世人は五欲を以て、財利田宅の諍あり  
 若し正法をなす者は、應に聖理に隨順すべし  
 法の爲に而も怨を結ぶは、此れ則ち理に相違せり  
 佛の寂靜の慈悲は、常に一切を安んぜんと欲したまひしに  
 大悲を供養するに、而も大害を興す  
 應に等しく舍利を分けて、普く供養を得しむべくんば  
 法に順つて名稱流れ、義通じ理則ち宣べん  
 若し彼に非法行あるも、當に法を以て之に和すべし  
 是れ則ち樂法たり、法をして久住を得しめん

佛は一切の施を説くに、法施を最勝とせり  
 人斯れ財施を行ずるも、法施を行ずるは難し  
 乃士彼の説を聞いて、内に愧ぢ互に相視て  
 彼梵志に報じて言はく、「深く汝の來意を感じり  
 親善は法言に順ひ、和理雅正の説なり  
 梵志の所應、自の功德に隨應し  
 善く彼此を和し、我に示すに要道を以てせり  
 迷塗に馬を制し、還つて正路を得るが如し  
 今當に用て和理し、汝が所説に従ふべし  
 誠言なるに而も顧ざれば、後必ず悔恨を生ぜん  
 即ち佛舍利を聞いて、等分して八分と爲し  
 自ら一分を供養し、七分を梵志に付す  
 七王舍利を得て、歡喜して頂受し  
 持ち歸りて自國に還り、塔を起てて供養を加ふ  
 梵志力士に求めて、舍利の瓶を分つことを得  
 又彼七王より、第八分を分たんことを求め  
 持ち歸つて支提を起し、號して金瓶塔と名く

【惘然】

おそるる

俱夷那竭人、餘の灰炭を聚集して

而して一の支提を起し、名けて灰炭塔と曰ふ

八王は八塔を起し、金瓶及び灰炭と

是の如く閻浮提に、始めて十塔を起せり

學國の諸の士女、悉く寶華蓋を持し

塔に隨つて供養し、莊嚴せること金山の若く

種種の諸の伎樂もて、晝夜に長く讚歎せり

時に五百羅漢、永く大師の蔭を失ひ

惘然として恃む所無く、耆闍崛山に還り

彼帝釋の巖に集り、諸の經藏を結集し

一切皆共に、長老に阿難陀を推す

『如來前後の説を、巨細に汝は悉く聞けり

韓提陁牟尼、當に大衆の爲に説くべし』

阿難大衆の中にて、師子座に昇り

佛説の如くして説き、如是我聞を稱せば

合坐悉く涕流せり

此我聞の聲に感ぜば、法の如く其時の如く



【無憂王】アシヨ  
ーカ(Asoka)と梵  
にいふ。

處の如く其人の如く、説に隨つて筆受し  
究竟して經藏を成じ、勤めて方便して修學し  
悉く已に涅槃を得、今得及び當に得べく  
涅槃も亦復然り、無憂王世に出でて  
強者を強く憂へしめ、劣者爲に憂を除くこと  
無憂華樹の如く、闍浮提に王たり  
心に常に所憂無く、深く正法を信じ  
故に無憂王と號し、孔雀の苗裔なり  
正性を稟けて生れ、普く天下を濟ひ  
兼て諸の塔廟を起し、本強無憂と字けたるも  
今は法無憂と名け、彼七王塔を開けり  
以て舍利を取り、分布して一旦  
八萬四千の塔を起つ、唯第八の塔のみ有りて  
摩羅村に在り、神龍の守護する所  
王取るも得ること能はず、舍利を得ずと雖も  
佛の遺骸有り、神龍の供養する所たるを知る  
其信敬心を増す、王國土を領すと雖も

初聖果を逮得し、能く普く天下をして  
如來の塔を供養せしむ、去來今現在  
悉く皆解脱を得たり、如來現在世と  
涅槃及び舍利と、恭敬供養せる者は  
其福等しくして異なること無く、明慧の増上心は  
深く如來の徳を察し、道を懐ひ供養を興し  
其福亦俱に勝れ、佛の尊勝法を得  
應に一切の供を受くべく、已に不死處に到れり  
信者亦隨つて安く、是故に諸の天人  
悉く應に常に供養すべし  
第一の大慈悲は、第一義に通達し  
一切の衆生を度す、孰か聞いて感ぜざらんや  
生老病死の苦は、世間苦に過ぎたるは無し  
死苦は苦の大、諸天の畏るる所  
永く二種の苦を離れ、云何が供養せざらんや  
後有を受けざるの樂は、世間樂の無上なり  
生苦の大を増さば、世間苦比無し

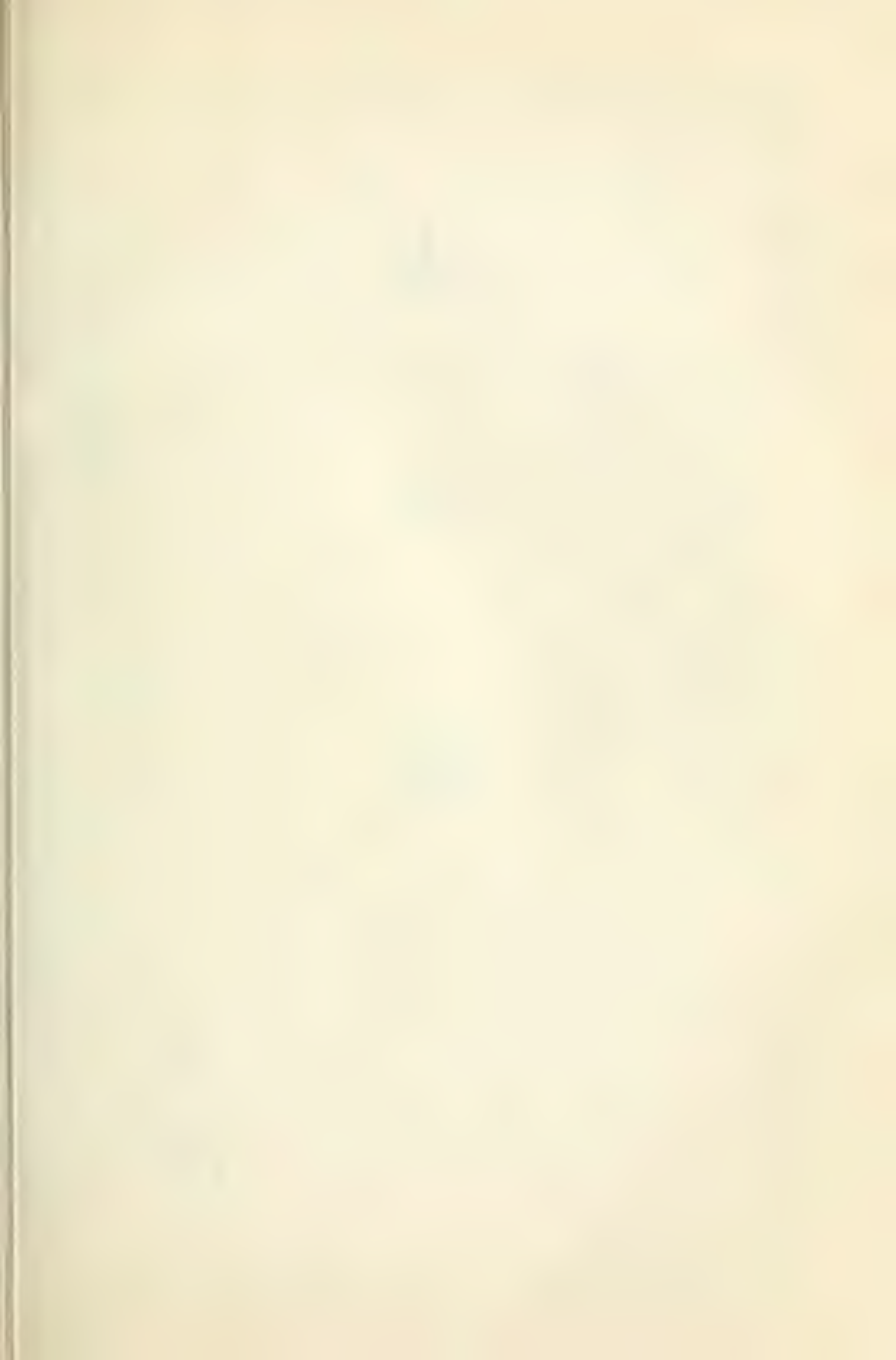
佛は生苦を離るることを得、後有樂を受けず  
世の爲に廣く顯示せり、如何が供養して  
昭の牟尼尊を讃ぜざる、始終の所行は  
自ら知見を顯さず、亦名利を求めず  
佛經に隨順して説き、以て諸の世間を濟へり

法

句

經

經典部
第十二卷



法ほつ句く經きやう卷まき上つじやう

尊そん者じや法ほつ救く撰せんす  
吳ご天てん竺ぢく沙しゃ門もん維ゐ祇ぎ難なん等とう譯やくす

無常品第一 二十有一章

無常品むじやうひんとは、寤欲昏亂ごよくこんらんし、榮命保やうみやうほち難がたく、唯道ただちう是これ眞しんなり。

睡眠解寤すいみんげいごすれば、宜よろしく歡喜くわんぎして思おもふべし

我説わがとくく所ところを聽きき、佛言ぶつげんを選せん記ぎせよ

所行しやうぎやうは非常ひじやうなり、謂いはく興衰こうすいの法ほふなり

夫それ生しやうずれば輒すなはち死しす、此滅こゝれめつするを樂らくと爲なす

譬たとへば陶家たうけの、埴埴えんぢぢもて器きを作つくるに

一切いっさい要いんがらす埴あするが如ごとし、人命にんみやうも亦然またしかなり

河かの駛すみやに流ながれて、往ゆいて返かへらざるが如ごとく

人命にんみやうも是こゝの如ごとく、逝ゆく者ものは還かへらず

譬たとへば人ひとの杖つゑと操とり、牧もくを行ぎやうじて牛うしを食じきするがごとく

【埴埴】 ねぼつち



老死も猶然なり、亦命を養りて去る

千百も一に非ず、族姓男女

財産を貯聚するも、衰喪せざること無し

生ける者は日夜に、命を自ら攻め削る

壽の消盡すること、禁葬水の如し

常者皆盡き、高者も亦墮つ

合へば會す離有り、生ける者は死有り

衆生相刻して、以て其命を喪ふ

行に墮つて墮する所、自ら殃福を受く

老いては苦痛を見、死しては則ち意去る

家を樂しんで獄に縛せられ、世を食りて斷せず

喞喞に老至り、色變じて耄と作る

少時意の如くなるも、老いて躄藉せらる

壽きこと百歳なりと雖も、亦死せば過去せん

老いたるが爲に厭はれ、病條至際る

是日已に過ぐれば、命則ち隨つて滅す

少水の魚の如し、斯れ何の樂みか有らん

【躄藉】 ふむこと

老ゆれば則ち色衰へ、病に自ら壞せられ  
形敗れ腐朽し、命終ること自然なり  
是身何の用ぞ、恆に臭を漏らす處  
病に困められて、老死の患有り

欲を嗜りて自ら怠なれば、非法是れ増し  
變を見聞せず、壽命は無常なり  
子有るも恃むところに非ず、亦父兄に非ず

死に迫らるれば、親とても怙むべき無し  
晝夜慢惰に、老ゆるも姪を止めず  
財有るも施さず、佛言を受けず

此四弊有りて、自ら侵欺を爲す  
空に非ず海中に非ず、山石の間に入るに非ず  
地の方所に、之を脱して死を受けざること有ること無し

是務は是れ吾作、當に作して是を致さしむべし  
人此躁擾を爲して、老死の憂を履賤す  
此を知らば能く自ら淨く、是の如くして生盡くるを見る

比丘は魔兵を厭ひ、生死に従つて得度す

【躁擾】心せはしくわづらはしきこと。  
【比丘】ピクシユ (Bhiksu) 乞士、除勤と譯す。

【教學品】明版に  
は教學品の次に法  
句經の三字無し。

【蟻】じがばち。  
【蜂】ほらがひ。  
【蜂】はまぐり。  
【意】しみ。

教學品法句經第二 二十有九章

教學品とは、導くに所行を以てし、己の愚闇を釋して道の明を見ろを得しむ。

咄い哉何すれぞ寢ぬる、蟻蝶蜂蠹の類

隱弊するに不淨を以てし、迷惑を計して身と意す

焉んぞ研削を被る有らん、心疾痛に嬰るが如し

衆の厄難に遭ふも、而も反つて用て眠ることを爲す

思うて放逸ならず、仁を爲し仁の迹を學ぶ

是より變有ること無く、常に念じて自ら意を滅す

正見の學を務めて増す、是を世間の明と爲す

所生の福は千倍し、終に惡道に墮せし

小道を學して、以て邪見を信すること莫れ

放蕩を習ひて、欲意を増さしむること莫れ

善く修法を行じて、學誦して犯すこと莫れ

行道は憂無く、世世常に安し

敏學して身を攝し、常に慎んで思言せば

是れ不死に到り、行滅して安きを得  
 務に非ざれば學すること勿れ、是れ務なれば宜しく行すべし  
 已に念すべきを知らば、則ち漏は滅することを得  
 法を見て身を利するは、夫れ善方に到り  
 利を知りて行を健す、是を賢明と謂ふ  
 覺義を起せる者は、學滅して以て固し  
 着滅して自ら悉なれば、損じて興らず  
 是に向ふに強を以てし、是を學んで中を得  
 是より義を解し、宜しく行を憶念すべし  
 學は先づ母を斷ち、君の二臣を率め  
 諸の營從を廢す、是れ上道の人  
 學に朋類無く、善友を得ざれば  
 寧ろ獨り善を守り、愚と偕ならざれ  
 戒を樂み行を學するに、奚ぞ伴を用ふることを爲さん  
 獨善に覆無し、空野象の如し  
 戒間は俱に善く、二者孰れか賢ならん  
 方に戒を稱して聞と稱ひ、宜しく諦に學行すべし

學するに先づ戒を護り、閉閉に必ず固くして

施して受くること無く、伏行して臥すこと勿れ

若し人壽きこと百歳ならんも、邪に學して不善に志さば

生一日なるも、精進して正法を受くるに如かず

若し人壽きこと百歳ならんも、火を奉じ異術を修せば

須臾の頃も、戒に事ふる者の福の稱ふべきには如かず

能く行ずるは可と説かんと、能はずして空語すること勿れ

虚偽にして誠信無きは、智者の屏棄する所

學は當に先づ解を求め、觀察して是非を別つべし

諦を受けなば應に彼に誨ふべく、慧然は復惑はず

被髮して邪道を學し、草衣にして内に貪濁なり

朦朧として眞を識らず、譬の五音を聽くが如し

學は能く三惡を捨し、藥を以て衆壽を消す

健夫は生死を度すること、蛇の故皮を脱するが如し

學んで多く聞き、持戒して失はざれば

兩世に譽められ、願ふ所の者は得

學んで聞くこと寡く、戒を持つこと完からざれば

【朦朧】くらきこと。  
【三惡】地獄、餓鬼、畜生。

【秘傳】 穢草とひえ。

【梵行】 清淨なる行。

【正覺】 正しきさと。

兩世に痛を受け、其本願を喪ふ。夫れ學に二行り、常に多聞に親み

諦に安んじ義を解し、困むと雖も邪ならず。種種の禾を害するがごとく、多欲は學を妨ぐ

衆惡を転除せば、成收必ず多からん。慮つて後言ひ、辭は強梁ならず

法說義說、言つて違ふること莫し。善く學して犯すこと無く、法を畏れて曉忌す

微を見るの知者は、誠めて後の患無く。遠く罪福を捨てて、務めて梵行を成じ

終身自ら攝す、是を善學と名く。

多聞品法句經第三 十有九章

多聞品とは、亦聞學を勧め積聞して聖を成じ、自ら正覺を致す。

多聞を能持すること固く、奉法を垣牆と爲す。精進は踏毀し難く、是より戒慧成ず。



【甘露の法】 如来の教法、甘露とは梵にいふアムリタ (Amrita) の譯。  
 【泥洹】 ニルヴァナ (Nirvana) の譯。滅度と譯す、涅槃と同じ。  
 【不死處】 涅槃のこと。

多聞は志を明かならしめ、已に明かなれば智慧増す  
 智則ち博ければ義を解し、義を見れば行法安し  
 多聞は能く憂を除き、能く定を以て歡と爲す  
 善く甘露の法を説くは、自ら泥洹を得るを致す  
 聞は法律を知ると爲し、疑を解し亦正を見る  
 聞に従つて非法を捨てば、行いて不死處に到る  
 能師と爲りては道を現じ、疑を解しては學を明かならしむ  
 亦清淨の本を興し、能く法藏を奉持し  
 能揚を解義と爲す、解せば則ち義穿たす  
 法を受け法に倚る者は、是に従つて疾に安きことを得  
 若し多少とも聞くこと有りて、自ら大として人に倚らば  
 是れ盲の爛を執るが如く、彼を熾すも自らは明かならず  
 大れ尊、位、財を求め、尊貴天福に升るも  
 辯慧世間の桴たる、斯聞を第一と爲す  
 帝王の聘禮は聞なり、天上天も亦然なり  
 聞を第一藏と爲す、最も富み旅力強し  
 智者は聞の爲に屈し、道を好む者も亦樂しむ

王者は心を盡して事へ、釋梵と雖も亦然なり

仙人常に敬つて聞く、況んや貴巨富人をや

是を以て慧を貴しと爲す、禮すべきこと是に過ぎたるは無し

日に事ふるは明の爲の故なり、父に事ふるは恩の爲の故なり

君に事ふるは力を以ての故なり、聞の故に道人に事ふる

人は命の爲に隣に事へ、勝たんと欲して豪強に依る

法は智慧處に在り、福行はるれば世世明し

友を察するは謀を爲すに在り、伴に別るるは急時に在り

妻を觀るは房樂に在り、智を知らんと欲せば説に在り

聞は今世の利たり、妻子昆弟友

亦後世の福を致し、聞を積みて聖智を成す

是れ能く憂患を散じ、亦不祥衰を除く

安隱の吉を得んと欲せば、當に多聞者に事ふべし

新創に過憂無く、射箭に過患無し

是れ壯なれば能く抜くこと無く、唯多聞に従つて除く

盲は是に従つて眼を得、闇者は従つて燭を得

亦世間人を導くこと、目あるが無目を將ゐるが如し

是故に癡は捨つべく、慢豪富樂を離れ  
學を務めて聞者に事ふるを、是を積聚徳と名く

篤信品法句經第四 十有八章

篤信品とは、立道の根果なり、因に於て正見ならば行、回顧せず。  
信慚戒意財は、是れ法雅士の譽  
斯道明かなるを智説とし、是の如くして天世に昇る  
愚は天行を修せず、亦布施を譽めず  
信施して善を助くる者は、是より彼安に到る  
信する者は眞人の長、法を念すれば所住安し  
近く者は意に上を得、智壽は壽中の賢なり  
信は能く道を得、法は滅度を致す  
聞に従つて智を得、所到に明有り  
信は能く淵を度し、攝は船師たり  
精進は苦を除き、慧は彼岸に到る  
士は信行有り、聖に譽めらる

【沙門】 シユラマ  
ナ (Sramana) 勤  
息と譯す、諸の善  
法と勤修し、諸の  
惡法を止息するの  
意。

無爲を樂む者は、一切の縛を解く  
信は戒と與なり、慧は意に能く行ず  
健夫は志を度し、是より淵を脱す  
信は戒を誠ならしめ、亦智慧を受く  
在在能く行ぜば、處處に養はる  
方に世利に比すれば、慧信は明たり  
是れ財の上寶、家産は非常なり  
諸の眞を見んと欲せば、樂うて法を聽講し  
能く慳吝を捨せよ、此を信と爲す  
信は能く河を度し、其福畜ひ難し  
能く禁じて盜を止めよ、野には沙門の樂あり  
信無く習せず、好んで正言を割ぐこと  
拙くして水を取り、泉を掘つて泥を揚ぐるが如し  
賢夫は智を習し、清流を樂仰すること  
善く水を取るが如く、思を擾らざらしむ  
信は他を染せず、唯賢を人に與ふ  
好んで則ち學すべし、非好は則ち遠し

信を我與と爲し、斯載を知ること莫れ

大象を調するが如く、自ら調するは最勝なり

信も財、戒も財、慚愧も亦財なり

聞も財、施も財、慧とを七財と爲す

信に従つて戒を守り、常に淨く法を觀ず

慧にて利行し、奉敬して忘れず

生れて此財有り、男女を問はず

終に以て貧ならず、賢者は眞を識る

戒慎品法句經第五 十有六章

戒慎品とは、善道を授與し、邪非を禁制し、後に所悔無きなり。

人にして常に清く、律を奉じて終に至り

善行を淨修せば、是の如くして戒成ず

慧人は戒を護り、福を三寶に致し

名聞利を得ば、後に上天の樂あり

常に法處を見、護戒を明と爲さば

三寶、佛寶、法寶、僧寶

眞見を成ずることを得て、輩中の吉祥たり  
持戒者は安く、身をして惱無からしむ  
夜臥して恬淡なれば、寤めて則ち常に歡喜  
修戒布施は、福を作り福と爲る  
是より彼に適いて、常に安處に到る  
何の終をか善と爲し、何の善にか安かに止まる  
何をか人寶と爲し、何の盜をか取らざる  
戒の終は老いて安く、戒の善に安に止まる  
慧を人寶と爲し、輻の盜は取らず  
比丘は戒を立てて、諸根を守攝し  
食うて自ら節を知り、悟つて意を應ぜしむ  
戒を以て心を降し、意を守りて正定なり  
内に正觀を學せば、正智を忘るること無し  
明哲は戒を寺り、内に正智を思ふ  
行道は應の如く、自清は苦を除く  
諸垢を蠲除し、慢を盡して生ぜしむること勿れ  
終身法を求めて、暫くも聖を離るること勿れ



【戒定慧】この三五にあひよりて證果を得しむるが故に三學と名く。

【安般】アナ、アパーナ(Ana-pāna)出入息なり、人靜かに出入息を觀ずるとき、心の擾亂を離るるを得るなり。

戒定慧の解、是れ當に善く惟ふべし  
都て已に垢を離るれば、禍無く有を除く  
着を解くは則ち度るなり、餘は復生せず  
諸の魔界を越ゆること、日の清明なるが如し  
狂惑自恣せば、已に常に外に避く  
戒定慧の行は、滿を求めて離ること勿れ  
持戒清淨にして、心自ら恣ならざれば  
正智已に解し、邪部を觀ず  
是れ吉處に往く、無上道と爲す  
亦非道を捨し、諸の魔界を離る

惟念品法句經第六 十有二章

惟念品とは、守微の始、内に安般を思へば必ず道紀を解す  
出息入息の念を、具に滿じ諦に思惟せよ  
初めより竟りまで通利せば、安きこと佛の説きたまふ所の如し  
是れ到ち世間を越すこと、雲解けて月現はるるが如し

起止に學を思惟し、坐臥に廢忘せず

比丘是念を立つれば、前にも利し後にも則ち勝れん  
始めに得れば終に必ず勝れ、逝いて生死を觀す

若し身の所住を見んには、六更を以て最と爲す

比丘常に一心なれば、便ち自ら泥洹を知る

已に是諸の念有らば、自身に常に建行せん

若し其れ是の如くならずんば、終に意行を得じ

是本行に隨ふ者は、是の如く愛勞を度せん

若し能く意念を悟らば、一身の樂を解す

時に應じて等しく行法すれば、是れ老死の惱を度す

比丘の悟れる意行は、當に是念に應ぜしむべし

諸念に生死を棄てて、爲に能く苦際と作さば

常に當に微妙を聽くべく、自ら其意を覺悟せん

能く覺れる者は賢たり、終始所會無けん

覺意を以て能く應じ、日夜に務めて學行せば

當に甘露の要を解し、諸漏をして盡くることを得しむべし  
夫れ人善利を得んとせば、乃ち來つて自ら佛に歸す

【佛法衆】 佛法僧  
に同じし。

【空不願無相】  
三昧或は三無覺門  
といふ。

是故に常に晝夜に、常に佛法衆を念すべし  
已に自覺の意を知れば、是を佛弟子と爲す  
常に常に晝夜に、佛と法及び僧とを念すべし  
身を念じ非常を念じ、戒と布施との徳を念じ  
空と不願と無相と、晝夜に常に是を念すべし

慈仁品法句經第七 十有八章

慈仁品とは、是大人、聖人所履の徳の普く無量なるを云ふ。

仁を爲して殺さず、常に能く身を攝すれば

是處に死せず、所適に患無し

殺さずして仁を爲し、言を慎み心を守れば

是處に死せず、所適に患無し

彼亂已に譽はば、守るに慈仁を以てし

怒を見るも善く忍ぶ、是を梵行と爲す

至誠安徐にして、日に讒言無く

彼所に瞋らずんば、是を梵行と謂ふ

【重拱】何事もな  
さざる義。

垂拱無爲にして、衆生を害せず  
燒亂する所無くんば、是れ梵行に應ず  
常に慈愛を以てし、淨きこと佛敎の如く  
足るを知り止むるを知らば、是れ生死を度するなり  
少欲にして學を好み、利に惑はず  
仁にして犯さざるは、世上の稱する所なり  
仁壽は犯さるる無く、變怪を興さず  
人に靜擾せらるるも、慧は照するを以て安し  
普く賢友を愛へ、哀を衆生に加へ  
常に慈心を行すれば、所適者は安し  
仁儒にして邪ならず、安止して憂ふる無くば  
上天之を衛る。智者は慈を樂み  
晝夜に慈を念じて、心に尅伐無く  
衆生を害せずんば、是行に仇無し  
慈ならざれば則ち殺し、戒に違し言妄なり  
過つて他と與ならず、衆生を觀ざれ  
酒は心を失ふを致し、放逸行を爲す

【梵天】 プラフマ  
ローカ (Brahmaloka)  
三) 初禪天の第三。

後惡道に墮して、誠無く眞ならず  
 仁を履み慈を行ひ、博く愛して衆を濟へば  
 十一の譽有りて、福常に身に隨ふ  
 臥して安く覺めても安く、惡夢を見ず  
 天護り人愛し、毒せず兵せず  
 水火喪はず、在所に利を得  
 死して梵天に昇る、是を十一と爲す  
 若し慈心を念じて、無量に廢せざれば  
 生死漸く薄く、利を得世を度す  
 仁に亂志無く、慈最も行すべし  
 衆生を慈傷すれば、此福無量なり  
 假令壽命を盡して、勤めて天下の人に仕へ  
 象馬以て天を祠らんも、一の慈を行するには如かず

言語品法句經第八 十有二章

言語品とは、口を戒むる所以、發説談論に當に道理を用ふべし。

悪言し罵詈ののりし、橋はかり陵りやうもて人を蔑へたにす  
是行興起このきやうこころせば、疾怨しやくをん滋生しうをんす

遜言そんげん順辭じゆんじ、人を尊敬そんがうし

結むすを棄あきらて悪あくを忍しのべば、疾怨しやくをん自ら滅ほろす

夫それ士しの生なまるるや、斧きりぎりすの口くち中に在ありて

身みを斬きる所以ゆゑは、其その悪言あくごんに由よる

諍あやつて少利せうりを爲なすは、失財しつざいを掩おほふが如ごとく

彼かれに従したがつて諍あやを致いたせば、意いをして惡あくに向むかはしむるなり

惡あくを譽ほめ惡あくに譽ほめらるるは、是この二俱にともに惡あくと爲なす

好このんで口くちを以もつて儻けつせば、是このれ後のちに皆安みなやすきこと無し

道だう無なくんば惡道あくだうに墮だし、自みづから地獄ぢごくの苦くるしみを増ます

愚ぐに遠とほざかり忍にんの意いを修しゆし、諱たいを念ねんせば則すなはち犯とがすこと無し

善ぜんに従したがつて解脫げだつを得え、惡あくの爲ために解げを得えず

善ぜんく解げする者は賢けんと爲なし、是このを惡惱あくをんを脱だつすと爲なす

解げするも自みづから損意そんいを抱かかき、不躁ふそうの言ことばは中ちゆうを得えう

義說ぎせつと如法說じゆふせつとは、是言このごん柔軟じゆあんにして甘あまし

是このを以もつて言語ごんごとは、必ず已おのれをして患無うれひなからしむ



亦衆人を尅せず、是を能く善言すと爲す  
 言をして意の可しきに投せしめば、亦歡喜を得しめ  
 惡意に至らしめざる、出言の衆悉く可なり  
 至誠甘露の説は、如法にして過無く  
 諦は義の如く法の如し、是を道に近づきて立つと爲す  
 説の佛言の如きものは、是吉滅度を得  
 能作浩際を爲す、是を言中の上と謂ふ

雙要品法句經第九 二十有二章

雙要品とは、兩兩の相を明し善惡對有り、義を擧ぐる事單ならず。

心を法本と爲す、心尊く心に使はる

中心に惡を念じて、即ち言ひ即ち行はば

罪苦の自ら追ふこと、車の轍を轢むがごとし

心を法本と爲す、心尊く心に使はる

中心に善を念じて、即ち言ひ即ち行はば

福樂の自ら追ふこと、景の形に隨ふが如し

亂意行に随つて、愚を拘り冥に入り

自ら大として法無くば、何んが善言を解せん

正意行に随つて、清明を聞解し

妬嫉を爲さずば、善言に敏達す

怨者を慍らば、未だ嘗て怨無くんばあらず

慍らずして自ら除く、是道を宗とすべし

好んで彼を責めず、務めて自ら身を省みよ

如し此を知る有らば、永く滅して患無けん

行ふに身の淨のみを見、諸根を攝せず

飲食節あらず、慢に怯弱に墮さば

邪の制する所と爲ること、風の草を靡かすが如けん

身の不淨を觀じ、能く諸根を攝し

食ふに節度を知り、常に精進を樂しまば

邪の爲に動かされざること、大山を風くが如けん

毒態を吐かず、欲心馳騁し

自ら調むこと能はずんば、法衣に應ぜず

能く毒態を吐き、戒意安靜にして

心を降し已に調めば、此れ法衣に懸す  
眞を以て偽と爲し、偽を以て眞と爲す  
非を邪計と爲す、眞利を得ず  
眞を知りて眞と爲し、偽を見て偽を知る  
是を正計と爲す、必ず眞利を得ん  
屋を蓋ふに密ならずんば、天雨ふれば則ち漏る  
意惟れ行ぜずんば、淫泆に穿たれん  
屋を蓋ふに善く密なれば、雨則ち漏らず  
意を操して惟れ行ずれば、淫泆生ぜざらん  
鄙夫の人を染するは、臭物の近づくが如し  
漸く迷ひて非に習ひ、覺えず惡を成す  
賢夫の人を染するは、香熏に近づくが如し  
智に進む善を習ひ、行じて潔芳を成す  
憂を造り後に憂ひ、惡を行せば兩つながら憂ふ  
彼も憂ひ惟も懼れ、罪を見て心據る  
喜を造り後に喜び、善を行せば兩つながら喜ぶ  
彼も喜び惟も歡び、福を見て心安からん

今も悔い後も悔い、悪を爲せば兩つながら悔ゆ  
 厥れ自らの殃を爲さば、罪を受けて熱惱せん  
 今も歡び後も歡び、善を爲せば兩つながら歡ぶ  
 眠れ自らの福を爲さば、福を受けて悦豫せん  
 巧言多く求めて、放蕩して戒無く  
 姪怒癡を懷いて、止觀を惟はずんば  
 聚ること群牛の如きは、佛弟子に非ず  
 時言少しく求むるも、道を行ずること法の如く  
 姪怒癡を除き、正意解を覺り  
 對を見るも起きずんば、是れ佛弟子なり

放逸品法句經第十 有二十章

放逸品とは、律を引き情を戒め、邪を防ぎ失を檢し道を以て賢に勸むるなり。  
 戒を甘露の道と爲し、放逸を死徑と爲す  
 貪らざるば則ち死せず、道を失ふを自ら喪ふと爲す  
 慧智道勝を守り、終に放逸を爲さずんば

不貪に歡喜を致し、是より道樂を得ん

常に當に道を惟念し、自ら強めて正行を守るべし

健者は世を度るを得て、吉祥上有ること無し

正念にして常に興起し、行淨からは惡滅し易し

自ら制へ法を以て壽とし、犯さずんば善名増す

行を發して放逸ならず、約して以て自ら心を調め

慧あり能く定明を作さば、冥淵の中に返らず

愚人は意に解し難し、食亂にして諍訟を好む

上智は常に重愼し、斯を護りて寶尊と爲す

貪ること莫れ、諍を好むこと莫れ、亦欲樂を嗜むこと莫れ

思心放逸ならすんば、以て大安を獲べし

放逸を如し自ら禁じ、能く之を除くるを賢と爲す

已に智慧の闇に昇り、危を去りて爲に即ち安く

明智もて愚を觀ること、譬へば山と地との如し

亂に居て身を正しくせば、彼獨り覺悟せりと爲す

是乃師子に過ぎ、愚を棄てて大智たり

睡眠は重きこと山の若く、癡冥に弊せらるる所たり

安臥して苦を計らず、是を以て常に受胎す  
 時に自ら恣たらざれ、能く制すれば漏盡くすることを得  
 自ら恣なれば魔便を得ること、師子の鹿を搏つが如く  
 能く自ら恣ならざるは、是を戒比丘と爲す  
 彼思正淨なる者は、常に當に自ら心を護るべし  
 比丘、謹慎を樂しみ、放逸に憂鬱多くんば  
 諍小を變じて大を致し、積惡火焰に入らん  
 戒福を守りて喜を致し、戒を犯すに懼心有らば  
 能く三界の漏を斷つ、此れ乃ち泥洹に近し  
 「若し前に放逸なるも、後に能く自ら禁ぜば  
 是れ世間を炤し、念定其宜しきあり  
 過失を惡と爲し、追覆するに善を以てせば  
 是れ世間を炤し、念善其宜しきあり  
 少莊にして家を捨て、盛に佛教を修せば  
 是れ世間を炤す、月の雲に消ゆるが如し  
 人前に惡を爲すも、後止みて犯さざれば  
 是れ世間を炤す、月の雲に消ゆるが如し



生れて憍を施さず、死して威へされば  
是れ見道の悍なり、應に中に憂ふること勿ろへし  
濁黒の法を斷じて、惟れ清白を學し  
淵を度して反らず、猗を棄て行を止め  
復樂に染せず、欲斷じて憂無し

心意品法句經第十一 十有二章

心意品とは、意精神の空無形なりと雖も造作竭くる無きを説く。

意を猶たらしめば、護り難く禁じ難し

其其本を正しくせば、其朋や乃ち大なり

行躁にして持し難く、唯欲に是れ従ふ

意を制ふるを善と爲す、自ら調むれば則ち寧し

意は微にして見難し、欲に隨つて行す

慧は常に自ら護る。能く守れば則ち安し

獨り行き遠く逝き、覆載して形無し

意を損し道に近かば、魔繫乃ち解けん

心に住息無く、亦法を知らず

世事に迷はば、正智有ること無けん

念は適止無く、絶えず邊無し

福の能く悪を過むるを、覺る者を賢と爲す

佛は心法を説きたまふ、微と鄙も眞に非ずと

常に逸意を覺るべし、放心に隨ふこと莫れ

法を見ば最も安く、所願成ずることを得

慧は微意を護り、苦の内縁を斷つ

身有るも久しからず、皆當に土に歸すべし

形壞し 神去り、寄住何をか貪らん

心豫て造る處、往來端無し

念するに邪僻多くば、自ら爲に惡を招かん

是意自らを造る、父母の爲に非ず

勉めて正に向ひ、福を爲して廻ること勿るべし

六を藏して龜の如くし、意を防ぐこと城の如く

慧もて魔と戦ふ、勝たば則ち患無し

華香品法句經第十二 二十有七章

華香品とは、明學もて行に當り華に因つて實を見、偽をして眞に反らしむるなり。

孰か能く地を擇び、鑑を捨てて天を取る

誰か法句を説くこと、善華を擇ぶが如くする

學者は地を擇び、鑑を捨てて天を擇り

善く法句を説くこと、能く徳華を採るがごとくす

世の坏喻を知らば、幻法忽ち有り

魔華の敷くを斷ちて、生死を視ず

身を見るに沫の如く、幻法は自然なり

魔華の敷くを斷ちて、生死を視ず

身病めば則ち萎るること、華の零落するが如し

死命の來至すること、水満の驟きが如し

食欲厭くこと無く、消散の人は

邪致の財を念じ、自ら浸欺を爲す

蜂の華に集むるに、色香を感さず

但だ 味のみを取つて去るが如く、正の聚に入るも然り

彼作すと作さざるとを、觀るを務めず

常に自ら身を省みて、正と不正とを知れ

可意の華の、色好きも香無きが如く

工語も是の如く、行ぜざれば得ること無し

可意の華の、色美しく且香しきが如く

工語も行ふ有れば、必ず其福を得ん

多く寶花を作り、結べば步搖綺なり

廣く徳を植うる者は、所生轉た好し

奇草芳花は、風に逆はずして薫ず

道に近きて敷開し、徳人は香に逼る

梅檀、多香、青蓮、芳花

是れ眞なりと曰ふと雖も、戒の香には如かず

華の香氣は微なり、眞なりと謂ふべからず

持戒の香は、天に到るも殊勝なり

戒具に成就し、行に放逸無く

定慧度脱せば、長く魔道を離る

田溝を作りて、大道に近きも  
 中に蓮華を生じて、香潔可意なるが如く  
 生死にも然る有り、凡夫の處の邊に  
 慧智出づるを樂むを、佛弟子と爲す

愚闇品法句經第十三 二十有一章

愚闇品とは、曠を閉くを將ての故に其態を陳べ、闡明たらしめんと欲す  
 寤ねずんば夜は長く、疲倦せば道長く  
 愚には生死長し、正法を知る莫ければなり  
 癡意は常に冥く、逝くこと流川の如し  
 一に在れば行疆く、獨りにして偶無し  
 愚人は數に著し、憂感すること久長なり  
 愚と與に居ることは苦なり、我に於て猶怨むがごとし  
 子有り財在りとて、愚は惟波波たり  
 我は且我に非ず、何をが子と財とを憂へんや  
 暑は當に此に止るべく、寒は當に此に止るべくも

愚は務慮多くして、末變を知ること莫し

愚蒙愚極にして、自ら我智と謂ふ

愚にして勝智なれば、是を極愚と謂ふ

頑闇は智に近きこと、瓢の味を斟むが如し

久しく狎習すと雖も、猶法を知らず

開達は智に近きこと、舌の味を嘗むるが如し

須臾の習と雖も、即ち道の要を解す

愚人の施行は、身の爲に患を招く

快心惡を作して、自ら重殃を致す

行不善を爲さば、退いて悔悟を見

涕流の面を致さん、報は宿習に由る

行に徳善を爲さば、進んで歡喜を觀

應來福を受け、喜笑悅習せん

過罪の未だ熟せざるときは、愚は以て恬淡たり

其熟する處に至つて、自ら大罪を受く

愚の所望處は、適苦と謂はず

厄地に墮するに臨んで、乃ち不善と知るなり



【愚春】

おろかな

愚春は愚を作して、自ら解すること能はず

外、遣ひ自ら焚き、罪熾燃を爲す

愚は美食を好み、月月滋甚なるも

十六分に於て、未だ一も法を思はず

愚は念慮を生ずるに、終に至つて利無く

自ら刀杖を招き、報に印章有り

觀處に其愚を知るも、施さずして廣く求め

墮する所に道智無くば、往往に悪行有り

道に遠ざかり欲に近づく者は、食の爲に學に在りと名く

家居に食猶するが故に、多く取りて異姓を傳ふ

學は二望に墮すること莫れ、家沙門と作ること莫れ

食家は聖教に違し、後に自ら貧乏を爲す

此行は愚と同じく、但欲慢を増せしむ

利求の勵異れば、道意を求むるも亦異なる

是を以て有識者は、出でて佛弟子たり

愛を棄て世習を捨てて、終に生死に墮せず

明哲品法句經第十四

明哲品とは、智行者を擧げて、福を修し道に進み、法を明鏡と爲すなり。

深く善惡を觀じ、心に畏忌を知り

畏れて犯さずんば、終に吉にして憂無けん

故に世に福有り、念思紹行せば

善く其願を致し、福祿轉た勝れん

信は善く福を作し、積行して厭はずんば

陰徳を信知して、久しくして必ず彰れん

常に無義を避け、愚人に親しまず

賢友に従ひ、上士に狎附せんことを思へ

法を喜ばば臥して安く、心悦び意清し

聖人法を演べ、慧は常に樂しんで行す

仁人智者は、癡戒して道を奉じ

星中の月の如く、世間を照明す

弓工は角を調め、水人は船を調め

村匠は木を調め、智者は身を調む

譬へば厚石は、風の移すこと能はざるが如く

智者は意重くして、毀譽に傾かず

譬へば深淵の、澄静清明なるが如く

慧人は道を聞きて、心淨く歡然たり

大人は無欲を體とし、在所照然として明かなり

或は苦樂に遭ふと雖も、高く其智を現ぜず

大賢は世事無し、子と財と國とを顧はず

常に戒と慧と道とを守り、邪の富貴を食らず

智人は動搖の、譬へば沙中の樹の如くなるを知る

朋友、心未だ強からずんば、色に隨つて其素を染めん

世皆淵に没し、廻く岸を度るは鮮し

如し或は人有り、度らんと欲して必ず奔る

誠に道を食べる者は、正教を覺受す

此彼岸に近づき、死を脱するを上と爲す

五陰の法を斷ち、靜に智慧を思ひ

反つて淵に入りて、其明を棄捨せず

【五陰】 色受想行識の五、陰は陰蓋の義

情欲を抑制し、絶だ無爲を樂み  
能く自ら拯濟し、意を慧たらしめよ  
學は正智を取り、意正道を惟ひ  
一心に諦を受け、不起を樂と爲さば  
漏盡き習除き、是れ度世を得ん

羅漢品法句經第十五 有十章

羅漢品とは、眞人の性、欲を脱し、着心無くして渝變せざるを言ふ。  
憂患を去離し、一切を脱し

縛結已に解けなば、冷かにして煖きこと無けん  
心淨くして念を得、貪樂する所無くんば  
已に癡の淵を度ること、鴈の池を乘つるが如し  
腹に量りて食ひ、藏積する所無し  
心空にして無想なれば、衆の行地を度る  
空中の鳥の、遠く逝くに礙無きが如く  
世間の習盡くれば、復食を仰がず

【三界】欲界、色  
と、無色界。

虚心に思無く、已に脱處に到るは  
 譬へば飛鳥の、暫く下つて輒ち逝くが如し  
 根を制して止に從ふは、馬を調御するが如し  
 憍慢の習を捨つれば、天に敬はる  
 怒らざること地の如く、動かざること山の如く  
 眞人は垢無く、生死の世を絶つ  
 心に休息し、言行亦正しければ  
 正解脱に從つて、寂然滅に歸せん  
 欲を棄てて著無く、三界の障を缺き  
 望意已に絶ゆ、是を上人と謂ふ  
 聚に在るも野の若く、平地も高岸も  
 應眞の過ぐる所、社を蒙むらざる莫し  
 彼空閑を樂むも、衆人は能はず  
 快こころよい哉望無く、欲求する所無きこと

述千品法句經第十六  
 十有六章

述千品とは、學者の經を示す、多くして要めざるは約明に如かず。

千言を誦すと雖も、句義正ならずんば

一要だも、聞きて意を減すべきに如かず

千言を誦すと雖も、義有らずんば何の益かあらん

一義だも、聞きて行じて度すべきには如かず

多経を誦すと雖も、解せずんば何の益かあらん

一法句を解するも、行ぜば道を得べし

千千を敵と爲し、一夫にて之に勝つも

未だ自ら勝つの、戦中の上たるには若かず

自ら勝つは最も賢なり、故に人雄と曰ふ

意を護り身を調め、自ら損じて終に至らば

尊天、神、呪、魔、梵、釋と曰ふと雖も

皆能く、自勝の人に勝つ莫し

月に千返祠り、終身懈まざるは

須臾も、一心に法を念ずるには如かず

一念の道福は、彼終身に勝る

百歳を終へて、火祠に奉事すと雖も



【三尊】 佛法僧のこと。

須臾も、三尊を供養するに如かず  
一供養の幅は、彼百年に勝る

神を祭り以て福を求め、後に従つて其報を觀るも

四分未だ一をも望まず、賢を禮する者には如かず

能善く禮節を行ひ、常に長老を敬ふ者は

四福自然に増す、色と力と壽而も安し

若し人壽きこと百歳なるも、正に遠ざかり戒を持たずんば

生くること一日なるも、戒を守り意を正しくして禪するには如かず

若し人壽きこと百歳なるも、刑僞にして智有ること無くんば

生くること一日なるも、一心に正智を學ぶには如かず

若し人壽きこと百歳なるも、懈怠にして精進ならずんば

生くること一日なるも、勉めて精進を行するには如かず

若し人壽きこと百歳なるも、成敗の事を知らずんば

生くること一日なるも、微を見、忌む所を知るに如かず

若し人壽きこと百歳なるも、甘露の道を見ずんば

生くること一日なるも、甘露の味を服行するには如かず

若し人壽きこと百歳なるも、大道の義を知らずんば

【禪】 心を専らにして三昧に入り寂靜に遊ぶこと。

【精進】 善行をつとめ勵むこと。

生いくること一日いちにちなるも、佛ぶつ法の要ようを學まな推おしするに如ごとかず

惡行品法句經第十七 二十有二章

惡行品あくぎょうほんとは、惡人あくにんに感切かんせつせば動ひかもすれば罪報ざいほう有り、行ぎやうぜざれば患無うれなしし。

善ぜんを見て從したがはずんば、反かへつて惡心あくしんに隨したがはん

福ふくを求もとめて正ただしからずんば、反かへつて邪淫じやゐんを樂たのまん

凡おほそ人惡ひとあくを爲なして、自みづから覺さること能あたはず

愚癡ぐちけい快意かいぎならば、後あとをして鬱毒うつどくならしむ

殞人えいじん虐ぎやくを行なげば、沈しづむこと漸あやく數數すうすうなり

快欲けよく人の爲ためにせば、罪報ざいほうは自然じぜんなり

吉人きちじん德とくを行なじ、相隨あひしたがつて積增じやくさうす

甘心かんしんに之これを爲なせば、福應ふくおう自然じぜんなり

妖えうに福ふくを見るは、其惡未そのあくいまだ熟じやくせざればなり

其惡熟そのあくじやくするに至いたらば、自みづから罪虐ざいまくを受うく

貞祥ちんじやうに禍わざはひを見るは、其善未そのぜんいまだ熟じやくせざればなり

其善熟そのぜんじやくするに至いたらば、必かならず其福そのふくを受うく

【殞人】 惡者の意

【妖孽】 わざはひのたね。

人を撃たば撃を得、怨を行すれば怨を得

人を罵れば罵を得、怒を施せば怒を得

世人聞くこと無く、正法を知らず

生れて此壽少くば、何ぞ宜しく惡を爲すべき

小惡を輕んじ、以て殃無しと爲すこと莫れ

水の滯微なりと雖も、漸く大器に盈つ

凡そ罪の充滿するは、小より積成す

小善を輕んじ、以て福無しと爲すこと莫れ

水滴微なりと雖も、漸く大器に盈つ

凡そ福の充滿するは、纖纖より積む

夫れ士の行を爲すや、之を好むと惡むと

各自ら身の爲にし、終に敗亡せず

好取の士は、自ら以て可と爲し

彼を沒取する者は、人も亦之を沒す

惡は即時ならず、牛乳を搗るが如し

罪の陰に在りて祠ること、灰の火を覆ふが如し

戲笑を惡と爲し、以て身行を作し

【纖纖】 こまかし  
いことし

【洞漚】水の渦を  
まける所。

【雲噓】くもり。

號泣して報を受け、行に随つて罪至る  
悪を作すも覆はず、兵の載する所の如し  
牽往して乃ち知るも、已に悪行に墮し  
後に苦報を受くること、前の所習の如し  
毒摩瘡の如く、船の洞漚に入ることく  
悪行流衍して、傷尅せざる靡し  
悪を加へて人を誣罔するも、清白は猶汚れず  
愚殃反つて自ら及ぶ、塵の風に逆ひて益すが如し  
過失に非悪を犯し、能く追悔するを善と爲す  
是れ明に世間を照すこと、日の雲噓無きが如し  
夫れ士の行する所以は、然も後に身に自ら見る  
善を爲せば則ち善を得、悪を爲せば則ち悪を得  
識有れば胞胎に墮す、悪しき者は地獄に入り  
善を行すれば天に上昇す、無爲なるは泥洹を得  
空に非ず海中に非ず、山石の間に隠るるに非ず  
能く此處に於て、宿惡の殃を避免すること莫し  
衆生苦惱有り、老死を免るることを得ず

唯仁智者のみ有り、人の非惡を念ぜず

刀杖品法句經第十八 十有四章

刀杖品とは、慈仁を教習し、刀杖を行じて衆生を賊害する無きなり。

一切皆死を懼れ、杖痛を畏れざること莫し

己を恕して讐と爲すべし、殺すこと勿れ杖を行すること勿れ

能く常に群生を安んじて、暗の楚毒を加へざれ

現世に害に逢はざれば、後世長く安隱なり

當に讒言すべからず、言はば當に報を畏るべし

惡往き禍來り、刀杖驅に歸せん

言を出すに善を以てし、鐘磬を叩くが如く

身に論議無くんば、世を度ること則ち易からん

良善を歐杖し、妄りに無罪を讒せば

其殃十倍し、災の迅なること赦する無し

生きて耐痛を受け、形體毀折し

自然に惱病あり、失意恍惚たり

【歐杖】たたくこと。歐は歐か。

人に誣咎せられ、或は縣官の厄あり  
財産耗盡し、親戚離別し

舍宅所有、災火に焚焼せられ

死して地獄に入る、是の如きを十と爲す

髻し、剪髮し、長く草衣を服し

沐浴し石に踞すと雖も、癡結を奈何せん

伐、殺、焼せず、亦勝を求めず

人天下を愛せば、適く所怨無し

世黨し人有り、能く慚愧を知らば

是を誘進して、良馬を策つが如しと名く

善馬に策ちて、道を進めて能く遠ざかるが如く

人に信と戒と、定と慧と精進と有らば

受と道と慧とを成じて、便ち衆告を滅せん

自ら嚴にして以て法を修し、滅損して淨行を受け

杖を群生に加へざるは、是れ沙門道人なり

天下に害無ければ、終身害に遇はず

常に一切を慈しむ、孰か能く與に怨を爲さんや



老耗品法句經第十九 十有四章

老耗品とは、人に勤力して命と競はざれば、老いて悔ゆとも何の益かあらんと誨ふ。

何をか喜び何をか笑はん、命常に熾然す

深く幽冥を蔽ふ、鏡を求むるに如かず

身の形範を見て、倚りて以て安しと爲す

多想は病を致す、豈眞に非ざるを知らんや

老ゆれば則ち色衰へ、病みて光澤無く

皮緩み肌縮み、死命近促す

身死し神徙らば、棄車を御するが如し

肉消え骨散す、身何んが怙むべき

身を城の如しと爲す、骨幹肉塗

生れて老死に至る、但恚と慢とを藏す

老ゆれば則ち形變すること、嘘へば故車の如し

法は能く苦を除く、宜しく以て功學すべし

人の聞く無きは、老いて特牛の若し

但長じて肌肥え、福慧有ること無し

生死無聊なれば、往來艱難なり

意に身を倚食せば、生苦端無し

慧を以て苦を見る、是故に身を棄つ

意を滅し行を斷じ、愛盡きて生無し

梵行を修せず、又富財ならずんば

老いて白鷺の、空池を守り伺ふが如し

既に戒を守らず、又財を積まず

老羸氣竭きて、故を思ふも何んが逮はん

老ゆれば秋葉の如く、何んが穢れし鑑録なる

命は疾く脱至し、亦後悔を用ひん

命は日夜に盡きんと欲す、時に及んで勦力すべし

世間は諦かに非常なり、惑うて冥中に墮すること莫れ

常に學して意の燈を燃し、自ら練つて智慧を求むべし

垢を離れて染汚すること勿れ、燭を執つて道地を觀ぜよ

愛身品法句經第二十 十有三章

愛身品とは、學を勸むる所以は、終に己に益有り、罪を滅して福を興す。

自ら身を愛する者は、憤みて守る所を護れ

怖望して解を欲せば、正を學んで寐まざれ

身を第一と爲す、常に自ら勉學せよ

利なれば乃ち人を誨へ、慥まずんば則ち智なり

學んで先づ自ら正しかれ、然る後人を正せ

身を調めば慧に入り、必ず選つて上となる

身を利すること能はずんば、安んぞ能く人を利せん

心調り體正しくば、何の願か至らざらん

本我造る所、後我自ら愛く

惡を爲して自ら更ふること、剛の珠を鑽るが如し

人戒を持たずんば、滋蔓して藤の如し

情を逞くし欲を極め、惡行日に増さん

惡行は身を厄す、愚は以て易しと爲す

善は最も身を安んず、愚は以て難しと爲す  
眞人の教の如き、道法身を以てす  
愚者は之を疾み、見て悪と爲す  
悪を行ぜば悪を得ること、苦種を種うるが如し  
悪は自ら罪を受け、善は自ら福を受く  
亦各須らく熟すべし、彼自ら代らず  
善を習へば善を得る、亦甜を種うるが如し  
自ら利し人を利するは、益にして費えず  
利身を知らんと欲せば、戒聞を最と爲す  
如し自ら愛有りて、天上に生ぜんと欲せば  
敬ひ樂しんで法を聞き、當に佛教を念すべし  
凡そ用は必ず豫め慮り、以て所務を損すること勿れ  
是の如き意を日に修め、事務時を失はざれ  
夫れ事を治むるの士は、能く至つて終に利を成す  
眞の見身は行に應ず、是の如くんば所欲を得

世俗品法句經第二十一 十有四章

世俗品とは、世の幻夢を説く、當に浮華を捨てて、勉めて道用を修すべし。

車の道を行くに、平なる大途を捨てて

邪徑に従はば敗れ、折軸の變を生ずるが如し

法を離るるも是の如く、非法の増すに従つて

愚守して死に至らば、亦折患有り

正道に順行して、邪業に隨ふこと勿れ

行住臥に安く、世世患無し

萬物は泡の如く、意は野馬の如く

世に居するは、幻の若し、奈何が此を樂まん

若し能く此を斷じ、其樹根を伐り

日夜是の如くんば、必ず定に至る

一たび如信、如樂の人に施すも

或は滿意に従ひ、飯を以て衆と食す

此輩日夜に、定意を得ず

【妄語】 いっはり  
をいふこと。

世俗は眼無く、道の眞を見ること莫し  
如し少しく明を見んとせば、當に善意を養ふべし  
鴈の群を將ゐるに、羅を避け高く翔くるが如く  
明人は世を導き、邪衆を度脱せしむ  
世皆死有り、三界は安きこと無し  
諸天に樂ありと雖も、福盡くれば亦喪ふ  
諸の世間を観するに、生れて終らざる無し  
生死を離れんと欲せば、當に道眞を行すべし  
癡は天下を覆ひ、食は見ざらしめ  
邪疑は道を却く、若し愚ならば是に従ふ  
一たび法を脱過し、妄語を謂ふ人は  
後世を免れず、惡として更らざる曬し  
多く珍寶を積み、嵩高天に至り  
是の如き世間に滿つと雖も、道迹を見るには如かず  
不善は像て善の如く、愛は無愛に似たるが如く  
苦を以て樂の像と爲すは、狂夫の厭ふ所と爲す

法句經卷上終



法句經 卷下

尊者法救撰

吳天竺沙門維祇難等譯

述佛品法句經第二十二 二十有一章

述佛品とは、佛の神徳は利度せざる無く、明にして世の則たるを遺ふ。

已に勝つて悪を受けず、一切世間に勝つ

徹智廓として疆り無く、矇を聞きて道に入らしむ

網を決して罣礙無し、愛盡きて積む所無し

佛意深くして極り無く、未だ踐まざる迹を踐ましむ

勇健は一心を立て、出家して日夜に滅し

根斷じて欲意無く、正を學んで念清明なり

諦を見るに淨くして穢無く、已に五道の淵を度す

佛出でて世間を照し、爲に衆の憂苦を除く  
人道に生ずるを得ることは難く、壽を生ずることも亦得難く

【五道】地獄、餓鬼、畜生、人、天。

【梵志】ブラフマ  
チャーリン(Brah-  
mavin)淨高と譯  
す、波羅門生活の  
師につきて修學す  
る間。  
【除饑】沙門の譯

世間に佛有ること難く、佛法聞くを得ること難し  
我既に歸保無く、亦獨りにして伴侶無し  
一行を積みて佛を得、自然に聖道に通ず  
船師は能く水を渡り、精進を橋梁と爲す  
人は種姓を以て繫し、度者は健雄たり  
壞惡を度するは佛たり、地に止るは梵志たり  
除饑は學法たり、斷種は弟子たり  
觀行は忍第一たり、佛は泥洹最たりと説きたまふ  
罪を捨てて沙門と爲り、彼を燒害すること無し  
燒さず亦惱まさず、戒の如く一切を持し  
少食もて身の食を捨て、幽隱の處に行する有り  
意諦かに以て點行らば、是れ能く佛教を奉ぜるなり  
諸の惡は作すこと莫く、諸の善は奉行し  
自ら其意を淨くする、是れ諸佛の教なり  
佛は尊貴たり、漏を斷じ姪無し  
諸の釋中の雄、一群心に從ふ  
快い哉福報ある、所願皆成す

【四諦】 苦集滅道の四諦。

【八道】 正思、正業、正精進、正語、正命、正定、正念、正見の八正道。

上寂に敏なれば、自ら泥洹を致す  
 或は多く自ら、山川樹神に歸し  
 廟立し圖像し、祭祀して福を求む  
 自ら歸する是の如きは、吉に非ず上に非ず  
 彼來りて、我業苦を度すること能はず  
 如し自ら、佛法聖衆に歸する有らば  
 道德の四諦、必ず正慧を見ん  
 生死は極苦なり、諦に従つて度を得  
 世を度する八道は、斯れ業苦を除く  
 自ら三尊に歸するは、最吉最上なり  
 唯獨り是のみ有りて、一切の苦を度す  
 士如し中正にして、道に志し慳ならずんば  
 利なる哉斯人、自ら佛に歸する者なり  
 明人値ひ難く、亦比有らず  
 其所生の處は、放觀慶を蒙る  
 諸佛の興る快く、經道を説く快く  
 衆聚の和は快く、和なれば則ち常に安し

安寧品法句經第二十三 十有四章

安寧品とは、安危を差次す、惡を去れば即ち善快にして墮せず。

我生已に安し、怨に懼らず

衆人怨有り、我無怨を行す

我生已に安し、病を病ます

衆人病有り、我無病を行す

我生已に安し、憂を感へず

衆人憂有り、我無憂を行す

我生已に安し、清淨無爲なり

樂を以て食と爲す、光音天の如し

我生已に安し、澹泊無事なり

彌き薪の國火も、安んぞ能く我を焼かん

勝たば則ち怨を生じ、負くれば則ち自ら鄙す

勝負の心を去りて、争無くんば自ら安し

熱は姪に過ぐるは無く、毒は怒に過ぐるは無し

【光音天】色界二禪天中の第三。

苦は身に過ぐるは無く、樂は滅に過ぐるは無し  
無樂小樂、小辯小慧

觀じて大を求むる者は、並ち大安を獲

我は世尊たり、長く解して憂無し

正に三有を度し、獨り衆魔を降す

聖人を見るは快く、依附を得るは快く

愚人を離るるを得て、善を爲すは獨り快し

正道を守るは快く、工に法を説くは決し

世と諍ふこと無く、戒を具するは常に快し

賢に依つて居するは快く、親しく親會するが如し

仁智に近く者は、多聞高遠にして

壽命は鮮少にして、世の多きを棄て

學は當に要を取り、老に至つて安からしむべし

諸欲は甘露を得、棄欲の滅諦は快し

生死の苦を度せんと欲せば、當に甘露味を服すべし

【三有】 欲色無色  
の三界。

好喜品法句經第二十四 十有二章

好喜品とは、人の多喜を禁ず、能く貪欲せざれば則ち憂患無し。

道に違はば則ち自ら順ひ、道に順はば則ち自ら違ふ

義を捨てて好む所を取る、是を愛欲に順ふと爲す

當に愛する所に趣くべからず、亦愛せざること有ること莫し

之を愛して見ざるも憂へ、愛せざるを見るも亦憂ふ

是を以て愛を造ること莫れ、愛は憎惡の由る所なり

已に縛結を除きし者は、愛無く憎む所無し

愛喜は憂を生じ、愛喜は畏を生ず

愛喜する所無くんば、何をか憂へ何をか畏れん

好樂は憂を生じ、好樂は畏を生ず

好樂する所無くんば、何をか憂へ何をか畏れん

貪欲は憂を生じ、貪欲は畏を生ず

解して貪欲無くんば、何をか憂へ何をか畏れん

法を貪り戒成じ、至誠にして慚を知り



身を行じて道に近かば、衆の愛する所と爲る

欲態出でず、正を思ひて乃ち語り

心に貪愛無くんば、必ず流を截りて渡る

譬へば人の久しく行き、遠くより吉く還り

親厚普く安からば、歸り來りて歡喜するがごとし

好んで輻を行する者は、此より彼に到り

自ら輻祚を受くる、親の來りて喜ぶが如し

起つて聖教に従ひ、不善を禁制し

道に近くは愛せられ、道を離るるは親しまるること莫し

近と不近と、住する所は異なる

道に近きは天に昇り、近からざるは獄に墮す

忿怒品法句經第二十五 二十有六章

忿怒品とは、瞋恚に害せらるるも、寛弘慈柔なれば天祐け人愛す。

忿怒は法を見ず、忿怒は道をしらず

能く忿怒を除く者は、福喜常に身に隨ふ

貪婬は法を見ず、愚癡意も亦然なり  
 婬を除き癡を去る者は、其福第一尊なり  
 志を能く自ら制して、奔車を止むる如くんば  
 是を善く御すると爲す、冥を棄てて明に入る  
 忍辱は悲に勝ち、善は不善に勝つ  
 勝者は能く施し、至誠は欺に勝つ  
 欺かず怒らず、意の多きを求めず  
 是の如き三事は、死して則ち天に上る  
 常に自ら身を攝し、慈心にして殺さずんば  
 是れ天上に生じ、彼に到りて憂無からん  
 意常に覺悟し、明暮に勤學せば  
 漏盡き意解け、泥洹に致るべし  
 人相謗毀して、古より今に至る  
 既に多言を毀り、又訥忍を毀り  
 亦中和を毀りて、世に毀らざる無し  
 欲意非聖は、中を制すること能はず  
 一毀一譽、但利名の爲なり

【羅漢】アルハン  
(Arhan) 塵供と譯す。  
【香噓】なげきほむること。

明和の譽むる所、唯是を賢と稱す  
慧人戒を寺りて、譏謗する所無し  
羅漢淨の如きは、誣謗すること莫し  
諸人も香噓し、梵釋も稱する所なり  
常に守りて身を慎み、以て瞋恚を護り  
身の惡行を除きて、德行を進修せよ  
常に守りて言を慎み、以て瞋恚を護り  
口の惡言を除きて、法言を誦習せよ  
常に守りて心を慎み、以て瞋恚を護り  
心の惡念を除き、思惟して道を念せよ  
身を節し言を慎み、其心を守攝し  
恚を捨てて道を行する、忍辱は最も強し  
恚を捨てて慢を離れ、諸の愛會を避け  
名色に著せずんば、無爲にして苦を滅す  
起つて怒を解き、姪生すれば自ら禁じ  
不明健を捨て、斯れ皆安きを得  
瞋斷すれば臥安く、悲滅して婬憂ふ

怒は毒の本たり、軟意は梵志たり  
 言善くば譽を得、斷は無患たり  
 同志相近づく、詳は作惡たり  
 後に餘の恚と別つ、火は自ら燒惱し  
 慚愧を知らず、戒無きは怒有り  
 怒の爲に牽かる、厭はずんば務有り  
 有力は兵に近く、無力は戰に近し  
 夫れ忍の上たる、宜しく常に贏を忍ぶべし  
 舉衆之を輕んじ、有力者は忍ぶ  
 夫れ忍の上たる、宜しく常に贏を忍ぶべし  
 自我を彼と、大畏に三有り  
 如し彼作を知らば、宜しく滅は已の中なるべし  
 俱に兩の行義は、我彼の爲に教ふ  
 如し彼の作を知らば、宜しく滅は已の中なるべし  
 苦智は愚に勝ち、羅言惡說なり  
 常に勝たんと欲する者は、言に於て宜しく默すべし  
 夫れ惡を爲す者は、怒れば怒報有り

怒つて怒を報いざるは、彼との闘負に勝つ

塵垢品法句經第二十六 十有九章

塵垢品とは、清濁を分別す、學は當に潔白なるべし、汚辱を行すること無かれ。

生きて善行無くんば、死して惡道に墮せん

住すること疾にして間無く、到るに資用無けん

當に智慧を求めて、以て意定を然すべし

垢を去り汚るる勿くんば、苦形を離るべし

慧人は漸を以てし、安徐として稍進し

心垢を洗除すること、工の金を鍊るが如し

惡は心に生じ、還りて自ら形を壞る

鐵の垢を生じて、反つて其身を食するが如し

誦せざるを言の垢と爲し、勤せざるを家の苦と爲し

嚴ならざるを色の垢と爲し、放逸を事の垢と爲す

懼を惠施の垢と爲し、不善を行の垢と爲す

今世にも亦後世にも、惡法を常の垢と爲す

垢中の垢は、癡よりも甚しきは無し  
學ぶもの當に惡を捨つべし、比丘よ無垢なれ  
生を尙くもして恥無く、烏の長喙の如く  
強顏辱に耐ふるを、名けて穢生と曰ふ  
廉耻は苦と雖も、義清白を取り  
辱を避けて妾ならざるを、名けて潔生と曰ふ  
愚人殺を好み、言に誠實無く  
與へざるに取り、好んで人婦を犯す  
心を逞くして戒を犯し、酒に迷惑す  
斯人世に、自ら身の本を掘る  
人如し是を覺らば、當に惡を念すべからず  
愚は非法に近づき、久しく自ら燒没す  
若し信の布施して、名譽を揚げんと欲し  
人の虚飾に會せば、淨定に入るに非ず  
一切欲を斷ち、意の根源を截り  
晝夜一を守らば、必ず定意に入らん  
垢に著するを塵と爲し、染塵に従ふを漏とす



染せず行ぜざるは、淨くして愚を離る

彼自ら侵され、常に内に自ら省る

漏を行じて自ら欺き、漏盡きて垢無し

火は煙より熱きは莫く、捷は怒より疾かなるは莫し

網は癡より密なるは莫く、愛流は河よりも駛し

虚空に轍迹無し、沙門は外意無し

衆人盡く悪を樂む、唯佛のみ淨くして穢無し

虚空に轍迹無く、沙門に外意無し

世間は皆無常にして、佛のみ無我の所有なり

奉持品法句經第二十七 十有七章

奉持品とは、道義を解説す、法は徳行を貴び食修を用ひず。

經道を好む者は、利を競はず

有利と無利とに、欲無くして惑はず

常に好學を愍み、心を正しくして以て行し

實慧を擁懷する、是を謂つて道と爲す

謂ゆる智者とは、必ずしも辯言ならず

恐無く懼無く、善を守るを智と爲す

法を奉持する者は、多言を以てせず

素少しく聞くと雖も、身、法に依りて行じ

道を守りて怠まざるを、法を奉ずると謂ふべし

謂ゆる老者とは、必ずしも年者ならず

形熟し髮白きは、蠢愚のみ

諦法を懐き、順、調、慈仁

明達、清潔なるを謂ひて、是を長老と爲す

謂ゆる端政とは、色花の如くなるも

慳、嫉、虚飾、言行に違有るに非ず

能く悪を捨て、根原已に断ちて

慧にして慧無きを謂つて、是を端政と謂ふ

謂ゆる沙門とは、必ずしも髮を除くに非ず

妄語貪取して、欲有らば凡の如し

能く悪を止め、恢廓弘道  
心を息め意を滅するを謂つて、是を沙門と爲す

【恢廓】ひろく大なること。

謂ゆる比丘とは、時に食を乞ふに非ず

邪行彼を嫉せば、名を稱するのみ

罪福を捨て、淨く梵行を修し

慧能く惡を破するを謂つて、此を比丘と爲す

謂ゆる仁明とは、口言はざるに非ず

心を用ふることを淨からずんば、外順なるのみ

心の無爲にして、内に清虚を行じ

此彼寂滅なるを謂つて、是を仁明と爲す

謂ゆる有道とは、一物を救ふに非ず

普く天下を濟ひ、害無きを道と爲す

戒衆きを言はず、我行は多く誠なり

定意を得る者は、要す閉損に由る

意解して安きを求めば、凡人に習ふこと莫れ

使結末だ盡きずんば、能く腕を得ること莫けん

道行品法句經第二十八 二十有八章

道行品とは、旨大要度脱の道を説く、此を極妙と爲す

八直は最上の道、四諦は法迹たり

不婬は行の尊、施燈は必ず眼を得ん

是道復畏るる無く、淨を見て乃ち世を度す

此れ能く魔兵を壊し、力行すれば邪苦を滅す

我已に正道を聞き、大いに異明を現すと爲す

已に聞けば當に自ら行すべく、行すれば乃ち邪縛を解す

生死は非常にして苦なり、能く觀見するを慧と爲す

一切苦を離れんと欲せば、行道して一切を除け

生死は非常にして空なり、能く觀見するを慧と爲す

一切の苦を離れんと欲せば、但當に勤めて道を行すべし

起時には當に即ち起つべく、愚の淵を覆ふが如くすること莫れ

與に墮し與に瞻て聚るも、計して罷めば道に進まず

念應すれば念則ち正しく、念應せざれば則ち邪なり

慧にして邪を起さず、正を思へば道乃ち成ず

言を愼しみ意念を守り、身の不善を行ぜず

是の如き三行除かば、佛は是れ道を得と説けり

樹を斷つも木を伐ること無くんば、根有つて猶復生ず

根を除けば乃ち樹無く、比丘は泥洹を得

樹を斷つこと能はずんば、親戚相戀ひ

貪意自ら縛すること、犢の乳を慕ふが如し

能く意の木を織ち、生死に強むること無き

是を道に近くと爲し、疾に泥洹を得

貪嫉は老を致し、瞋恚は病を致し

愚癡は死を致す、三を除いて道を得

前を釋し後を解し、中を脱せば彼を度し

一切の念滅すれば、復老死無し

人は妻子を憐み、病法を觀せずんば

死命卒に至ること、水滿の驛きが如し

父子すら救はざるに、餘の親に何をか望まん

命盡きて親を悟むとも、盲の燈を守るが如し

慧は是意を解して、經戒を修し

勤行して世を渡り、一切苦を除くべし

諸淵を遠離すること、風の雲を却くるが如し

已に思想を滅せば、是を知見と爲す

智は世の長たり、淡樂無爲なれば

正教を受くることを知り、生死盡くることを得

衆行は空なりと知るは、是を慧見と爲す

世苦を罷厭し、是道に従つて除く

衆行は苦なりと知るは、是を慧見と爲す

世苦を罷厭し、是道に従つて除く

衆行非身なる、是を慧見と爲す

世苦を罷厭し、是道に従つて除く

吾汝に法を語る、愛箭を射と爲し

宜しく以て自ら助めて、如來の言を受くべし

吾都て以て滅と爲す、往來して生死盡く

一情を以て解するに非ず、演ずる所を道眼と爲す

駛流海に澎げば、潘水濺うて疾に滿つ

故に爲に智者は説く、趣いて甘露を服すべし

前に未だ聞かざる法輪を、轉ずるは衆生を哀れむが爲なり

是に於て奉事する者は、之を禮して三有を度す



三念に善を念ずべし、三も亦難く不善なり  
 念に従ひて行有るは、之を滅して正斷と爲す  
 三定は轉念たり、棄捨すべき行は無量なり  
 三を得て三窟を除く、結を解して念に應ずべし  
 戒を以て惡を禁ずるを知り、思惟して慧樂を念ず  
 已に世の成敗を知る、意を息めば一切解せん

廣衍品法句經第二十九 十有四章

廣衍品とは、凡そ善惡は小を積んで大を致し、證は章句に應ずると言ふ。

施安は小と雖も、其報彌大なり

慧は小施より、景福を受け見る

勞を人に施し、福を望まんと欲せば

殊咎身に歸し、自ら廣恕に遭はん

已に多事を爲し、事に非ざるも亦造る

伎樂放逸ならば、惡習日に増す

精進惟れ行じ、是に習ひ非を捨て

身を修めて自覺する、是を正習と爲す

既に自ら慧を解し、又多く學問し

漸く進み普く廣がるは、油酥を水に投ずるがごとし

自ら慧意無く、好んで學問せず

凝縮狭少なるは、酪酥を水に投ずるがごとし

道に近きは名顯はるること、高山の雪の如し

道に遠く闇昧なるは、夜に箭を發するが如し

佛弟子と爲りては、常に寤めて自ら覺め

晝夜に佛を念じ、惟れ法をもて衆を思ふ

佛弟子と爲りては、當に寤めて自ら覺むべし

日暮に禪を思ひ、樂觀し一心なり

人は當に念意有るべし、毎食に自ら少きを知れば

則ち是れ痛みを欲と薄き、節消して壽を保つ

學ぶことは難く罪を捨つることは難く、家に居在することも亦難し

會止利を同じくすること難く、難難有に過ぐるは無し

比丘の乞求は難く、何んが自ら勉めざるべけんや

精進ならば得ること自然にして、後人に欲する無し

信有れば則ち戒成じ、戒に従つて多く賢を致し  
 亦従つて諸偶を得、在所に供養せらる  
 一坐一處に臥し、一行放恣無し  
 一を守りて以て身を正さば、心樂しく樹間に居るがごとし

地獄品法句經第三十 十有六章

【泥梨】 ナラカ  
 (Nirika) 地獄の  
 こと。

地獄品とは、泥梨の事を道ふ、悪を作せば悪を受く、罪は牽ゐて置かず。

妄語は地獄に近し、之を作して作さずと言はば

二罪後に俱に受く、是行を自ら牽き往く

法衣其身に在るも、悪を爲し自ら牽ぜず

苟くも悪行に没せば、終に則ち地獄に墮つ

無戒にして供養を受けば、理豈自ら損せざらん

死は燒鐵丸を噉ふごとく、然も熱は火炭より劇し

放逸に四事有り、好んで他人の婦を犯す

險に臥し、福利に非ず、毀は三、滄泆は四

福利ならざるは悪に墮し、悪を畏れ樂寡きを畏れ

【玷缺】 缺點。

【怨讟】 うらみそ  
しること。

王法重罰を加へ、身死して地獄に入る  
 譬へば管草を抜くが如し、執ること緩ければ則ち手を傷く  
 戒を學びて禁制せざれば、獄録乃ち自ら賊す  
 人行ふに慢惰を爲し、衆勞を除くこと能はず  
 梵行に玷缺有らば、終に大福を受けず  
 常に當に行すべき所を行じ、自ら持して必ず強からしめ  
 遠く詣の外道を離れ、習うて塵垢を爲すこと莫れ  
 常に爲すべからざる所を爲さば、然る後に變毒を致す  
 善を行ぜば常に吉順にして、適く所悔悞無し  
 其れ衆の悪行に於て、作さんと欲し若し已に作さば  
 是苦は解すべからず、罪近きて避くることを得ること難し  
 妄證は求むるも敗れ、行已に正しからずんば  
 良人を怨讟し、托を以て士を治む  
 罪斯人を縛し、自らを坑に投ず  
 邊城を備ふるに、中外牢固なるが如く  
 自ら其心を守り、非法を生ぜざれ  
 行缺くれば憂を致し、地獄に墮せしむ

羞づべきを羞ぢず、羞に非ざるを反つて羞ぢなば  
 生きて邪見を爲し、死して地獄に墮つ  
 畏るべきを畏れず、畏るべきに非ざるを反つて畏れなば  
 邪見に信向し、死して地獄に墮つ  
 避くべきを避けず、就くべきに就かず  
 邪見を翫習せば、死して地獄に墮つ  
 近づくべきは則ち近づき、遠ざくべきは則ち遠ざけ  
 恆に正見を守らば、死して善道に墮つ

象喩品法句經第三十一 十有八章

象喩品とは、人をして身を正さしめ、善を爲さば善を得、福報快し。

我は象の鬮ふに、箭の中るを恐れざるが如し

常に誠信を以て、無戒の人を度せん

譬へば象の調正せるは、王乘に申つべし

調せるを尊人と爲し、乃ち誠信を受く

常調を爲すと雖も、彼新馳

亦また最さい善ぜんの象さうの如ごときも、自じ調てうに如ごとかず  
彼かれ、人ひとの至いたらざる所ところに適ゆくこと能あたはず  
唯ただ自じ調てうする者ものは、能よく調てう方ほうに至いたる  
象さうの財さい守しゆと名なくるが如ごときは、猛みやう害がい禁きん制せいし難あたし  
繫け絆ばんせば與たぬに食くらはず、猶なほ暴ぼう逸いつせる象さうの如ごとし  
惡あく行ぎやうに没もつ在ざいする者ものは、恆つねに食くらを以もつて自じら繫つなぎ  
其その象さう厭いとくことをしらず、故ゆゑに數かず胞ほう胎たに入いる  
本もと意いに純じゆん行ぎやうを爲なし、及まび常つねに安やすんずる所ところを行なせり  
悉ことごとく捨すて結けつを降が伏ふくせば、鈎かぎもて象さうを制せいし調てうむるが如ごとし  
道だうを樂たのみ放は逸いつならず、常つねに能よく自じら心こころを護まもる  
是これを身しん苦くを抜ぬくと爲なす、象さうの埒かを出いるが如ごとし  
若もし賢けんの能よく伴たふを得えて、俱く行ぎやうして善ぜん悍かんを行なせば  
能よく諸しよの所ところ聞きを伏ふくし、至いたり到たりて意いを失あはさず  
賢けんの能よく伴たるを得えざれば、俱く行ぎやうして惡あく悍かんを行なす  
廣ひろく王わうの邑おほ里りを斷たち、寧むじろ獨ひとり惡あくを爲なさざれ  
寧むじろ獨ひとり行なじて善ぜんを爲なし、愚ぐと侶りよたらざれ  
獨ひとりして惡あくを爲なさざること、象さうの驚おどいて自じら護まもるが如ごとくせよ



生うまんで利り有ちるは安やすく、伴ともは軟やわ和わを安やすしと爲なす  
命いのち盡つくるに福ふくを爲なすは安やすく、衆しゆ惡あく犯おほさざるは安やすし  
人家にけに母はは有あるは樂たのしく、父ちち有あるも斯またも亦また樂たのし  
世よに沙しゃ門もん有あるは樂たのしく、天てん下かに道だう有あるは樂たのし  
戒かいを持もつて終つに老おゆるは安やすく、正しやうを信しんじ正しやうしき所ところは善ぜんく  
智ち慧ゑは最ちよも身み安やすく、惡あくを犯おほさざるは最ちよも安やすし  
馬うまを調てう軟なんするが如ごとく、意いの如ごとく所ところに隨したがへ  
信しんと戒かいと精しやう進じんと、定ぢやう法ぽうと要やうす具ぐせば  
明みやう行ぎやう成じやう立りつし、忍にん和わし意い定ぢやうる  
是こゝろれ諸しよ苦くを斷だんじて、意いの如ごとく所ところに隨したがふ  
是こゝろに從したがつて定ぢやうに往ゆくこと、馬うまを調てう御ぎするが如ごとく  
患わづらを斷だんせば無む漏ろうにして、是こゝろれ天てんの樂らくを受うく  
自みづから放はな恣しならずんば、是こゝろれ多おほく痛いたむ  
羸あやめ馬うまを良らうに比ひす、惡あくを棄すつるを賢けんと爲なす

愛欲品法句經第三十二 三十有二章

愛欲品とは、賤姪恩愛を世人は此が爲に、盛に災害を生ず。

心を姪行に放在せば、欲愛枝條を増し

分布生ずる熾盛にして、超躍して果を食ること猴のごとし

愛を忍ぶの苦を爲すを以て、貪欲し世間に著せば

憂患日夜に長じ、薤に蔓草の生ずるが如し

人は恩愛の爲に惑ひ、情欲を捨つること能はず

是の如く憂愛多くば、潺湲池に盈つ

夫れ憂悲して、世間の苦一に非ざる所以は

但愛有に縁るが爲なり、愛を離るれば則ち憂無し

已に意安くんば憂を棄つ、無愛何んが世に有らん

憂へず染求せず、愛せざれば焉んぞ安きを得ん

憂有れば死時を以て、爲に親屬多きを致す

憂の長塗を涉り、苦を愛せば常に危きに墮す

道を爲す行者は、欲と會せず

先づ愛の本を誅して、根を植うる所無く

葦を刈るが如くして、心に復生せしむること勿れ

樹根深固なれば、截ると雖も猶復生するが如く

【潺湲】水の流るる貌。

愛意盡く除かずんば、輒ち當に還りて苦を受くべし。  
猿猴樹を離るることを得るも、脱するを得ば復樹に越く  
衆人も亦是の如く、獄を出でて復獄に入る  
貪意は常流たり、習は橋慢と并ぶ  
思想は嫉欲に倚り、自ら鬱うて所見無し  
一切意は流衍し、愛結は葛藤の如し  
唯慧のみ分別して見、能く意の根原を斷ず  
夫れ愛の潤澤に従へば、思想は滋蔓を爲す  
愛欲は深くして底無く、老死は是を用て増す  
所生の枝は絶えず、但用て貪欲を食す  
怨を養うて丘塚を益し、愚人は常に汲汲たり  
獄に鈎鐐有りと雖も、慧人は牢しと謂はず  
愚の妻子息を見て、染著する愛は甚だ牢し  
慧は愛を説いて獄と爲し、深固にして出づるを得難しといふ  
是故に當に斷棄すべし、欲を視ざれば能く安し  
色を見て心に迷惑し、惟れ無常と觀せず  
愚は以て美善と爲す。安んぞ其非眞なるを知らんや

姪樂を以て自ら裏むは、譬へば蠶の繭を作るが如し  
智者は能く斷棄し、盼せずして衆苦を除く  
心に放逸を念ずる者は、姪を見て以て淨と爲し  
恩愛の意盛に増し、是より獄牢を造る  
意を覺り姪を滅する者は、常に欲の不淨を念じ  
是より邪獄を出でて、能く老死の患を斷ず  
欲網を以て自ら蔽ひ、愛蓋を以て自ら覆ふ  
自ら恣にして獄に縛せらるること、魚の荷口に入るが如し  
老死の伺ふ所と爲ること、犢の母乳を求むるが如し  
欲を離れ愛迹を滅せば、網を出でて所繫無し  
道を盡して獄縛を除き、一切此彼解け  
已に邊行を度るを得る、是を大智士と爲す  
法に遠ざかれる人に親むこと勿れ、亦愛染を爲すこと勿れ  
三世を斷ぜざる者は、會ず復邊行に墮す  
若し一切の法を覺り、能く諸法に著せず  
一切の愛意解くるを、是を聖意に通ずと爲す  
衆施は經施勝れ、衆味は道味勝れ

【捕惕】 おそるる

【五欲】 色聲香味觸の五境をいふ。

衆樂は法樂勝れ、愛盡は衆苦に勝つ  
 愚は貪を以て自ら縛し、彼岸に度るを求めず  
 貪を敗處と爲すが故に、人を害し亦自ら害す  
 愛欲の意を田と爲し、嫉、怨、癡を種と爲す  
 故に度世者に施さば、福を得ること量有ること無し  
 伴少くして貨多くんば、商人怖惕として懼る  
 嗜欲の賊は命を害す、故に慧は欲を食らす  
 心可なるを則ち欲と爲す、何ぞ必ずしも獨り五欲のみならん  
 達して五欲を絶つべし、是れ乃ち勇士と爲す  
 欲無く畏有ること無く、恬淡にして憂患無く  
 欲除き使解くるに、是を長く淵を出づると爲す  
 欲我汝の本を知り、意は思想を以て生ず  
 我汝を思想せずんば、則ち汝有らす  
 樹を伐つて休むこと忽れ、樹は諸惡を生ず  
 樹を斷ち株を盡さば、比丘滅度せん  
 夫れ樹を伐らずんば、少多の餘親あり  
 心此に繫らば、犢の母を求むるが如し

【驅驢】驢馬に似た一種の馬。

【七寶】金、銀、瑠璃、玻璃、珊瑚、瑪瑙。

利養品法句經第三十三 有二十章

利養品とは、已を勵して貪を防ぎ、徳を見て思議し、穢生を爲さず。

芭蕉は實を以て死し、竹廬の實も亦然なり

驅驢は好に坐りて死し、士は貪を以て自ら喪ふ

是の如きの貪は利無し、當に知るべし癡より生ずることを

愚は此をもて賢を害すと爲し、首領は地に分たる

天は七寶を雨らすも、欲は猶厭くこと無く

樂少く苦多しと、覺る者を賢と爲す

天欲有りとも雖も、慧は捨てて貪ること無し

樂んで恩愛を離るるを、佛弟子と爲す

道に遠ざかり邪に順ひ、貪養の比丘は

止めて慳意有り、以て彼姓に供す

此養に倚ること勿れ。家の爲に罪を捨つるは

此至意に非ず、用用何の益かあらん

愚は愚計を爲す、欲慢用を増す



異なる哉利を失ふや、泥洹に同じからず  
是を諦に知る者は、比丘佛子たり

利養を樂はず、閑居して意を却け

自ら得て恃まず、他に從つて望まず

彼比丘に望んで、正定に至らず

夫れ命に安んぜんと欲せば、息心自省し

計數、衣服飲食を知らざれ

夫れ命に安んぜんと欲せば、息心自省し

取得するを知り、一法を守行せよ

夫れ命に安んぜんと欲せば、息心自省し

鼠の穴に藏るるが如し、潜隱して教を習へ

利に約し耳に約し、戒を奉じて思惟せば

慧に稱せらる、清吉怠ること勿れ

如し三明有らば、解脫無漏なり

智寡く識鮮くば、憶念する所無し

其食飲に於て、人に從つて利を得

而も惡法行らば、供養に從つて嫉む

【三明】宿住智證  
明、死生智證明、漏  
盡智證明。

【搯食】段食、搏食ともいひ、肉食等有形の食物をいふ。

多く怨利を結んで、強ひて法衣を服し  
但飲食を望んで、佛教を奉ぜず  
當に知るべし是過は、養へば大畏たり

寡取は憂無く、比丘心を釋す  
食に非ざれば命濟はずば、孰か能く搯食せざらん

夫れ食を立つるを先と爲せ、是を知らば宜しく嫉むべからず  
嫉は先づ已を創け、然る後人を創く

人を撃つて撃を得るも、是れ除くことを得ず  
寧ろ焼石を噉ひ、洋銅を呑飲するも

無戒を以て、人の信施を食せざれ

沙門品法句經第三十四 三十有一章

沙門品とは、訓ふるに法正を以てす、弟子受行して道を得ば解淨し。

目と耳と鼻と口とを端しくし、身と意と常に正を守る  
比丘の行は是の如し、以て衆苦を免るべし  
手と足と妄りに犯すこと無く、言を節し所行に順ひ

常に内に定意を樂み、一を守りて寂然を行せよ

學は當に口を守るべし、有言安徐ならば

法義爲に定り、言必ず柔軟なり

法を樂み法を欲し、思惟して法に安んじ

比丘法に依らば、正しくして費えず

學ぶに利を求むること無く、他行を愛すること無かれ

比丘他を好まば、定意を得ず

比丘少しく取りて、以て積むこと無きを得ば

天人の譽むる所、淨を生じて穢無し

比丘は慈を爲し、佛教を愛敬し

深く止觀に入り、行を滅せば乃ち安し

一切の名色は、有に非ず惑ふこと莫れ

近かず變へざるを、乃ち比丘と爲す

比丘よ船を屬め、中虚ならば則ち輕し

姪と怒と癡とを除かば、是を泥洹と爲す

五を捨て五を斷ち、五根を思惟し

能く五を分別せば、乃ち河淵を渡る

【五根】眼、耳、鼻、舌、身の五根。

【五陰】色、受、  
想、行、識の五。

禪にして放逸すること無く、欲亂を爲すこと莫れ  
洋銅を呑み、自ら憊み形を焦させ  
禪無くんば智ならず、智無くんば禪ならず  
道有るは禪智に従ひ、泥洹に至るを得  
當に學んで空に入り、靜居して意を止め  
獨屏處を樂み、一心に法を觀すべし  
常に五陰を制し、意を伏すること水の如く  
清淨和悅、甘露の味を爲せ  
所有を受けざるを、慧比丘と爲す  
根を攝し足るを知り、戒律悉く持つ  
生きては當に淨を行じ、善師友を求むべし  
知者成人は、苦を度り喜を致す  
衛師華の如く、熟すれば自ら墮つるが如く  
淫と怒と癡とを釋けば、生死自ら解す  
身を止め言を止め、心に玄默を守り  
比丘世を棄つる、是を受寂と爲す  
當に自ら身を勅めて、内心と争ふべし

身を護り諦を念ぜば、比丘惟れ安し

我は自ら我たり、我有ること無きを計す

故に當に我を損すべし、調くるを乃ち賢と爲す

喜佛教に有らば、以て喜を多くすべく

寂寞に至到し、行滅して永く安し

儻し少行有るも、佛の教戒に應ぜば

此れ世間を照す、日の嘘無きが如し

慢を棄てて餘の倚無く、蓮華は水に生じて淨し

學は能く此彼を捨つ、是れ故に勝るを知る

愛を割き懸慕無く、受けざること蓮華の如く

比丘は河流を渡り、勝つて故を明さんと欲す

流を截つて自ら恃み、心を逝つて欲を却く

仁割欲せずんば、一に意猶走る

之を爲せ之を爲せ、必ず強めて自ら割せよ

家を捨てて懈らば、意猶復染す

行の懈緩なる者は、勞して意除かず  
淨梵行に非ず、馬んぞ大寶を致さん

【袈裟】カチャヤ  
ヤ(Kaśāya)染色  
衣と譯す、出家の  
正衣なり。

【剔】剃に同じ。  
【慢訛】ほしいま  
まなること。

沙門何をか行する、意の如くして禁ぜず  
歩歩著粘して、但思に隨つて走る

袈裟を肩に披、惡を爲して損せず

惡惡の行者は、斯れ惡道に墮す

調めざるは誠しむること難く、風の樹を枯すが如し

作して自ら身の爲にせば、曷ぞ精進ならざらん

息心は剔に非ず、慢訛は無戒なり

貪を捨て道を思ひ、乃ち息心に應ず

息心は剔に非ず、放逸は無信なり

能く衆苦を滅するを、上沙門と爲す

梵志品法句經第三十五 有四十章

梵志品とは、言行清白にして、理學んで穢無きを道士と稱すべし。

流を截つて渡り、欲無きこと梵の如く

行已に盡くるを知る、是を梵志と謂ふ

二法無きを以て、清淨淵を渡り



諸の欲結解くるを、是を梵志と謂ふ  
彼に適くに彼無く、彼彼已に空しく

貪婬を捨離する、是を梵志と謂ふ

思惟あり垢無く、所行漏れず

上求起らざるを、是を梵志と謂ふ

日は晝に照り、月は夜に照り

甲兵は軍を照し、禪は道人を照し

佛は天下に出でて、一切の冥を照す

剃するを沙門と爲すに非ず、稱して吉なるを梵志と爲す

謂く能く衆惡を捨つる、是れ則ち道人と爲す

惡を出づるを梵志と爲し、正に入るを沙門と爲す

我業の穢行を棄つるを、是を則ち捨家と爲す

若し愛に猗り、心に所著無く

已に捨て已に正しくば、是れ衆苦を滅す

身と口と意と、淨くして過失無く

能く三行を捨する、是を梵志と謂ふ

著し心に、佛の所説の法を曉了し

心こころを觀くわんじ自みづから歸かへせば、水みづたるより淨まし  
族うぢと結けつ髮ぱつと、名なけて梵ぼん志しと爲なすに非あらず  
誠じやう行ぎやう、法ほふま行ぎやう、清じやうびやく白やくならば則ただち賢けんなり  
飾まき髮ぱつも悲あはれ無なくんば、草くさ衣えも何なにをか施ほどこさん  
内うちに著ちやくを離はなれずんば、外そとに捨すつるも何なにの益やくかあらん  
被ひ服ふく、弊あひ惡あく、射みづから法ほふを承うけて行ぎやうひ  
閑ひま居こし思し惟ひす、是これを梵ぼん志しと謂いふ  
佛ほとけは彼かれをして、己おのれを讚さんじて自じ稱ちやうせしめず  
諦じゆの如ごとく妄まうならざるを、乃すなはち梵ぼん志しと爲なす  
諸もろの欲ほつすべきを絶たち、其その志こころを姪いんせず  
欲よく數すうを委い棄きする、是これを梵ぼん志しと謂いふ  
生なま死じの河かを斷たち、能よく忍しのんで度どを起おこし  
自じ覺かく鞭せんを出いづる、是これを梵ぼん志しと謂いふ  
罵ののしれ撃つたるるも、默もく受じゆして怒いからず  
忍にん辱じやく力りき有ある、是これを梵ぼん志しと謂いふ  
若わし侵おさし欺あそかるるも、但ただ念ねんじて戒かいを守まもり  
身みを端たしくし自みづから調てうむる、是これを梵ぼん志しと謂いふ

心惡法を棄つること、蛇の皮を脱するが如く

欲の爲に汚されざる、是を梵志と謂ふ

生の苦たるを覺り、是より意を滅し

能く重擔を下す、是を梵志と謂ふ

微妙の意を解し、道と不道とを辯じ

上義を體行する、是を梵志と謂ふ

家居と、無家の畏とを棄捐し

少求寡欲なる、是を梵志と謂ふ

活生を棄放して、賊害の心無く

燒惱する所無きを、是を梵志と謂ふ

争を避けて争はず、犯すも懼らず

惡來るを善もて待つ、是を梵志と謂ふ

姪と怒と癡と、憍慢の諸惡を去ること

蛇の皮を脱するが如き、是を梵志と謂ふ

世事を斷絶し、口に麤言無く

八道を密に諦む、是を梵志と謂ふ

世の惡法とする所、修短巨細

取無く捨無き、是を梵志と謂ふ  
 今世の行淨ければ、後世に穢無し  
 習無く捨無き、是を梵志と謂ふ  
 身を棄て猗る無く、異行を誦せず  
 甘露の滅を行す、是を梵志と謂ふ  
 罪と福とに於て、兩行永く除き  
 憂無く嘆無き、是を梵志と謂ふ  
 心喜び垢無く、月の盛に滿つるが如く  
 謗毀已に除く、是を梵志と謂ふ  
 癡の往來して、墮に墮し苦を受くるを見  
 單に岸に渡らんと欲し、他語を好まず  
 唯滅して起らず、是を梵志と謂ふ  
 已に恩愛を斷じ、家を離れて欲無く  
 愛有已に盡く、是を梵志と謂ふ  
 人聚の處を離れ、天聚に墮せず  
 諸聚に歸せず、是を梵志と謂ふ  
 樂と無樂とを棄て、滅して熅燭無く

彼にして諸世に違ふ、是を梵志と謂ふ

所生已に訖り、死して所趣無く

覺、安、依ること無き、是を梵志と謂ふ

已に五道を度り、墮する所を知ること無く

習盡きて餘無き、是を梵志と謂ふ

前に後に、乃ち中に有無く

操る無く捨つる無き、是を梵志と謂ふ

最雄最勇、能く自ら度を解し

覺意動かざる、是を梵志と謂ふ

自ら宿命の、本更來する所を知り

生の盡くるを要つを得、寂は道玄に通じ

明は能默の如き、是を梵志と謂ふ

泥洹品法句經第三十六 二十有六章

泥洹品とは、道の大歸を叙す、恬淡寂滅なるは生死の畏を度す。

忍を最自守と爲し、泥洹を佛は上と稱す

家を捨てて戒を犯さず、心を息めて害する所無かれ

病無きは最利、足るを知るは最富

厚きを最友と爲し、泥洹を最快と爲す

飢を大病と爲し、行を最苦と爲す

已に諦かに此を知る、泥洹最も樂し

少しく善道に往き、惡道に越くこと多し

諦の如く此を知る、泥洹は最も安し

因に従つて善を生じ、因に従つて惡に墮す

因に由つて泥洹あり、所縁も亦然なり

麋鹿は野に依り、鳥は虚空に依る

法は其報に歸し、眞人は滅に歸す

始は不の如くなる無く、始は無の如くならず

是を無得と爲し、亦思有ること無し

心は見難く習うて觀るべし、欲を覺れる者は乃ち見を具す

所樂無きを苦際と爲し、愛欲に在れば痛を増すと爲す

不清淨を明めて能く御し、所近無きを苦際と爲す

見て見有り聞いて聞有り、念じて念有り識つて識有り



視て苦無く亦識無く、一切捨てて際を得と爲す  
身想を除き痛行を滅し、識已に盡くるを苦竟ると爲す  
倚れば則ち動、虚なれば則ち淨、動は近に非ず樂有るに非ず  
樂と無近とを寂を得と爲し、寂し已り寂し已りて往來す  
來往絶して生死無く、生死斷じて此彼無し  
此彼斷するを兩滅と爲し、滅して無餘なるを苦除と爲す  
比丘有つて世に生じ、有有り作行有り  
有無生なれば有無く、作無ければ所住無し  
夫れ唯念無き者は、能く自ら致すを得と爲す  
生無ければ復有ること無し、作無ければ行處無し  
生有り作行ある者は、是れ要を得すと爲す  
若し已に不生を解せば、有ならず作行ならず  
則ち生有なれば要を得、生有已に起りてより  
作行は死生を致し、爲に聞いて法果を爲す  
食は因縁に従りて有り、食に従りて憂樂を致す  
而も此要す滅する者は、復行迹を念する無し  
諸の苦法已に盡き、行滅すれば湛然として安し

比丘、吾已に知る、復諸入地無しと  
有虚空の入無く、諸入用の入無く  
想不想の入無く、今世、後世無し  
亦日月の想無く、往無く所懸無し  
我已に往反無く、去らず而も來らず  
没せず復生せず、是際を泥洹と爲す  
是の如く像無像、苦樂を以て解と爲す  
所見に復恐れず、言無くば言に疑無し  
斷有の射箭は、愚を構へて所猗無し  
是を第一の決と爲し、此れ道寂の無上なり  
辱を受くるも心は地の如く、忍を行すること門闕の如し  
淨きこと水に垢無きが如く、生盡くれば彼受無し  
利勝は恃むに足らず、勝つと雖も猶復苦なり  
當に自ら去勝を求むべし、己に勝たば所生無し  
故を畢つて新を造らず、胎を厭うて姪行無し  
種焦ゆれば復生せず、意盡くること火の滅するが如し  
胞胎は穢滅たり、何爲れぞ姪行を樂しまん

上に善處有りとは雖も、皆泥洹に如くは莫し

悉く知つて一切斷じ、復世間に著せず

都てを棄つること滅度の如し、衆の道の中にて斯を勝れたりとす

佛は以て誦法を現じ、智勇もて能く奉持す

淨を行すれば取穢無く、自ら度世を知れば安し

道を務めて先づ欲に遠ざかり、早く佛敎の戒を服す

惡を滅して惡障を極むれば、易きこと鳥の空を逝くが如し

若し已に法句を解せば、至心もて道行を體せよ

是れ生死の岸を度し、苦盡きて患無し

道法に親疎無く、正に羸強を問はず

要は無識想に在り、結解けて清淨たり

上智は腐身に饜き、危脆は實眞に非ず

苦多くして樂少し、九孔に一の淨無し

慧は危を以て安きに質へ、棄倚は衆難を脱す

形腐銷せるを沫と爲し、慧は見捨して食らず

身を觀すれば苦器たり、生と老と病と無とは痛たり

垢を棄てて清淨を行せば、以て大安を獲べし

【九孔】口、兩耳、  
兩眼、兩鼻孔、兩  
便孔の稱。

慧に依つて以て邪を却け、愛けずんば漏盡くることを得  
淨を行じて度世を致せば、天人禮せざる莫し

生死品法句經第三十七 十有八章

生死品とは、諸人の魂靈亡神在つて行に隨つて轉生するを説く。

命は菓の熟するを待ち、常に零落に會するを恐るるが如し

已に生すれば皆苦有り、孰か能く不死を致さん

初樂に従つて恩愛あり、姪よりして泡影に入るべし

形を受くるの命は電の如し、晝夜に流れて止り難し

是身は死物たり、精神は無形の法なり

假令死すとも復生じ、罪福は敗亡せず

終始は一世に非ず、癡によつて愛は久長なり

此より苦樂を受け、身死するも神は喪びず

身の四大を色と爲し、識の四陰を名と曰ふ

其情は十八種、緣起する所は十二

神の止まる凡そ九處、生死は斷滅せず

【四大】地水火風  
【十八種】六根、  
六境、六識。  
【緣起】十二、無  
明、行、識、名色  
六入、觸、受、愛、  
取、有、生、老死

【三垢】貪、瞋、癡、  
壞の三垢のこと。

世間愚もて聞かず、蔽闇なれば天眼無し

自ら塗すに三垢を以てし、目無くして意に妄見す

謂く死は生時の如しと、或は謂く死は斷滅なりと

識神は三界を造り、善と不善と五處あり

陰に行じて黙到せば、所往は響の應するが如し

欲と色と不色とは有なり、一切は宿行に因る

種の本像に隨ふが如く、自然の報は意の如し

神は身を以て名と爲し、火の形字に隨ふが如し

燭を著けて燭火と爲すは、炭草糞薪に隨ふ

心は法起れば則ち起り、法滅すれば則ち滅す

興衰は雨雹の如く、轉轉して自ら識らず

識神は五道を走り、一處として更らざる無し

身を捨つるも復身を受くること、輪の轉じて地に著くが如し

人一身に居せんに、其故室の中を去るが如く

神は形を以て廬と爲し、形は壞るるも神は亡びず

精神の形軀に居すること、猶雀の器中に藏するが如く

器破るれば雀は飛び去り、身壞するも神逝いて生ず

性の癡淨なるは常想と、樂身想と疑想と  
嫌望は上要到非ず、佛は是を不明と説く  
一本二展轉、三垢五彌廣し

諸海の十三事、淵銷し越度して歡ぶ

三事斷絶するの時、身に所直無きを知る

命は氣の煖煖の識、身を捨てて轉た逝く

其死臥の地に當つて、猶草のごとく所知無し

其狀を觀ることは是の如し、但幻のみ而も愚は食る

道利品法句經第三十八 十有九章

道利品とは、君と父と師とは行じて善道を開示し、之を率ゐるに正を以てす。

人は其上に奉ずるを知る、君と父と師と道士なり

信と戒と施と聞と慧は、終に吉にして生ずる所安し

宿命に福慶有り、世に生れて人尊たり

道を以て天下を安んじ、法を奉じて従はざる莫し

王は臣民の長たり、常に慈を以て下を愛す



身率ゐるに法戒を以てし、之に示すに休咎を以てす  
安きに處して危きを忘れず、慮れば明福は轉た厚し  
福德の反報は、尊以て卑を問はず

夫れ世間の將たるや、正を修し枉に阿らず

心を調め諸惡に勝ち、是の如くして法王たり

正を見て能く施し恵み、仁愛は好く人を利す

既に利するに平均を以てし、是の如くんば衆は附親す

牛の厲して水を渡るが如く、導正しければ從も亦正し

法を奉ずれば心邪ならず、是の如くんば衆は普く安し

妄に神象を燒すこと勿れ、以て苦痛の患を招く

惡意は自ら殺すを爲す、終に善方に至らず

戒徳は恃情すべし、福報は常に己に隨ふ

見法は人の長たり、終に三惡道に遠かる

戒慎は苦畏を除く、福德は三界の尊なり

鬼龍邪毒の害も、持戒の人を犯さず

義無く誠信ならざるは、欺妄して鬪諍を好む

當に知るべし此を遠離することを、愚に近くは罪を興すこと多し

仁賢は言誠信なり、多聞は戒行具せり

當に知るべし此に親附することを、智に近けば誠善多し

善言なるも戒を守らざれば、志亂れて善行無し

身處すること潜隱なりと雖も、是を非學法と爲す

美説の正なるを上と爲し、法説を第二と爲す

愛説は彼三たるべく、誠説欺かざるは四なり

便ち利刃を獲るも、自ら以て其身を剋すること無し

愚は學するも好んで妄説し、行牽くも幸戾を受く

貪嫉と瞋恚と癡と、是三は善本に非ず

身斯を以て自ら害し、報は癡愛に由つて生ず

有福は天人たり、非法は惡行を受く

聖人は明にして獨り見、常に善もて佛令を承く

戒徳後世の業、以て福を作し身を追ふ

天人は善を稱譽し、心正しくんば安んぜざる無し

惡を爲して止を念せず、日に縛して自ら悔いず

命の逝くこと川流の如く、是を恐れて宜しく戒を守るべし  
今我は上體の首、白生は被盜たり

已すでに天てんの使し召めい有あり、時ときに正せいに宜よろしく出家しゅつがすべし

吉祥品きしやうひん法句經ほっくけい第三十九だいさんじゅうきゅう 十有九章じゅうじゅうきゅうしやう

吉祥品きしやうひんとは、己おのれの術あつを修あやめ惡あくを去おとり善ぜんに就つき終つひに景福けいふくを厚あつくす

佛ほとけは尊たつときこと諸天しよてんに過なぎ、如來常にょらいじやうに義ぎを現あす

梵志ぼんし道士だうし有あり、來きたつて問とはく、何なにか吉祥きしやうなるこ

是こゝに於おつて佛ほとけ、慳けん傷やしたまひ、爲なるに眞有しんりゆうの要えうを説ときたまはく

『己おのれに正法しやうぽうを信樂しんがくする、是これを最吉祥さいきしやうと爲なす

若もし天人てんじんの從したがつて、希け望ぼうし僥倖げうかうを求もとめずんば

亦また祠神しとしんを禱いのるも、是これを最吉祥さいきしやうと爲なさず

賢けんを友ともとし善ぜんを擇えらびて居こし、常つねに先まづ福徳ふくとくを爲なす

身みを勅つとめて眞正しんしやうに從したがふ、是これを最吉祥さいきしやうと爲なす

惡あくを去おとり從したがつて善ぜんに就つき、酒さけを避さけて自みづから節せつし

女色にょしきに姪いんせず、是これを最吉祥さいきしやうと爲なす

多聞たもんなること戒行かいぎやうの如ごとく、法律ほふりつを精進しやうじんに學まし

修しゆし已すでつて第だいふ所しよ無なし、是これを最吉祥さいきしやうと爲なす

孝に居して父母に事へ、家を治めて妻子を養ひ  
空の行を爲さず、是を最吉祥と爲す

慢ぶらず自大ならず、足るを知り反復を念じ

時を以て經を誦習す、是を最吉祥と爲す

所聞は常に忍を以てし、樂んで沙門を見んと欲し

毎講輒す聽受す、是を最吉祥と爲す

齋を持し梵行を修し、常に賢聖を見んと欲し

明智者に依附す、是を最吉祥と爲す

以て道徳有るを信じ、正意向に疑無し

三惡道を脱せんと欲す、是を最吉祥と爲す

等心に布施を行じ、諸の得道者を奉じ

亦諸の天人を敬す、是を最吉祥と爲す

常に貪欲と、愚癡と瞋恚の意とを離れんと欲し

能く道見を習識す、是を最吉祥と爲す

若し以て非務を棄て、能く勤めて道用を修し

常に可事に事ふ、是を最吉祥と爲す

一切天下の爲にし、大慈意を建立す

仁を修し衆生を安んず、是を最吉祥と爲す  
 吉祥の福を求めんと欲すれば、當に佛を信敬すべし  
 吉祥の福を求めんと欲すれば、當に法句の義を聞くべし  
 吉祥の福を求めんと欲すれば、當に衆僧を供養すべし  
 戒具清淨なる者は、是を最吉祥と爲す  
 智者は世間に居して、常に吉祥の行を習ふ  
 自ら致して慧見を成ず、是を最吉祥と爲す  
 梵志は佛の教を聞いて、心中大いに歡喜す  
 即ち前んで佛足を禮し、佛法衆に歸命したてまつる

昭和四年九月一日印刷  
昭和四年九月十日發行

不許複製

發行所

編纂者

新昭和國譯大藏經編輯部  
代表者 三井 晶 史

發行者

東京市下谷區上野櫻木町五十番地

株式會社 東方書院

印刷者

東京市神田區表神保町十番地

同 興 舍

代表者 井波 康 三 郎

東京市下谷區  
上野櫻木町五〇

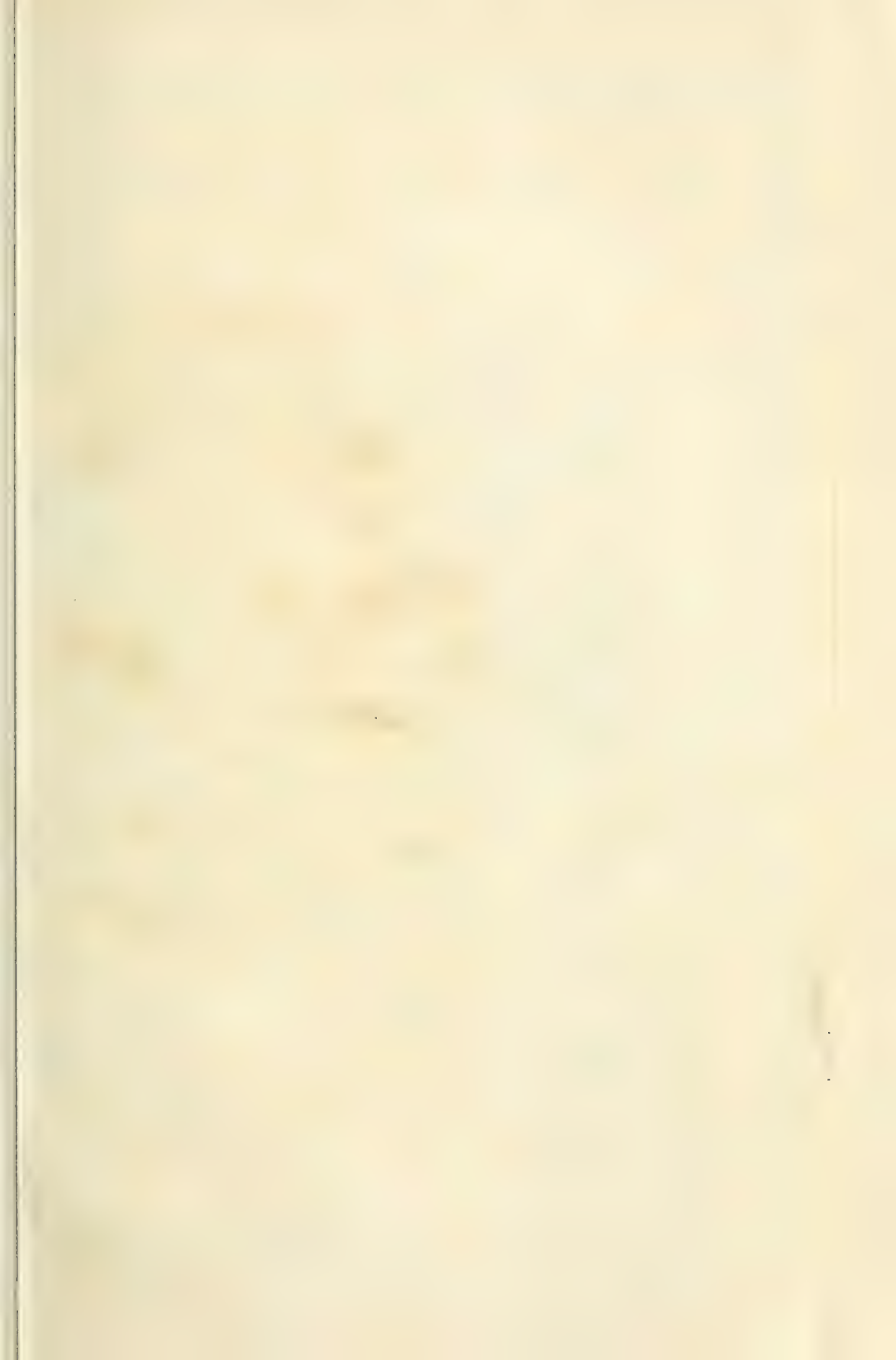
株式會社

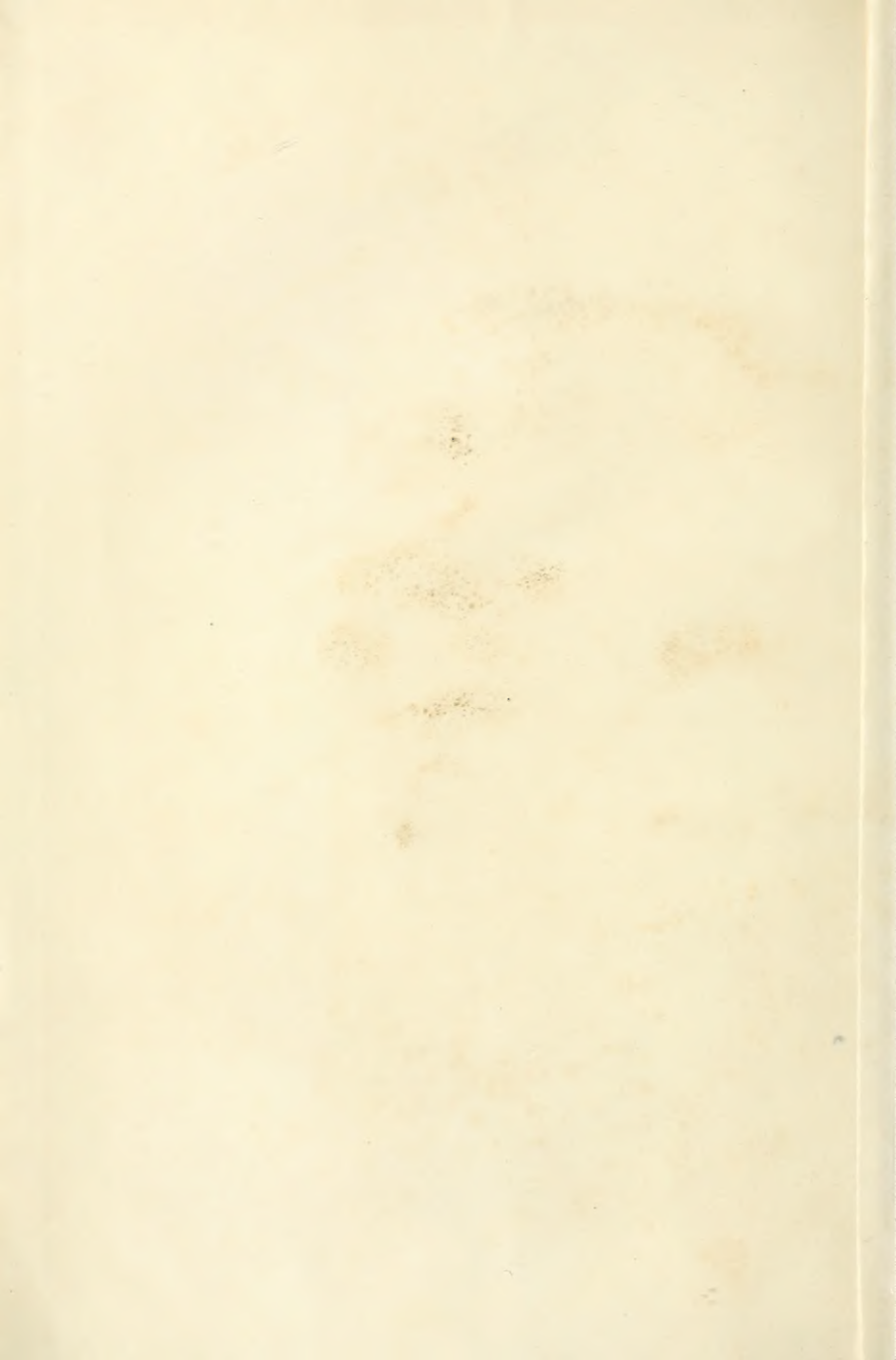
東方書院

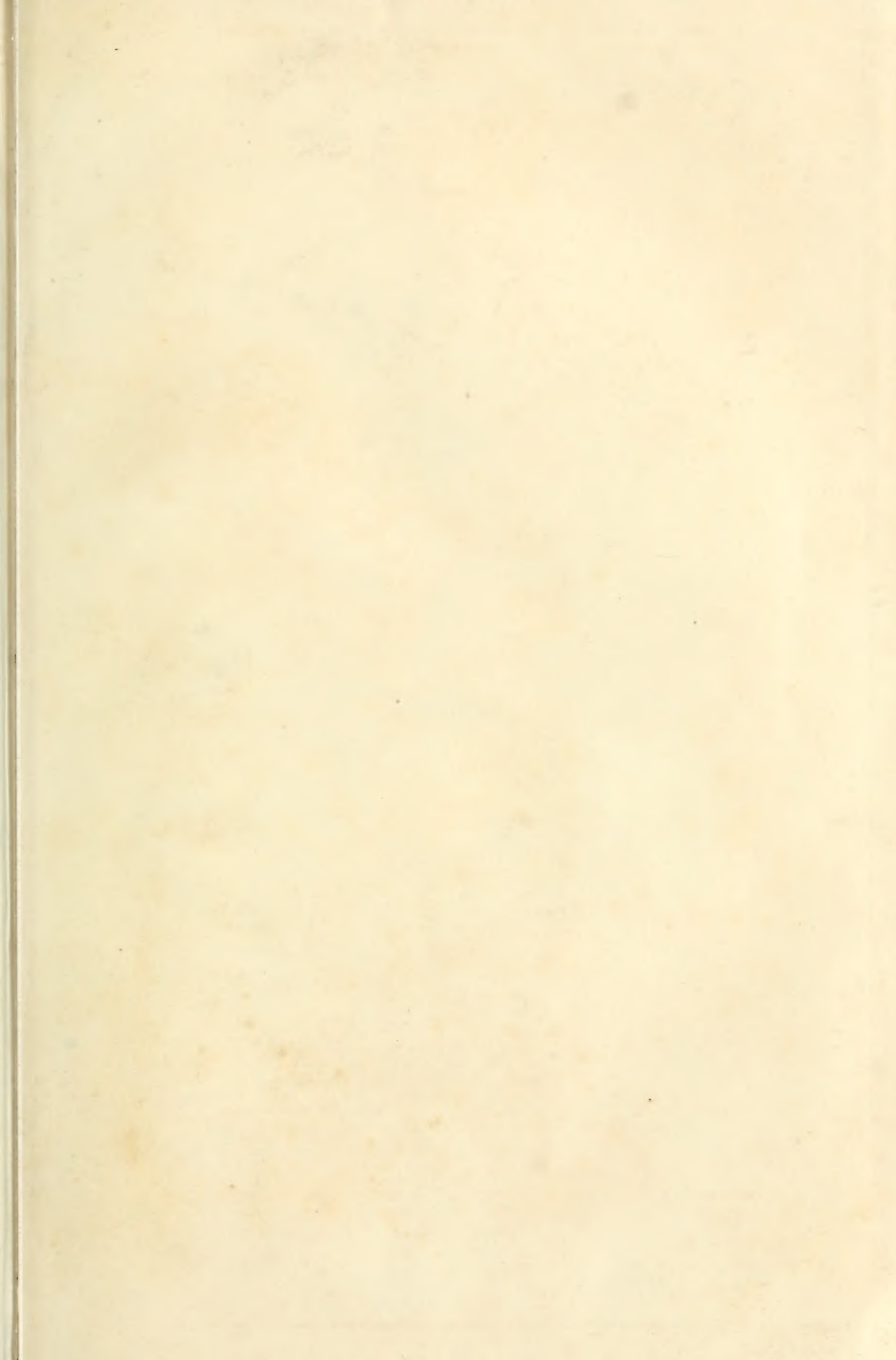
電話 下谷四二五九  
振替 東京六八一

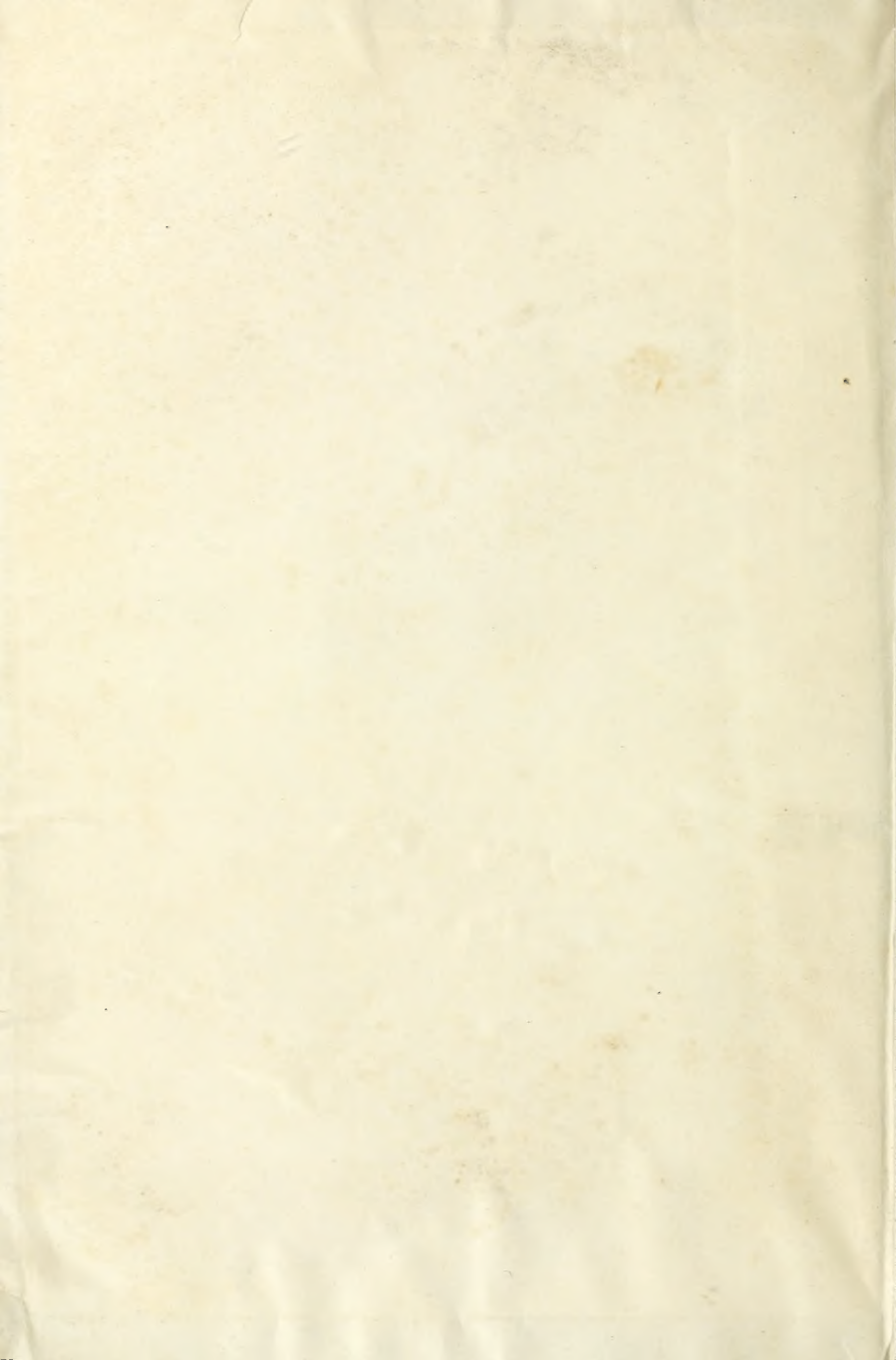
昭和國譯大藏經 經典部 第三卷



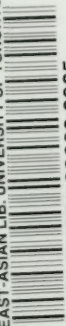








EAST-ASIAN LIB. UNIVERSITY OF TORONTO



3 1761 03023 3985